筑波大学博士（文学）学位請求論文

ロラン・バルトにおける提喩的意味作用

金谷　壮太

2016 年度

目次

目次 i
凡例 iv

序章 1
第 1 節　本論文の目的と問題設定 1
第 2 節　先行研究に対する本論文の位置づけ 4
第 3 節　本論文の構成 9

第 1 章　提喩的意味作用としての「コノテーション」 14
第 1 節　はじめに 14
第 2 節　「コノテーション」と換喩性――バルトのテクスト理論 15
第 3 節　「コノテーション」と提喩性――ジュネットの文体論 20
第 4 節　バルトのレトリック論とイェルムスレウのコノテーション論
における提喩性 26
4-1. バルトのレトリック論とコノテーションの問題圏 26
4-2. イェルムスレウのコノテーション論とカテゴリー間の往復運動 32
4-3. バルトのレトリック論におけるカテゴリー間の往復運動 37
4-4. バルトのレトリック論におけるコノテーションの問題に対する総括 39
第 5 節　文体事象へのバルトの提喩的ヴィジョン――「文体とそのイメージ」 40
5-1. バルトの文体論とコノテーションの問題圏 40
5-2. 形式の多重性における概念的な運動性 43
第 6 節　結論 47

第 2 章　提喩的意味作用と「混合」の実践 49
第 1 節　はじめに 49
第 2 節　バルトの神話分析と提喩的意味作用――「今日における神話」 49
2-1. 「記号体系」としての「神話」における提喩的意味作用 50
2-2. 提喩的意味作用を通じた諸要素の「混合」 56

第 3 節　バルトの写真論と提喩的意味作用
——「写真のメッセージ」、「映像のレトリック」 64
3-1. 記録写真をめぐる提喩的意味作用 66
3-2. 広告の写真をめぐる提喩的意味作用と「混合」の実践 74
第 4 節　カテゴリーとしての「現実」——「現実効果」 86
第 5 節　バルトの写真論における提喩的意味作用の射程 96
5-1. 分類活動から逃れる意味をめぐる提喩的意味作用の射程
——「第三の意味」 97
5-2. 提喩的意味作用を活かした「現実」と「真実」の「混合」
——『明るい部屋』 104
第 6 節　結論 113

第 3 章　提喩的意味作用と「体系」の問題 115
第 1 節　はじめに 115
第 2 節　「ル・システマティック」と衣服分類 117
2-1. 「体系」と「ル・システマティック」 117
2-2. 分類活動と「ル・システマティック」 125
第 3 節　『モードの体系』における
換喩的意味作用と「ル・システマティック」 128
3-1. 『モードの体系』の方法論 129
3-2. 「ル・システマティック」の換喩的な具現化 136
第 4 節　『モードの体系』における
提喩的意味作用と「ル・システマティック」 142
4-1. 書かれた衣服の「類」と「種」の分類方法 143
4-2. カテゴリーとしての衣服 152
4-3. 「種の断定」における提喩的運動性 153
4-4. 「ル・システマティック」の提喩的な具現化 159
第 5 節　『モードの体系』における提喩的なプロセスとしての「中性化」 166
5-1. 「ル・システマティック」の一様態としての「中性化」の作用 167
5-2. 「中性化」の提喩的なプロセス 169
5-3. 「頂点の欠けたピラミッド」としての提喩的なプロセス 178
5-4. 提喩的なプロセスが有する可逆的な運動性 180

第 6 節　結論　181

第 4 章　提喩的意味作用と「構造化」の問題　183
第 1 節　はじめに　183
第 2 節　「構造化」と分類活動　185
2-1. テクストそれ自体のうちに内包されている「構造化」の働き　186
2-2. 読者の分類活動を通じて具現化するテクストの「構造化」　191
第 3 節　『Ｓ／Ｚ』における解釈学的分析を通じたテクストの「構造化」　198
第 4 節　行為の連鎖における提喩的運動性を通じたテクストの「構造化」　201
4-1. 提喩的関係性と「構造」の動的様態　201
4-2. 『Ｓ／Ｚ』でのシークエンス分析における提喩的な往復運動　209
第 5 節　テクストの「構造化」と『Ｓ／Ｚ』における提喩的創造性　213
5-1. 「読み得るテクストの構造化」と「書き得るテクストの構造化」　214
5-2. 分類活動と創造性　215
5-3. 「意味素」の提喩的特徴　217
5-4. 「類」の可動性を活かした分類活動に宿る提喩的創造性　220
第 6 節　結論　227

第 5 章　提喩的意味作用の水平的運動性　229
第 1 節　はじめに　229
第 2 節　「恋愛のディスクール」をめぐる意味作用の様態　230
第 3 節　「差異」として反復される「フィギュール」のネットワーク　239
第 4 節　「類」と「種」の並置を通じた水平的運動性　246
第 5 節　結論　255

結章　257

主要参考文献一覧　265

初出一覧　275

凡例

1. 引用の日本語訳は、基本的に既訳を参考にしているが、すべて引用者によるものである。

2. 引用文中において、原著者によるイタリック体での強調には傍点を付し、引用者による強調には下線を施す。

3. 文献情報の提示にあたっては、書名および論文名を繰り返す方式を取った。章ごとに既出の文献については、省略的な記述を行なった。

4. 主要参考文献一覧を含めた文献情報のなかでは出版地名を省略する。

5. 概念語ないしキーワードについては、適宜「　」で表示する。

序章

第 1 節　本論文の目的と問題設定

本論文は、「提喩（synecdoque）」という転義的比喩を様々なかたちで活かした試みとして、20 世紀フランスの批評家ロラン・バルト（Roland Barthes, 1915-1980）の初期から晩年に至るテクスト実践を総合的に捉え直すものである。

この目的を成し遂げるために、本論文は次の二つの課題を設定したい。一つ目は、バルトの多岐にわたるテクスト実践が、記号論的な枠組みが前景化されていない後期のテクストを含めて、意味作用の働きそのものを捉えようとする一貫した試みである点を示すことであり、二つ目は、意味作用が働くそのプロセスをめぐるバルトの探求が提喩という転義的比喩の性質を原動力にしている点を明らかにすること、すなわち、バルトが探求した意味作用の在り方を「提喩的意味作用」として提示することである。

そうするにあたってただちに明確化しなければならないと思われるのは、意味の変化を顕著に体現するかたちで意味という事象に密接に結びついている転義的比喩のなかで、ほかの代表的な転義的比喩（隠喩と換喩）ではなく、なぜ提喩に着目するのかという点である。提喩に着目する理由は、提喩が、それに最も親近的な転義的比喩である「換喩（métonymie）」とは異なった仕方で、バルトのテクスト実践を捉え直すうえで有益な視座をもたらすからである。

換喩は、たとえば「容器」で「内容物」を、「生産者」で「産物」を表わす転義的比喩であり、一般的には「必然的関係（relation nécessaire）」に基づくとされる[1]。周知のとおり換喩は、「隣接性（contiguïté）」という原理を与えられたかたちで、ロマン・ヤコブソンの隠喩（métaphore）と換喩の二軸から成る言語理論によって 20 世紀半ばに脚光を浴び[2]、さらにはジャック・ラカンの精神分析の理論においてその二軸理論が援用され、言語記号の連鎖という関係性が重要性を持つに至った[3]。バルトはその思想の潮流のなかにおり、シニフ

---

[1] *Le Grand Robert de la langue française*, t. VI, deuxième édition entièrement revue et enrichie par Alain Rey, Le Robert, 1985, p. 418.

[2] Cf. Roman Jakobson, « Deux aspects du langage et deux types d'aphasie », in *Essais de linguistique générale*, traduit de l'anglais et préfacé par Nicolas Ruwet, Minuit, 1963, pp. 43-67（「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」、田村すゞ子訳、『一般言語学』、川本茂雄監修、みすず書房、1973 年、21-44 頁）.

[3] Cf. Jacques Lacan, « L'instance de la lettre dans l'inconscient ou la raison depuis Freud », in *Écrits I*,

ィアンの戯れ（jeu du signifiant）を具現化する自身のテクスト実践の理論的支柱として、換喩の隣接関係という原理を採用している[4]。また、「換喩（的）」という用語がバルトのテクストに散見されることは事実であり、隣接関係による横滑り（glissement）という用語が絶えざる転位（déplacement）を旨とする彼の活動を端的に表わしているようにも見える。また、バルト全集の編集者であり、彼の弟子かつ友人であった、いわばバルトに最も近かった研究者であるエリック・マルティは、バルトの『Ｓ／Ｚ』、ラカンの「『盗まれた手紙』についてのセミネール」、そしてルイ・アルチュセールらの『資本論を読む』という三つの理論的テクストに、「換喩的因果性（causalité métonymique）」というテクスト読解の方法を見ている[5]。

同時代の諸理論を背景にして隣接関係という換喩的原理がバルトのテクスト実践に大きな影響力を持っているのはたしかであるが、その影響力の陰には、提喩的と呼べる原理が存在する。提喩は伝統的に、たとえば「帆」で「船」を表わすといった「部分と全体の関係」と定義される[6]。換喩と提喩の関係性について注目すべきなのは、両者の相違が明確でないということであり、「部分と全体の関係」という定義からは、提喩は換喩に組み込まれ、その独自性を失う[7]。「部分と全体の関係」は、「必然的関係」や「隣接関係」の一種と見なされるからである。しかし、構造主義期の文学理論の枠組みのもとに位置するリエージュ学派と呼ばれたグループμが、提喩の様態を次の二つに分けることによってその独自性に光を当てたことに着目したい[8]。彼らによれば、物理的なつながりに基づく様態（「帆」で「船」を、「刀身」で「短刀」を表わす）と、概念的なつながりに基づく様態（「貨物船」で「船」を、「脇差」で「短刀」を表わす）の二つのうち、概念的な様態すなわち「類」と「種」のカテゴリー間の関係性は、物理的な様態に基づく部分と全体の関係には還元できず、それゆえ提喩を換喩から明確に分離させることができる[9]。

Seuil, coll. « Points », 1999 (1966), pp. 491-526.

[4] Roland Barthes, « De l'œuvre au texte » (1971), in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 911（「作品からテクストへ」、『物語の構造分析』、花輪光訳、みすず書房、1979 年、96 頁）.

[5] Éric Marty, « Avant-propos », in Roland Barthes, *Le discours amoureux. Séminaire à l'École pratique des hautes études 1974-1976*, suivi de *Fragments d'un discours amoureux* (pages inédites), Seuil, 2007, p. 13. なお、マルティ自身が記しているように、「換喩的因果性」という概念自体はラカンの弟子、ジャック＝アラン・ミレールの論考を参照している。Cf. Jacques-Alain Miller, « Action de la structure » (1964), in *Un début dans la vie*, Gallimard, 2002. p. 77.

[6] 佐々木健一監修『レトリック辞典』、大修館書店、2006 年、265 頁。

[7] C. Du Marsais, *Traités des tropes*, Le Nouveau Commerce, 1977 (1730), p. 86.

[8] Cf. Groupe μ, *Rhétorique générale*, Seuil, coll. « Points », 1982 (1970), pp. 104-106（『一般修辞学』、佐々木健一・樋口桂子訳、大修館書店、1981 年、202-207 頁）.

[9] グループμのこの見解は、次の文献で肯定的な評価を与えられている。瀬戸賢一『認識のレトリック』、海鳴社、1997 年。

本論文の土台に据えたいのは、概念的なつながりに基づく様態としての「類」と「種」のカテゴリー間の関係性を、換喩に還元されない提喩独自の原理として捉えるグループ μ の提喩観である。その理由は、こうした理論的枠組みのもとで捉えられた提喩が、現実世界についての私たちの認識や思考のプロセスないしメカニズムを支える原理として存在していると考えられるからである。この見地からすれば提喩は、バルトのテクスト実践の元となる彼の思考のプロセスないしメカニズムを把握するうえでの手がかりとして存在しているのだと言える。そこから、次のような問いを立てることができる。すなわち、バルトの諸々のテクスト実践にアプローチするにあたって、提喩のカテゴリー的な関係性によって体現されるような彼の思考の在り方にこそ注目するべきなのではないか。

なぜ提喩（によって体現されるようなバルトの思考の在り方）に注目するのかという点について、もう少し詳しく述べておきたい。青柳悦子は、その論文「ジュネットにおける「フィギュール」」のなかで、ジェラール・ジュネットにおけるフィギュール（figure）の概念を把握する際の鍵として、提喩への着目を挙げている[10]。その議論から私たちが取り上げたいのは、グループ μ によって浮き彫りにされただけでなくジュネットによっても問題にされていた提喩と換喩の差異である。青柳は、ジュネット自身が 1968 年に復刻刊行することに寄与したピエール・フォンタニエの著作[11]に寄せた彼の序文、および有名な論文「限定された修辞学」（1970 年）[12]において、ジュネットがいかに提喩と換喩の差異に意識的であったのかを明らかにしている。その際に青柳は、換喩の原理である現実上の隣接関係とは異なる提喩の概念的な包含関係の特徴を、運動性という点から指摘している。提喩において問題になるのは、ある物質から別の物質へと移動するという水平的なレベルでの運動ではなく、異なる概念レベル間での垂直的な運動である。こうした異なる概念レベル間での横断（いわば縦断）は、（ジュネット自身の言葉を元にして）「概念世界の垂直的逃走」（64 頁）、あるいはまた「精神の論理的運動」（70 頁）と形容されている。つまり青柳は、「類」と「種」のカテゴリー間での概念的な関係性（提喩的関係性）が明確なかたちで運動性を伴っていることに着目しているのである。それゆえ、私たちがなぜ提喩（によって体現されるようなバルトの思考の在り方）に注目するのかというと、その理由は、提喩的関係性に胚胎する運動性を通じて、あるいはそうした運動性を手がかりにして、バルトのテクス

---

[10] 青柳悦子「ジュネットにおける「フィギュール」」、『言語文化論集』、第 46 号、筑波大学現代語・現代文化学系、1998 年、64-72 頁。

[11] Pierre Fontanier, *Les figures du discours*, introduction par Gérard Genette, Flammarion, 1977 (1968).

[12] Gérard Genette, « La rhétorique restreinte », in *Communications, 16. Recherches rhétoriques*, Seuil, coll. « Points », 1994 (1970), pp. 233-253（「限定された修辞学」、天野利彦訳、花輪光監修『フィギュール III』、1987 年、白馬書房（書肆風の薔薇）、41-103 頁）.

ト実践の元となる彼の思考の在り方を、茫漠としたかたちでは決してなく明確なかたちで把握することができるのではないかと考えるからである。

そのうえで、本論文の問題設定をより明確にしたい。概念的な関係性を原動力とする「提喩的意味作用」の探求としてバルトの諸テクストを総合的に捉え直すこと、なぜこの試みが必要なのか。言い換えれば、いかなる理由のもとで、バルトの諸テクストに通底していると思われる「提喩的意味作用」（の探求）という問題が提起されなければならないのか。それは、記号論時代のバルトとその後のバルトを分離する傾向にある先行のバルト理解に対する見直しを図るためであり、同時に、バルトの記号論的な分析実践そのものに対する理解を更新するためである。次の第 2 節において、この点について述べたい。

第 2 節　先行研究に対する本論文の位置づけ

1915 年に生まれたバルトは、1980 年に亡くなるまで、20 世紀の文学理論および文化論、より広く言えば思想の領域において大きな影響力を有した知的活動を行なった。

最初の著作『零度のエクリチュール』（1953 年）においてバルトは、特定の意味（sens）を担っていないように見える文体の有り様を意味の問題に組み込むことで、文学的な言語活動に備わる意味作用（signification）[13]の働きを探求する端緒を開いた（そのインパクトは、それ自体では意味を持たない音素が意味の変化に関与することを明らかにした音韻論の成果に結びつけることができる）。『現代社会の神話』（1957 年）では、こんにちの文化研究の先駆けとも言えるイデオロギー批判が実践されている。イデオロギー批判を行なっていた時期にバルトは、記号論（sémiotique）ないし記号学（sémiologie）を知ることになり[14]、意味作用の働きに対する理論化に傾倒する。1960 年代において、記号論の知見の蓄えは、とりわけ写真論および記号論的な衣服分析である『モードの体系』（1967 年）として結実する。この時期にバルトは、文学研究の在り方（ないし文学研究と文学理論の関係性）が問われ

[13] おそらくこの用語の理解に最も貢献した業績のひとつであるバルト自身のテクスト（「記号学の原理」）を参照しよう。「意味作用」とは、「シニフィアン［／記号表現］（signifiant）」（聴覚映像）と「シニフィエ［／［記号内容］（signifié）」（概念）の結合関係（両者が結合するという関係性）のことである。Cf. Roland Barthes, « Éléments de sémiologie » (1965 [1964]), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 664-666（「記号学の原理」、沢村昂一訳、『零度のエクリチュール　付・記号学の原理』、渡辺淳・沢村昂一訳、みすず書房、1971 年、144-146 頁）.

[14] 記号の科学に対する呼称として、パースの系統では「記号論」が用いられソシュールの系統では「記号学」が用いられるが、この区別を念頭に置きさえすれば、両者の区別にこだわる必要はないと思われる。本論文では基本的に、より一般的な呼称として用いられているように見受けられる「記号論」という用語を用いるが、必要に応じて「記号学」という用語も用いる。

た『批評と真実』（1966 年）を背景にしつつ、フランスにおける物語分析を先導する役割を果たした。この活動から産み出されたのが『Ｓ／Ｚ』（1970 年）である。しかし同時に、エッセー『記号の国』（1970 年）の元になった未知の国（日本）との邂逅（西欧とは異なる文化との邂逅）と連動しながら、『Ｓ／Ｚ』における第二次の意味作用（コノテーション）の働きに対する探求は、「科学的な」厳密さから距離を置くことになった。こうした柔軟性、別の言い方をすれば自身の論述において客観性ではなく主観性を重視するというバルトの姿勢に貫かれているのが、1970 年代における作家的な（ロマネスクな）エクリチュールの創造と呼べるような諸々のテクスト実践、すなわち『テクストの快楽』（1973 年）、『彼自身によるロラン・バルト』（1975 年）、『恋愛のディスクール・断章』（1977 年）、そして生前最後の著作になった『明るい部屋』（1980 年）である[15]。

バルトには、教育の場での活動も存在する。バルトは、1960 年に高等研究院[16]の研究主任（chef de travaux）に任命されて以来、教育の場での活動も行なった。バルトは、1962 年に研究指導教授（directeur d'études）として授業（セミナー）を受け持つ立場になり、このセミナーでの講義が、「記号学の原理」（1964 年）、『Ｓ／Ｚ』、『彼自身によるロラン・バルト』、『恋愛のディスクール・断章』といった諸々のテクストに結実した。また最終的にバルトは、コレージュ・ド・フランスにおいて文学の記号学（sémiologie littéraire）の講座を担当することになった。

1960 年代以降のバルトの著作（活動）を捉える際、従来踏襲されてきたのは、1960 年代の記号論のもとでの活動から、1970 年代に入ってテクスト理論（théorie du Texte）やロマネスクなエクリチュールの問題圏のもとでの活動への移行、すなわち 1960 年代の記号論時代のバルトとその後の（1970 年代の）バルトという二分法的理解である。別の言い方をすれば、1960 年代の構造主義の影響下にあった時期から、1970 年代前半のポスト構造主義の影響下にあった時期を経て、1970 年代後半のロマネスクな作品を発表する時期に至ったとされる。

記号論時代のバルト（1960 年代までの前期バルト）とその後のバルト（1970 年代の後期バルト）という図式は、バルトの著作全般についての概論のみならず個別のトピックを取り上げる議論も含めて、バルトを論じる研究者がまずもって意識する区分であると言える。

---

[15] 無論、作家研究を行なったテクストも数多く残されており、そのなかでも『ミシュレ』（1954 年）はテーマ批評の代表例と見なせる著作であり、また『ラシーヌ論』（1963 年）はこの著作をめぐって論争（いわゆる新旧の批評の論争）が起こるほど（当時としては）斬新な読解を提示した著作である。

[16] バルトが所属した高等研究院（École pratique des hautes études, EPHE）の第六部門は、のちに独立して社会科学高等研究院（École des hautes études en sciences sociales, EHESS）となった。本論文では便宜上、その両者を含めて「高等研究院」と表記する。

先に言及したマルティは、この区分を念頭に置いてバルトの活動を解説しており[17]、英米圏のみならず世界的にも屈指だと言えるダイアナ・ナイトのバルト論[18]も、この区分を前提にしている。総合的な視野を持った日本における代表的な先行研究である篠田浩一郎の著作[19]においても、事情は変わらない。また、バルト自身がこの区分を認めていたことも事実である[20]。

2000年代から2010年代にかけてバルトの新たなテクストの刊行が相次いだことで研究のコーパスが増大したものの、現在に至るまでこの二分法的理解に対する根本的な見直しが図られているとは言い難い。たとえば2010年代のマリー・ジル（Marie Gil）の研究[21]は、総合的なバルト論として、バルトの著作（活動）が持つ伝記的なコンテクストを膨大な情報量とともに明らかにしたという点において、決定的と言えるほどの完成度を持つが、この先行研究においても、1960年から1967年までを構造主義の時期、1968年の5月に起きた学生運動をはじめとして1970年に出版された日本論や『Ｓ／Ｚ』などを経て、（正確に言えば晩年を特別な一時期として扱っているものの）1971年以降をロマネスクの時期というように、記号論時代のバルトとその後のバルトという区分を踏襲している。

また、2000年代におけるバルトの記号論を対象にした個別研究は、総じて、バルトの記号論者としての面を強調するにとどまるか[22]、あるいは、記号論時代の蓄積がその後のバルトの活動にどのように活かされたのかという点を明らかにするというパースペクティヴを持っていないかのどちらかである[23]。

記号論時代のバルトとその後のバルトという二分法的理解は、理論家と作家の両面が切り離せないはずのバルトの活動に対して、記号論時代に関しては理論家としてのバルトを重視し、その後の活動に関しては作家としてのバルトを重視するという、前世紀のバルト受容に裏づけられている[24]。今世紀には、そうしたバルト像が不正確であるという問題意識

---

[17] Cf. Éric Marty, *Roland Barthes. Le Métier d'écrire*, Seuil, 2006, pp. 107-189.
[18] Diana Knight, *Barthes and Utopia. Space, Travel, Writing*, Clarendon Press, 1997.
[19] 篠田浩一郎『ロラン・バルト――世界の解読』、岩波書店、1989年。
[20] Cf. Roland Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes* (1975), in *Œuvres complètes*, t. IV (1972-1976), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 718-719（『彼自身によるロラン・バルト』、佐藤信夫訳、みすず書房、新装版1997年（初版1979年）、邦訳228-229頁）; Roland Barthes, « L'aventure sémiologique » (1974), in *Œuvres complètes*, t. IV (1972-1976), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 522-525（「記号学の冒険」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版1999年（初版1988年）、8-13頁）.
[21] Marie Gil, *Roland Barthes. Au lieu de la vie*, Flammarion, 2012.
[22] Sémir Badir, « Barthes sémiologue », in Sémir Badir et Dominique Ducard (dirs.), *Roland Barthes en cours (1977-1980) : Un style de vie*, Éditions Universitaires de Dijon, 2009, pp. 187-200.
[23] Marc Buffat, « L'aventure sémiologique », *Revue des sciences humaines*, no. 268, 2002, pp. 27-39.
[24] アントワーヌ・コンパニョンによる二人のバルト（two Barthes）という形容はそれを端的に

に立った先行研究が出てきており、その典型と言えるジャン＝マリー・シェフェールのバルト論[25]では、バルトの「理論」の有用性よりもその理論構築に見られるバルトの思考のプロセスに焦点を当てることの重要性が示されている。バルトの諸々のテクストを詳細に検討するという規模を持っていないとはいえ、このバルト論は本論文にとって有益な示唆に富む。

シェフェールによれば[26]、「記号学の原理」や「物語の構造分析序説」（1966 年）のような予備教育的なテクストのみならず、『Ｓ／Ｚ』や『モードの体系』を含めたバルトの諸々のテクストを、「閉じた理論的なモデル（modèles théoriques clos）」としてではなく、「プログラム的なテクスト（textes programmatiques）」（理論的なプログラムを示すテクスト）、「方法論的なブリコラージュ［／器用仕事］（bricolages méthodologiques）」、「実験用の装置（dispositifs expérimentaux）」として読むことは、バルトの思考の歩みをたどることにつながる。バルトの諸々のテクストは「思考の体験というステータス（statut d'expériences de pensée）」を有しており[27]、その教義（doctrines）を批評するよりもバルトの思考の歩みをたどることの方が実り多い、すなわち厳密さではなく繊細さ（細やかさ）を旨とするバルトの「エスプリ（esprit）」に釣り合っている。こうしたシェフェールの見解は、バルトの諸々のテクスト実践を把握する際に、バルトの思考のプロセスに焦点を当てることが有効であるということを示している。

それゆえ本論文は、このシェフェールのバルト読解の問題意識を推し進めて（言い換えればそれを実行に移して）、可能な限り細やかな仕方で初期から晩年に至るバルトの諸々のテクストにアプローチして、バルトの思考の歩み、その輪郭を浮き彫りにする。さらに、この作業を進めるにあたって本論文は、とりわけ理論的なモデルによってその分析行程が感知し難くなる傾向にあるテクスト、つまり『モードの体系』に代表される記号論的実践のような、理論的なアスペクトが際立ったテクスト、あるいはまた『Ｓ／Ｚ』のような、理論的なアスペクトがともすれば際立ちかねないテクストを分析対象として取り上げるだろう（本論文が分析対象として取り上げるテクストについては後述する）。

同時に、シェフェールの見解を元にしたこのような方針を取ることで本論文は、前世紀

表わすものである。Cf. Antoine Compagnon, "The two Barthes," trans. James McGuire and Didier Bertrand, in Steven Ungar and Betty R. McGraw (eds.), *Signs in Culture: Roland Barthes Today*, University of Iowa Press, 1989, pp. 63-75.

[25] Jean-Marie Schaeffer, « Roland Barthes : de la théorie à la pensée », in *UTCP [The University of Tokyo, Center for Philosophy] Bulletin*, vol. 2, 2004, pp. 14-22.

[26] Cf. Schaeffer, « Roland Barthes : de la théorie à la pensée », pp. 20-21.

[27] この知見をめぐってシェフェールは、理論的なアスペクトが際立ったテクストばかりでなく、原則的には「バルトのあらゆるテクスト（*tous* les textes de Barthes）」を想定している。

においては大きな影響力を有したが現代においてはその理論的なモデルが素朴であるように見える、要するに古いと見なされるようなバルト（の諸々の理論的なテクスト実践）[28]にそもそもなぜ注目するのかという疑問に対するひとつの応答となり得るだろう。つまり、理論的な有用性や新しさから切り離すという条件のもとで、理論的なアスペクトが際立った（また際立ちかねない）バルトのテクスト（彼の記号論的実践や物語分析）を分析対象にしてこそ、「方法論的なブリコラージュ」を行ない「実験用の装置」を創造するバルトの「思考の体験」を明るみに出すことができると考えられるのである。問題なのは、理論的な有用性や新しさから切り離した場合にバルトの理論的なテクストにおいて何を見定めることができるのか、別の言い方をすれば、有用性や新しさからではなくバルトの「思考の体験」に根ざしたかたちでそれでもなお理論的と呼べる論点を示すことができるのかということだろう。「提喩的意味作用」とは、この論点の名称にほかならない。

バルトの諸々の記号論的な実践に対する理解（ないし受容）に目を移すと、それらを解説する概説書は数多く存在するものの、意味作用のいわば結果（諸々の意味内容）ではなくプロセスというかたちでの意味作用の働き方それ自体への関心に根ざした試みとしてバルトの分析実践を的確に位置づけることがなされているとは言い難い。管見の限りでは、記号論的かつ構造主義的なバルトの活動の要点を最も的確に捉えたのは、バルトの活動に焦点を当てたかたちでの大浦康介による「フランス構造主義」の解説[29]であり、大浦によって（文学研究者としての）バルトが探求したのは諸々の意味ではなく意味が産出されるプロセスとしての意味作用にあったという点が整理されている。しかし、そこで述べられている意味作用の探求は、バルトの記号論的実践を視野に収めつつも、根本的には、バルト自身の活動では（『批評と真実』で構想された）文学の科学（science de la littérature）およびその理念を受け継いだツヴェタン・トドロフやジェラール・ジュネットが推し進めた詩学（poétique）、すなわち 1960 年代に端を発するフランス系の文学理論の枠組みを超え出るものではない。

それゆえ本論文は、大浦が的確に整理した点、すなわち 1960 年代から 1970 年代にかけて隆盛を誇ったフランス系の文学理論の領域で行なわれた意味作用の働きに対する探求を

---

[28] その最も典型的な例は、「物語の構造分析序説」であると言えるだろう。実際、このテクストにおいてバルトが物語に対する言語学（的な手法）の限界としてそれが「文」を超えることがないという指摘をしたことを引き合いに出しつつ、蓮實重彦は次のように述べている。「多くの問題をはらんでいるとはいえ、バルトのこの歴史的な論考をいまなお価値ありと判断しうるのは、そこにこの指摘［当該の指摘］が書きこまれているからだといってよい。」蓮實重彦『『ボヴァリー夫人』論』、筑摩書房、2014 年、267 頁。

[29] 大浦康介「フランス構造主義」、小森陽一ほか編『岩波講座文学別巻　文学理論』、岩波書店、2004 年、41-71 頁。

念頭に置いたうえで、この意味作用の働きに対する探求の射程を、文学理論の領域にとどまらないバルトの諸々のテクスト実践を通じて提示する。さらに踏み込んで言えば本論文は、「フランス構造主義」におけるバルトの試みが有していた意味作用の働きに対する探求をめぐっていまだ解明されていない点（提喩の応用）を明らかにするとともに、その点を大浦が整理していない後期および晩年のバルトのテクスト（『恋愛のディスクール・断章』および『明るい部屋』）においても見定める。そうすることで本論文は、バルトの記号論的な分析実践そのものに対する捉え直しを図るのであり、その結果として本論文は、広大な視野を伴ったひとつの総合的な意味作用論という性質を持つことになるだろう。

このような問題設定のもとで本論文は、「提喩的意味作用」としてバルトが探求した意味作用の具体的な様態を明らかにしつつ、記号論時代の蓄積がその後のバルトの活動において活かされていることを示すのである。

私たちが行なうのは、バルトが展開した議論をトレースする作業ではない。バルトのテクストの理論的前提や彼が練り上げた議論構成を綿密に押さえつつ、そのうえで、バルトが理論化しなかったため彼のテクストにおいて明確化されないまま残された論点を提示する。「提喩的意味作用」（の探求）という問題は、バルトが提喩と換喩を明確には区別しなかったため（具体的な事例は第 4 章で挙げるが『Ｓ／Ｚ』においてそのことがはっきりとわかる）、またバルトが刺激を受けたヤコブソンの言語理論においても提喩は換喩の一種と見なされるため、バルト自身が着目せず先行のバルト研究によっても問われてこなかった論点である。

本論文は、批評家を対象にする批評、すなわちメタ批評という性質を持つ。バルトのテクストにアプローチする際には、本論文それ自体が認識論的と呼べるような性質を帯びる。つまり私たちは、バルトが提示した個々の見解に対する是非を問うのではなく、バルトの思考のプロセスやメカニズムそのものを解明することに努めるのである。

第 3 節　本論文の構成

私たちが狙いを定めるのは、バルトの「理論」の妥当性ではなく、意味作用の在り方をめぐる彼の思考であり、そのために注目するのが、バルトのテクストに胚胎する「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づいた意味作用である。私たちは、こうした意味作用を「提喩的意味作用」として捉え、その働きを「類」と「種」のカテゴリー間での運動性として浮き彫りにするとともに、この「提喩的意味作用」の働きを活かして多様な意味実践を分類しなおかつ新たな概念（ないし意味領域）を創造しさえするバルトの思考を明る

みに出すことを試みる。

バルトは、イデオロギー批判を行なう神話学者、記号論者、文学研究者、あるいはまたロマネスクなテクストを書く作家といったように多彩な活動を行なったが、その多様さには、意味作用の働きを体現しようとする彼の問題意識が伴われているように思われる。バルトが残した様々なテクストのなかで本論文が分析対象として取り上げるのは、意味作用の在り方そのものが問われている諸テクスト、言い換えれば意味作用の在り方をめぐるバルトの思考の痕跡が顕著なかたちで見受けられる諸テクストであり、また、その方法論を通じて意味作用の働きを前景化するバルトの思考の通時的な展開をたどる作業に適した諸テクストである。

そうした諸テクストとは、先に言及したバルトの「理論的な」テクスト、すなわち『モードの体系』や写真論に代表される記号論的実践、『Ｓ／Ｚ』に代表される物語分析、レトリック論や文体論として発表された文学言語論、そして『恋愛のディスクール・断章』における方法論である（最後に挙げた分析対象については、当該の著作の元になった高等研究院でのセミナーのノートを取り上げる）。こうしたバルトの「理論的な」テクストにおいてこそ、バルトの思考のプロセスに焦点を当てることができるだろう[30]。バルトの作家研究やエッセーを取り上げないのは、バルトの解釈それ自体が前景化されているからである。『テクストの快楽』や『彼自身によるロラン・バルト』を取り上げないのは、それらの著作以上に『恋愛のディスクール・断章』（の元になったセミナーのノート）において方法論の練り上げが行なわれているからである。「理論的な」テクストであっても『零度のエクリチュール』や『批評と真実』を取り上げないのは、意味作用の働きに対する探求が萌芽的な（予備的な）段階にとどまっているからである。

本論文の全体的な構成を明確にしたうえで各章の概要について言及しよう。第 1 章においてバルトの文学言語論を検討して「提喩的意味作用」に対する基礎的な定義づけを行なうとともに、第 2 章において「提喩的意味作用」と連動するバルトの思考の在り方を明るみに出す。言い換えれば、第 1 章で「提喩的意味作用」の基本的な型を抽出し、第 2 章でその型を適用かつ応用した試みとしてバルトの諸々のテクスト実践を通時的な視野のもとで把握する。そのうえで、バルトの個別の著作に的を絞る。第 3 章および第 4 章において、

[30] 第 5 章で私たちは、『恋愛のディスクール・断章』を取り上げつつも、実質的には、その本文で記述されている内容それ自体（「恋愛のディスクール」に対するバルトの解釈）について検討するのではなく、その方法論を問題にする。そうすることには明確な理由がある。すなわち、『恋愛のディスクール・断章』で繰り広げられているバルトの解釈においてではなくその方法論においてこそ、「実験用の装置」を作り上げるバルトの思考の歩みをたどることができると考えられるからである。

バルトによる「提喩的意味作用」の応用の様々な面を示す。そして第 5 章において、第 3 章およびとりわけ第 4 章での「提喩的意味作用」の応用の延長線上にあるバルトの試みを浮き彫りにする。

本論文の全体的な構成を支える論点は、「提喩的意味作用」に胚胎する運動性、およびこの意味作用を様々なかたちで応用するバルトの創造性である。第 1 章では「提喩的意味作用」における「類」と「種」のあいだでの往復運動に、第 2 章では「提喩的意味作用」を活かした柔軟かつ創造的なバルトのグルーピングの実践に、それぞれ光を当てる。この「提喩的意味作用」の運動性とそれを活かすバルトの創造性を、第 3 章では「類」と「種」のあいだでの往復運動を背景にして絶えず意味を産出するという動的な在り方を「体系」に付与する（いわば「体系」を作り変える）創造性として、第 4 章では「類」と「種」を往復しつつ「類」の可動性を活かして新たな意味領域を切り開く創造性として、第 5 章では「類」と「種」のあいだでの概念的な（垂直的な）往復運動に水平的な次元での往復運動を付与する創造性として提示する。概念的なレベルの差異のあいだでの往復運動および「類」と「種」の関係性を活かしたバルトの創造性を問題にする理由は、この二つの論点を通じて、バルトの思考のプロセス、その輪郭を浮き彫りにすることができるからである。

第 1 章では、「提喩的意味作用」の現われを示すことを通じて、記号論的な視座のもとで意味作用の働きそのものに焦点を当てるバルトの思考方法の基盤を明らかにする。そのために、第二次の意味作用（「コノテーション」）への注視に根ざした彼の文学論（レトリック論と文体論）を取り上げる。ジュネットの文体論を参照しつつ「コノテーション」に対するバルトの捉え方を改めて検討することによって浮かび上がるのは、第一次での意味実践（「デノテーション」）から発する第二次の意味作用を通じて何らかの「類」としてのカテゴリーを導き出すという、分類活動に基づく提喩的な思考方法である。そのうえで私たちは、バルトが、ルイ・イェルムスレウのコノテーション論を背景にしたかたちで、意味作用のプロセスそのものを浮き彫りにするこうした提喩的な思考方法に、「類」と「種」の両カテゴリーのあいだを往復するという、意味作用の働きを体現する運動性を付与していることを示す。

第 2 章では、「提喩的意味作用」を通じて意味作用のプロセスを前景化するバルトの思考方法が、分類活動に基づきながらもそれにとどまらない柔軟性に富んだテクスト実践として展開されていることを明らかにする。そのために取り上げるのは、ともすれば意味作用の働きを取り逃がしてしまうような表象の領域、すなわち、バルトが「神話」と呼んだ言語活動と写真の現実表象である。この二つのタイプの表象をめぐってバルトは、意味作用の働きが覆い隠される第一次での意味実践の在り方を分析するのであり、その鍵となって

いるのが、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づく第二次の意味作用の働きである。また、こうした記号論的実践を通じてバルトが実践しているのは、論理的な整合性にとらわれず多様な要素を結び合わせるという知的操作であり、私たちは、新たな「概念」を創造しつつ「混合」というかたちで展開するこのバルトの思考方法が、彼のキャリアの初期（「今日における神話」）から晩年（『明るい部屋』）にまで広がっていることを示す。

第 3 章では、「提喩的意味作用」に基づく分類活動として体現されるバルトの思考方法を明らかにするために、『サド・フーリエ・ロヨラ』で記述されている「ル・システマティック」の概念を、記号論的な衣服分析である『モードの体系』でのバルトのテクスト実践に接続することによって、彼が描いた動的という性質を有する「体系」（システム）の在り方を示す。「ル・システマティック」と「システム」の共存関係を検討することから見えるのは、バルトによる「ル・システマティック」の具現化をめぐって、意味作用の働きを注視する彼の衣服分類が、「類」と「種」のカテゴリー間を往復する運動性を備えていることである。この運動性に裏づけられたかたちで際限のない（無尽蔵な）意味作用の働きが生じ、その結果として「システム」の動的な在り方、すなわち「ル・システマティック」が具現化されるに至る。『モードの体系』においてバルトは、際限のない意味作用の働きを前景化することによって、意味の統御を旨とする「体系」の在り方そのものを変えるという創造的な試みを行なっているのである。

第 4 章では、「提喩的意味作用」を活かしたバルトの物語分析が運動性および創造性を有することを示す。そのために私たちは、主要な分析対象として『Ｓ／Ｚ』を取り上げて意味作用の働きに基づくバルトの分類活動に焦点を当てつつ、第 3 章における「体系」の問題性と連動する問いを提示する。すなわち、「構造」と対立したかたちでバルトが記述していた「構造化」の作用に対する捉え直しを図る。私たちは、『Ｓ／Ｚ』がその代表的な実践例となっている「構造化」の作用に、相反しつつも共存する二つの様態（分析者が及ぼす作用およびテクストそれ自体に内包された機能）を読み込むのである。この作業によって明らかになるのは、物語テクストに対するバルトの分類活動が、「類」と「種」のあいだでの往復運動を元にした運動性のみならず、諸々の「種」を遍歴しながらその境界を画定してゆく「類」の可動性を活かして、新たな意味領域を切り開くという創造性を有することである。

最終の第 5 章では、バルトのキャリアの後期において、「提喩的意味作用」を通じて意味作用の様態を浮き彫りにする彼の記号論的な探求が、新たな局面に達したことを示す。そのために私たちは、「恋愛のディスクール」をめぐるバルトの方法論に焦点を当てて、『恋愛のディスクール・断章』に賭けられていたものが、包含関係（垂直的な関係）に基づく

「意味」を逃れるというかたちでの「意味作用」の探求にあったこと、および、『恋愛のディスクール・断章』の元になった高等研究院でのセミナーのノート『恋愛のディスクール』においてバルトが、「類」と「種」のあいだのつながりを垂直的かつ水平的な関係性と捉えていたことを明らかにする。この提喩的関係性には「恋愛のディスクール」の流れ（連鎖）のなかを往復するという運動性が備わっており、バルトが、「提喩的意味作用」の応用として、意味作用の働きを体現する運動性を水平的なレベルにおいても細やかなかたちで具現化しようとしていたことが明らかになるだろう。

本論文を通じて浮き彫りになる事柄は、初期から晩年に至るまで意味作用の働きそのものに焦点を当てて多様な表象を分析するバルトのテクスト実践が、提喩的関係性（「類」と「種」のカテゴリー間の関係性）を様々なかたちで応用することにある、言い換えれば提喩的関係性のヴァリエーションを提示することに存するということである。そのヴァリエーションの広がりのもとで、意味作用の働きを前景化するバルトの思考の在り方が、垂直的かつ水平的なレベルで「類」と「種」のカテゴリー間を往復する運動性に貫かれている点、さらにまた新たな意味を産み出しつつ絶えず意味を複数化してゆく創造的な分類活動として展開するという点を明るみに出すことができるだろう。

第 1 章　提喩的意味作用としての「コノテーション」

第 1 節　はじめに

本章では、バルトが問題にする「コノテーション［／共示］（connotation）」[1]すなわち第二次の意味作用が、「類」（上位カテゴリー）と「種」（下位カテゴリー）のあいだの関係性に基づいているという点を明らかにすることによって、この第二次の意味作用を「提喩的意味作用」として捉えることを試みる。

バルトの多様な仕事は、意味（sens）の持つ問題性に貫かれていると言える。意味の問題を、「コノテーション」の問題と呼び換えれば、そのことがはっきりするだろう。バルトにおけるコノテーションの働きの重要性そのものについてはこれまで看過されてきたわけではない[2]。

バルトにとってコノテーションという概念は、元々記号論の枠組みのなかで取り上げられたが、彼のテクスト実践の重点が記号論からいわゆるテクスト理論（théorie du Texte）へと移行すると、この概念に対するバルトの捉え方も変わったと言える。意味のずれや横すべり（glissement）、あるいはまたシニフィアンの戯れ（jeu du signifiant）（とりわけシニフィアンの連鎖）といった点に表われているように、テクスト理論へ問題意識を移したバルトにとって、コノテーションという概念は、記号論的な分析装置というよりもむしろ、テクストの多義性を支える基盤として捉えられていた。言い換えれば、バルトのキャリアにおいてコノテーションという概念は、その換喩的な側面が前景化されたかたちで、すなわち隣接関係による意味の移動として捉えられるようになった。このことは、絶えず転位する人というバルトに対して広く定着したイメージにもつながる。しかしながら、バルトにとってコノテーションという概念が持つ射程は、彼の活動の多様性に裏づけられた換喩的な

---

[1] 本章では、「コノテーション」を「共示」、「デノテーション（dénotation）」を「外示」と、適宜言い換える。おおむね「共示・外示」という訳語が定着しているように見受けられるが、一般に「コノテーション・デノテーション」と呼ぶ慣用を考慮に入れたためである。また、とりわけ頻繁に用いられるその動詞形の訳語である「共示する・外示する」という表現が、利便性に富んでいるため、本章では、「コノテーション・デノテーション」ならびに「共示・外示」という表記を併用することにした。

[2] バルトのキャリア全体におけるコノテーションの働きの重要性（固定した意味に対する忌避や神話批判といった点での重要性）については、花輪光のバルト論が詳しい。Cf. 花輪光『ロラン・バルト――その言語圏とイメージ圏』、みすず書房、1985 年、114-133 頁。

側面にのみ収まるのだろうか。

本章では、コノテーションの持つ換喩的な性質を念頭に置きながらも、その提喩的な性質、すなわち「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づいた意味作用の働きを、バルトが述べた多義性の根拠のひとつとして示すことを目指す。そうすることによって、提喩的関係性すなわち「類」と「種」のあいだの関係性に見られるような概念的な関係性に基づいた第二次の意味作用を「提喩的意味作用」として提示したい。

第 2 節　「コノテーション」と換喩性――バルトのテクスト理論

「コノテーション（connotation）」は、中世ラテン語「connotatio」にその起源を持つ「二次的な指示（indication seconde）」ないし「第二次の意味作用（signification seconde）」のことである[3]。

まず、コノテーションに対する一般的な捉え方を押さえておく。フランス語での代表的な言語辞典である『プチ・ロベール』で確認してみると、1 番目の定義として、「ある言葉が対象と同時にその対象が持ついくつかの属性を示すという特性――ある言葉によって示された対象が持つ諸々の性質の総体（Propriété d'un terme de désigner en même temps que l'objet certains de ses attributs. – Ensemble des caractères de l'objet désigné par un terme.）」、ならびに 2 番目の定義として、「状況やコンテクストにより通常の意味に付け加えられる、語や言表の特別な意味（Sens particulier d'un mot, d'un énoncé qui vient s'ajouter au sens ordinaire selon la situation ou le context.）」と記述されている[4]。1 番目の定義は論理学で言う「内包（compréhension）」に対応し、2 番目の定義は付加的意味に対応する。

コノテーションの一般的な用法としては、概してこの二つの定義に集約される傾向があると言える。コノテーションは、『ラルース言語学用語辞典』では、外延（extension）としての外示（dénotation）に対立する「内包」として、および付加的意味を請け負うものとして説明されている[5]。文学では，頻繁に付加的意味としてコノテーションが利用され（たとえば「香水」がぜいたくさや魅惑や官能性などを表わす[6]）、ときには比喩的意味として利用されることもある（誰かを隠喩によって蛇と呼べば、呼ばれた人が信頼できず卑劣なほど

---

[3] *Dictionnaire historique de la langue française*, Le Robert, 2006, p. 854.
[4] *Le Nouveau Petit Robert*, Le Robert, 2010, p. 510.
[5] 「しかし、それでも留意せねばならないことは、共示概念の漠然とした性質である。語彙単位の指向的な外示、意義というものに対して、共示の方はしばしば厄介払いの役割を演じている。外示の領域にないものは、すべて共示として特徴づけられることになる。」J. デュボワほか著『ラルース言語学用語辞典』、伊藤晃ほか編訳、大修館書店、1980 年、81 頁。
[6] Hendrik van Gorp *et al.*, *Dictionnaire des termes littéraires*, Éditions Champion, 2001, p. 113.

に攻撃的であることが意味される[7]。

次に、コノテーションという概念がバルトによってどのように取り上げられたのかを確認しよう。バルトによるコノテーションに対する基礎的な定式化は、「記号学の原理」（1964年）においてなされている。

あらゆる「意味作用の体系（système de signification）」は、「表現（expression）」と「内容（contenu）」の面を含み、「意味作用」はこの二つの面の「関係（relation）」に相当する。これは「ERC」と表わせる。この「ERC」という第一次の意味作用の体系が、第二次の意味作用の体系のなかの要素となり、「取り外し（décrochage）」が可能なかたちとして入れ子構造的に、第一の体系が第二の体系のなかに入り込む。このように第一の体系が第二の体系のなかに入り、この第一の体系（ERC）が第二の体系の表現の面あるいはシニフィアンとなっている場合がコノテーションである。これは「（ERC）RC」と表わすことができる。続けてバルトは次のように述べている。

> 第一の体系はそれゆえデノテーションの面を構成し、第二の体系（第一の体系から拡張した）がコノテーションの面を構成する。したがって、共示された［／コノテーションの］体系とは、表現の面がそれ自体ひとつの意味作用の体系によって構成された体系のことである、と言うことができる。コノテーションのよく見られるケースはもちろん、分節された言語が第一の体系を形成する複合的な体系によって構成されている場合だろう（たとえば、文学の場合がそうである）。[8]

表現の面がひとつの意味作用によって構成されているというコノテーションの定義は、ルイ・イェルムスレウのコノテーション論を土台にしたものである[9]。バルトによるコノテ

---

[7] ジョゼフ・チルダーズほか編『コロンビア大学　現代文学・文化批評用語辞典』、杉野健太郎ほか訳、松柏社、1998 年、110-111 頁。

[8] « [...] le premier système constitue alors le plan de *dénotation* et le second système (extensif au premier) le plan de *connotation*. On dira donc qu'*un système connoté est un système dont le plan d'expression est constitué lui-même par un système de signification* ; les cas courants de connotation seront évidemment constitués par les systèmes complexes dont le langage articulé forme le premier système (c'est, par exemple, le cas de la littérature). », Roland Barthes, « Éléments de sémiologie » (1965 [1964]), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 695（「記号学の原理」、沢村昂一訳、『零度のエクリチュール　付・記号学の原理』、渡辺淳・沢村昂一訳、みすず書房、1971 年、196 頁）.

[9] コノテーションの表現の面をひとつの言語活動と見なす、イェルムスレウが与えたコノテーションに対する基礎的な定義は、次の記述に見られる。「これから行なわなければならないことは、われわれの視野を最終的に広げることによって、その表現の面がひとつの言語活動として構成されている諸々の言語活動、およびその内容の面がひとつの言語活動として構成されている諸々の言語活動が存在するという点を論証することである。前者をコノテーションの言語活動、そして

ーションの定義は、コノテーションに対する理解を広く普及させることになったとともに、こうした作業を背景にしてバルトの記号論は 1960 年代を中心に展開されていった。

1970 年代に入って、バルトの活動がテクスト理論（théorie du Texte）とのつながりを強めると、たとえば『Ｓ／Ｚ』（1970 年）において、コノテーションはテクストの複数性に結びつけられる。

> コノテーションは、古典的なテクストの持つ多義性に、古典的なテクストの基礎をなすその限定された複数性に近づくための方法である（現代的なテクストにおいてコノテーションが存在しているのかどうかはたしかではない）。［…］分析という点では、コノテーションは二つの空間を通して明確になる。そのひとつは、継起的な空間、［語の］配列のうえでの連鎖、諸々の文の継起性に従った空間であり、それら諸々の文に沿って、意味は取り木をしている枝のように増殖する。もうひとつは、凝集的な空間であり、テクストの特定の箇所であり、そうした箇所は、実際のテクストの外部に位置するほかの諸々の意味と相関関係にあり、それら諸々の意味とともにシニフィエの星雲のようなものを形成する。[10]

コノテーションは、（古典的な）テクスト、すなわちここではオノレ・ド・バルザックの小説『サラジーヌ』の持つ「多義性（polysémie）」にアプローチするための方法であると述べられており、多義性はコノテーションを通じてこそ受容されるという見解が示されている。『Ｓ／Ｚ』について述べられたテクストのなかで、コノテーションを通じた多義性へのアプローチは、小説『サラジーヌ』が持つ付加的意味の読み取りであると規定されていることから明らかなように[11]、端的に言えば、バルトはコノテーションを付加的意味として分

後者をメタ言語と呼ぶことにする。」« Il nous reste à démontrer, par un dernier élargissement de notre perspective, qu'il existe aussi des langages dont le plan de l'expression est un langage et d'autres dont le plan du contenu est un langage. Nous appellerons les premiers *langages de connotation* et les seconds *métalangages*. », Louis Hjelmslev, « Langages de connotation et métalangages », in *Prolégomènes à une théorie du langage*, Minuit, 1968 (1943), p. 155（「共示言語とメタ言語」、『言語理論の確立をめぐって』、竹内孝次訳、岩波書店、1985 年、132 頁）.

[10] « La connotation est la voie d'accès à la polysémie du texte classique, à ce pluriel limité qui fonde le texte classique (il n'est pas sûr qu'il y ait des connotations dans le texte moderne) [...] Analytiquement, la connotation se détermine à travers deux espaces : un espace séquentiel, suite d'ordre, espace soumis à la successivité des phrases, le long desquelles le sens prolifère par marcotte, et un espace agglomératif, certains lieux du texte corrélant d'autres sens extérieurs au texte matériel et formant avec eux des sortes de nébuleuses de signifiés. », Roland Barthes, *S/Z* (1970), in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 125（『Ｓ／Ｚ――バルザック『サラジーヌ』の構造分析』、沢崎浩平訳、みすず書房、1973 年、10-11 頁）.

[11] 「［…］私が読むこの中編小説、この長編小説、この詩には、ただちにある意味の付加が存在

析しているのである。

実際にコノテーションがどのようなプロセスを経て読み取られるのかという点について目を向けると、それは、ヤコブソンの言語理論を背景にした言語活動の二つの軸に基づくことがわかる。範列（paradigme）という隠喩的秩序との対照で、換喩を連辞（syntagme）という言語単位の隣接関係として捉えるヤコブソンの言語理論から見れば[12]、コノテーションが見出される継起的空間は、換喩的な次元であると言い換えられる（凝集的空間の方は、シニフィエの「星雲（nébuleuses）」と形容された隠喩的な次元を形成することになるだろう）。ここで注目したいのは、そうした言語活動の継起的な次元に沿って意味が増殖するという旨の記述である。つまり換喩の隣接関係は、単に言語単位の連鎖を形成しているばかりでなく、意味の増殖をもたらすのであり、隣接関係に沿って意味が増えてゆく有り様を目撃する私たちは、様々な意味を通過ないし横断していることになる。それゆえバルトにとって換喩性は、意味を横断するという射程を有している。

そのうえで考慮に入れなければならないのは、バルトのテクスト理論において、シニフィアンの「戯れ（jeu）」という概念に支えられながら、意味の増殖をもたらす換喩性の働きが前景化されることである。バルトの有名な論文「作品からテクストへ」（1971 年）では、シニフィアンの戯れと換喩性のつながりに関して、次のように述べられている。

> ［…］シニフィアンの無限性は、何らかのえも言われぬもの（名づけようのないシニフィエ）という観念を指し示しているのではなく、戯れという観念を指し示している。絶え間ないシニフィアンが（同じ名前が絶え間なく繰り返されるようなカレンダーのように）産み出されるのは、「テクスト」の場においてであり（あるいはむしろ、「テクスト」自体がその場なのであるが）、それは、成熟という有機的な道筋、あるいは深化という解釈学的な道筋によって実現されるのではなく、むしろ、ずれ、部分的重複、変異することといった、系列をなす動きによって実現される。「テクスト」を規定する

するのであり、辞書も文法もその付加的意味について説明できない。バルザックの『サラジーヌ』を対象にした私の読書を書くことによって、私は、そうした付加的意味の空間を描き出そうとしたのである。」« [...] il y a *immédiatement* dans cette nouvelle, ce roman, ce poème que je lis, un supplément de sens, dont ni le dictionnaire ni la grammaire ne peuvent rendre compte. C'est ce supplément dont j'ai voulu tracer l'espace, en écrivant ma lecture du *Sarrasine* de Balzac. », Roland Barthes, « Écrire la lecture » (1970), in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 603（「読書のエクリチュール」、『言語のざわめき』、花輪光訳、みすず書房、新装版 2000 年（初版 1987 年）、39 頁）.

[12] Cf. Roman Jakobson, « Deux aspects du langage et deux types d'aphasie », in *Essais de linguistique générale*, traduit de l'anglais et préfacé par Nicolas Ruwet, Minuit, 1963, pp. 43-67（「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」、田村すゞ子訳、『一般言語学』、川本茂雄監修、みすず書房、1973 年、21-44 頁）.

論理は、了解的なもの（作品が「言わんとしていること」を定義すること）ではなく、換喩的である。連合、隣接性、繰延べによる作業は、象徴的なエネルギーの解放と一致する（もしこのエネルギーがなければ人間は死ぬだろう）。[13]

ここでもまた、換喩を「隣接性（contiguïté）」に基づく関係性として捉えるヤコブソンの言語理論の影響がはっきりと見て取れる（今しがた確認したとおり、その隣接関係は意味の増殖という考え方と結びついている）。この引用文の末尾の「象徴的なエネルギーの解放（libération de l'énergie symbolique）」という記述は、意味の複数性（テクストの複数性）の称揚を示している[14]。しかし同時に、バルトにとって意味の複数性とは、読み取り可能ないくつかの意味に狙いを定めているのではなく、より根本的なかたちで受容される複数性、すなわち意味の通過ないし横断として体験される複数性のことであるため[15]、「象徴的なエネルギーの解放」は、絶え間なく変転する意味の在り方として想定されていると見なすべきだろう。

それゆえ、換喩が隣接関係と幅広く把握されることによって（換喩が通常依拠する現実的な隣接関係に、連辞のうえでの隣接関係というアスペクトが加えられることによって）、

---

[13] « [...] l'*infini* du signifiant ne renvoie pas à quelque idée d'ineffable (de signifié innommable), mais à celle de *jeu* ; l'engendrement du signifiant perpétuel (à la façon d'un calendrier du même nom) dans le champ du Texte (ou plutôt dont le Texte est le champ) ne se fait pas selon une voie organique de maturation, ou selon une voie herméneutique d'approfondissement, mais plutôt selon un mouvement sériel de décrochements, de chevauchements, de variations ; la logique qui règle le Texte n'est pas compréhensive (définir « ce que veut dire » l'œuvre), mais métonymique ; le travail des associations, des contiguïtés, des reports, coïncide avec une libération de l'énergie symbolique (si elle lui faisait défaut, l'homme mourrait). », Roland Barthes, « De l'œuvre au texte » (1971), in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 911（「作品からテクストへ」、『物語の構造分析』、花輪光訳、みすず書房、1979 年、96 頁）.

[14] 『批評と真実』（1966 年）において、バルトは次のように述べている。「[…] 作品はいくつもの意味を同時に保持しているが、それは構造上そうなのであって、作品を読む人々の欠陥によるのではない。この点においてこそ作品は象徴的なのである。象徴とは、イメージではなく、意味の複数性そのものである。」« [...] l'œuvre détient en même temps plusieurs sens, par structure, non par infirmité de ceux qui la lisent. C'est en cela qu'elle est symbolique : le symbole, ce n'est pas l'image, c'est la pluralité même des sens. », Roland Barthes, *Critique et vérité* (1966), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 784（『批評と真実』、保苅瑞穂訳、みすず書房、2006 年、75 頁）.

[15] 「「テクスト」は複数的である。その趣旨は、ただ単に「テクスト」がいくつもの意味を持つことではなく、「テクスト」が意味の複数性そのもの、すなわち（ただ単に容認可能なわけではなく）還元できない複数性を成し遂げるということである。「テクスト」は意味の共存ではなく、意味の通過、横断である。したがって「テクスト」は、たとえ自由な解釈であっても、ある解釈に属することは有り得ず、爆発や拡散に属する。」« Le Texte est pluriel. Cela ne veut pas dire seulement qu'il a plusieurs sens, mais qu'il accomplit le pluriel même du sens : un pluriel *irréductible* (et non pas seulement acceptable). Le Texte n'est pas coexistence de sens, mais passage, traversée ; il ne peut donc relever d'une interprétation, même libérale, mais d'une explosion, d'une dissémination. », Barthes, « De l'œuvre au texte », p. 911. 邦訳 97 頁。

意味の複数性を支える「ずれ（décrochement）」や「変異すること（variation）」が換喩の働きとして前景化されるのであり、言い換えれば、意味の増殖（またその帰結としての意味の横断）という考え方を元にして、換喩は、際限のないシニフィアンの産出、すなわち意味の絶え間ない変転を促進する原動力として存在することになる。

「テクスト――その理論」（1973 年）においては、「デノテーションのメッセージに接ぎ木された意味の「振動」（« vibrations » sémantiques greffées sur le message dénoté）」というコノテーションに対する形容、そのなかでもとりわけ接ぎ木されるという点に現われている、隣接関係に基づいた意味の増殖という換喩的なコノテーション観が、意味形成性（signifiance）の作用のもとで、テクストを読みまた書く主体の「消失（perte）」（およびそのことによる「悦楽（jouissance）」の状態への到達）に結びつく[16]。この場合、主体の存在ないし位置を見定めることの難しさは、際限のない意味の増殖に主体が巻き込まれることに起因していると考えられる。

『彼自身によるロラン・バルト』（1975 年）においては、意味の複数性が、固定した状態を逃れる「震え（frisson）」として記述されているとともに[17]、さらにその複数性が推し進められると、あらゆる意味を「通り抜け（traverser）」、意味を「衰弱させる（exténuer）」ことによってなされる意味の「免除（exemption）」という帰結に至る[18]。あるいはまた、この著作のなかで繰り返し用いられている「転位（déplacement）」や「漂流すること（dérive）」といった用語が、「ずれ」に基づいて多様に変化していく意味の運動性を示している。

このように、バルトのテクスト理論におけるコノテーションの概念は、意味が絶えず変転するという換喩的ヴィジョンとともに、その付加的意味としての側面が強調されたのである。

第 3 節　「コノテーション」と提喩性――ジュネットの文体論

前節で確認したとおり、バルトのテクスト理論においては、コノテーションの換喩的な側面が前景化されていた。しかしながら、コノテーションは換喩的な原理だけで捉えきれる概念なのだろうか。

---

[16] Cf. Roland Barthes, « Texte (théorie du) » (1973), in *Œuvres complètes*, t. IV (1972-1976), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 449-450（「テクスト――その理論」、花輪光訳、『現代思想　特集＝構造主義以後』、1981 年 7 月号（第 9 巻第 7 号）、82-83 頁）.

[17] Roland Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes* (1975), in *Œuvres complètes*, t. IV (1972-1976), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 674（『彼自身によるロラン・バルト』、佐藤信夫訳、みすず書房、新装版 1997 年（初版 1979 年）、145-146 頁）.

[18] Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes*, pp. 664-665. 邦訳 125-126 頁。

この点について検討するために、ジェラール・ジュネットの文体論を参照しよう。というのもジュネットは、「文体と意味作用」（1991 年）という論文のなかで文体に対する記号論的な定義を試みるにあたって、コノテーションに対する示唆に富む捉え方を提示しているからである。

ジュネットは、デノテーションの「仕方（manière / façon）」を表わすというコノテーションの特徴を強調しながら、フランス語「long」（長い）という語が持つ意味作用について、次のように述べている。

> [lõ]という音自体はフランス語の単語ではない。フランス語になり、またフランス語を共示しうるのは、[lõ]という音の「長い」という意味への結びつきなのである。言い換えれば、この語のフランス性［／フランス語性］という共示［／コノテーション］は、この語の外示的な［／デノテーションの］機能に付加されるだけではない。この共示［／コノテーション］は、第二次において、イェルムスレウの（ERC）RC という定式とバルトの取り外しできる図式が示している入れ子型の現象を通じて、この外示的な機能に依存しているのである。したがってここでは、*long* という（全体としての）語は、二つではなく、少なくとも四つの意味作用を担っている。すなわち、外示［／デノテーション］（長さ）、その物理的な特徴が例示する価値（短さ）、そしてそれらが関係づけられる際に共示される二つの価値、つまりフランス語への帰属とその「反表現的な」性質である。したがって、記号という術語によって日常言語がよくやるように、シニフィアン（[lõ]）と全体としての記号（[lõ] =「長い」、つまり *long*）を混同してはならない。単なる例示的な価値はシニフィアンに伴い（すなわち、[lõ]［という音］は短い）、共示的な価値は全体としての記号に伴う（すなわち、*long*［という語］はフランス語である）。［…］共示［／コノテーション］は、単なる付加的な価値として、あるいは意味の追加として、外示［／デノテーション］に生じるのではなく、外示の仕方を全面的に担保にした派生的な価値として、外示に生じるのである。[19]

[19] « Le son [lõ] n’est pas un mot français ; ce qui est un mot français, et qui peut donc connoter la langue française, c’est la liaison du son [lõ] au sens « long ». Autrement dit, sa connotation de francité ne *s’ajoute* pas seulement à sa fonction dénotative ; elle en *dépend*, au second degré, par le phénomène de décrochement qu’illustrent la formule de Hjelmslev (ERC)RC et le tableau déboîté de Barthes. Le mot (total) *long* est donc ici porteur non pas de deux, mais bien d’au moins quatre significations : sa dénotation (longueur), la valeur exemplifiante de son caractère physique (brièveté), et les deux valeurs connotatives de leur mise en relation : son appartenance à la langue française et son caractère «anti-expressif ». Comme quoi il ne faut pas trop confondre, comme le fait la langue commune sous le terme de *signe*, le signifiant ([lõ]) et le signe total ([lõ] = « long » ou, pour faire bref, *long*). Les valeurs simplement examplificatoires s’attachent au premier ([lõ] est bref), les valeurs connotatives au second : *long* est français. [...] La connotation n’advient pas à la dénotation comme une simple valeur ajoutée, ou

ここでジュネットが述べているところの、フランス語「long」（長い）という語が持つ意味作用を整理すると次のようになる。デノテーションとして「長い」、この語あるいは正確にはそのシニフィアンが物理的に短いため、この語の性質つまり「例示」として「短さ」が得られる。なおこの例での物理的特徴のように、諸属性の所有という観点から捉えられる意味作用に対する呼称として、ジュネットはネルソン・グッドマンの記号学から「例示（exemplification）」という用語を借用している。

ジュネットによれば、コノテーションとして導かれるのは、フランス語への帰属として「フランス語性（francité）」、ならびに「反表現的な（anti-expressif）」性質、すなわち「長い」を外示するが「長さ」ではなく逆に「短さ」を例示するという性質である。それゆえコノテーションは、「フランス語性」や「反表現性」というデノテーションの「仕方（manière）」を示していることがわかる。フランス語「bref」（短い）の場合には、フランス語への帰属として「フランス語性」、ならびに「表現性（expressivité）」、すなわち「long」とは反対に、「bref」は「短さ」を外示するとともに例示しているから他の語より「表現的」であるという性質が、コノテーションとして導かれる。

さらにまた、先に確認したように、一般に比喩的意味はコノテーションに帰属すると考えられているが、これに対してジュネットは比喩的意味を、文彩による「間接的なデノテーション（dénotation indirecte）」と捉えている。この捉え方について、ジュネットが挙げている簡単な例を用いて確認しておく。フランス語「nuit」（夜）は、「夜」を指示する字義的ないし直接的なデノテーションの機能を有しているのはもちろんだが，この語は「死」の隠喩としてもよく用いられる（死の生に対する関係が夜の昼に対する関係に類似している）。この場合、「夜」という「デノテーションの内容（un dénoté）」すなわちデノテーション（第一次の意味作用）のシニフィエを介することによって、隠喩という文彩が働くことになり、「nuit」がこの文彩により間接的にデノテーションとして「死」を示すと言える。要するに、隠喩という文彩が媒介されているのである。同様に、「女性」を表わす「スカート」の場合なら、これは換喩を媒介にした間接的なデノテーションということになる。

ジュネットは、ここで挙げた「死」を表わす「nuit」を、「意味」を経由する「間接的なデノテーション」として分類している。すなわち「語義変換（Métasémèmes）」ないし「転義法（tropes）」の場合であり、「意味」（「夜」）を経由して「死」が間接的にデノテーション

---

comme un supplément de sens, mais comme une valeur *dérivée*, entièrement gagée sur la manière de dénoter. », Gérard Genette, « Style et signification », in *Fiction et Diction* précédé de *Introduction à l'architexte*, Seuil, coll. « Points », 2004 (1991), p. 190（「文体と意味作用」、『フィクションとディクション――ジャンル・物語論・文体』、和泉涼一・尾河直哉訳、水声社、2004 年、94-95 頁）.

として示されている。また、「間接的なデノテーション」のほかの例として、「形式」を経由しているもの、たとえば「先生」を表わす「prof」という略語（「professeur」という正しい形式を経由している）や「つんぼ（聾者を表わす蔑称）」を表わす「sourdingue」という拡張（「sourd（耳の不自由な人）」という形式を経由している）などが挙げられる。この場合は「語形変換（Métaplasmes）」ないし「語り方の文彩（figures de diction）」と呼ばれている。さらに、こうした語のレベルに適用されるケースのほかに、語以上のレベルに適用されるケースも含めて「間接的なデノテーション」の分類が行なわれている[20]。

そのうえで、ジュネットは次のように述べる。

> これらの間接的な外示［／デノテーション］（意味あるいは形式による迂回を経由した）のあらゆるケースにおいて、始発となるシニフィアン（*nuit* や *prof*）から最終的なデノテーションの内容（「死」や「先生」）に至る経路上で遭遇するあらゆる出来事と同じように、この間接性そのものが、第二次において、その諸属性を例示、したがって共示している［／コノテーションとして示している］。たとえば、*nuit*［「夜」という語］が死を隠喩的に外示するときには、この外示［／デノテーション］の仕方がその隠喩性を、より一般的に言うならその文彩性を、そしてさらに一般的に言うならある種の「詩的言語」を共示しているのである――「愛」を表わす古典的な隠喩である *flamme*［「炎」という語］は、その隠喩性と同時に古典的な語法を共示し（だが「炎」を表わす *flamme* にその働きはない）、（「サツマイモ」ではなく）「ジャガイモ」を表わす庶民的な隠喩である *patate* は、その隠喩性と同時に庶民的な言語使用域を共示し、口語的な語形変換である *sourdingue* はその語形変換性と同時にそのくだけた調子を共示する、など。[21]

ここからわかるとおり、ジュネットによれば、「死」を表わす「nuit」という語は、隠喩

---

[20] ここで挙げなかった間接的なデノテーションの様々なケースについては、とりわけ次の箇所を参照のこと（また、「語義変換」や「語形変換」といった用語は、グループ μ の『一般修辞学』から借用されている）。Cf. Genette, « Style et signification », pp. 197-201. 邦訳 100-103 頁。

[21] « Dans tous ces cas de dénotation indirecte (par détour de sens ou de forme), l'indirection elle-même, comme tout accident rencontré sur le trajet du signifiant initial (*nuit*, *prof*) au dénoté ultime (« mort », « professeur »), exemplifie au second degré, et donc connote ses propriétés. Ainsi, lorsque *nuit* dénote métaphoriquement la mort, cette façon de dénoter connote sa métaphoricité, plus généralement sa figuralité et, plus généralement encore, un certain « langage poétique » -- comme *flamme* pour « amour », métaphore classique, connote à la fois sa métaphoricité et la diction classique (mais non *flamme* pour « flamme ») ; *patate* pour « pomme de terre » (mais non pour « patate »), métaphore populaire, connote à la fois sa métaphoricité et le registre populaire ; *sourdingue*, métaplasme familier, à la fois son caractère métaplasmique et sa familiarité, etc. », Genette, « Style et signification », pp. 200-201. 邦訳 103 頁。

を媒介にした間接的なデノテーションであり、コノテーションとして導かれるのはデノテーションの「仕方（façon）」、すなわち「隠喩性（métaphoricité）」、あるいはより広く言えば、ジュネットの述べるところでは「より一般的に言えば（plus généralement）」、「文彩性（figuralité）」やある種の「詩的言語（langage poétique）」である。「女性」を表わす「スカート」の場合なら、これは換喩を媒介にした間接的なデノテーションであり、コノテーションとして示されるのは換喩性や文彩性などであるということになる。

それゆえ、ジュネットの見解に従えばコノテーションは、付加的意味や比喩的意味すなわち間接的なデノテーションとは異なり、デノテーションの「仕方」あるいはその間接性が問題になる意味作用であると言える。このことは、換喩的な横すべりという考え方では捉えきれないような意味の問題に私たちの注意を促しているのではないだろうか。

さらに私たちにとって重要なのは、フランス語性や文彩性などといったジュネットの述べる「デノテーションの仕方」は、「類」と「種」の関係に見られるようなカテゴリー的な（概念的な）包含関係に基づくため提喩的な性質を有するという点である。「死」を表わす「nuit」という語は、その第二次の意味作用において、フランス語性（フランス語への帰属）や文彩性（隠喩表現であること）といったデノテーションの仕方を包含していると考えることができる。同様に、「先生」を表わす「prof」という略語の場合なら、「形式を経由した間接的なデノテーションであること（いわば語形変換性）」や「くだけた表現であること」といったデノテーションの仕方を包含している。言い換えれば、「死」を表わす「nuit」という語は「フランス語での表現」や「文彩表現」という上位クラスに、「先生」を表わす「prof」は「語形変換による表現」や「くだけた表現」という上位クラスに、カテゴリー間の関係性に基づいていわば格上げされる、つまり一般化されることになる。このように、コノテーションに対してジュネットが強調した「デノテーションの仕方」という観点を得ることによって、意味をめぐるカテゴリー的な包含関係というコノテーションの提喩的特徴が明らかになるのである。

ジュネットの文体観という見地から付け加えると、デノテーションの仕方は、文体を形容するための「分類する［／クラス分けをする］（classer）」といういわば人間の思考方法そのものとして現われる。つまり、フランス語性や文彩性、あるいはまた語形変換による表現やくだけた表現であるといった「デノテーションの仕方」とは、デノテーションが属する言説の抽象的な様式あるいはジャンルであると言い換えることができるだろう。それゆえ、文体は単に規範からの偏差として言説ないしテクストに付加されるのではなく、いかなるテクストも、そのデノテーションの仕方を含むという点において、すなわちそのデノテーションが属する言説の様式ないしジャンルを二次的に表わすという点において、必ず

何らかの文体を持っていることになる[22]。

この点について、ジュネットは次のように述べている。

> ［…］形容すること、それは分類することである。「このテクストの文体は高尚である、あるいは優雅である、あるいは定義し難い、あるいは驚愕するほど陳腐である」と言うことは、その文体が高尚であったり優雅であったり等々といった諸々のテクストのカテゴリーに、そのテクストを分類することである。［…］したがって文体の形容は純粋に内在的であることは決してなく、つねに超越的かつ類型的である。[23]

諸々の文体特徴を形容することはそれらを分類することになる以上、諸々のデノテーションの仕方を形容することは、それらを分類することにほかならない。たとえば、「死」を表わす「nuit」という語を隠喩表現であると形容する際には、必然的にこの語を、それが持つ「隠喩性」というステータス（デノテーションの仕方）を共有するほかの諸々の語、すなわち「愛」を表わす「flamme」という語や「ジャガイモ」を表わす「patate」という語などとともに、隠喩表現として分類することになる。ジュネットが述べるところの、文体の形容が「内在的（immanent）」では有り得ず、必ず「超越的（transcendant）」かつ「類型的（typique）」であるという旨は、この場合であれば、「死」を表わす「nuit」という語それ単独では、その語が持つ隠喩性というステータスを確定させることができず、そのステータスを確定させるためには、必然的に共通のステータスを持ったほかの語を参照する必要があり、そしてそうすることは分類するという作業にほかならないということである。

文体の形容は類型的な性質を有するが、ジュネットは、「言説の属性（propriétés du discours）」（ないし「言説の形式的な属性（propriétés formelles du discours）」）という呼称を提示しつつ、「デノテーションの仕方」という観点を、文体ないし「スタイル」の概念をより明確に定義する際の基盤としている[24]。この場合、「スタイル（style）」という概念は、文体として言説に適用されるだけではなく、人が何かをするときの仕方（ないし目的に対する手段）を指しており、「仕方（manière）」という観点は最終的に、「スタイル」の概念に集約される。この点において、「デノテーションの仕方」（コノテーション）と「スタイル」（文体）の概

---

[22] たとえ文体的特徴が存在しないように見える中性的なエクリチュールでも、そのようなものとして分類（形容）できる。Cf. Genette, « Style et signification », pp. 205-208. 邦訳 106-108 頁。

[23] « [...] qualifier, c’est classer. Dire : « Le style de ce texte est sublime, ou gracieux, ou indéfinissable, ou consternant de platitude », c’est le ranger dans la catégorie des textes dont le style est sublime, ou gracieux, etc. [...] Les qualifications stylistiques ne sont donc jamais purement immanentes, mais toujours transcendantes et *typiques*. », Genette, « Style et signification », p. 207. 邦訳 108 頁。

[24] Cf. Genette, « Style et signification », pp. 211-214. 邦訳 111-114 頁。

念は切り離せない。

このように、ジュネットによれば、コノテーションにはデノテーションの仕方という特徴があるとともに、コノテーションについて分析することは、分類活動という論点のみならず、文体の概念そのものにも直結している。コノテーションには、換喩的原理に基づいた付加的意味とは別の側面が存在するのであり、それは、提喩的原理に基づき言説の様式ないし「スタイル」を示す意味作用のことであると言えるだろう。

第 4 節　バルトのレトリック論とイェルムスレウのコノテーション論における提喩性

本節では、バルトのレトリック論とルイ・イェルムスレウのコノテーション論を検討することによって、コノテーションが提喩的関係性（「類」と「種」のあいだの関係性）に基づいていることを示す。

4-1. バルトのレトリック論とコノテーションの問題圏

先に見たように、バルトのテクスト理論においては換喩的なヴィジョンが際立っていたが、実際には、バルトはデノテーションの仕方をコノテーションとして捉えている。「記号学の原理」においてコノテーションについて述べられた箇所で、バルトは次のように記述している。

> フランス語でのメッセージの集まり［／総体］は、たとえば、「フランス語」というシニフィエを参照している［／指し示している］。ある作品［文学作品］は「文学」というシニフィエを参照する［／指し示す］ことができる。これらのシニフィエは文化や知や歴史と密接に関係しており、もしそう言えるのならば、それら文化や知や歴史によって、世界は体系に浸透するのである。イデオロギーとは要するに、コノテーションの諸々のシニフィエの形式［／形相］（イェルムスレウ的な意味で［の形式］）なのだろうし、他方でそれとは反対に、レトリックは諸々のコノテーター［／共示体］の形式［／形相］であるだろう。[25]

[25] « [...] l'ensemble des messages français renvoie, par exemple, au signifié « Français » ; une œuvre peut renvoyer au signifié « Littérature » ; ces siginifiés communiquent étroitement avec la culture, le savoir, l'histoire, c'est par eux, si l'on peut dire, que le monde pénètre le système ; l'*idéologie* serait en somme la *forme* (au sens hjelmslevien) des signifiés de connotation, cependant que la *rhétorique* serait la forme des connotateurs. », Barthes, « Éléments de sémiologie », p. 697. 邦訳 198 頁。

「デノテーションの仕方」という用語自体は用いられていないが、諸々のデノテーション（ある文学作品やフランス語でのメッセージの集まり）に対応するコノテーション（「文学」や「フランス語」）は、「デノテーションの仕方」として扱われている。コノテーションとしてバルトが読み取っているのは、イェルムスレウが提起した（「実質（substance）」に対する）「形式（forme）」であり[26]、その「形式」の次元をバルトが自身の記号論に取り入れていることがわかる。より正確に言えば、「文学」や「フランス語」は、コノテーションのシニフィエの「形式」、つまりコノテーションのシニフィエが組織化される様態として捉えられており、そうしたコノテーションのシニフィエの「形式」が「イデオロギー」と呼ばれている。

それゆえ実際のところバルトは、「イデオロギー」という呼称のもとで、コノテーションにおけるシニフィエの組織化の在り方として機能する提喩性（カテゴリー間の関係性）を重要視しているのである。さらに、ここで述べられている「形式」とは、言語外の事実への参照に頼ることなく記述される次元であるため[27]、「デノテーションの仕方」として現われる提喩性は、現実社会の具体的状況とは別の側面から、すなわち神話批判とは別の方法論的態度から、「イデオロギー」について記述することを可能にしているのだと言える。

他方で「レトリック」は、「コノテーター［／共示体］（connotateur）」（コノテーションのシニフィアン[28]）の「形式」、すなわち諸々のコノテーターの組織化の在り方である。入れ子状になったコノテーションの定式（「（ERC）RC」）に従えば、コノテーションのシニフィ

---

[26] イェルムスレウが提起した「形式」とは、「表現（expression）」（シニフィアン）の面で言えば、個別具体的な諸々の音的な「実質（substance）」を組織化している抽象的な体系であり、「内容（contenu）」（シニフィエ）の面で言えば、「実質」としての「思考（pensée）」の組織化の在り方である。Cf. Louis Hjelmslev, « Expression et contenu », in *Prolégomènes à une théorie du langage*, Minuit, 1968 (1943), pp. 71-85（「表現と内容」、『言語理論の確立をめぐって』、竹内孝次訳、岩波書店、1985 年、58-72 頁）.

[27] 「記号学の原理」で「形式」と「実質」について記述された箇所では、次のように述べられている。「形式とは、いかなる言語外の前提に頼ることなく、言語学によって網羅的かつ簡潔に、また一貫性を伴って（[そうした記述方法は] 認識論的な基準である）記述され得るものである。実質とは、言語外の諸前提に頼ることなくしては記述され得ない諸々の言語現象が呈する諸様相の総体のことである。」« La *forme*, c'est ce qui peut être décrit exhaustivement, simplement et avec cohérence (critères épistémologiques) par la linguistique, sans recourir à aucune prémisse extra-linguistique ; la *substance*, c'est l'ensemble des aspects des phénomènes linguistiques qui ne peuvent être décrits sans recourir à des prémisses extra-linguistiques. », Barthes, « Éléments de sémiologie », p. 658. 邦訳 133 頁。

[28] 「コノテーションの諸々のシニフィアン、それらをコノテーターと呼ぶことにしよう、それらは、デノテーションの体系の諸々の記号（シニフィアンとシニフィエの結びつき）によって構成されている。［…］」« Les signifiants de connotation, que l'on appellera des *connotateurs*, sont constitués par des *signes* (signifiants et signifiés réunis) du système dénoté [...] », Barthes, « Éléments de sémiologie », p. 696. 邦訳 197 頁。

アンの「形式」は、コノテーションのシニフィエの「形式」とデノテーションをつなぐ蝶番の役割を果たしている。コノテーションのシニフィエの「形式」は、コノテーションのシニフィアンの「形式」（つまり「レトリック」）に媒介されたかたちで導き出されるはずであり、またそうである以上、「レトリック」に対するバルトの分析方法を把握する必要があるだろう。

広告の視覚イメージを分析対象にした論文「映像のレトリック」（1964 年）では、コノテーターと「レトリック」の関係性について、次のように述べられている。

> 広範囲にわたるイデオロギーには、選ばれた実質によって特徴づけられるコノテーションの諸々のシニフィアンが実際に対応する。そうしたシニフィアンをコノテーター、諸々のコノテーターの総体［／集まり］をレトリックと呼ぶことにしよう。すなわちレトリックは、このようにイデオロギーのシニフィアンの面として現われている。レトリックはその実質（ある場合には分節された音、別の場合には映像や身振り、等々）によって必然的に変わるが、その形式によっては必ずしも変わらない。たとえば、夢と文学と映像に共通する唯一のレトリックの形式が存在するということさえ十分有り得る。それゆえ映像のレトリック（すなわち映像の諸々のコノテーターの分類）は、視覚の物理的な制約（たとえば、発声のうえでの制約とは異なった制約）に従っているという点で特殊なものであるが、「文彩」が諸要素の形式的な関係でしかないという点において［映像以外の領域にわたる］一般性を持つ。[29]

「記号学の原理」での記述と同様に、「イデオロギー」すなわち第二次の意味作用におけるシニフィエ（の「形式」）に対応するコノテーションのシニフィアンがコノテーターであると述べられていると同時に、「記号学の原理」ではコノテーターの「形式」であるとしか記述されていない「レトリック」が、ここでは「諸々のコノテーターの集まり（ensemble des

[29] « A l'idéologie gérérale, correspondent en effet des signifiants de connotation qui se spécifient selon la substance choisie. On appellera ces signifiants des *connotateurs* et l'ensemble des connotateurs une *rhétorique* : la rhétorique apparaît ainsi comme la face signifiante de l'idéologie. Les rhétoriques varient fatalement par leur substance (ici le son articulé, là l'image, le geste, etc.), mais non forcément par leur forme ; il est même probable qu'il existe une seule *forme* rhétorique, commune par exemple au rêve, à la littérature et à l'image. Ainsi la rhétorique de l'image (c'est-à-dire le classement de ses connotateurs) est spécifique dans la mesure où elle est soumise aux contraintes physiques de la vision (différentes des contraintes phonatoires, par exemple), mais générale dans la mesure où les « figures » ne sont jamais que des rapports formels d'éléments. », Roland Barthes, « Rhétorique de l'image » (1964), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 586-587（「映像の修辞学」、『第三の意味――映像と演劇と音楽と』、沢崎浩平訳、みすず書房、新装版 1998 年（初版 1984 年）、44 頁）.

connotateurs)」と呼ばれている。また、映像の「レトリック」は諸々のコノテーターを分類することであると呼び換えられている。コノテーターの「形式」（コノテーターの組織化の在り方）としての「レトリック」が諸々のコノテーターを包括する上位カテゴリーとして機能するという点がうかがえることから、「実質」に依拠しない諸々の要素間の関係性（「形式」）は、カテゴリー間の関係性として捉えられているように思われる。

たしかに、諸々の要素間の「形式的な」関係性は「文彩（figures）」というかたちで現われると見なされており、この引用文の直後では、コノテーターの総体としての「レトリック」において、文彩のいくつかが見出されるだろうという見通しが述べられている。バルトが示している例は、トマトが換喩的にイタリア性（italianité）を表わし、三つのシーンの並置（コーヒー豆、コーヒーの粉、コーヒーの香りに焦点を当てた三つのシーンの連続を単純に並置すること）が連結辞省略（asyndète）に類するというものである。

しかし、「レトリック」は諸々のコノテーターを集めて構成される以上、文彩（技法として諸々の文彩を使用すること）が引き合いに出されたことの重要性は、文彩が諸々の要素間の「形式的な」関係性の現われとなっているという点よりも、むしろ文彩（の使用）が端的にコノテーターとして存在しているという点にあると解釈できる。この点から見れば、コノテーターの「形式」（コノテーターの組織化の在り方）としての「レトリック」は、カテゴリー間の関係性に基づいて諸々のコノテーター（諸々の文彩）を集めることによってこそ、イェルムスレウが提起した「形式」の次元を具現化するのだと考えられる。

この論文「映像のレトリック」においては、諸々のコノテーターを分類すること、すなわちコノテーターの目録としての「レトリック」を抽出することが行なわれているわけではない。それゆえ、「レトリック」に対するバルトの具体的な分析手法を把握するためには、別のテクストを参照する必要がある。

「レトリックの分析」（1967 年）というテクストにおいてバルトは、コノテーションにおけるシニフィアンの面（「表現」の面）が「レトリック」を構成しているという点を取り上げており、その「レトリック（Rhétorique）」について、次のように述べている。

> ところで、言語活動としての文学は、明らかに一つの共示的［／コノテーションの］記号体系である。［…］会話の便宜を持って来させなさいという文をもし私が読めば、私は肘掛け椅子を持って来いという命令である外示された［／デノテーションの］メッセージを受け取るが、また共示された［／コノテーションの］メッセージも受け取るのであり、この共示されたメッセージのシニフィエはこの場合においては「気取った表現」である。したがって、情報論的には、文学をデノテーションとコノテーショ

ンの二重の体系として定義できるだろう。この二重の体系のうちで、明白に現われ独特の働きをしている面は、第二の体系のシニフィアンの面であり、それが「レトリック」を構成する。ゆえに、レトリックのシニフィアンとはコノテーターということになる。[30]

バルトは、「肘掛け椅子（fauteuils）」を「会話の便宜（commodités de la conversation）」と表現することに、これが 17 世紀フランスの才子・才女たちが用いた用語であったことから、「気取った表現（préciosité）」を読み取っている。ここで注目したいのは、「会話の便宜を持って来させなさい（Faites avancer les commodités de la conversation）」という文から、コノテーションとして導き出されている要素は、「気取った表現」というデノテーションの「仕方」であるという点である。バルトがデノテーションのメッセージ（つまりそのデノテーションの趣意）と捉えているのは、肘掛け椅子を持って来るようにとの命令であり、コノテーションからバルトが読み取っているのは、ある種の文化的コードないし規範に特徴的なデノテーションの仕方である。「気取った表現」というデノテーションの仕方は、コノテーションのシニフィエとして、さらに先の「記号学の原理」での記述を考慮に入れると、コノテーションのシニフィエの「形式」として導き出されていることがわかる。実際この引用文の直後でバルトは、文学的メッセージが産出される「仕方（façon）」に対する探求の必要性について述べており[31]、文学的メッセージの組織化の在り方を重要視する彼の問題意識がうかがえる。

「記号学の原理」と「レトリックの分析」における、コノテーションについてのバルトの記述に共通している点は、デノテーションの仕方に焦点が当てられていることである。

---

[30] « Or, comme langage, la littérature est de toute évidence une sémiotique connotative [...] si je lis : *Faites avancer les commodités de la conversation*, je perçois un message dénoté qui est l'ordre d'amener les fauteuils, mais je perçois aussi un message connoté dont le siginifié est ici la « préciosité ». En termes informationnels, on définira donc la littérature comme un double système dénoté-connoté ; dans ce double système, le plan manifeste et spécifique, qui est celui des signifiants du second système, constituera la Rhétorique ; les signifiants rhétoriques seront les connotateurs. », Roland Barthes, « L'analyse rhétorique » (1967), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 1272-1273（「修辞の分析」、『言語のざわめき』、花輪光訳、みすず書房、新装版 2000 年（初版 1987 年）、138 頁）.

[31] 「情報論的に定義された文学的メッセージは、体系的な探求に付され得るしまたそうされなければならない。体系的な探求なしには、文学的メッセージとそれを産出する「歴史」とを突き合わせることは決してできないだろう。なぜなら、文学的メッセージの歴史的な実体とは、文学的メッセージが述べる事柄だけではなく、文学的メッセージが作り出される仕方でもあるからである。」 « Défini en termes informationnels, le message littéraire peut et doit être soumis à une exploration systématique, sans laquelle il ne sera jamais possible de le confronter avec l'Histoire qui le produit, puisque l'être historique de ce message n'est pas seulement ce qu'il dit, mais aussi la façon dont il est fabriqué. », Barthes, « L'analyse rhétorique », p. 1273. 邦訳 138 頁。

諸々のデノテーション（ある文学作品、フランス語でのメッセージ（の集まり）、肘掛け椅子（会話の便宜）を持って来るようにとの命令）から読み取られているのは、デノテーションの仕方（「文学」、「フランス語」、「気取った表現」）である。そうしたデノテーションの仕方は、諸々のデノテーションに対して概念的なレベルで上位に位置するクラスにほかならないのであるから、コノテーションを分析する際にバルトが行なっていることは、デノテーションが属する言説の様式を抽出することであると言える。それゆえ、デノテーションが属する言説の様式を抽出するという点に、バルトによるカテゴリー間の関係性の適用を見ることができるのであり、バルト自身はそのように述べていないものの、バルトがコノテーションを提喩的な意味作用として捉えていることがわかる。

こうしたバルトのコノテーションに対する捉え方は、「long」という語から「フランス語性」（あるいはまた「nuit」という語から「隠喩性」）を読み取る先のジュネットのコノテーションに対する捉え方に合致する。バルトとジュネットはともに、コノテーションを分析する際に、隣接関係に基づいた換喩的な付加的意味ではなく、カテゴリー間の関係性に基づいた提喩的な言説の様式を問題にしているからである。

そのうえで、コノテーターと「レトリック」の関係性についてのバルトの記述に注意したい。第二次の意味作用においてコノテーターが特徴的な働きをする点、また「レトリックのシニフィアン（signifiants rhétoriques）」がコノテーターに該当する点が述べられているものの（「レトリックのシニフィアン」という不明瞭な記述の趣旨は、「レトリック」を構成するシニフィアンということだろう）、諸々のコノテーターがどのようにして「レトリック」を構成するのかという点について述べられていないため、コノテーターの「形式」としての「レトリック」の性質がはっきりしていない。

実際、この論文「レトリックの分析」における「レトリック」という用語は、コノテーターの「形式」および（この用語が一般的に指す）言説を彩る技法、その両者を指し示しており、単一の用法で使用されていない。また、コノテーションの問題との関連で「レトリック」について記述されている別のテクスト「レトリックの文彩の構造的分類」[32]では、先に取り上げた論文「映像のレトリック」での記述と同様に、技法としての文彩に焦点が

[32] 元々は 1964 年に準備されたもので、「ル・フランセ・モデルヌ」誌（1966 年 1 月）に掲載され、「旧修辞学」（1970 年）に補遺として収められている（ただしこのテクストは、1970 年の「コミュニカシオン」誌に掲載された「旧修辞学」には収められていない。1985 年の『記号学の冒険』に再録された「旧修辞学」に補遺として収められており、バルト全集もそれを踏襲している。邦訳では独立して『記号学の冒険』に収録されている。Cf. « Le classement structural des figures de rhétorique » (1966) [annexe de « L'ancienne rhétorique. Aide-mémoire » (1970)], in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 600-601（「修辞の文彩の構造的分類」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1988 年）、16-17 頁）.

当てられている。

しかし同時に、「レトリック」という用語を用いてバルトが取り組んでいた問題は、諸々のデノテーションが属する言説の様式（デノテーションの仕方）の抽出という論点に結びついている。それゆえコノテーターの「形式」としての「レトリック」は、技法としての文彩の在り方にとどまらない様相を呈しているように思われる。私たちはそうした様相を、第二次の意味作用におけるカテゴリー間の関係性の前景化であると捉えたい。

4-2. イェルムスレウのコノテーション論とカテゴリー間の往復運動

コノテーターに対するバルトの捉え方は、イェルムスレウの言語理論とのずれを生じさせているように見える。なぜならバルトの用語法では、コノテーターはコノテーションの「表現（expression）」の面に属すると捉えられているが、セミル・バディル（Sémir Badir）によれば、イェルムスレウの用語法では、コノテーターはコノテーションの「内容（contenu）」の面に属するからである[33]。

私たちはここで、コノテーションについてのイェルムスレウの記述を参照したい。そうすることによって、バルトが想定していたコノテーターと「レトリック」の関係性を的確に把握することができるはずである。さらにイェルムスレウへの参照は、コノテーションとカテゴリー的な問題圏のつながりをめぐる、デノテーションが属する言説の様式の抽出とは別の面を引き出すことになるだろう。

最初に、コノテーターに対するイェルムスレウの捉え方を確認しよう。イェルムスレウはコノテーターについて、次のように述べている。

> あるいくつもの記号のクラスとあるいくつものコノテーターのあいだに存在する連帯関係が記号機能［記号の体系に参与する機能］であることは明白である。なぜなら、諸々の記号のクラスは内容に属すると見なされるコノテーターの表現になっているからである。それゆえ、われわれがフランス語と呼ぶ言語の図式［慣用に対する抽象的体系］と慣用は「フランス語」というコノテーターの表現である。[34]

---

[33] Cf. Sémir Badir, *Hjelmslev*, Société d'édition les Belles Lettres, 2000, p. 208（『イェルムスレウ』、町田健訳、大修館書店、2007 年、246 頁）.

[34] « Il est évident que la solidarité qui existe entre certaines classes de signes et certains connotateurs est une *fonction sémiotique*, puisque les classes de signes sont l'*expression* de ces connotateurs considérés comme appartenant au *contenu*. Ainsi, le ou les schémas et usages linguistiques que nous appelons la langue française sont l'*expression* du connotateur « français ». », Hjelmslev, « Langages de connotation et métalangages », p. 160. 邦訳 136 頁。

第二次の意味作用（コノテーション）において、諸々の記号のクラス（classes de signes）はコノテーターに対して「表現」として存在し、コノテーターは「内容」に属すると述べられている。この引用文によれば、第二次の意味作用における「内容」に属するのは「「フランス語」というコノテーター（connotateur « français »）」であり、それに対応する「表現」は記号のクラスにほかならないフランス語（langue française）であるところの「言語の図式と慣用（schémas et usages linguistiques）」である。このようにイェルムスレウの記述は、コノテーターを第二次の意味作用（コノテーション）の「表現」の面として捉えるバルトの考え方とのずれを示している。

その直後の箇所では、次のように述べられている。

> したがって、諸々のコノテーターの集まりを、デノテーションの言語活動がその表現となっている内容として見なし、この内容と表現で形成された総体を言語活動、あるいはむしろコノテーションの言語活動という名称で示すことは妥当であるように思われる。[…] 再度、ここで問題になるのは、言語の慣用と図式を区別することである。諸々のコノテーターはそれら相互の機能に基づいて分析されるべきであって、それらコノテーターに与えられ得る内容としての意味に基づいてではない。[35]

第二次の意味作用における「内容」の面に該当するのは、「諸々のコノテーターの集まり（ensemble des connotateurs）」である。それに対応する第二次の意味作用における「表現」の面がデノテーションである言語活動が、コノテーションと呼ばれている。この点はコノテーションに対する基本的な理解であるが、「諸々のコノテーターの集まり」というイェルムスレウの記述の細部に注意を払っておきたい。諸々のコノテーターを分析する際に焦点を当てるべきなのは、それら相互の機能であり、またそうである以上、「諸々のコノテーターの集まり」とは、コノテーター同士の連帯関係（諸々のコノテーターが相互に影響を及ぼし合う関係）を指していることがわかる。

またこの引用文では、言語の「慣用（usage）」と「図式（schéma）」を区別するべきであるという旨が述べられている。デノテーションの言語活動は言語体系の規則に従うものの[36]、

---

[35] « Il semble donc légitime de considérer l'ensemble des connotateurs comme un contenu dont les langages de dénotation sont l'expression, et de désigner le tout formé par ce contenu et cette expression du nom de *langage*, ou plutôt de *langage de connotation*. [...] De nouveau, il s'agit ici de distinguer entre usage et schéma linguistiques. Les connotateurs devront être analysés sur la base de leurs fonctions mutuelles et non sur celle du sens de contenu qui peut leur être imparti. », Hjelmslev, « Langages de connotation et métalangages », p. 160. 邦訳 137 頁。

[36] 「コノテーションの言語活動はそれゆえ言語体系ではない。その表現の面がデノテーシ

コノテーションは、言語体系として存在するのではなく、諸々のデノテーション（「表現」の面）とコノテーター同士の連帯関係（「内容」の面）によって構成される、言い換えれば、諸々のデノテーションからコノテーター同士の連帯関係が導き出される、そのような言語活動にほかならない。

このようにイェルムスレウの記述をたどれば、コノテーターが第二次の意味作用の「内容」の面に属するという点よりも重要なのはむしろ、コノテーター同士の連帯関係に着目することであると言えるだろう。実際、イェルムスレウは次のように述べている。

> こうしたクラス［諸々の記号のクラス］のそれぞれに属する諸々の個別的な構成要素と、それら諸々の構成要素の組み合わせから生じる諸々の単位をコノテーターと呼ぶことにしよう。これらのコノテーターのうち、いくつかのものは特定の言語図式と連帯関係を持ち得るし、ほかのものは特定の言語慣用と、さらにほかのものは［図式および慣用の］両者と連帯関係を持ち得る。[37]

この引用文は、コノテーターに対するイェルムスレウの捉え方についての重要な手がかりを私たちに与えてくれる。というのもこの引用文を通じて、先の二つの引用文で問題となっていた点、すなわち、コノテーターが「内容」（の面）に属すること（言い換えれば諸々の記号のクラスがコノテーターの「表現」になっていること）、およびコノテーター同士の連帯関係、その二つの点の内実を把握することができるからである。

諸々の記号のクラスは、諸々のコノテーターの「表現」になっているわけであるが、この引用文では、そうした記号のクラス（「表現」）に属する諸々の構成要素、およびそれら諸々の構成要素が組み合わされた結果として生じる諸々の「単位（unité）」、その両者がコノテーター（「内容」）と呼ばれている。また、コノテーター同士の連帯関係の内実は、諸々の記号のクラスに属する諸要素の組み合わせ、より正確に言えば、諸々の「単位」のなかで互いが包含されるというかたちでの諸要素の組み合わせであることがわかる。

ョンの言語活動の内容と表現の面によって構成されている。したがってコノテーションは、その一方の面、［すなわち］表現の面が言語体系となっている言語活動である。」« Un langage de connotation n’est donc pas une langue. Son plan de l’expression est constitué par les plans du contenu et de l’expression d’un langage de dénotation. C’est donc un langage dont l’un des plans, celui de l’expression, est une langue. », Hjelmslev, « Langages de connotation et métalangages », p. 161. 邦訳 137 頁。

[37] « Les membres particuliers de chacune de ces classes et les unités qui résultent de leur combinaison seront nommés *connotateurs*. Parmi ces connotateurs quelques-uns peuvent être solidaires de schémas linguistiques donnés, d’autres, d’usages linguistiques donnés, d’autres encore, des deux. », Hjelmslev, « Langages de connotation et métalangages », pp. 157-158. 邦訳 134 頁。

それに加え、この引用文からはコノテーターに対するイェルムスレウの分析方法を読み取ることができるのであり、出発点として諸々の記号のクラスおよびその構成要素を参照し、そのあとでそれら構成要素を組み合わせるという、諸々のコノテーターのステータスを規定するための手順が示されている。この観点から見れば、諸々の記号のクラスが諸々のコノテーターの「表現」になっているという先の引用文での記述の趣旨として、諸々のコノテーターのステータスを規定するためには、言い換えれば、諸々のコノテーターがどのような「単位」を形成するのか明示するためには、出発点となる諸々の記号のクラスに属する諸要素に目を向ける必要があるということが述べられているのだと解釈することができる。

そしてここで、諸々の文体事象がコノテーションの問題に合流する。というのもイェルムスレウは、諸々の記号のクラス（正確に言えばその構成要素）を言説の様々な文体的特徴として記述しているからである。イェルムスレウがコノテーションの問題において念頭に置いていたのは、諸々のコノテーターのステータスを導き出すために必要な諸々の記号のクラスであり、彼はそうした記号のクラスに属する諸要素を言説の様々な文体的特徴として捉えていたのである。

イェルムスレウは、記号のクラスとして様々な文体のカテゴリー（第一の区分）、およびそれら文体のカテゴリーに属する諸要素すなわち文体のカテゴリーを構成する諸要素（第二の区分）、その両者を列挙するとともに、（第二の区分の）諸要素を組み合わせた結果として生じる諸々の「単位」（第三の区分）について記述している[38]。

諸々の文体のカテゴリー（第一の区分）には、「文体の種（espèces de styles）」、「文体の水準（niveaux de style）」、「文体のジャンル（genres de styles）」、「特有語法の類型（types vernaculaires）」などが挙げられている（この第一の区分には「各国語（langues nationales）」というカテゴリーも挙げられており、イェルムスレウはわざわざ例を挙げることはしていないが、たとえばフランス語という言語体系はこの区分に分類されるだろう）。

諸々の文体のカテゴリーに属する諸要素（第二の区分）として挙げられているのは、次のとおりである。「文体の種」を構成する「創造的な文体（style créateur）」、「模写的な文体（style imitatif）」あるいは「標準的な文体（style normal）」、「創造的かつ模写的な文体」あるいは「擬古的な文体（style archaïsant）」、「文体の水準」を構成する「高尚な文体（style élevé）」、「低俗な文体（style vulgaire）」、「［高尚でも低俗でもない］中性的な文体（style neutre）」、「文体のジャンル」を構成する「パロール（話される言葉）」、「エクリチュール（書かれる言葉）」、

[38] Cf. Hjelmslev, « Langages de connotation et métalangages », pp. 156-157. 邦訳 133-134 頁。

「身振り（gestes）」、「符号（code）」、「特有語法の類型」を構成する「公用語（langage commun / langue commune）」や「様々な社会集団および職業集団に属する言語（langages appartenant à divers groupes sociaux et professionnels）」（様々な職業集団に属する言語は「専門職業用語（langage professionnel）」と言い換えることができる）、などといった諸要素である（社会的レベルでのフランス語の使用は、様々な社会集団に属する言語に該当するだろう）。

そのうえで、諸々の文体のカテゴリーに属する諸要素（第二の区分の諸要素）を組み合わせた結果として生じる諸々の「単位」（第三の区分）が抽出される。たとえば、「文学的な文体（style littéraire）」は、「創造的な文体」であると同時に「高尚な文体」である。「日常語（langage familier）」は、「標準的な文体」であると同時に「（高尚でも低俗でもない）中性的な文体」である。「演説の文体（style oratoire）」は、「高尚な文体」であり、同時に「パロール（話される言葉）」であり、さらにまた「公用語」である。「行政調の文体［行政機関において用いられるような文体］（style administratif）」は、「擬古的な文体」であり、「エクリチュール（書かれる言葉）」であり、そしてまた「専門職業用語」である。

このようにイェルムスレウは、コノテーターについて記述するにあたって、諸々の記号のクラスとそれらに属する諸要素すなわち様々な文体的特徴を列挙したうえで、そうした文体的特徴を組み合わせるという手法を取っていたのであるが、私たちは、このイェルムスレウの手法において、カテゴリー間での往復運動が存在していることに注目したい。

コノテーターについて記述するイェルムスレウの手法においては、まず、諸々の記号のクラスとして様々な文体のカテゴリーが参照される（第一の区分として示した「文体の種」、「文体の水準」、「文体のジャンル」、「特有語法の類型」）。

次に、そうした記号のクラスが諸々の下位カテゴリーに分割される（それら諸々の下位カテゴリーは第二の区分として示した諸要素である）。「文体の種」というカテゴリーは、「創造的な文体」、「模写的な文体」（「標準的な文体」）、「創造的かつ模写的な文体」（「擬古的な文体」）といった諸々の下位カテゴリーに分割され、「文体の水準」というカテゴリーは、「高尚な文体」、「低俗な文体」、「中性的な文体」といった諸々の下位カテゴリーに分割される。同様に、「文体のジャンル」というカテゴリーは、「パロール」、「エクリチュール」、「身振り」、「符号」といった諸々の下位カテゴリーに、「特有語法の類型」というカテゴリーは、「公用語」や「専門職業用語」といった諸々の下位カテゴリーに、それぞれ分割される。

最後に、諸々の記号のクラス（第一の区分）に属する諸要素（第二の区分）が、第一の区分の記号のクラスとは別個に存在する諸々の上位カテゴリー（第三の区分）にグルーピングされる。「創造的な文体」（文体の種）と「高尚な文体」（文体の水準）は「文学的な文体」にグルーピングされ、「標準的な文体（ないし模写的な文体）」（文体の種）と「（高尚

でも低俗でもない）中性的な文体」（文体の水準）は「日常語」にグルーピングされる。同様に、「高尚な文体」（文体の水準）と「パロール（話される言葉）」（文体のジャンル）と「公用語」（特有語法の類型）は「演説の文体」にグルーピングされ、「擬古的な文体」（文体の種）と「エクリチュール（書かれる言葉）」（文体のジャンル）と「専門職業用語」（特有語法の類型）は「行政調の文体」にグルーピングされる。

このように、たとえば文学的な文体というステータスを規定するためには、まず上位カテゴリーを参照し（文体の種および文体の水準）、次にそれを下位カテゴリーに分割し（創造的な文体および高尚な文体）、そのうえでそうした下位カテゴリーを新たな上位カテゴリーへとグルーピングする（文学的な文体）という手順が取られている。こうした概念的な往復運動は、カテゴリー間の関係性に基づく提喩的な往復運動にほかならない。私たちは、この提喩的な往復運動という点がバルトとイェルムスレウの分析手法に共通していることを提示したい。

4-3. バルトのレトリック論におけるカテゴリー間の往復運動

バルトのテクストに戻ろう。コノテーターと「レトリック」の関係性について、論文「レトリックの分析」のなかでは次のような記述が見られる。

> 諸々のコノテーターがあるひとつのコードの構成要素をなすのであるが、そのコードの有効性がどれだけ続くかはまちまちである。広い意味における古典主義のコードは西欧において幾世紀ものあいだ続いた。というのもまさに同じレトリックがキケロの演説もボシュエの説教も活気づけているからである。［…］[39]

複数のコノテーターの集まりがそれぞれ要素となって文化的規範（古典主義のコード）を形成するという旨が述べられたこの引用文において、コノテーターはキケロの演説とボシュエの説教に対応し（両者が属する時代はかけ離れており、また両者の言語表現のどのような点が古典主義的なのかという点が示されていないという不明瞭さは残る）、コノテーションのシニフィエの「形式」（「イデオロギー」とバルトが呼んでいた言説の様式）は古典主義のコードに対応する。カテゴリー間の関係性という点から見れば、ここで用いられている「レトリック」という用語は、言説を彩る技法だけではなく、コノテーションのシ

[39] « Les connotateurs forment les éléments d'un code, et la validité de ce code peut être plus ou moins longue ; le code classique (au sens large) a duré en Occident pendant des siècles, puisque c'est la même rhétorique qui anime un discours de Cicéron ou un sermon de Bossuet [...] », Barthes, « L'analyse rhétorique », p. 1275. 邦訳 142 頁。

ニフィアンの「形式」をも同時に指し示していることがわかる。なぜなら「レトリック」という概念は、キケロの演説とボシュエの説教を包括する上位カテゴリーとして機能しているからである。

「レトリック」について記述するバルトの分析手順にアプローチすると、古典主義のコードというコノテーションのシニフィエの「形式」を導き出すためにまず行なわれているのは、コノテーションのシニフィアンの「形式」としての「レトリック」というカテゴリーを参照することである。次にその「レトリック」がキケロの演説とボシュエの説教という下位カテゴリーに分割され、そのうえでそれら下位カテゴリーを組み合わせて古典主義のコードが導き出されているのだと解釈できる。それゆえ、諸々のコノテーターが文化的規範を形成するというそれ自体では平凡に見える記述のなかで、あるカテゴリー（「レトリック」）から出発し、それを下位カテゴリーに分割し（諸々のコノテーター）、そのうえでそれら下位カテゴリーをある文化的コード（古典主義のコード）という上位カテゴリーにグルーピングするというかたちで、先に見たイェルムスレウの場合と同様に、概念的な運動性、すなわちカテゴリー間での往復運動を見ることができる。

言語実践のより具体的な例に対するバルトの分析に目を向けると、先の「会話の便宜を持って来させなさい」というデノテーションからは、コノテーションのシニフィエの「形式」として「気取った表現」という言説の様式が読み取られていたのであるが、この場合には、まずコノテーションのシニフィアンの「形式」として「レトリック」というカテゴリーから出発し、次にその「レトリック」に属するコノテーターの在り方（すなわち肘掛け椅子を「会話の便宜」と表現すること）を参照することになり、最後にそうしたコノテーターの在り方に対する総称として「気取った表現」という包括的な名称が導き出されているのだと解釈できる。

このように、カテゴリー間の関係性という点から見れば、コノテーターと「レトリック」のつながりをバルトがどのように捉えていたのかはっきりする。バルトは、第二次の意味作用を分析するにあたって、カテゴリー間を往復するという手順を取っているのである。諸々のコノテーターが「レトリック」を構成するというバルトの記述が指し示しているのは、諸々のコノテーター（キケロの演説、ボシュエの説教、肘掛け椅子を「会話の便宜」と表現すること）は「レトリック」というカテゴリー（コノテーションのシニフィアンの「形式」）に属する諸要素にほかならないということであり、そのうえでそうした諸々のコノテーターが構成するのはもうひとつ別のカテゴリー（古典主義のコードや「気取った表現」といったコノテーションのシニフィエの「形式」）であるということになる。

「レトリックの分析」の冒頭において、文学言語ないし詩的言語の特徴的な要素である

ことが念頭に置かれた「レトリック」は、(たとえば韻文と散文の区別に左右されない)「あらゆるジャンルに共通する言語活動の一般的次元（plan général du langage commun à tous les genres)」[40]と呼ばれている。この「言語活動の一般的次元」は、言説を彩る様々な技法を包括する目録としてのステータスを保ちつつ、そうした技法の実践例（キケロの演説、ボシュエの説教、「会話の便宜」という言語表現）を包括するカテゴリーとしても機能しているのだと言える。それゆえ、バルトの考えでは「レトリック」は、文学言語に特徴的でありながら言語活動のあらゆるジャンルに見出し得る要素であるばかりでなく、第二次の意味作用を通じてカテゴリー間での往復運動を可能にさせる概念でもある。そして、「レトリック」を構成する諸々のコノテーター、すなわち「会話の便宜」という表現をはじめとした諸々の言語実践が、「レトリック」というカテゴリーの下位区分として存在しつつ「気取った表現」をはじめとするもうひとつ別の上位カテゴリーへ包括されるというかたちで、カテゴリー間での往復運動を創出する原動力となっている。コノテーターは、第二次の意味作用における概念的な運動性を支えているのである。

4-4. バルトのレトリック論におけるコノテーションの問題に対する総括

「レトリック」という概念を通じたコノテーションに対するバルトの分析は、デノテーションが属する言説の様式の抽出を眼目にしており、この第一の点は、コノテーションを付加的意味としてではなくデノテーションの仕方として分析するジュネットの手法につながる。またバルトの分析手順は、カテゴリー間での往復運動に基づいており、この第二の点は、言説の様々な文体的特徴を分類するイェルムスレウのコノテーション論と共通する手法である。この二つの点は、第二次の意味作用を分析するバルトの手法における提喩的関係性の存在を示している。

バルトのレトリック論におけるコノテーションの問題は、私たちを「文体」の概念へと導く。先に見たように、ジュネットによれば、デノテーションの仕方は、人が何かをするときの様式（「スタイル」）として、すなわち言説の様式として文体の問題に直結している。また、イェルムスレウが記述していたコノテーションにおける概念的な運動性（カテゴリー間での往復運動）の基盤は、言説の様式としての諸々の文体的特徴である。ゆえに諸々の文体事象とは、「レトリック」という言語活動の「形式」の次元と同様に、第二次の意味作用においてカテゴリー間の関係性が前景化される領域なのである。次節において私たちは、バルトの文体論について取り上げる。

---

[40] Barthes, « L'analyse rhétorique », p. 1271. 邦訳 136 頁。

第 5 節　文体事象へのバルトの提喩的ヴィジョン――「文体とそのイメージ」

本節では、バルトの文体論がコノテーションの問題につながっていることを示したうえで、彼の文体論では異なる概念レベル間での往復運動という現象が前景化されていることを明らかにしたい。

5-1. バルトの文体論とコノテーションの問題圏

「文体とそのイメージ」（1971 年）というテクストは、バルトの活動が記号論からテクスト理論への傾斜を深めていった時期に位置しており、とりわけ 1970 年に刊行された『Ｓ／Ｚ』でのテクスト分析を土台にしている。本節では、文体に対するバルトのヴィジョンとコノテーションの問題との関連性を示したうえで、そのヴィジョンをバルトが実践する際に働く提喩性を明らかにしたい。

この文体論においてバルトは、文体の概念をめぐる「形式／内容」（「シニフィアン／シニフィエ」）や「規範／偏差」（「ラング／パロール」、「コード／メッセージ」）といった二項からなる考え方に対して批判的な検討をしている。たとえば形式と内容という対立においては、最初に内容が存在してその内容が形式において表現されるという考え方に私たちは相変わらず依拠しているのではないか、あるいは規範と偏差という対立においては、文体は規範に対する逸脱と捉えられることになるが、そうした文体に対する見方は精密なものでないとバルトは考えるわけである。

バルトが望む文体のイメージはテクストの複数性と連動しており、その点について彼は次のように述べている。

> ［…］私の考えでは文体のヴィジョンは、こんにちでは、文体をテクストの複数性において見るということでなければならないと言いたい。［ここで問題になっている］テクストの複数性とは、テクストを織り成している意味論的レベル（コード）の複数性のことであり、それらのコードのうちのひとつに積み重なる引用の複数性のことである。われわれはそうしたコードのひとつを「文体」と呼んでいるわけであるが、少なくとも第一の研究対象として、文学的な言語活動とむしろ私は呼びたい。[41]

[41] « [...] je dirai qu'à mon avis elle [la vision du style] doit consister aujourd'hui à *voir* le style dans le pluriel du texte : pluriel des niveaux sémantiques (des codes), dont la tresse forme le texte, et pluriel des citations qui se déposent dans l'un de ces codes que nous appelons « style » et que j'aimerais mieux appeler, du moins comme premier objet d'étude, *langage littéraire*. », Roland Barthes, « Le style et son

テクストの複数性は「コード」の複数性と呼び換えられている。バルトのヴィジョンによれば、諸々の文体事象は、テクストを織り成す数あるコードのなかのひとつを占める要素として存在しているということになる。この文体論では、『Ｓ／Ｚ』で用いられた諸々のコード（行為、解釈学、意味素、文化、象徴の各コード）に加えて、言語のコード（フランス語）とレトリックのコード（たとえば換称（antonomase）や頓呼法（apostrophe）の使用）が挙げられており[42]、文体も同様にひとつのコードとして捉えられている。さらにコードとしての文体は、文学的な言語活動と呼び換えられており、規範に対する逸脱の代表例とでも言える文学言語を言説に遍く浸透しているコードのひとつとして捉えることで、「規範／偏差」の対立という文体観が修正されていることがわかる。

文体に対するバルトのヴィジョンを理解するうえで、文体を単にコードとして捉えること以上に重要だと思われるのは、複数のコードを重ね合わせるというイメージが文体に対するヴィジョンに応用されることである。諸々のコードが編み合わされて形成される織物というテクスト観に基づいた『Ｓ／Ｚ』でバルトは、分析対象であるバルザックの小説を読み進めるその度ごとに複数のコードを同時に提示するという読解手法を取っており、その意味で彼は諸々のコードを「並置し（juxtaposer）」また「混ぜ合わせる（mêler）」という作業をしていると言えるが、この点についてバルトは諸コードを「重ねる（superposer）」と記述している[43]。

諸コードの重なりというイメージは、「形式／内容」の対立という文体観を精密なものにする機会をバルトにもたらしている。バルトは、装飾としての文体（内容に対する形式としての文体）を剥ぎ取ったあとに残るのは、内容ではなくもうひとつ別の形式であると考えており[44]、この見解が指し示すのは、ある形式（コードとしての文体）を剥ぎ取ればもう

---

image » (1971), in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 980（「文体とそのイメージ」、『言語のざわめき』、花輪光訳、みすず書房、新装版 2000 年（初版 1987 年）、160 頁）.

[42] Cf. Barthes, « Le style et son image », pp. 974-975. 邦訳 150-151 頁。

[43] Cf. Barthes, « Le style et son image », p. 974. 邦訳 150 頁。

[44] 「[…] 文体の剥ぎ取り（今しがた述べたとおりそれは可能である）が露出させるのは、ある内容やシニフィエではなく、もうひとつ別の形式やシニフィアンであり、あるいはこう言った方が良ければ、より中性的な語彙［の使用］であり、もうひとつ別のレベルであり、それは決して最後のものではない（というのも、テクストは常に、くみ尽くせない諸々のコードに基づいて分節［／構成］されているからである）。[…]」« [...] ce que cette soustraction [la soustraction du style] (possible, comme on vient de le dire) dénude, ce n’est pas un fond, un signifié, mais une autre forme, un autre signifiant, ou, si l’on préfère, un vocable plus neutre, un autre niveau, *qui n’est jamais le dernier* (car le texte s’articule toujours sur des codes qu’il n’épuise pas) [...] », Barthes, « Le style et son image », p. 974. 邦訳 149-150 頁。

ひとつ別の形式（コード）が現われる、つまり、形式が重なり合って存在しているということである。

形式の重なりは、バルトのテクスト観として次のように定式化されており、バルトの文体観が彼のテクスト観と連動している以上、この定式化はバルトの文体観にも適用できるだろう。

> それゆえわれわれはもはやテクストを、内容と形式からなる二元的な構成として見ることはできない。テクストは二重ではなく多重である。つまりテクストのなかには様々な形式しか存在しない、あるいはさらに正確に言えば、テクストとはその全体において内容のない諸形式の多重性にほかならない。[45]

バルトのヴィジョンによれば、テクストを織り成す形式の複数性は、その「多重性（multiplicité）」と捉えるべきであり、文体に関しても、形式が多重に存在していることに注意を払うべきである。この文体論の末尾で、形式の多重性は、言説の「葉層性（feuilleté）」（薄い層が何枚も重なっているという性質）と称されるイメージとともに語られており[46]、核のない外皮の積み重ねという意味合いでたまねぎが比喩として用いられていることから、形式の複数性はやはりその重なりとして捉えられていることがわかる。

私たちは、このような形式の多重性を、コノテーションの問題と直結させて把握したい。『Ｓ／Ｚ』のなかでコノテーションについて述べられた箇所で、バルトは次のように記述している。

> それでは一体コノテーションとは何であるのか。定義上、それは前後、あるいは外部の記述やそのテクストの（もしくは別のテクストの）他の箇所に関係する力を持った、ある限定、関係、照応関係、特徴である。［…］観念連合は主体の体系を参照するが、コノテーションは、ひとつないし複数のテクストに内在する相関関係なのである。あるいはまた、こう言っても良いが、コノテーションは、テクストそれ自身の体系の内部で、主体としてのテクストによって行なわれる連合である。[47]

---

[45] « Nous ne pouvons donc plus *voir* le texte comme l'agencement binaire d'un fond et d'une forme ; le texte n'est pas double, mais multiple ; dans le texte il n'y a que des formes, ou plus exactement, le texte n'est dans son ensemble qu'une multiplicité de formes – sans fond. », Barthes, « Le style et son image », p. 975. 邦訳 151 頁。

[46] Cf. Barthes, « Le style et son image », pp. 980-981. 邦訳 160-161 頁。

[47] « Qu'est-ce donc qu'une connotation ? Définitionnellement, c'est une détermination, une relation, une anaphore, un trait qui a le pouvoir de se rapporter à des mentions antérieures, ultérieures ou extérieures, à

テクストの複数性の基盤となるコノテーションは、主体が行なう観念連合（association d'idées）と対比されたかたちで、いわばテクストそれ自身が実践する関係性として、「テクストに内在する相関関係（corrélation immanente au texte）」であると記述されている。テクストの複数性の在り方のひとつとして、複数のコード（ないしコードとしての形式）を重ねるという考え方をバルトが採用している以上、テクストに内在する相関関係を具現化するのは、テクストそれ自身が持つ性質としての、内容とは別の次元での性質、すなわち形式の多重性であると解釈することができる。

このように、形式の多重性というバルトの文体観をもたらしているコードの重なりというテクストの複数性の在り方は、バルトによるコノテーションの定義そのものに支えられているのである。

5-2. 形式の多重性における概念的な運動性

形式の多重性というバルトの文体観は、具体的には、言語表現のうえでのある形式と別の形式とのあいだで行なわれる「変形（transformation）」として展開されている。

バルトは、文学的な言語活動における対称的な二種類の変形について述べており、そのひとつは、「外的な変形（transformation externe）」と呼ばれている。『Ｓ／Ｚ』の一節について言及しながら、バルトは次のように述べている。

> ［…］「私は深い夢想にふけっていた、それは、もっとも騒々しい宴会の只中においても、全ての人を、軽薄な男でさえも捉えるあの夢想だった。」とバルザックが書くとき、その個人的な［／人称の］標識（「私はふけっていた」）を除けば、この文は、騒々しい宴会にも深い夢想という格言を変形したものにほかならない。言い換えれば、文学的な言表行為は、変形によって、もうひとつ別の統辞構造を参照させる。この文の最初の内容はもうひとつ別の形式（ここでは格言の形式）であり、文体は、観念ではなく形式に対して行なわれる変形の作業において確立されるのである。これからの課題はもちろん、文学的な言語活動が作り出され生み出される出発点となる諸々の主要なステレオタイプ（たとえば格言）を標定することだろう。[48]

---

d'autres lieux du texte (ou d'un autre texte) [...] celle-ci [l'association d'idées] renvoie au système d'un sujet ; celle-là [la connotation] est une corrélation immanente au texte, aux textes ; ou encore, si l'on veut, c'est une association opérée par le texte-sujet à l'intérieur de son propre système. », Barthes, *S/Z*, p. 125. 邦訳 11 頁。

[48] « [...] lorsque Balzac écrit : « J'étais plongé dans l'une de ces rêveries profondes qui saisissent tout le

バルザックの一文（「私は深い夢想にふけっていた、それは、もっとも騒々しい宴会の只中においても、全ての人を、軽薄な男でさえも捉えるあの夢想だった。（J'étais plongé dans l'une de ces rêveries profondes qui saisissent tout le monde, même un homme frivole, au sein des fêtes les plus tumultueuses）」[49]）は、定型表現のひとつの型（タイプ）である格言の形式（「騒々しい宴会にも深い夢想（A fêtes tumultueuses, rêveries profondes）」）からの変形として説明されている（この定型表現は、辞書のなかで実際にこの格言が記載されているかどうかにかかわらず、格言として用いられることがあり得るとバルトが見なしている定型表現である）。そうした形式をバルトは、「集団による定型表現（formules collectives）」と呼んでおり、これは、ある社会集団や制度（たとえば文学）に共通する定型表現（ステレオタイプ）のことである。

ここで注意しておきたいことは、「騒々しい宴会にも深い夢想」という格言の内容ではなく、あくまでこの格言の決まり文句としての型に焦点が当てられているということである。文学的な言語活動による変形の起点となる定型表現の「内容」は、文学的な言語活動で用いられそうなほかの素材であっても良い。たとえば、同じく『Ｓ／Ｚ』で述べられている、「彼［サラジーヌ］は一日中［芸術家としての］仕事をし、夜、生活の糧を乞いに出かけるのだった。[50]」という 170 番目のレクシにおける格言として、「貧しく勇気ある芸術家（artiste pauvre et courageux）」、あるいはまた、「パリでは美徳だけが祭壇を持たないのですわ。そう、純粋な魂は天に故郷［／安らぎの場］を持っているのですわ！[51]」）という 559 番目のレクシにおける格言として「美徳はこの世のものではない（la vertu n'est pas de ce monde）」、等々。170 番目のレクシのバルザックの一文は「貧しく勇気ある芸術家」というステレオタイプを変形したものであり、同様に 559 番目のレクシは「美徳はこの世のものではない」というステレオタイプを変形したものである。それゆえ、この変形は文化的参照による変形と言

---

monde, même un homme frivole, au sein des fêtes les plus tumultueuses », la phrase, si l'on excepte sa marque personnelle (« *J'étais plongé* »), n'est que la transformation d'un proverbe : *A fêtes tumultueuses, rêveries profondes* ; autrement dit, l'énonciation littéraire renvoie, par transformation, à une autre structure syntaxique : le *premier* contenu de la phrase est une autre forme (ici, la forme gnomique) et le style s'établit dans un travail de transformation qui s'exerce non sur des idées, mais sur des formes ; il resterait bien entendu à repérer les stéréotypes principaux (tel le proverbe) à partir desquels le langage littéraire s'invente et s'engendre. », Barthes, « Le style et son image », p. 979. 邦訳 158 頁。

[49] 『Ｓ／Ｚ』でのレクシ（バルトが区切った読解単位）では、2 番目と 3 番目のレクシに該当する。

[50] « Il travaillait pendant toute la journée, et, le soir, allait mendier sa subsistance », Barthes, *S/Z*, p. 198. 邦訳 113 頁。

[51] « [L]a vertu seule y [à Paris] est sans autels. Oui, les âmes pures ont une patrie dans le ciel ! », Barthes, *S/Z*, p. 298. 邦訳 252 頁。

い換えることができる[52]。

形式と形式のあいだで行なわれる二種の変形のうち、バルトが述べるもうひとつの変形は、「内的な変形（transformation interne）」と呼ばれているものである。この変形についてバルトは、プルーストを例に挙げて次のように述べている。

> ［…］バルベックに滞在したおり、プルーストの小説の語り手はグランドホテルの若いエレベーター係と会話を交わそうとするが、彼は返事をしない。プルーストは述べている、「私の言葉に対する驚きのためか、仕事に対する注意のためか、礼儀に対する配慮のためか、耳の遠さのためか、場所に対する配慮のためか、危険に対する恐れのためか、知性の怠惰のためか、支配人の言いつけのためか」。同じ統辞の［／シンタックスの］定型表現（ひとつの名詞とその補語）を反復することは、明らかにある種の戯れ［／活動］であって、この場合文体は次のことをすることにある。すなわち、(1) 潜在的な従属節を名詞句に変形すること（彼はよく聞こえなかったのでという従属節が耳の遠さという名詞句になっている）、(2) 様々な内容を通して、この変形の定型表現を可能な限り長く反復すること。[53]

一作家プルーストが持ついわば特有語法としての、「彼はよく聞こえなかったので（parce qu'il n'entendait pas bien）」という従属節から「耳の遠さ（dureté de son ouïe）」という名詞句への変形においては、「個人言語の［／イディオレクトの］形式（formes idiolectales）」、すなわち一個人が持つ定型表現に焦点が当てられている。ひとつの名詞とその補語という「定型表現（formule）」は、変形の決まった様式ないしパターンとして、様々な内容を通して反復されていることがわかる[54]。

定型表現の反復現象という第二の点ではなく、第一の点である従属節から名詞句への変

---

[52] Cf. Barthes, *S/Z*, pp. 201-202. 邦訳 117 頁。当該のセクションは「文体の変形（transformation stylistique）」と題されている。

[53] « [...] à moment de son séjour à Balbec, le narrateur proustien essaie d'engager la conversation avec le jeune liftier du Grand Hôtel, mais celui-ci ne lui répond pas, dit Proust, « soit étonnement de mes paroles, attention à son travail, souci de l'étiquette, dureté de son ouïe, respect du lieu, crainte du danger, paresse d'intelligence ou consigne du directeur » ; la répétition de la même formule syntactique (un nom et son complément) est évidemment un jeu, le style consiste alors : 1° à transformer une subordonnée virtuelle en syntagme nominal (*parce qu'il n'entendait pas bien* devient *la dureté de son ouïe*) ; 2° à répéter le plus longtemps possible cette formule transformationnelle à travers des contenus différents. », Barthes, « Le style et son image », pp. 979-980. 邦訳 158-159 頁。

[54] 『Ｓ／Ｚ』でも、「戯れとしての変形（transformation comme jeu）」と題されたセクションにおいて、このプルーストの例について、萌芽的に同様のことが述べられている。Cf. Barthes, *S/Z*, p. 167. 邦訳 69 頁。

形それ自体に注目すると、この変形は形式の多重性（重ね合わせ）に基づいている。変形が起こっていても（「耳の遠さ」という名詞句）、もとの形式（「彼はよく聞こえなかったので」という従属節）を潜在的に知覚できるからである。一作家のイディオレクトによるこの「内的な変形」においては、従属節と名詞句の重ね合わせというかたちで形式の重ね合わせが生じている。

形式の重ね合わせは、文化的参照に基づいた「外的な変形」ついても当てはまる。変形が起こっていても（「私は深い夢想にふけっていた、それは、もっとも騒々しい宴会の只中においても、全ての人を、軽薄な男でさえも捉えるあの夢想だった。」というバルザックの一文）、もとの形式（「騒々しい宴会にも深い夢想」という格言）を潜在的に知覚できるからである。この場合、互いに形式として、格言とバルザックの一文が重ねられていると見なせる。

このようにバルトは、諸々の文体特徴を、ある形式と別の形式のあいだで行なわれる「変形」と捉えている。ここで私たちが提示したいのは、顕在する形式と潜在する形式の重ね合わせには、提喩的な運動性、すなわち概念的な運動性が伴うという点である。

文体事象に対するバルトのヴィジョンにおいて、二つの形式のあいだには概念的なレベルの違いが存在することに着目したい。というのも、「外的な変形」における格言および「内的な変形」における名詞句が言説の様式としての「定型表現（formule）」になっていることをバルトが重要視しているからである（「外的な変形」と「内的な変形」についての先の引用文から読み取れるように、バルトが述べる文体的変形の射程は、「外的な変形」においては定型表現を標定することにあり、「内的な変形」では定型表現を反復することにある）。諸々の定型表現は「連辞のパターン（patterns syntagmatiques）」ないし「文の典型的な断片（fragments typiques de phrases）」と捉えられているが[55]、それは、定型表現が言語表現のうえでの決まりきった仕方（スタイル）として想定されているからである。言い換えれば、定型表現は言説のひとつの様式（カテゴリー）として想定されている。

「外的な変形」における格言および「内的な変形」における名詞句は、定型（反復され使い古される決まりきった型）という言語表現のある一定の仕方として存在しているが、「外的な変形」におけるバルザックの文および「内的な変形」における従属節に関しては、バルトはそれらに言語表現の仕方として何らかの特徴を見出しているわけではない。バルトが述べる文体的変形において、格言と名詞句は定型表現という上位カテゴリーに包括されるが、バルザックの文と従属節に関しては、特定の上位カテゴリーへの包括が問題にな

[55] Barthes, « Le style et son image », p. 979. 邦訳 157 頁。

っていない。定型表現としての格言と名詞句は、意味内容に依拠することなく（格言と名詞句の内容それ自体は重要性を持っていない）、言語表現のうえで、別の言い方をすれば言語表現の仕方として、概念的に上位のレベルに位置している。要するに、ここで問題になっている文体的変形とは、言語表現のうえでの汎用的な型を個別具体的に実践することであると言える。

「外的な変形」において定型表現（としての格言）は、バルザックの文へと移される。定型表現からその個別例への移動というかたちで、一般的なレベルから個別的なレベルへの移動が見られる。

「内的な変形」においては、まず、従属節が定型表現（としての名詞句）へと移されることで、すなわち構文のうえでの任意の形式にすぎない従属節が言語表現のうえでの特定の型へと変形されることで、個別具体的なレベルから汎用性に通じる一般的なレベルへの移動が見られる（第一段階）。次に、この定型表現が実際に使用されることで、定型表現からその個別例への移動、すなわち一般的なレベルから個別的なレベルへの移動が見られる（第二段階）。さらに、第一段階から第二段階へ至るプロセスが反復されることによって、言い換えれば従属節からの変形が行なわれた定型表現を実際に使用するということが反復されることによって、汎用性に通じる一般的なレベルと個別具体的なレベルのあいだを往復するという運動性が生じる。

したがって、バルトが述べる文体的変形、とりわけ「内的な変形」においては、異なる概念レベル間での往復運動が前景化されているのであり、私たちはこの往復運動をバルトが実践した提喩的関係性（一般的なレベルと個別的なレベルから成る概念的な関係性）の応用と捉えることができる。提喩的関係性は、文体に対するバルトのヴィジョンである形式の多重性に動的な様相をもたらしているのである。

第 6 節　結論

バルトの「コノテーション」（第二次の意味作用）に対する捉え方においては、換喩的なメカニズムとは別に、提喩的なメカニズムが存在する。ジュネットが強調していた「デノテーションの仕方」というコノテーションの提喩的特徴は、コノテーションの問題圏のもとに位置するレトリックに対するバルトの分析および彼の文体論を通じて、ジュネットが問題にした時代よりも前の時代すなわち構造主義の時代においてすでに、バルトによって継続的に扱われていた。この「デノテーションの仕方」は、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づいている（「フランス語性」や「気取った表現」、あるいはまた「集団によ

る決まり文句」などといったデノテーションの仕方は、諸々のデノテーションが属する概念的な上位クラスである)。デノテーションの仕方とは、デノテーションの在り方ないし様態と呼び換えることができる。バルトにとって「コノテーション」とは、デノテーション（第一次の意味作用）の在り方をカテゴライズすることに資するというステータスを有しているのである。

このように、バルトが捉える「コノテーション」（第二次の意味作用）とは、付加的意味とは別に、諸々のデノテーション（第一次の意味作用）の様態をカテゴライズする（ことに資する）意味作用として存在している。この場合、デノテーションの様態をカテゴライズするコノテーションのレベルのシニフィエ（デノテーションの仕方を示すシニフィエ）は上位クラスすなわち「類」に、デノテーションのレベルでの諸々の意味実践は下位クラスすなわち「種」に、それぞれ対応する。私たちは、「類」（上位クラス）と「種」（下位クラス）という異なる概念レベルのあいだの関係性に基づくこうした第二次の意味作用を「提喩的意味作用」と名づけたい。

さらにまた、バルトのレトリック論および文体論では、上位カテゴリーと下位カテゴリーを往復するという分析行程が存在する（この分析行程はイェルムスレウのコノテーション論にも見られた)。レトリック論では、あるカテゴリー（「レトリック」）から出発し、それを下位カテゴリーに分割し（諸々のコノテーター)、そのうえでそれら下位カテゴリーをある文化的コード（古典主義のコード）という上位カテゴリーにグルーピングするというかたちで、カテゴリー間での往復運動が生じている。文体論では、言語表現のうえでの汎用的な型（「類」としての上位クラス）とその個別具体的な実践例（「種」としての下位クラス）のあいだでの往復運動が見られる。換喩には横滑りというかたちで水平的な運動性が存在するが、提喩には異なる概念レベル間での往復運動というかたちで垂直的な運動性が存在するのである。

こうしたカテゴリー間でなされる往復運動は、コノテーションを通じて感知できる意味作用の働き、その運動性を体現している。言い換えればバルトは、意味作用の働きを異なる概念レベル間での往復運動として可視化したのである。同時にこの往復運動は、バルトの分析実践の進行と連動している。つまりカテゴリー間での往復運動は、意味作用の働きを浮き彫りにするバルトの思考のプロセス（が現われている状態）として把握できるのである。私たちは次章以降、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づいた意味作用、すなわち「提喩的意味作用」を様々なかたちで活かすバルトの思考の在り方を明らかにしてゆくだろう。

第 2 章　提喩的意味作用と「混合」の実践

第 1 節　はじめに

第 1 章では、バルトによる「コノテーション（connotation）」の理論における提喩的関係性（「類」と「種」のカテゴリー間の関係性）の検討を通じて、バルトが第二次の意味作用をカテゴリー間の関係性に直結させて捉えていたことを明らかにし、カテゴリー間の関係性に結びついたこのような意味作用を「提喩的意味作用」と名づけた。また、提喩的意味作用に焦点を当ててバルトの思考のプロセスをたどることによって、バルトが自身の分析実践にカテゴリー間での往復運動というかたちで、概念的と形容できるような運動性、すなわちカテゴリー間の関係性に基づく思考の運動性を持たせていたことを示した。

本章では、提喩的意味作用を通じてさらにバルトの思考の在り方に迫ってゆきたい。提喩的意味作用に着目することで浮き彫りになるのは、意味作用の働きそのものを前景化するバルトの思考であり、より具体的に言えばそれは、一見すると論理的には矛盾するが意味作用の働きに基づいて諸々の要素を結び合わせるという知的操作である。本章では、提喩的意味作用を活かして多様な要素を結合させる彼の思考を示したい。

その導きとなるのは、意味作用の働きを注視するバルトの記号論的実践であり、本章では、記号論的知見を土台にした彼の諸々のテクストを対象にして相反する諸要素の結合およびそれに類する思考を見出すことを試みるとともに、バルトの記号論的実践の射程が彼のキャリアの初期から晩年にまで広がっていることを示す。言い換えれば、本章での検討を通じて私たちは、第 1 章でその基礎的な様態を定義した「提喩的意味作用」を適用かつ応用する試みとして、バルトの諸々のテクスト実践を通時的な視野のもとで把握することを試みる。諸々の文化表象を分析するバルトのテクスト実践が、意味作用の厚みのなかで働くカテゴリー間の関係性に根ざしていることを明らかにしてゆきたい。

第 2 節　バルトの神話分析と提喩的意味作用――「今日における神話」

本節では、提喩的意味作用の現われを、バルトの記号論的実践の出発点に位置する彼の神話分析において見る。その理由は、提喩的意味作用が、記号論の枠組みのもとで意味作用のレベルの相違を前景化するバルトの分析手法に密接なかたちで結びついているからで

ある。そのうえで、バルトが提喩的意味作用を通じて様々な事象を結び合わせるという分析実践を行なっていたことを示す。

2-1. 「記号体系」としての「神話」における提喩的意味作用

記号論（記号学）の枠組みのもとでのバルトの仕事、その出発点に位置するのは『現代社会の神話』（1957 年）である。1970 年のポケット版刊行の際の序文では、この著作に賭けられている事柄として、マスカルチャーの言語活動に対する二つの分析実践が挙げられており、それは、「イデオロギー批判（critique idéologique）」およびフェルディナン・ド・ソシュールから確信を得た「最初の記号学的解析（premier démontage sémiologique）」の二つである[1]。この著作では、バルトの批判的なまなざしのもとで、私たちの日常に潜む「神話（mythe）」と呼ばれる現象が明るみに出されているとともに（第 1 部での事例集）、その第 2 部「今日における神話」においては、「神話」の性質を規定しようとするバルトの理論的考察が展開されている。

初版刊行の際の序文によれば、バルトが「神話」と呼ぶ現象は、「偽りの自明の理（fausses évidences）」、いわば自然らしさ（のもとに隠された「イデオロギーの濫用（abus idéologique）」）を私たちに気づかせる契機となっている[2]。「神話」の効果ないし機能として挙げられるのは、諸々の歴史的事象に対して、それらがあたかも普遍的であるかのように見せることである。すなわち「神話」を通じて、恣意的な事象がもっともらしく映るようになる。その典型例

---

[1] 「ここでは二つの決意が見出されるだろう。一方で、いわゆるマスカルチャーの言語活動を対象とするイデオロギー批判があり、他方、この言語活動についての最初の記号学的解析をすることである。わたしはソシュールを読んだばかりで、そこから次のような確信を引き出した。すなわち、「集団的表象」を記号の体系として扱うことによって、敬虔な告発から抜け出し、プチブルジョワの文化を普遍的な自然に変形する欺瞞を詳細に説明することが望めるということである。」« On trouvera ici deux déterminations : d'une part une critique idéologique portant sur le langage de la culture dite de masse ; d'autre part un premier démontage sémiologique de ce langage : je venais de lire Saussure et j'en retirai la conviction qu'en traitant les « représentations collectives » comme des sytèmes de signes on pouvait espérer sortir de la dénonciation pieuse et rendre compte *en détail* de la mystification qui transforme la culture petite-bourgeoise en nature universelle. », Roland Barthes, *Mythologies* [suivi de Le Mythe, aujourd'hui] (1957), in *Œuvres complètes*, t. I (1942-1961), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 673（『ロラン・バルト著作集 3　現代社会の神話　1957』、下澤和義訳、みすず書房、2005 年、5 頁）.

[2] 「[…] 私は、自明なことが飾り立てられて示されているということにおいて、そこに隠されていると思われるイデオロギーの濫用を捉え直したかったのである。

神話という概念は、私には最初から、そうした偽りの自明の理を説明してくれるように思われた。[…]」

« [...] je voulais ressaisir dans l'exposition décorative de *ce-qui-va-de-soi*, l'abus idéologique qui, à mon sens, s'y trouve caché.

La notion de mythe m'a paru dès le début rendre compte de ces fausses évidences [...] », Barthes, *Mythologies*, p. 675. 邦訳 3 頁。

として、『パリ・マッチ』誌の表紙に使われている写真、そこでフランス軍隊風の敬礼をする（抑圧する者に仕える）黒人兵士から、フランスの植民地主義があたかも当然であるかのごとく映るようになるのであり、バルトの作業は、歴史（的事象）を自然（であるかのような装いをした事象）に「変形する（transformer）」[3]こうした「神話」の効果の欺瞞を暴露することであったと言える。あるいはまた、バルトが行なった神話分析とは、もっともらしいという見かけのもとで隠蔽された「イデオロギーの濫用」を暴き出すことにあったのだと整理することができるだろう。

本節では、提喩的意味作用を活かすバルトの思考を示すために、彼が神話分析の手法について論じた「今日における神話」を取り上げたい。「今日における神話」では、意味作用の働きへの注視に根ざす彼の神話分析の記号論的な土台が示されているからである。

このテクストの冒頭でバルトは、「神話」が言葉（parole）によって構成された「コミュニケーションの体系（système de communication）」であることを改めて述べつつ、神話分析の方針を次のように提示している。文字通り言葉によって成立する言説をはじめとして、（文字通りには言語活動でなくともそれが意味作用を発揮する限りにおいて言語活動と見なされる）写真や映画といった映像など多様な文化表象に対して、意味作用を担った単位（unité）ないし「意味作用を発揮する総合［／意味作用の総合］（synthèse significative）」としてそれらを捉えることである[4]。その際にバルトは、様々な意味実践を体現する「コミュニケーションの体系」である「神話」が「意味作用の様態（mode de signification）」として存在している点に注意を払っており[5]、彼にとって「神話」とは、まさに意味作用の在り方こそが前景化される分析対象にほかならないことがわかる。この見地からは、バルトが行なった神話分析とは何よりもまず、意味作用の働き方を細やかに観察し解明すること、すなわち言語活動に対する「記号学的解析」が含意する作業であったと言える。

実際、後年（20 年近く経過した後で）、「記号学の冒険（aventure sémiologique）」について語った際にバルトは、イデオロギー批判と記号学（的解析）が一体となった「今日における神話」を「幸福なテクスト（texte euphorique）」と呼ぶとともに（その理由は、知的なアンガージュマン（engagement intellectuel）が記号学的解析という方法論に支えられ、意味の研究（étude du sens）がイデオロギー批判によって社会的な意義を有するからである）、その

---

[3] Barthes, *Mythologies*, p. 842. 邦訳 345 頁。

[4] Cf. Barthes, *Mythologies*, pp. 823-825. 邦訳 319-321 頁。

[5] 「［…］神話はコミュニケーションの体系であり、メッセージである。このことによって、神話が事物や概念や観念では有り得ないだろうことがわかる。神話とは、意味作用の様態である。［…］」« [...] le mythe est un système de communication, c’est un message. On voit par là que le mythe ne saurait être un objet, un concept, ou une idée ; c’est un mode de signification [...] », Barthes, *Mythologies*, p. 823. 邦訳 319 頁。

具体的な手法が「意味のプロセス（processus de sens）」を精密に分析することであったと述べている[6]。元々ソシュールが記号学（sémiologie）という呼び名を与えたのは「社会的な生の只中にある諸々の記号の生を研究する学問（*une science qui étudie la vie des signes au sein de la vie sociale*）」[7]であり、バルトは彼なりの仕方で記号学を社会的な使命（と呼べる活動）に直結させたのであるが、その要点は、ある何らかの記号が意味作用を発揮することの結果として現われる諸々の意味を解読するだけでなく、複数的な意味が生じるプロセスそのものを探求することにあったのではないだろうか。

バルトの神話分析の方針はこのように明確でありながらも、その詳細な展開については必ずしも理解しやすいとは言えない。というのも、私たちがここで取り上げる「今日における神話」は、1956 年の夏、すなわち記号論の用語に対する整備がバルトのなかで十分なかたちではなされていない時点で書かれているからである（それがなされるのは 1964 年の「記号学の原理」を待たなければならない）。「コノテーション（connotation）」という用語も提示されていない。しかし、1960 年代半ば以降であればまず間違いなく「コノテーション」と呼ばれていただろう事象が問題になっており、実際のところ、それがほかならぬ「神話」なのである。こうした用語法の未整備を問題にするよりもむしろ注意を向けるべきなのは、「今日における神話」では、記号論の用語に対する整備がなされていないだけにかえって、多様な文化表象を分析する際のバルトの着想の豊かさが示されているように見受けられる点だろう。

「記号体系［／記号学的体系］（système sémiologique）」として記述されている「神話」の性質は、次のようにまとめることができる。「今日における神話」では、「コノテーション」における場合と同様の定式化が「神話」に対してなされており、バルトは、「神話」を「第二次の記号体系（système sémiologique second）」と規定している[8]。同時に彼は、「神話」を

---

[6] Cf. Roland Barthes, « L'aventure sémiologique » (1974), in *Œuvres complètes*, t. IV (1972-1976), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 522-523（「記号学の冒険」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1988 年）、8-9 頁）.

[7] Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale*, Édition critique préparée par Tullio de Mauro, Payot & Rivages, 1967 (1916), p. 33（『一般言語学講義』、小林英夫訳、岩波書店、改版 1972 年（初版 1940 年）、29 頁）.

[8] 「神話においては、今しがた述べたような、シニフィアン、シニフィエ、記号という三つの次元からなる図式がまた見出される。しかし神話は、それ以前に存在している記号学的連鎖から構築されるという点で特殊な体系である。つまり、それは第二次の記号体系である。第一次の体系では記号であるもの（すなわち概念と映像［聴覚映像］の連合した全体）が、第二次の体系では単なるシニフィアンになる。」« On retrouve dans le mythe le schéma tridimensionnel dont je viens de parler : le signifiant, le signifié et le signe. Mais le mythe est un système particulier en ceci qu'il s'édifie à partir d'une chaîne sémiologique qui existe avant lui : *c'est un système sémiologique second*. Ce qui est signe (c'est-à-dire total associatif d'un concept et d'une image) dans le premier système, devient simple signifiant dans le second. », Barthes, *Mythologies*, p. 828. 邦訳 326 頁。

対象言語（langage-objet）について語る「メタ言語（méta-langage）」と呼び換えており[9]、のちに書かれる「記号学の原理」では区別されているコノテーションとメタ言語がここでは区別されず、「神話」に対する定義は細やかなものではない。しかし、第一次の体系における記号（シニフィアンとシニフィエが結合した様態）が第二次の体系においてシニフィアンになる、言い換えれば、第一次の意味作用が第二次の意味作用のレベルでシニフィアンとして機能するのであるから（これは第 1 章で確認した「記号学の原理」におけるコノテーションの定義にほかならない）、「神話」のメカニズムはコノテーションの問題として捉えることができる。それゆえ私たちは、第 1 章に引き続きここでも第二次の意味作用のレベルに注目する。

バルトが提示している用語法を確認しておくと[10]、「今日における神話」において彼は、第一次の記号体系（デノテーション）のレベルにおけるシニフィアンを「意味（sens）」、第二次の記号体系（コノテーション）のレベルにおけるシニフィアンを「形式（forme）」と呼んでおり、このあと見るように、「意味」および「形式」が対照的に記述されることで意味作用のレベルの相違が示されることになる点に注意しておきたい。（第一次の記号体系と第二次の記号体系の両方のレベルにおいて）シニフィエが「概念（concept）」、そしてシニフィアンとシニフィエの結合関係が「意味作用（signification）」と呼ばれている点については、用語法のうえで捉え難さはないと思われる。記述用語として私たちが用いる「カテゴリー」とは「概念」のことにほかならず、また、問題になるのは第二次の意味作用のレベルであるため、「今日における神話」をめぐる提喩的意味作用を探るうえでは、第二次の意味作用のレベルにおけるシニフィエ（「概念」）についてのバルトの記述が手がかりになる。

提喩的意味作用の痕跡は、次の点に現われている。「神話」に対する理論化の際にバルトが注意を向けているのは、「神話」が「メッセージ（message）」を発する「仕方（façon）」[11]、すなわち、諸々の「神話」のメッセージがそれぞれどのような言語活動の様式に属するのかという点であり、バルトが「神話」の在り方を「類」と「種」のあいだの関係性から捉えようとしていることがうかがえる。

「記号体系」としての「神話」を説明するためにバルトが真っ先に示している例を挙げよう。獲物を占有しようとする動物（ライオン）をモチーフにした属詞の一致を例示するラテン語の文（「なぜなれば我が名は獅子なれば［／なぜなら私は雄のライオンと呼ばれて

---

[9] Barthes, *Mythologies*, p. 829. 邦訳 327 頁。
[10] Barthes, *Mythologies*, p. 830. 邦訳 329 頁。
[11] 「神話が定義されるのは、神話のメッセージの対象ではなく、神話がメッセージを発する仕方である。［…］」« Le mythe ne se définit pas par l'objet de son message, mais par la façon dont il le profère [...] », Barthes, *Mythologies*, p. 823. 邦訳 320 頁。

いるからである］（quia ego nominor leo）」）、このラテン語文では、属詞に該当する「leo」（「雄のライオン」）という単語が、性の判別を示すことによって（この単語は雌ではなく雄のライオンを指すのに用いられる）、主語「ego」（「私は」）と性の一致を行なう役割を果たしている。このラテン語の例文から、第二次の意味作用のレベルでバルトがシニフィエ（「概念」）として提示しているのは、例文の内容そのもの（この動物がライオンであるという理由で獲物の占有を正当化しようとすること）ではなく、それが属する言説のジャンルとしての「文法の例文（exemple de grammaire）」というカテゴリーである[12]。当該の言説の自己指示を示すと言えるこのカテゴリーは、第 1 章で参照したジュネットの呼び方にならえば、「デノテーションの仕方（manière de dénoter / façon de dénoter）」にほかならないということになるだろう。

このラテン語文を挙げるに際してバルトは、ポール・ヴァレリーの『テル・ケル』のなかの一節を参照しており、このラテン語文を通じて意味される事柄としてそれが「文法の例文」であることがヴァレリーによって浮き彫りにされているが[13]、バルトは、一人称単数主格の代名詞「ego」を補ってこのラテン語文が「文法の例文」の実践であることを際立たせて、ヴァレリーが述べる以上に言説の類型性を前景化している。バルトは、属詞の一致を例示しているラテン語文から、第二次の意味作用のレベルで「文法の例文」という言語

---

12 「［…］確かにひとつのシニフィアンが存在するが、このシニフィアンはそれ自体、いくつかの記号の総体によって形成されており、それだけで第一次の記号体系となっている（私はライオンである［／私の名前はライオンである］）。残りについては、形式的な図式は正確に展開されている。つまり、ひとつのシニフィエ（私は文法の例文である）、そしてまた、シニフィアンとシニフィエの相関関係にほかならないひとつの総合的な［／包括的な］意味作用が存在する。［…］」
« [...] il y a bien un signifiant, mais ce signifiant est lui-même formé par un total de signes, il est à lui seul un premier système sémiologique (*je m'appelle lion*). Pour le reste, le schème formel se déroule correctement : il y a un signifié (*je suis un exemple de grammaire*) et il y a une signification globale, qui n'est rien d'autre que la crrélation du signifiant et du signifié [...] », Barthes, *Mythologies*, p. 829. 邦訳 328 頁。

13 「あらゆる言葉はいくつもの意味を持ち、なかでも最も注目すべきなのは間違いなく、その言葉を言わせた原因そのものである。

それゆえ、なぜなれば［我が］名は獅子なれば［という文］は、というのも私の名はライオンである［ということ］を意味しているのではなく、私は文法の例文である［ということ］を意味している。

永遠の沈黙、等々と言うこと、それははっきりと次のように述べることである、私は自分の深遠さであなたたちを恐れさせ自分の文体であなたたちを驚嘆させたいのだ、と。」

« Toute parole a plusieurs sens dont le plus remarquable est assurément la cause même qui a fait dire cette parole.

Ainsi : *Quia nominor Leo* ne signifie point : *Car Lion je me nomme*, mais bien : *Je suis un exemple de grammaire*.

Dire : *Le silence éternel*, etc., c'est énoncer clairement : *Je veux vous épouvanter de ma profondeur et vous émerveiller de mon style*. », Paul Valéry, *Tel Quel II*, Gallimard, 1943, p. 191.

活動の様式を抽出する。つまり彼は、第二次の意味作用を通じてこのラテン語文を包括する「文法の例文」というカテゴリーを導き出しており、「類」と「種」の包含関係に基づくこのバルトの操作は、第二次の意味作用の働きから感知できる提喩的意味作用の現われを示している。

このラテン語文とともにバルトが挙げている例は、先に言及した『パリ・マッチ』誌の表紙に使われている写真であり、フランス軍隊風の敬礼をする黒人兵士の表象から、「フランス性と軍隊性の意図的な混合（mélange intentionnel de francité et de militarité）」[14]、あるいはそれを呼び換えた「フランス帝国性（impérialité française）」が第二次の意味作用のレベルで抽出される。写真を媒体にした表象から読み取られた「フランス帝国性」という概念もまた、写真の「メッセージ」を類型化した一例だと見なせる。「フランス帝国性」のような文字通りのかたちでは言説の類型性が感知し難い場合でも、第一次での意味実践の在り方（フランス軍隊風の敬礼をする黒人兵士）が、第二次の意味作用のレベルにおいて「概念」（「フランス帝国性」というシニフィエ）として提示されているのである。

言説の類型性を背景にした「意味作用の様態」を明るみに出すバルトは、第一次の（先行する）意味実践の在り方（雄のライオンという名前を通じた属詞の一致の例示、フランス軍隊風の敬礼をする黒人兵士の表象）を、第二次の（後続する）意味作用のレベルで何らかの包括的なカテゴリー（「文法の例文」あるいはそれを呼び換えた「文法の例という性質（exemplarité grammaticale）」いわば「文法の例性」、「フランス帝国性」）として提示する。このように、「神話」（に属する諸々の意味実践）を「記号体系」として分析することは、第一次の意味作用と第二次の意味作用で構成される入れ子構造を貫くカテゴリー間での包含関係を浮き彫りにする。同時に、このカテゴリー間の関係性が浮き彫りにされることによって、複数的な意味が生じるプロセス（「意味のプロセス」）が第一次の意味作用から第二次の意味作用へと至るそれとして明るみに出されているのである。第二次の意味作用を通じて導き出される何らかの「概念」が包括性を持つという点に、提喩的意味作用の現われが見て取れるのであり、そうした「概念」は提喩的意味作用におけるカテゴリーと呼ぶことができる。ゆえに、記号論の用語が整備されていない時期に行なわれていながらも、それが整備された第 1 章で検討した時期と同様に、記号論を土台にしたバルトの神話分析

---

[14] 「[…] すでに、前提となる［第一次の］体系（フランスの軍隊式敬礼をする黒人兵士）でそれ自体形成されたシニフィアンがある。シニフィエがある（ここではそれは、フランス性と軍隊性の意図的な混合である）。最後に、シニフィアンを通じたシニフィエの現前がある。」« [...] il y a un signifiant, formé lui-même, déjà, d'un système préalable (*un soldat noir fait le salut militaire français*) ; il y a un signifié (c'est ici un mélange intentionnel de francité et de militarité) ; il y a enfin une *présence* du signifié à travers le signifiant. », Barthes, *Mythologies*, p. 830. 邦訳 329 頁。

において、提喩的意味作用とは、言語活動の類型性に基づいた第二次の意味作用（カテゴリー間の関係性に基づいた第二次の意味作用）であり、より正確には、第一次の意味作用の様態をカテゴライズする第二次の意味作用のことであると言える。

「プロセス」として存在する意味作用の働き方（「意味作用の様態」）の解明とは、第二次の意味作用のレベルでの何らかの包括的なカテゴリーのもとに、第一次の意味実践の在り方を位置づけること、つまり分類するということにほかならないのであり、諸々の意味実践を分類するバルトの神話分析は、提喩的意味作用に支えられているのである。このことは、次のように言い換えられるだろう。バルトの神話分析がまさに記号論的作業（記号学的作業）であるのは、提喩的意味作用というかたちで意味作用の働き方を捉えることができるからであり、提喩的意味作用に基づいて「神話」（に属する諸々の意味実践）が「記号体系」として特徴づけられるからなのである。

2-2. 提喩的意味作用を通じた諸要素の「混合」

バルトの神話分析は、提喩的意味作用（言語活動の類型性に基づく第二次の意味作用）の存在を前景化するだけにとどまらず、この意味作用を活かした分析手法の応用可能性まで射程に収めている。その点を示すために着目したいのは、「神話」における「概念」、すなわち第二次の意味作用（コノテーション）のレベルでのシニフィエが持つしなやかさと形容できるような性質である。この性質を検討することによって、提喩的意味作用におけるカテゴリー（第二次の意味作用を通じて顕在化する何らかの包括的な概念）を導き出すバルトの操作が、いくつもの相異なる事象を結び合わせる「混合（mélange）」と呼ばれる分析実践として展開されてゆくことを明らかにしたい。

「神話」における「概念」（第二次の意味作用のレベルでのシニフィエ）に備わる一種の柔軟性について、バルトは次のように記述している。

> 実を言うと、概念のなかに注ぎ込まれているのは、現実というより、現実に対するある種の認識である。意味から形式に移行することによって、映像は知識を失う。それは、概念の知識をより良く受け入れるためである。実際には、神話的概念に含まれている知識は、限定されていない柔軟な諸々の連合で形成された、あいまいな知識である。概念のこうした開かれた特徴を強調しなければならない。概念は純化された抽象的な本質では少しもない。それは不定形で、不安定で、漠然とした凝縮であり、その

統一性や首尾一貫性は何よりも機能にかかっている。[15]

「神話的概念（concept mythique）」（「神話」における「概念」）の「開かれた特徴（caractère ouvert）」にアプローチする前に確認しておきたいのは、現実（réel）に対する認識ないし現実についての知識が、「神話」における「概念」に含まれていることである。また、ここで記述されている現実についての知識は、「神話」における「概念」に含まれているのであるから、第二次の意味作用のレベルに属する。この場合、第一次の意味作用のレベル（「意味」としてのシニフィアンが存在するデノテーションのレベル）でのシニフィアン（引用文中では単に「映像（image）」と記述されている聴覚映像ないし視覚映像）に伴う知識が、第二次の意味作用のレベル（「形式」としてのシニフィアンが存在するコノテーションのレベル）では失われるというように、意味作用のレベルの相違に応じて異なる知識の在り方（また現実に対する認識の在り方）が記述されていることがうかがえる（「記号体系」としての「神話」を通じたこうした現実認識の在り方は「神話」の消費という問題につながるが、その点については後述する）。

そのうえで神話における概念の「開かれた特徴」にアプローチすると、概念というものを純化されておらず抽象的ではないと捉えるバルトの逆説的な記述が見られる。この特徴がバルト自身によって強調されている以上、彼にとって神話における概念は、普遍的な性質を持ち得ないことがわかる。神話における概念の「統一性（unité）」や「首尾一貫性（cohérence）」が「機能（fonction）」に依拠しているという旨が指すのは、引用文の直後の箇所で述べられている点、すなわち、この概念が形成される根拠は特定の受け手（たとえば雑誌の場合であれば特定の読者層）への訴えかけの力に存するという点である。神話における概念が純化された抽象的な本質ではまったくないとまでバルトが断言しているのは、このカテゴリーが普遍的ではあり得ず、神話の受け手によってその効力（諸々の神話の影響力）が異なるからだろう。

しかし同時に、神話における概念の特徴はそれだけではない。バルトによれば神話における概念とは、「不定形で、不安定で、漠然とした凝縮（condensation informe, instable, nébuleuse）」にほかならず、神話における概念の「不定形で、不安定で、漠然とした」性質は、神話における概念に含まれている知識が「限定されていない柔軟な諸々の連合で形成

[15] « A vrai dire, ce qui s'investit dans le concept, c'est moins le réel qu'une certaine connaissance du réel ; en passant du sens à la forme, l'image perd du savoir : c'est pour mieux recevoir celui du concept. En fait, le savoir contenu dans le concept mythique est un savoir confus, formé d'associations molles, illimitées. Il faut bien insister sur ce caractère ouvert du concept ; ce n'est nullement une essence abstraite, purifiée ; c'est une condensation informe, instable, nébuleuse, dont l'unité, la cohérence tiennent surtout à la fonction. », Barthes, *Mythologies*, p. 832. 邦訳 332 頁。

された、あいまいな知識（savoir confus, formé d’associations molles, illimitées）」であることに由来している。

このバルトの記述は、次のように解釈できる。神話における概念に備わる「知識」は、「諸々の連合」（複数の連合関係）で形成されるため、ある何らかの総体（ある一定のまとまり）として存在しており、そのまとまり方が柔軟性を持つのである。また、別の箇所でのバルトの記述を参照すると[16]、「概念」は「包括的な仕方（façon globale）」で構成された「凝縮（condensation）」であり、その構成要素は（ソシュールに由来する用語法で記述されているところの）「諸々の連合関係（rapports associatifs）」に基づいている。それゆえ「凝縮」という用語は、「概念」ないし「知識」がまとまった状態、別の言い方をすれば、「概念」ないし「知識」を構成する諸要素が集まった状態を指している。「概念」のまとまり方の柔軟性、すなわち「概念」が「不定形で、不安定で、漠然とした凝縮」であるということは、それを構成する諸要素が論理的必然性に拘束されないかたちで集まっていることとして捉えることができる。

提喩的意味作用におけるこうした「概念」（第二次の意味作用を通じて得られる何らかの包括的な概念）が柔軟性を持つことは、それが導き出されるプロセスと無関係ではない。神話における概念の不安定性によって導かれるバルトの神話分析の方法論上の要点を参照しよう。

> すでに述べたように、諸々の神話的概念にはいかなる固定性もない。それらは、作り出され、変質し、解体し、完全に消え去ることができる。まさしく諸々の神話的概念が歴史的であるがゆえに、歴史はそれらをいともたやすく消去できるのである。［神話的概念の］こうした不安定性は、神話学者に用語法の調整を余儀なくさせる。［…］問題なのは新造語である。概念は神話を構成するひとつの要素である。もし私が諸々の神話を解読しようとすれば、諸々の概念を名づけることができなくてはならない。辞書はそうした概念のうちのいくつかを提供してくれる。「善良さ」、「慈善」、「健康」、「人間性」、など。しかし定義上、まさに辞書が私にそれらの概念を与える以上、そうした概念は歴史的なものではない。ところで、私が最もしばしば必要とするのは、限られた偶発事に結びついている一時的な概念である。つまり、新造語がここでは避け

[16] 「概念は［「形式」とは］反対に、包括的な仕方で与えられるのであり、それはある種の混沌としたもの［／星雲］であり、知識の多かれ少なかれ漠とした凝縮である。その諸要素は、諸々の連合関係によって結ばれている。［…］」« Le concept au contraire, se donne d’une façon globale, il est une sorte de nébuleuse, la condensation plus ou moins floue d’un savoir. Ses éléments sont noués par des rapports associatifs [...] », Barthes, *Mythologies*, p. 835. 邦訳 336 頁。

られない。中国とはひとつの事柄であるが、それについて遠からぬ過去にフランスのプチブルが抱くことのできた観念は、また別のものである。鈴、人力車、阿片窟からなる、あの特殊な混合については、シナ性という語のほかにはあり得ない。[17]

バルトが神話分析に際して調整しなければならないと考えている点は、普遍的ではあり得ない「神話的概念」（神話における概念）をどのように命名するのかという、用語法上の難点である。そこでバルトは、造語に頼って神話における概念を提示するのであり、「シナ性（sinité）」という概念がその例として挙げられている。

私たちは、造語それ自体の妥当性を検証したいのではない。また、造語の必要性をめぐる是非を問いたいのでもない（神話における概念が造語を必要とするほど不安定かつ柔軟である点を押さえておけば十分である）。ここで注目したいのは、バルトの知的操作それ自体であり、彼が「特殊な混合（mélange spécial）」というかたちで、「シナ性」の概念のもとに、鈴や人力車や阿片窟といった諸々の事象を集めていることである。「混合」の操作の内実は、ある何らかのカテゴリーのもとに諸々の事象をまとめることにほかならない。神話における概念の「一時的な（éphémère）」と形容された不安定な性質が活かされて、雑多な諸要素に対するグルーピングが行なわれているのであり、神話における概念の茫漠とした「凝縮」というステータスは、グルーピングを旨とする雑多な諸要素に対する「混合」によってもたらされるのだと言える。

バルトによる「混合」の操作は、「フランス帝国性」というカテゴリーが「フランス性と軍隊性の意図的な混合（mélange intentionnel de francité et de militarité）」であるとする先に挙げた記述にも見られるため、具体的な事象のみならず抽象的な一般概念をも対象にしている。「フランス性と軍隊性の意図的な混合」としての「フランス帝国性」とは、「フランス帝国性」のカテゴリーのもとで「フランス性」と「軍隊性」といった相異なる抽象的な概念そのものがグルーピングされていることであると解釈できる。

このようにバルトは、提喩的意味作用（言語活動の類型性に基づく第二次の意味作用）

---

[17] « Je l'ai dit, il n'y a aucune fixité dans les concepts mythiques : ils peuvent se faire, s'altérer, se défaire, disparaître complètement. Et c'est précisément parce qu'ils sont historiques, que l'histoire peut très facilement les supprimer. Cette instabilité oblige le mythologue à une terminologie adaptée [...] il s'agit du néologisme. Le concept est un élément constituant du mythe : si je veux déchiffrer des mythes, il me faut bien pouvoir nommer des concepts. Le dictionnaire m'en fournit quelques-uns : la Bonté, la Charité, la Santé, l'Humanité, etc. Mais par définition, puisque c'est le dictionnaire qui me les donne, ces concepts-là ne sont pas historiques. Or ce dont j'ai le plus souvent besoin, c'est de concepts éphémères, liés à des contingences limitées : le néologisme est ici inévitable. La Chine est une chose, l'idée que pouvait s'en faire, il n'y a pas longtemps encore, un petit-bourgeois français en est une autre : pour ce mélange spécial de clochettes, de pousse-pousse et de fumeries d'opium, pas d'autre mot possible que celui de *sinité*. », Barthes, *Mythologies*, pp. 833-834. 邦訳 334 頁。

を通じて、「混合」というかたちで雑多な具体的事象や相異なる抽象的概念といった多様な対象をグルーピングして、それらを包括するカテゴリーを導入し、新たなカテゴリーを創出しさえもする。バルトが行なう「混合」の実践とは、提喩的意味作用を活かして相異なる諸要素を集めることなのである。

バルトによる「混合」の実践が多様な要素を対象にしている点は、神話における概念が帯びる歴史性に関しての彼の記述からも読み取れる。バルトは、神話における概念（第二次の意味作用のレベルでの「概念」）が「歴史的（historique）」かつ「意図的（intentionnel）」であると述べつつ、それが神話を作り上げる目的性を伴う点に言及するとともに（そこでは「文法の例という性質（exemplarité grammaticale）」（「文法の例性」）および「フランス帝国性（impérialité française）」という用語が見て取れる）[18]、歴史性に関しては、その直後の箇所（このあとすぐに引用する箇所）で、「概念」が諸々の個別具体的なコンテクストから成る歴史性に満たされていると説明している。

私たちは、この歴史性についてのバルトの記述が複雑な様相を呈していることに注意を払う必要がある。神話における概念に伴う歴史性とは、意味作用のレベルの相違に応じて異なる（現実についての）知識という、先に確認した知識の在り方のもとでの歴史性のことであり、第一次の意味作用をめぐるコンテクストではない。この歴史性は実際のところ、分析者バルトの存在なしでは生じ得ないのであり、神話における概念は、第二次の意味作用において、第一次の意味作用をめぐるコンテクストを前提としながらもそれとは別に、バルト自身の生ないし「実存（existence）」に基づいた歴史性を帯びて、不定形かつ不安定な状態にある。

この点を明確にするために、先に取り上げた文法の例文に関して彼が記述する歴史性が、第一次の意味作用における場合と第二次の意味作用における場合とではまったく異なったかたちで論じられていることを注意深くたどろう。

> 形式とは反対に、概念は少しも抽象的ではない。<u>概念はある状況に満たされている</u>。概念によって、まるまる新しい歴史こそが神話のなかに取り入れられるのである。あらかじめその偶然性が取り去られた［／空虚にさせられた］ライオンの名指し［ライ

[18] 「概念、これは限定されている。つまり概念は、歴史的であるとともに意図的である。それは、神話を発するようにさせる動機である。［概念としての］文法の例という性質やフランス帝国性が、まさに神話の衝動になっているのである。概念は、原因と効果の、動機と意図の連鎖を復元する。」« Le concept, lui, est déterminé : il est à la fois historique et intentionnel ; il est le mobile qui fait proférer le mythe. L'exemplarité grammaticale, l'impérialité française sont la pulsion même du mythe. Le concept rétablit une chaîne de causes et d'effets, de mobiles et d'intentions. », Barthes, *Mythologies*, p. 832. 邦訳 332 頁。

オンが自身の名を挙げること］においては、文法の例文は私の全実存を呼び出すだろう。たとえば、ラテン語の文法が教育されているしかじかの時代に私を生まれさせている「時間」、社会的隔離の作用全体によって、ラテン語を習わない子供たちから私を区別している「歴史」、イソップやファエドルスのなかでのこうした例を選び出させる教育学的な伝統、属詞の一致に実例に値する注目すべき事実を見る私自身の言語学的な習慣、である。[19]

第一次の意味作用においては、文法の例文のモチーフとなっているライオンをめぐる背景ないしコンテクストという意味合いでの偶然性（contingence）に従った歴史性、要するに偶発事としての個別具体的な歴史的与件が存在し、神話の分析者バルトはもちろんそのことを念頭に置いているが、第二次の意味作用においては事情が異なる。「概念」（第二次の意味作用でのシニフィエ）が帯びる歴史性は、「形式」（第二次の意味作用でのシニフィアン）を通じて空虚にされたライオンをめぐる元々のコンテクストの代わりに生じる歴史性であり、その「新しい歴史（histoire nouvelle）」とは、分析者バルトの生に根ざした歴史性のことにほかならず、具体的には彼が受けた教育の伝統や彼自身の言語的な習慣、等々である。ゆえに、それらの例の直後（この引用文の直後）に挙げられている歴史性、すなわち第二次の意味作用において「フランス帝国性」という概念に結びついている「フランスの全般的な「歴史」（Histoire générale de la France）」とは、バルト個人のまなざしのもとでの歴史性（バルト個人によって捉えられたフランスの歴史）を指していると理解するべきだろう。

私たちがここで取り上げているのは、第一次の意味作用（デノテーション）をめぐるコンテクストではなく、あくまで第二次の意味作用（コノテーションとしての「神話」）における歴史性である。問題なのは、そうした歴史性をバルトがどのようにして「概念」に関係づけているのかという点、つまり、先の引用文と同様に「概念」が抽象的ではまったくないとまで逆説的に断言するバルトのロジックである。バルトは、第二次の意味作用を通じて、彼自身の個人史に由来する様々な歴史的与件に満たされた「状況（situation）」を「概

[19] « Contrairement à la forme, le concept n’est nullement abstrait : il est plein d’une situation. Par le concept, c’est toute une histoire nouvelle qui est implantée dans le mythe : dans la dénomination du lion, préalablement vidée de sa contingence, l’exemple de grammaire va appeler toute mon existence : le Temps, qui me fait naître à telle époque où la grammaire latine est enseignée ; l’Histoire, qui me distingue par tout un jeu de ségrégation sociale des enfants qui n’apprennent pas le latin ; la tradition pédagogique qui fait choisir cet exemple dans Esope ou dans Phèdre ; mes propres habitudes linguistiques, qui voient dans l’accord de l’attribut un fait notable, digne d’être illustré. », Barthes, *Mythologies*, p. 832. 邦訳 332 頁。

念」に担わせており、それゆえに「概念」が単なる抽象的な性質というステータスにはとどまらなくなるのである。

このようにして、「文法の例性」とでも呼べるような、当該の文法の例文から抽出される「概念」（包括的なカテゴリーとしての「文法の例という性質」）は、分析者バルトの個人史に由来する「状況」としての諸々の個別的な要素で満たされるが、これはすなわち、彼がこのカテゴリーのもとに諸々の要素を集める「混合」の実践として捉えることができる。ゆえにバルトが行なう「混合」は、雑多な具体的事象や相異なる抽象的概念のみならず、個別的「状況」と形容できるような歴史的与件をも対象にしており、幅広い適用範囲を有している。

さらに別の点でも、バルトによる「混合」の応用例を見出せる。そのことを示すために、「神話」の消費という問題に言及しよう。先に確認したとおりバルトは、「記号体系」としての神話を分析するにあたって、意味作用のレベルの相違に応じて異なる知識の在り方ないし認識の在り方に注意を払っていた。

実際バルトは、「神話」の読み取りに際して現実に対する認識が意味作用のレベルの相違に応じて露呈される点に言及している。バルトによれば、「神話」を解読する分析者ないし神話学者（mythologue）は、意味作用のレベルの相違を把握している一方で、バルトが端的に「神話」の読者（lecteur）と呼ぶ「神話」をもっぱら消費する受け手は、「記号体系」を「事実の体系（système de faits）」ないし「事実に基づく体系（système factuel）」として受け取り、意味作用の働きを注視する立場には立っていない[20]。つまり両者を分かつのは、意味作用の働きを把握しているかどうかにかかっているのであるが、このことが含意しているのは、分析者バルトによって、もっぱら消費というかたちで「神話」が受け取られる際に見られる「記号体系」と「事実の体系」の「混同（confusion）」が問題にされていることである。

---

[20] 「実際のところ、読者が神話を素朴に消費することができるのは、読者が神話のなかに記号体系を見ておらず、帰納的な体系を見ているからである。等価関係［／等価性］しか存在しないところに、読者はある種の因果的なプロセスを見ているのである。シニフィアンとシニフィエは、読者の目からすると、自然な関係を持っている。この混同は、別なかたちで言い表わすことができる。つまり、あらゆる記号体系は価値の体系なのである。ところで神話の消費者は、意味作用を事実の体系と見なしている。神話は、それが記号体系にすぎないにもかかわらず、まるで事実に基づく体系のように読まれているのである。」« En fait, ce qui permet au lecteur de consommer le mythe innocemment, c'est qu'il ne voit pas en lui un système sémiologique, mais un système inductif : là où il n'y a qu'une équivalence, il voit une sorte de procès causal : le signifiant et le signifié ont, à ses yeux, des rapports de nature. On peut exprimer cette confusion autrement : tout système sémiologique est un système de valeurs ; or le consommateur du mythe prend la signification pour un système de faits : le mythe est lu comme un système factuel alors qu'il n'est qu'un système sémiologique. », Barthes, *Mythologies*, p. 843. 邦訳 347 頁。

「記号体系」を（実際には偽りである）「事実の体系」と受け取るこの「混同」を指摘することの背景にあるのは、「神話」が消費される様態を抽出するための「混合」の操作であると解釈できる。なぜならバルトは、「記号体系」と「事実の体系」の「混同」を、「真実であると同時に非現実的である歴史のようにして（à la façon d'une histoire à la fois vraie et irréelle）」、そうしたかたちで「神話」を消費することとして捉えているからである[21]。この場合、神話が消費される様態として、真実であるというステータスと非現実的であるというステータスが結び合わされているのだと見なせるだろう。

同時にバルトは、「記号体系」と「事実の体系」の「混同」を指摘することを通じて、「神話」をもっぱら消費する受け手には見えない「記号体系」の存在およびそれに備わる意味作用のプロセスを明るみに出しているのだと言える。「記号体系」と「事実の体系」の「混同」は、バルトが「概念の自然化（naturalisation du concept）」[22]と呼ぶ現象に関連している。「概念の自然化」についてバルトは、「概念」（第二次の意味作用におけるシニフィエ）が「自然の状態に移行する（passer à l'état de nature）」と記述している[23]。そこから理解できるのは、「概念」の「自然の状態」への移行（「概念の自然化」）とは「概念」が自然らしさ（「偽りの自明の理」）をまとうことを指しているということ、および、「概念」が（偽りの）自明さをまとった場合「記号体系」の有り様が「神話」をもっぱら消費する受け手には見えなくなるということである。しかし、この現象（「概念の自然化」）はまさしく意味作用のプロセスに貫かれており、バルトはその点を可視化しているのである。

たとえば、「物価、初めての下落。野菜、値下げ開始。（PRIX : PREMIER FLÉCHISSEMENT. LÉGUMES : LA BAISSE EST AMORCÉE.）」という新聞記事の見出しからバルトは、第二次の意味作用におけるシニフィエとして「政府性（gouvernementalité）」という概念を導き出しながら[24]、その例を通じて「記号体系」の有り様が第一次での意味実践で展開される（実際には偽りにすぎない）因果関係のもとで覆い隠されることを示しているが[25]、その要点とな

---

[21] 「[…] 読者は、真実であると同時に非現実的である歴史のようにして、神話を生きる。」« [...] le lecteur vit le mythe à la façon d'une histoire à la fois vraie et irréelle. », Barthes, *Mythologies*, p. 841. 邦訳 344 頁。

[22] Barthes, *Mythologies*, p. 843. 邦訳 346 頁。

[23] 「[…] まるで映像が自然なかたちで概念をもたらし、シニフィアンがシニフィエを根拠づけているかのように、事が運ぶ。フランス帝国性が自然の状態に移行するまさにその瞬間から、神話は存在する。つまり神話とは、過度に正当化された言葉なのである。」« [...] tout se passe comme si l'image provoquait *naturellement* le concept, comme si le signifiant *fondait* le signifié : le mythe existe à partir du moment précis où l'impérialité française passe à l'état de nature : le mythe est une parole *excessivement* justifiée. », Barthes, *Mythologies*, p. 842. 邦訳 345 頁。

[24] Cf. Barthes, *Mythologies*, p. 842. 邦訳 345-346 頁。

[25] 「[…] 果物と野菜が値を下げる、なぜならば、政府がそのように決定したからである。」« [...]

っているのは、意味作用のレベルの相違に注意を向けて第一次での意味実践における偽りの因果関係から第二次の意味作用における「概念」が偽りの自明さをまとうということを把握することにほかならない[26]。あるいはまた、「フランス帝国性」が「自然の状態に移行する」場合、第一次での意味実践（フランス軍隊風の敬礼をする黒人兵士の表象）においてまるで飾り立てられているかのように示された明証性（実際には偽りにすぎない明証性）から、第二次の意味作用のレベルにおける「概念」（「フランス帝国性」）がもっともらしく見えるようになる。ゆえにバルトが行なう「混合」の実践は、意味作用のプロセス（「意味のプロセス」）を通じて、偽りの自明さによって覆い隠されているように見える「記号体系」の存在を明るみに出すことにつながっているのである。

これまで検討してきたようにバルトは、提喩的意味作用（言語活動の類型性に基づく第二次の意味作用）を通じて、相異なる諸要素に対するグルーピングを旨とする「混合」の実践を行なうのであり、またこの実践は、幅広い対象に応用することができるものであった。このことは、新たなカテゴリーを創出しながら「混合」の操作を行なって提喩的意味作用を活かすバルトのテクスト実践が神話分析にとどまらないことを示唆している。さらにバルトによる「混合」の実践は、「記号体系」の存在が覆い隠されているように見える現実表象の在り方を明確化することにつながっていた。そこで次節においては、「記号体系」の現実表象の逆説的なメカニズムが浮き彫りにされる写真の映像（視覚イメージ）に対するバルトの分析実践を取り上げることにする。

第 3 節　バルトの写真論と提喩的意味作用――「写真のメッセージ」、「映像のレトリック」

本節では、バルトの写真論、彼が記号論に傾倒していた 1960 年代に書かれた二つの写真論に対する検討を通じて、提喩的意味作用を活かした彼の「混合」の実践を示す。写真に対するバルトの記号論的分析は、写真が意味作用の働きから逃れるその無意味さに私たちを導く。しかし同時に写真は、まさに無意味さを示すというかたちで意味作用を発揮する。周知のように、本来「デノテーション」（第一次の意味作用）および「コノテーション」（第

---

fruits et légumes baissent *parce que* le gouvernement l'a décidé. », Barthes, *Mythologies*, p. 842. 邦訳 346 頁。

[26] 「[…] 第一次の体系（もっぱら言語学的な）においては、因果性は、文字どおり自然であるだろう。果物と野菜が値を下げるのは、その季節だからである。第二次の体系（神話的な）においては、因果性は、人為的で偽りであるが、その因果性はいわば、「自然」の貨車のなかにもぐり込んでいる。」« [...] dans un système premier (exclusivement linguistique), la causalité serait, à la lettre, naturelle : fruits et légumes baissent parce que c'est la saison. Dans le système second (mythique), la causalité est artificielle, fausse, mais elle se glisse en quelque sorte dans les fourgons de la Nature. », Barthes, *Mythologies*, p. 843. 邦訳 346-347 頁。

二次の意味作用）という用語は言語活動に対して適用されるが、それらの用語を用いてバルトは、意味作用の働きを退けるかのように見える「記号体系」（写真）が実際には意味作用を発揮する点を明るみに出す。バルトが前景化したのは、写真のデノテーションから展開されるコノテーションの在り方、すなわちデノテーションからコノテーションへと至る意味作用のプロセスそのものであり、それを提喩的と捉えることができるとともに、この提喩的意味作用についてのバルトの記述のなかで、「混合」と呼べるような彼の分析実践を見出すことができる。

意味作用の問題から映像（視覚イメージ）を分析対象にしているのは、バルトの写真論ばかりでなく、彼が記号論に傾倒していた時期に書かれたバルトの映画論も挙げることができる。しかし、映画論では写真論におけるほど意味作用のプロセスが前景化されておらず、写真論においてこそ、「記号体系」の現実表象のメカニズムと結びついた意味作用の働きが問われている。

記号論（記号学）に傾倒していた時期のバルトは、言語記号（signe linguistique）以外の事象を含めて現実社会における様々な事象を分析対象にして、それらを「記号（signe）」ないし「記号学的記号（signe sémiologique）」として措定し、そこに意味作用の働きを見るという分析方針を取っていた[27]。しかし、写真の映像から意味作用を問題にすること、これは、写真というメディアの性質から見れば、首尾一貫した試みとして成立させることが容易でない探求であったと言える。写真の映像は、意味作用の働きとは相容れないように見えるからである。

松本健太郎は、『ロラン・バルトにとって写真とは何か』において[28]、メディアとしての写真の特徴を、「透明性」（カメラが捉えた場面を媒介なしで直接的に表現する透明性）、「視覚性」（肉眼とは異なる機械的で人工的な視覚性）、「延長性」（人間の能力の延長ないし拡張）という諸点から整理している（9-14 頁）。そのうえで松本は、写真が、言語活動を介さずに現実（より正確には「現実のイメージ」）をそのままのかたちで提示することから、「言語による意味付与」の問題を常に意識していたバルトにとって「言語活動の外部」を垣間見させる特権的なメディアとなっていると述べる（14-15 頁）。松本によれば、バルトは本節で取り上げる写真論の頃から一貫して「言語活動の外部」に関心を持ったのであり（27

[27] 「記号学の原理」はこの方針のもとで書かれているが、この方針は、初出の段階では「ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール」誌に掲載され「記号学の原理」と同時期の「意味の調理場」というテクストを通じて、かなり端的なかたちで述べられている。Cf. Roland Barthes, « La cuisine du sens » (1964), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 589-591（「意味の調理場」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1988 年）、46-50 頁）.

[28] 松本健太郎『ロラン・バルトにとって写真とは何か』、ナカニシヤ出版、2014 年。

頁)、バルトがその写真論を通じて目指したのは、特定の「心的イメージ」(「ステレオタイプ」、「ドクサ」、「イデオロギー」)を社会のなかに定着させる「意味の充実」(抑圧的な在り方をする「権力」と結びついた「意味の充実」)を回避する「言語からの逃走」にほかならず、言い換えればバルトにとって写真とは、「言語からの逃走」を演出するための装置であったとされている(131-133 頁)。

花輪光は、『ロラン・バルト――その言語圏とイメージ圏』において[29]、本節で取り上げるバルトの写真論の独自性として、バルトが写真の映像を「コードのないメッセージ」(デノテーション)および「コードのあるメッセージ」(コノテーション)から成る複合的な体系として捉えた点を挙げながらも、「コードがない」ということ(写真のデノテーション)の内実を「写真が対象を忠実に再現する」ことであると解釈している(244 頁)。写真のデノテーションは、松本の言葉を借りれば写真の「透明性」の現われにほかならないということである。花輪は、「対象の自然な再現」(245 頁)と呼べるこの点、すなわち現実(に存在している対象)をそのままのかたちで提示する写真の性質を「現実指示能力」と形容している(247 頁)。この見地からすれば、写真において意味作用の働きは根本的には後景に退くことになる。

現実の場面の忠実な再現に写真の特徴を見るのは、ごくごく常識的な見方だろう。しかし、先に検討したとおりバルトは、ともすれば意味作用の働きを見失いかねない事象にそれを見ていた。本節では、バルトが「透明性」ないし「現実指示」の力に支えられた写真の現実表象を意味作用の問題として考え抜こうとしていたこと、ほかならぬ提喩的意味作用の働きを活かしてそうしていたのだということを示したい。

3-1. 記録写真をめぐる提喩的意味作用

バルトは、記号論への傾倒の比較的早い時期に位置する「写真のメッセージ」(1961 年)において、記録写真(新聞の写真)を分析対象にして、その現実表象の特徴から意味作用の問題を提示している。

このテクストでは、意味作用の働きが感知される「メッセージ(message)」を伝達する媒体である写真が「構造的な自律性(autonomie structurelle)」[30]を備えているという視野のもとで、写真の現実表象の特徴について論じられている。写真のメッセージの内容(contenu)

---

[29] 花輪光『ロラン・バルト――その言語圏とイメージ圏』、みすず書房、1985 年。

[30] Roland Barthes, « Le message photographique » (1961), in *Œuvres complètes*, t. I (1942-1961), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 1120(「写真のメッセージ」、『第三の意味――映像と演劇と音楽と』、沢崎浩平訳、みすず書房、新装版 1998 年(初版 1984 年)、2 頁).

が「文字通りの現実（réel littéral）」ないし場面（scène）そのものであり、写真の映像が現実の「完全なアナロゴン［／類同代理物］（analogon parfait）」として被写体との「類似の完全性（perfection analogique）」を有することから、バルトは、写真の映像を、被写体それ自体と写真の映像のあいだに介在する（両者のあいだの「中継（relais）」となる）コード（写真の映像の解読に資するコード）を必要としないメッセージという意味合いで、「コードのないメッセージ（message sans code）」と規定している[31]。同時にバルトは、「完全なアナロゴン」としての写真の映像（「コードのないメッセージ」）を「デノテーションのメッセージ（message dénoté）」（デノテーションのレベルで示されたメッセージ）と呼び、写真の構造が被写体との「類似の完全性」のみに依拠する、すなわち「コノテーション（connotation）」を伴わず「デノテーション（dénotation）」（のレベルでのメッセージ）からのみ形成される点を指摘する[32]。写真の映像について記述する場合、言語体系（langue）というコードに由来する「中継」ないし「第二次のメッセージ（message second）」としての「コノテーション」を「デノテーションのメッセージ」に「付け加える（adjoindre）」ことになり、それは写真の映像にとって関与的な事柄ではないとするこの指摘からわかるのは、「コノテーション」が付加的意味として想定されていることである。

そのうえで問題となるのは、写真のこのような現実表象の在り方から「コノテーションのメッセージ（message connoté）」（コノテーションのレベルで示されたメッセージ）要するに「コノテーション」が生じるという、写真の逆説的なステータスである。バルトは、映像の生産と受容の観点から写真における「コノテーション」が導き出せるという見通しを立て、その要点となる「（コノテーションの）コード（code (de connotation)）」を設定する必要があると述べたうえで、次のような「写真のパラドックス（paradoxe photographique）」に注目する。

---

[31] Cf. Barthes, « Le message photographique », p. 1121. 邦訳 3-4 頁。

[32] 「要するに、あらゆる情報構造のなかで写真は、その実体を完全にくみ尽くしてしまうような「デノテーションの」メッセージによってもっぱら構成されかつ占められている唯一の構造であるだろう。写真の前では、「デノテーション」の感覚、あるいはもしそう言いたければ類似の充実の感覚が非常に強いので、写真に対する記述は文字通り不可能である。というのも記述するとは、デノテーションのメッセージに、言語体系というコードからくみ取られた中継ないし第二次のメッセージを付け加えることにあるからである。そしてそれは必然的に、正確であろうとしてどれほど気を配ろうとも、写真による類似物に比べて［／に対して］コノテーションを構成する。［…］」« En somme, de toutes les structures d'information, la photographie serait la seule à être exclusivement constituée et occupée par un message « dénoté », qui épuiserait complètement son être ; devant une photographie, le sentiment de « dénotation », ou si l'on préfère, de plenitude analogique, est si fort, que la description d'une phorographie est à la lettre impossible ; car *décrire* consiste précisément à adjoindre au message dénoté, un relais ou un message second, puisé dans un code qui est la langue, et qui constitue fatalement, quelque soin qu'on prenne pour être exact, une connotation par rapport à l'analogue photographique [...] », Barthes, « Le message photographique », pp. 1122-1123. 邦訳 5 頁。

写真のパラドックス、それゆえそれは二つのメッセージの共存ということになるだろう。一つはコードのないメッセージであり（これは写真による類似物であろう）、もう一つはコードのあるメッセージである（これは写真の「技法」、あるいは処理、あるいは「エクリチュール」、あるいはレトリックであろう）。構造的には、パラドックスは、デノテーションのメッセージとコノテーションのメッセージの結託にあるのではもちろんない。そのような結託は、おそらくあらゆるマスコミュニケーションが持つ必然的なステータスである。パラドックスは、コノテーションの（あるいはコード化された）メッセージがここではコードのないメッセージから発して展開することにある。[33]

「写真のパラドックス」とは、写真においてコノテーションを伴わないはずのデノテーション（コードのないメッセージ）が、写真制作術の観点（「技法（art）」や「処理（traitement）」、等々）から付加されるコノテーション（コードのあるメッセージ）と「共存（coexistence）」ないし「結託（collusion）」の関係にあることである。

同時に、意味作用の様態（デノテーションの様態）という点に着目すれば、この引用文は次のように解釈することができる。写真において、デノテーションはコノテーションを伴わない、すなわちデノテーションはただそれのみで存在しているが、こうしたデノテーションの様態そのもの「から発して（à partir de）」コノテーションが生じる、このことこそが写真の逆説的なステータスにほかならないのである。この見地からすれば、ただデノテーションだけが存在するというかたちでの第一次の意味作用の様態から生じる第二次の意味作用をバルトが「コノテーション」として捉えていることがわかる。それゆえバルトが述べる「写真のパラドックス」とは、写真にはデノテーション（第一次の意味作用）しか存在しないにもかかわらずまさにその点こそがコノテーション（第二次の意味作用）に組み込まれることを指しており、この場合、「デノテーションのメッセージ」と「コノテーションのメッセージ」の「共存」ないし「結託」の関係それ自体ではなく、その関係性を支えるデノテーションからコノテーションへと至る意味作用のプロセスが前景化されることになる。

このように、ここでバルトが述べる「コノテーション」とは、付加的な意味であるのみ

[33] « Le paradoxe photographique, ce serait alors la coexistence de deux messages, l'un sans code (ce serait l'analogue photographique), et l'autre à code (ce serait l'« art », ou le traitement, ou l'« écriture », ou la rhétorique de la photographie) ; structurellement, le paradoxe n'est évidemment pas la collusion d'un message dénoté et d'un message connoté : c'est là le statut probablement fatal de toutes les communications de masse ; c'est que le message connoté (ou codé) se développe ici à partir d'un message *sans code*. », Barthes, « Le message photographique », pp. 1123-1124. 邦訳 6 頁。

ならず、デノテーションの様態そのものから生じる第二次の意味作用を内包しているのである。とはいえ写真における「コノテーション」は、付加的な意味として、映像の生産および受容という二つの観点から論じられており、前者に関しては「コノテーションの手法（procédés de connotation）」という見出しのもとで、写真製作の際の技術的側面（トリック写真、被写体のポーズ、被写体の配置、等々）が説明され[34]、後者に関しては「知覚のコノテーション（connotation perceptive）」、「認知のコノテーション（connotation cognitive）」、「イデオロギーのコノテーション（connotation idéologique）」という三つのタイプの受容形態が挙げられている[35]。写真の映像をめぐるこれらの生産と受容、前者で問題になるのは意味作用（のプロセス）ではなく写真製作術であり（それが「コノテーション」の問題として論じられているのは、たとえば被写体のポーズが敬虔さを喚起するといったように、何らかの意味の付加に関連するからである）、また後者に対するバルトの論述はただデノテーションのみが存在することによって生じる意味作用の働きに焦点が当てられておらず、実際のところこれらの観点からは、写真の逆説的なステータスが前景化されていない。しかし両者ともに、社会ないし文化というある一定の制度のもとで行なわれる活動であり、何らかの意味の付加およびその読み取り（解読行為）と結びついている点、つまり文化的蓄積としての「コード」と付加的意味としての「コノテーション」が不可分の関係にあることは看過せずにおきたい。

写真の映像の受容形態から提喩的意味作用の働きを見て取れるかどうか確認しておくと、「知覚のコノテーション」については、それが「カテゴリー化（catégorisation）」の作用に依拠している点では提喩的と呼べるものの、この作用がなければ知覚は有り得ないとする仮定から言及されており、その仮定によればデノテーションの存在が考慮の外に置かれる[36]（ゆえに「知覚のコノテーション」を「コノテーション」と見なすことには疑問の余地がある）。つまり、デノテーションからコノテーションへと至る意味作用のプロセスが検討に

---

[34] Cf. Barthes, « Le message photographique », pp. 1124-1128. 邦訳 8-14 頁。

[35] Cf. Barthes, « Le message photographique », pp. 1131-1132. 邦訳 18-20 頁。

[36] 「もし［…］即座のカテゴリー化がないような知覚は存在しないとすれば、写真はそれが知覚されるまさにその瞬間に言語化される。あるいはまた、写真は言語化されてしか知覚されない。［…］この見地からは、言語体系として存在している［人間の心の］内部のメタ言語によって即座に捉えられる映像［／視覚イメージ］は、結局のところ、実際にはいかなるデノテーションの状態も持たないことになるだろう。そうした映像は、社会的には、少なくとも最初のコノテーション、すなわち言語体系の諸々のカテゴリーからなるコノテーションそのものに浸されてしか存在しないことになるだろう。」« Si, [...] il n’y a pas de perception sans catégorisation immédiate, la photographie est verbalisée dans le moment même où elle est perçue ; ou mieux encore : elle n’est perçue que verbalisée [...]. Dans cette perspective, l’image, saisie immédiatement par un méta-langage intérieur, qui est la langue, ne connaîtrait en somme réellement aucun état dénoté ; elle n’existerait socialement qu’immergée au moins dans une première connotation, celle-là même des catégories de la langue [...] », Barthes, « Le message photographique », p. 1131. 邦訳 18-19 頁。

付されなくなるため、この「カテゴリー化」の作用は、提喩的意味作用の働きを可視化するよりもむしろ、目の前の事象に対して自動的に適用されるような提喩性のある種の不毛さを示している。

提喩性と知覚のこうしたつながりに関してあくまで仮定のレベルで言及されていることからうかがえるのは、「カテゴリー化」ないし言語化の作用の影響力が暗黙のうちに留保されていることである。バルトは、提喩が引き起こしかねない不毛さ、すなわち意味と呼ばれる事象（いわば意味事象）が「カテゴリー化」の作用に関係しているという一般論に対する確認に陥っていないように思われるばかりでなく、記号論に傾倒していた比較的早い時期においてすでに彼は、いわゆる言語中心主義的な立場[37]に身を置いていないのではないか。問題となっていたのは、意味作用のプロセスそのもの、あるいはそれを具体化する（ないし可視化する）ことに資する限りでの言語活動の働きなのではないだろうか。

提喩的意味作用に直結するのは、次の二つの受容形態である。「認知のコノテーション」は、災害に遭ったアガディール（モロッコ南西部の都市）の写真を見て、アラブ文化圏を示す包括的なカテゴリーである「アラブ性（arabité）」を感知するといった類のものである。「イデオロギーのコノテーション」として読み取られるのは、たとえばイラン国王の息子が生まれたことを伝える写真では、「王権（royauté）」や「富（richesse）」や「衛生（hygiène）」とともに、王であっても人間として避けられない条件（泣いている赤ん坊）といった要素であり、それらの要素は「王侯の神話（mythe princier）」という言語活動のジャンルのもとでグルーピングされる。ゆえにここでも、第一次の意味作用（デノテーションとしての第一次での意味実践）の様態をカテゴライズする第二次の意味作用（コノテーション）を提喩的意味作用と呼ぶことができる。

「コノテーション」と呼ばれている写真映像の受容形態からこのように提喩的意味作用を感知できるが、私たちが明らかにしたいのはそれだけではなく、提喩的意味作用が、デノテーションのみが存在することによって生じるというかたちでの「コノテーション」として、すなわち写真の逆説的なステータスをめぐって働いている点である。

今しがた確認したように、「コードのないメッセージ」であるはずの写真の映像から、一様でない仕方で「コノテーション」は抽出され得る。そこからバルトは、「純然たるデノテーション（pure dénotation）」は存在するのかと問い、彼はそれを「トラウマ的な（traumatiques）」映像に見る。

---

[37] 当該の「カテゴリー化」に対するバルトの見解に花輪は「言語主義」を見て取り、カテゴリー化をただちに言語化と見なすことを疑問視している。Cf. 花輪『ロラン・バルト――その言語圏とイメージ圏』、281-282 頁。

［…］いずれにせよわかるのは、コノテーションが非常に遠くまで及ぶことである。そのことは、純然たるデノテーション、言語活動の此方が不可能であるということなのだろうか。もし純然たるデノテーションが存在するのならば、それは、日常言語が無意味、中性的、客観的と呼ぶもののレベルにおいてではおそらくなく、反対に本来トラウマ的な映像においてである。トラウマ、それはまさに言語活動を中断し意味作用を妨げるものである。[38]

「トラウマ的な」映像とは心理的なショックをもたらす写真のことであるが、この映像においては意味作用が機能せず言語活動が成り立たなくなる。意味作用の働きが認められない写真の映像に「デノテーション」の存在を見ることは一見矛盾しているが、バルトが言いたいのは、「トラウマ的な」映像にはデノテーションそのものが存在しない、つまりそうした写真はいかなる意味も伴わない純粋な現実転写（先の花輪の言葉を借りれば「現実指示」すなわち指示の作用とでも呼べるような現実転写）である、ということではないと思われる。先に述べたとおり、この写真論の前提としてバルトは、写真に撮影された「文字通りの現実（réel littéral）」を「デノテーションのメッセージ（message dénoté）」と呼びながら意味作用の問題を提示していたからである。実際、「トラウマ的な」映像について記述された箇所の少し前の箇所においても、ほかならぬ「現実の純粋かつ飾り気がないデノテーション（dénotation pure et simple de la réalité）」という用語とともに、この前提は保持されている[39]。

たしかに、前提は場合によっては覆されることもあるだろう。ここでは、「純然たるデノテーション」は「言語活動の此方（en deçà du langage）」と呼び換えられており、写真の映像には意味作用およびその基盤となる言語活動に還元できない要素が「トラウマ（trauma）」

---

[38] « [...] on voit en tout cas que la connotation va très loin. Est-ce à dire qu'une pure dénotation, un *en deçà du langage* soit impossible ? Si elle existe, ce n'est peut-être pas au niveau de ce que langage courant appelle l'insignifiant, le neutre, l'objectif, mais bien au contraire au niveau des images proprement traumatiques : le trauma, c'est précisément ce qui suspend le langage et bloque la signification. », Barthes, « Le message photographique », p. 1132. 邦訳 20-21 頁。

[39] 「結局のところ、写真の「言語活動」は、類似的単位と信号的単位が混じったいくつかの表意文字的な言語を思い起こさせずにはいないだろう。ただ違うのは、写真の「コピー」が現実の純粋かつ飾り気がないデノテーションであると見なされるのに対し、表意文字はまるで記号のように感じられる点である。」« Tout compte fait, le « langage » phorographique ne serait pas sans rappeler certaines langues idéographiques, dans lesquelles unités analogiques et unités signalétiques sont mêlées, à cette différence près que l'idéogramme est vécu comme un signe, tandis que la « copie » photographique passe pour la dénotation pure et simple de la réalité. », Barthes, « Le message photographique », p. 1130. 邦訳 18 頁。

として残るという点が問題になっているように見える。そうであれば「純然たるデノテーション」とは、（逆説的な呼び方ではあるが）写真には言語活動を背景にした意味作用としてのデノテーションが存在しないこと、要するに純粋な現実転写としての写真の映像を指すことになる。

しかし、「純然たるデノテーション」とは、現実の場面を表象した写真の映像の「デノテーションのメッセージ」、ただそれだけが存在している（と仮定された）状態であると解釈できる。言い換えればそれは、「デノテーションのメッセージ」がいかなるコノテーションをも伴わない「コードのないメッセージ」と呼ばれた性質を最も典型的に（かつ衝撃的なかたちで）体現している状態である。つまり、「トラウマ的な」映像に宿る「純然たるデノテーション」をめぐって妨げられているのは、意味作用の働きそれ自体ではなく、文化的蓄積としての「コード」の存在に裏づけられた付加的意味としてのコノテーションなのである。

そして、この「純然たるデノテーション」の存在からは、先に言及した「写真のパラドックス」（ただデノテーションのみが存在することによってコノテーションが生じること）が導かれることになる。「トラウマ的な写真（photographie traumatique）」に対するバルトの記述は、写真の逆説的なステータスを見事に示している。

> たしかに通常の意味でのトラウマ的な諸々の状況は、写真の意味作用のプロセスにおいて捉えられ得る。しかしそれは、それらの状況を遠ざけ、昇華させ、和らげるレトリックのコードを通じてまさにそれらの状況が示されるということである。本来の意味でのトラウマ的な写真は珍しい。というのも写真においてトラウマは、場面が実際に起こったという確実さに全面的に依存しているからである。写真家がそこにいたに違いない（これがデノテーションの神話的定義である）。しかし、そうであるからには（これが、実を言うと、すでに［あるひとつの］コノテーションである）、トラウマ的な写真（「現場で」捉えられた火事、海難、惨事、非業の死）は、言うべきことが何もない写真である。つまりショッキングな写真は、構造的に見て無意味である。いかなる価値、いかなる知識、究極的には言語によるいかなるカテゴリー化も、意味作用の制度的な過程に対して影響力を持つことができない。ある種の法則のようなものを想像することができるだろう。すなわち、トラウマがより直接的であればコノテーションはその分だけ難しくなる、あるいは、写真の「神話学的な」効果は、そのトラウマ

的な効果に反比例するということである。[40]

「トラウマ」が伴われた諸々の状況は、「トラウマ」の強烈さに手を加える「レトリックのコード（code rhétorique）」に媒介されるのならば、写真の意味作用のプロセスに組み込まれる。しかし「トラウマ」の効力が、諸々の状況が起こったという有無を言わさない確実性から「コード」の影響を退け、より「直接的（direct）」になればなるほど、第二次の意味作用（コノテーション）は発生し難くなり、極端に言えば「トラウマ的な写真」（ショッキングな写真）は「無意味（insignifiante）」になる。この場合ショッキングな写真の映像は、いかなる「カテゴリー化（catégorisation）」も受け付けなくなる[41]。

「コード」の存在から、さらにはそれに裏づけられた意味作用のプロセスが「制度的な（institutionnel）」と形容されていることから（引用文の直後でコノテーションが妨げられる理由として、それが制度的な活動（activité institutionnelle）であるためだろうと推測されている）、「トラウマ的な写真」において妨げられているのは、文化的蓄積を背景にした付加的意味としてのコノテーションであることがうかがえる（何らかの解読行為と結びついているため、引用文の末尾で「コノテーション」が「神話学的な（mythologique）」事象と呼び換えられているのだろう）。それゆえここでは、「トラウマ」として最も明瞭に感知される「純然たるデノテーション」の存在、言い換えれば付加的意味としてのコノテーションを伴わずただデノテーションのみが存在することが、事実に備わる明証性にもっぱら依存したかたちで「無意味」であるとされているのではないだろうか。「トラウマ的な写真」の無意味さとは、「トラウマ的な」状況が何ら手を加えられることなくそっくりそのままの状態で表象されているということであるが、その内実は、「トラウマ的な写真」のデノテーションがいかなる付加的意味をも伴わずただそれのみで（「純然たるデノテーション」として）

---

[40] « Certes, des situations normalement traumatiques peuvent être saisies dans un processus de signification photographique ; mais c'est qu'alors précisément elles sont signalées à travers un code rhétorique qui les distance, les sublime, les apaise. Les photographies proprement traumatiques sont rares, car, en photographie, le trauma est entièrement tributaire de la certitude que la scène a réellement eu lieu : *il fallait que le photographe fût là* (c'est la définition mythique de la dénotation) ; mais ceci posé (qui, à vrai dire, est déjà une connotation), la photographie traumatique (incendies, naufrages, catastrophes, morts violentes, saisis « sur le vif ») est celle dont il n'y a rien à dire : la photo-choc est par structure insignifiante : aucune valeur, aucun savoir, à la limite aucune catégorisation verbale ne peuvent avoir prise sur le procès institutionnel de la signification. On pourrait imaginer une sorte de loi : plus le trauma est direct, plus la connotation est difficile ; ou encore : l'effet « mythologique » d'une photographie est inversement proportionnel à son effet traumatique », Barthes, « Le message photographique », pp. 1132-1133. 邦訳 21 頁。

[41] ただしここで述べられている「カテゴリー化」とは、先に言及した「知覚のコノテーション」の枠組みのもとでの言語化の作用を指していると思われるため、デノテーションの様態を考慮に入れていないこの「カテゴリー化」が、ただデノテーションのみが存在することから発する意味作用のプロセスに影響力を持ち得ないのは当然であると言える。

存在していることにあると考えられる。

この引用文が写真の逆説的なステータスを見事に示していると言い得るのは、次の理由による。「トラウマ的な写真」のデノテーション（ショッキングな映像）がその強烈さを抑えるコードを通じて何らかの解読行為へと方向づけられることによってではなく、いかなる読み取りからも逃れた「純然たるデノテーション」が存在することで、まさにそのことによって、括弧書きでバルトが記述しているように、新たにコノテーションがもたらされるからである。ショッキングな写真をめぐって第二次の意味作用の働きが退けられているように見えるまさにその瞬間に、提喩的意味作用の働きが生じる。ショッキングな写真では、「トラウマ」としての「純然たるデノテーション」の存在が「無意味」であるとされている、すなわちこれは、そうした第一次での意味実践の様態そのものが、第二次の意味作用（コノテーション）のレベルにおいて、写真映像の無意味さとして抽出されていることだと解釈できる。この引用文が記述されている箇所の見出しは、ほかならぬ「写真の無意味性（insignifiance photographique）」であり、ただデノテーションだけが存在する点が、提喩的意味作用を通じて「無意味性」としてカテゴライズされているのである。この見地からすれば、ここでバルトは、ショッキングな写真の映像が現実の場面をそのまま反映する純粋な現実転写であると定義しているのではなく、そうした写真の現実表象の在り方をあくまでも意味作用の問題として提示しているのだと言える。

このように、デノテーションのみが存在する（ことによってコノテーションが存在する）という写真のパラドックスは、記録写真、そのなかでも心理的なショックをもたらす写真によって導かれるが、バルトは、「純然たるデノテーション」の存在およびその点が依拠する写真の現実表象の在り方（現実の場面の視覚的に忠実な再現）を、写真全般の特徴とも受け取れる「写真の無意味性」という用語を用いて問題にしている。この問題設定は、第一次での意味実践の様態を第二次の意味作用のレベルでカテゴライズすることによって成立しており、提喩的意味作用を活かしたバルトの写真分析は、写真の映像が無意味さをことさら示すかたちで意味作用を発揮するそのプロセスを明らかにしているのである。そしてこの問題設定は、記録写真だけでなく創作写真に対する分析においても見られることになるだろう。

3-2. 広告の写真をめぐる提喩的意味作用と「混合」の実践

論文「写真のメッセージ」から数年後、記号論の用語が整備された時期に執筆されたのが、「映像のレトリック」（1964 年）と題された広告の写真に対する分析である（この論文は初出の段階では、「記号学の原理」とともに『コミュニカシオン』誌に収められている）。

この写真分析からは、第一次の意味作用（第一次での意味実践）の様態をカテゴライズする第二次の意味作用を提喩的意味作用として引き出せるとともに、提喩的意味作用を活かして相反する抽象的概念を結び合わせるバルトの「混合」の実践を明るみに出すことができる。

バルトが分析対象にしたパンザーニ社の広告は、パスタ、（ソースの入った）缶詰め、（チーズの入った）小袋、トマト、たまねぎ、赤ピーマン、マッシュルームといった諸々の食品が、半ば開いた買い物用の網袋からあふれるように配置された、赤い下地に黄色と緑で彩られた写真である。

バルトは、「三つのメッセージ（trois messages）」という見出しのもとで、その写真から読み取れる「メッセージ」を次のように提示している[42]。一つ目のタイプの「メッセージ」は言語的なものであり、その例として、写真の隅に付された説明文（キャプション）および食品のラベル（「イタリア性（italianité）」という付加的意味を伴ったパンザーニ社の名前が入った製品ラベル）が挙げられている。二つ目の「メッセージ」は、図像そのものから読み取られる様々な付加的意味、たとえば、製品の新鮮さ、家庭での食事の準備、料理の全般的なサービス、美術的な参照事項として静物画（nature morte）、そして図像の色彩の組み合わせから喚起される「イタリア性（italianité）」であり、さらにまた、このあと言及する別の箇所では「豊かさ（abondance）」の読み取りが問題になっている。三つ目は、論文「写真のメッセージ」で扱われた写真のパラドックスという論点を引き継いだかたちで提示されている「コードのないメッセージ（message sans code）」である。この三つ目の「メッセージ」は、二つ目の「メッセージ」（「象徴的なメッセージ（message symbolique）」、「コード化された図像のメッセージ（message iconique codé）」および「コノテーションのレベルでの映像（image connotée）」）と対照させられて、「字義通りのメッセージ（message littéral）」、「コード化されていない図像のメッセージ（message iconique non codé）」および「デノテーションのレベルでの映像（image dénotée）」と呼ばれている（その例をあえて表記すれば、デノテーションとしての、パスタ（の存在）やトマト（の存在）、あるいはまた、赤をはじめとした色彩（の存在）、等々ということになるだろう）。ここでもバルトは、論文「写真のメッセージ」における場合と同様に、現実の場面を視覚上忠実に再現する写真（文字通りには言語活動と呼べない分析対象）に対して、意味作用の働きという点からアプローチする

[42] Cf. Roland Barthes, « Rhétorique de l'image » (1964), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 574-577（「映像の修辞学」、『第三の意味――映像と演劇と音楽と』、沢崎浩平訳、みすず書房、新装版 1998 年（初版 1984 年）、25-30 頁）.

のである[43]。

このなかで取り上げたいのは、図像そのものの様態に焦点が当たるかたちで提喩的意味作用の働きに直結する「デノテーションのレベルでの映像」および「コノテーションのレベルでの映像」である（言語的な「メッセージ」に関しては、それが、図像の読み取りに一定の方向性を与えることで図像の意味を定着させることに寄与するという、バルトが投錨（ancrage）と呼ぶ役割を果たす点を押さえておけばさしあたり十分である）。

「デノテーションのレベルでの映像」を取り上げる前に、「コノテーションのレベルでの映像」に対するバルトの分析から提喩的意味作用の働きを押さえておきたい。

> コノテーションのシニフィエをどのように名づけるのか？それらのうちのひとつとして、イタリア性という用語をあえて用いたが、ほかの用語は日常言語から来た語彙によってでしか示すことができない（食事の準備、静物画、豊かさ）。つまり、分析の際にそうした用語を引き受けるべきメタ言語は特別なものではない。そこに困惑がある。というのも、そうしたシニフィエは独特の意味論的性質を持っているからである。コノテーションの意味素としての「豊かさ」は、デノテーションの意味での「豊かさ」と正確には対応しない。コノテーションのシニフィアン（ここでは製品の豊富さと凝縮）は、あらゆる可能な豊かさの、あるいは豊富さの最も純粋な観念の本質的なマークのようなものである。デノテーションのレベルでの語は、決して本質を指し示さない。というのは、デノテーションのレベルでの語は常に、偶発的な［／些細な］パロール、すなわち言語活動のある種の実践的な他動性へと方向づけられた切れ目のない連辞（言葉による言説の連辞）のなかに捉えられているからである。意味素「豊かさ」は、それとは反対に、あらゆる連辞から切り離された、あらゆるコンテクストを欠いた、純粋な状態にある概念である。［…］イタリア性、それはイタリアではなく、スパゲッティから絵画に至るまでイタリア的で有り得るすべてのものが凝縮された本質である。[44]

---

[43] 「［…］字義通りの映像はデノテーションのレベルで示されており、また象徴的な映像はコノテーションのレベルで示されている。」« [...] l'image littérale est *dénotée* et l'image symbolique *connotée*. », Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 577. 邦訳 30 頁。

[44] « [...] comment nommer les signifiés de connotation ? Pour l'un d'eux, on a risqué le terme d'*italianité*, mais les autres ne peuvent être désignés que par des vocables venus du langage courant (*préparation culinaire*, *nature morte*, *abondance*) : le méta-langage qui doit les prendre en charge au moment de l'analyse n'est pas spécial. C'est là embarras, car ces signifiés ont une nature sémantique particulière ; comme *sème* de connotation, « l'abondance » ne recouvre pas exactement « l'abondance », au sens dénoté ; le signifiant de connotation (ici la profusion et la condensation des produits) est comme le chiffre essentiel de toutes les abondances possibles, ou mieux encore de l'idée la plus pure de l'abondance ; le

この引用文では、バルトの神話分析でも問題になっていた「コノテーションのシニフィエ（signifiés de connotation）」（コノテーションのレベルでのシニフィエ）を名づける際の用語法上の難点が見受けられる。神話分析では造語の必要性が述べられていたが、ここでは、「イタリア性（italianité）」という造語（的な用語）が持ち出されていることに加えて、日常言語を含めた意味分析のための記述言語（メタ言語）の特殊性に対するアプローチがなされており、その記述言語によって名指される「コノテーションのシニフィエ」に備わる「独特の意味論的性質（nature sémantique particulière）」について説明されている。

バルトによる説明は、「最も純粋な観念（idée la plus pure）」や「純粋な状態にある概念（concept à l'état pur）」、あるいはまた「本質（essence）」といった形容に見られるように不明瞭であり、「コノテーションのシニフィエ」の性質がはっきりしない（ただし「本質」と規定されているためそれが「イデオロギー（idéologie）」[45]の領域（domaine）に属することはわかる）。しかし、バルトの神話分析で「シナ性」のカテゴリーのもとに中国的と呼べる諸々の事象が集められていたことを思い起こせば、「本質」としての「イタリア性」、それは、イタリア的と呼べるあらゆる事象の「凝縮された本質（essence condensée）」にほかならず、その内実は、「イタリア性」という包括的なカテゴリーのもとにイタリア的な諸々の事象が集められていることだと解釈できる。「純粋な状態にある概念」としての「豊かさ（abondance）」は、「あらゆる可能な豊かさ（toutes les abondances possibles）」をグルーピングしていると見なせる（原理的には、「食事の準備（préparation culinaire）」や「静物画（nature morte）」といった「コノテーションのシニフィエ」についても同様だろう）。「コノテーションのシニフィエ」に備わる「独特の意味論的性質」とは、「類」と「種」の関係性における「類的な」性質、つまり包括性を指しているのである。それゆえ、ここで述べられている「コノテーションの意味素（sème de connotation）」とは、付加的意味であるのみならず包括性を有した意味論的要素なのであり、何らかの意味グループ（ひとつの写真映像に複数存在する意味グループ）の形成に寄与するジャンルの機能を果たすことがわかる。

「コノテーションのシニフィエ」が包括性を有する以上、包括的なカテゴリーが導き出される「コノテーション」の在り方を提喩的意味作用の現われと捉えることができる。「コノテーションのシニフィエ」が「コノテーション」である限り、厳密に言えばその包括性

---

mot dénoté, lui, ne renvoie jamais à une essence, car il est toujours pris dans une parole contingente, un syntagme continu (celui du discours verbal), orienté vers une certaine transitivité pratique du langage ; le sème « abondance », au contraire, est un concept à l'état pur, coupé de tout syntagme, privé de tout contexte [...] L'*italianité*, ce n'est pas l'Italie, c'est l'essence condensée de tout ce qui peut être italien, des spaghetti à la peinture. », Barthes, « Rhétorique de l'image », pp. 585-586. 邦訳 42-43 頁。

[45] Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 586. 邦訳 43 頁。

は「デノテーション」に対して効力を発揮するのであり、ここで提喩的意味作用は、「今日における神話」と論文「写真のメッセージ」における場合と同様に、第一次の意味作用ないし第一次での意味実践（「デノテーションのレベルでの映像」）の様態に対するカテゴリー化を支える第二次の意味作用として働いている。実際、「イタリア性」というシニフィエは、写真の映像（「デノテーションのレベルでの映像」）における「トマトとピーマンとポスターの三色の色彩（黄、緑、赤）の組み合わせ（réunion de la tomate, du poivron et de la teinte tricolore (jaune, vert, rouge) de l'affiche）」[46]、すなわちそれらの集まりから成るため、そうしたデノテーションの様態が「イタリア性」としてカテゴライズされているのである。また引用文によれば、「豊かさ」という「コノテーションのシニフィエ」に対応する「コノテーションのシニフィアン（signifiant de connotation）」は諸々の製品の「豊富さ（profusion）」と「凝縮（condensation）」にほかならないが、提喩的意味作用に注目すればこれは、デノテーションのレベル（写真の映像）において豊富な（とさしあたり言える）くらい数多くの食品が集まっているその様態が、コノテーションのレベルで「豊かさ」としてカテゴライズされていることであると考えられる。

同時にこの見解（によって示されるバルトの分析手法）が、ある一定の無味乾燥さを伴っていることを付言しなければならない。あらゆるイタリア的要素をグルーピングする「イタリア性」およびあらゆる豊かさをグルーピングする「豊かさ」といった「コノテーションのシニフィエ」が、トマトとピーマンと三つの色の集まりや数多くの食品の集まりという様相をカテゴライズすることによって導き出されているからである。提喩的意味作用を通じたカテゴリーの抽出が、元々写真の映像で示されている諸々の事象の集まりを反映している、あるいは写真の映像においてすでに自明であることを繰り返している、要するに同語反復的な操作になっているという印象が拭えない。

提喩的意味作用（包括的なカテゴリーが導き出される第二次の意味作用）のこの同語反復的な在り方は、論文「写真のメッセージ」で「写真の無意味性」と呼ばれていた事柄、すなわちコノテーション（第二次の意味作用）を退けるようなデノテーションの性質に由来していると思われる。そのため、ここで取り上げている論文「映像のレトリック」における「デノテーションのレベルでの映像」（「字義通りのメッセージ」）の性質を確認しておきたい。そうすることによって、「デノテーションのレベルでの映像」が有する現実表象のメカニズムを明らかにしようとするバルトの姿勢が、論文「写真のメッセージ」のみならずバルトの神話分析からも引き継がれていることがわかる。そのうえで、「デノテーション

[46] Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 575. 邦訳 26 頁。

のレベルでの映像」をめぐって働く提喩的意味作用について検討したい。

論文「写真のメッセージ」では記録写真が分析されていたが、論文「映像のレトリック」では広告という創作写真がバルトの分析対象になっている。広告の写真では実際には、「純粋な状態にある字義通りの映像（image littérale à l'état pur）」は存在しない、言い換えれば、ただデノテーションのみが存在すること（論文「写真のメッセージ」での用語法では「純然たるデノテーション（pure dénotation）」の存在）はない、とされている[47]（「字義通りの映像」とは、「字義通りのメッセージ」すなわち「デノテーションのレベルでの映像」の呼び換えであると理解できる）。

そのことを前提として、つまり仮設的（仮構的）な分析手順のもとで、次のように述べられている[48]。「デノテーションのレベルでの映像」は、「表象された場面の同定（identification de la scène représentée）」に資する「理解可能なものの第一段階（premier degré de l'intelligible）」として、コノテーション（字義通りではない意味）を伴わない「欠性的なメッセージ（message privatif）」でありかつデノテーション（字義通りの意味）で満たされた「充足的なメッセージ（message suffisant）」であると規定されており、バルトはそれを「あらゆる意味で満たされた意味の不在（absence de sens pleine de tous les sens）」と形容している（これは、厳密には「あらゆるデノテーションで満たされたコノテーションの不在」と呼ぶべきだろうし、またその方が、論文「写真のメッセージ」での「写真の無意味性」（ただデノテーションのみが存在すること）との対応関係がはっきりする）。デノテーションがコノテーションを伴わずそれ自体で充足すること、これはある潜在性を元にしており、その潜在性とはデノテーションが「理解可能なものの第一段階」としての「貧しさ（pauvreté）」を持つがゆえに「潜在したままである（rester virtuel）」という状態を指している（実際にはコノテーションが存在しないことはないためコノテーションとの均衡からそのように想定されている）。

ここでは、心理的なショックからコノテーションが退けられるわけではないが、論文「写真のメッセージ」で論じられていた「写真の無意味性」、すなわちただデノテーションのみが存在する点が問題になっていることがわかる。それ自体で充足するというデノテーションの性質（「デノテーションのユートピア的特徴（caractère utopique de la dénotation）」）が被写体との完璧な類似性（「完全に類似的な性質（nature absolument analogique）」）を有することでその影響力が強まり「コードのないメッセージ」が形成されるという、論文「写真の

---

[47] 「[…] 純粋な状態にある字義通りの映像には（少なくとも広告においては）決して出会わない。[…]」« [...] on ne rencontre jamais (du moins en publicité) une image littérale à l'état pur [...] », Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 581. 邦訳 35 頁。

[48] Cf. Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 581. 邦訳 35-36 頁。

メッセージ」での議論を踏まえた見解が示されているからである[49]。

同時にバルトは、「デノテーションのレベルでの映像」におけるこうした「コードの不在（absence de code）」を、一種の自然らしさが産み出される「神話（mythe）」の効果に関連づける[50]。実際にはデノテーションのみが存在するわけではない（デノテーションとコノテーションが共存している）広告の写真では、「デノテーションのレベルでの映像」（「字義通りのメッセージ」）が、その「ユートピア的特徴」およびそれを根拠づける被写体との完璧な類似性から、写真の「意味論的技巧（artifice sémantique）」を「無垢なものにする（innocenter）」、別の言い方をすれば「コノテーションのレベルでの映像」（「象徴的なメッセージ」）を「自然化する（naturaliser）」、そのようにして、「公然としたかたちで意味論的である体系の単なる妥当性（simple validité des systèmes ouvertement sémantiques）」が「疑似真実（pseudo-vérité）」に取って代わられる[51]。「デノテーションのレベルでの映像」（「コードのないメッセージ」）は、「記号の体系（systèmes de signes）」としての性質を失って被写体そのものであるかのような様相を呈しており[52]、そのことによって「コノテーションのレベルでの映像」を「自然化する」。それゆえ、仮に写真の映像が現実転写としてただひたすら現実の場面を反映する

---

[49] Cf. Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 581. 邦訳 36 頁。

[50] 「[…] コードの不在は明らかに写真の「自然さ」の神話を強めている。[…]」« [...] l'absence de code renforce évidemment le mythe du « naturel » photographique [...] », Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 582. 邦訳 37 頁。

[51] 「[…] デノテーションのレベルでの映像は、象徴的なメッセージを自然化し、コノテーションの（とりわけ広告においては）非常に濃密な意味論的技巧を無垢なものにする。パンザーニのポスターは「象徴」であふれているが、字義通りのメッセージが充足的である限りにおいて、写真には諸事物の自然なかたちでのいわばそこに存在するが残っている。自然［らしさ］が表象された場面を自発的に産み出しているように見える。公然としたかたちで意味論的である体系の単なる妥当性に、疑似真実がひそかに取って代わるのである。[…]」« [...] l'image dénotée naturalise le message symbolique, elle innocente l'artifice sémantique, très dense (surtout en publicité), de la connotation ; bien que l'affiche *Panzani* soit pleine de « symboles », il reste dans la photographie une sorte d'*être-là* naturel des objets, dans la mesure où le message littéral est suffisant : la nature semble produire spontanément la scène représentée ; à la simple validité des systèmes ouvertement sémantiques, se substitue subrepticement une pseudo-vérité [...] », Barthes, « Rhétorique de l'image », pp. 583-584. 邦訳 39-40 頁。

[52] 「この三つ目のメッセージ［字義通りのメッセージ］のシニフィエは、場面の現実の対象によって形成され、シニフィアンは写真に撮影された同一の対象によって形成される。[…] この三つ目のメッセージを特徴づけるもの、それは実際、シニフィエとシニフィアンの関係がほとんど同語反復的だということである。[…] ここでは、（正真正銘の記号の体系に固有な）等価性の消失があり、同一性同然の配置がある。言い換えれば、このメッセージの記号はもはや制度的な蓄えからくみ取られず、それはコード化されていない。[…]」« Les signifiés de ce troisième message sont formés par les objets réels de la scène, les signifiants par ces mêmes objets photographiés [...] Ce qui spécifie ce troisième message, c'est en effet que le rapport du signifié et du signifiant est quasi tautologique [...] il y a ici perte de l'équivalence (propre aux vrais systèmes de signes) et position d'une quasi-identité. Autrement dit, le signe de ce message n'est plus puisé dans une réserve institutionnelle, il n'est pas codé [...] », Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 576. 邦訳 28 頁。

だけであれば（あるいはそのように見なされるのであれば）、写真の映像にはコノテーションを「自然化する」という一種の「神話」の効果が認められる。その効果ないし機能とは、「構築された意味を所与の意味の外観のもとに覆い隠す（masquer le sens construit sous l'apparence du sens donné）」[53]こと、すなわちコノテーションをデノテーションのもとに隠蔽することにある。当該の写真映像から「イタリア性」や「豊かさ」といった「コノテーションのシニフィエ」を抽出する作業が同語反復的な様相を呈するのは、まさにコノテーションがデノテーションによって覆い隠されているからだろう。このように論文「映像のレトリック」では、バルトの神話分析をめぐって先に見た「概念の自然化（naturalisation du concept）」、すなわち「記号体系（système sémiologique）」（に備わる意味作用のプロセス）が「神話」をもっぱら消費する受け手には見えないという状態につながる現実表象のメカニズムが浮き彫りにされているのだと言える。

バルトが提示した「写真の無意味性」を彼の神話分析に照らし合わせることから導かれるのは、その有り様が覆い隠されているように見える「記号の体系」が第二次の意味作用を発揮するという点である。先に確認したようにバルトの神話分析では、偽りの自明さによって覆い隠されているように見える「記号体系」の存在が、第一次での意味実践から第二次の意味作用へと至るプロセスを通じて明るみに出されていた（「記号体系」としての「神話」の意味作用は、「神話」をもっぱら消費する受け手のまなざしからは逃れるが、「神話」の分析者のまなざしから逃れることはない）。写真においてその映像（「デノテーションのレベルでの映像」）は、トリック写真のような場合を除いてたしかに偽りではない。それは「変形［／変換］（transformation）」ではなく[54]、被写体との完璧な類似性を有している。しかしそれゆえに、「記号の体系」の第二次の意味作用（「コノテーションのレベルでの映像」）が覆い隠される。不可視の状態を可視化するという分析者の役割からすれば、次のように言えるだろう。バルトが行なっているのは、「記号の体系」としての写真に備わる意味作用のプロセスを明るみに出すことにほかならないのである。

この場合、問題となっている第二次の意味作用（コノテーション）とは、付加的な意味

---

[53] 「［…］技術は、情報の（またとりわけ映像の）普及を発展させればさせるほど、構築された意味を所与の意味の外観のもとに覆い隠す手段を提供することになる。」« [...] plus la technique développe la diffusion des informations (et notamment des images), plus elle fournit les moyens de masquer le sens construit sous l'apparence du sens donné. », Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 584. 邦訳 40 頁。

[54] 「［…］たしかに写真はある種の場面調整（フレーミング、縮小、平面化）を含むが、この移行は変形［／変換］（コード化がそうで有り得るような）ではない。［…］」« [...] sans doute la photographie implique un certain aménagement de la scène (cadrage, réduction, aplatissement), mais ce passage n'est pas une *transformation* (comme peut l'être un codage) [...] », Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 576. 邦訳 28 頁。

のことだけを指すのではない。それは、デノテーションの様態に対するカテゴリー化を支える第二次の意味作用、すなわち提喩的意味作用のことでもある。当該の写真映像に宿る「イタリア性」や「豊かさ」といった「コノテーションのシニフィエ」は、文化的蓄積に裏づけられた付加的意味であると同時に、第一次での意味実践（「デノテーションのレベルでの映像」）の様態がカテゴライズされた状態でもあるからである。

実際のところ、デノテーションによって覆い隠されているコノテーションを明るみに出すという展望は、すでに論文「写真のメッセージ」に胚胎している。その最も注目すべき実践例として、論文「写真のメッセージ」で「写真の無意味性」と名づけられていた点を挙げることができるだろう。心理的なショックをもたらす写真の映像は、無意味さをもっぱら示して付加的意味としてのコノテーションを退ける。しかし、そのように第一次のレベルで無意味さが示されることから発して、第二次のレベルで提喩的意味作用として把握できる意味作用が発揮されるのである。バルトは、デノテーションの影響力のもとにある付加的意味としてのコノテーションを「眼に見えないと同時に活動的（à la fois invisible et active）」と形容しているが[55]、そうした「コノテーション」とは、提喩的意味作用として把握できる第二次の意味作用を内包しているのだと言える。論文「映像のレトリック」の場合、分析対象は心理的なショックをもたらす写真ではなく広告の写真であるが、その「デノテーションのレベルでの映像」においては、デノテーションがコノテーションを伴わずそれ自体で充足している。先に言及したようにこの点は、仮設的（仮構的）な分析手順のもとで示されていたものの、論文「写真のメッセージ」での「写真の無意味性」（ただデノテーションのみが存在すること）に対応すると見なせる。

論文「写真のメッセージ」を検討した際に私たちは、次の点を提示した。デノテーションのみが存在することからコノテーションが生じるという写真のパラドックスを導く「写真の無意味性」（ただデノテーションのみが存在すること）と名づけられたバルトの問題設定が、デノテーションのみが存在するという第一次での意味実践の様態を、提喩的意味作

---

55 「ところで、写真の純粋に「デノテーションを示す」こうしたステータス、その類似の完璧さと充実さ、要するにその「客観性」、これらすべては神話的になりかねない［…］コノテーションは、メッセージそれ自体のレベルでは必ずしもすぐには捉えられない（それは、もしそう言いたければそう言っても構わないが、眼に見えないと同時に活動的であり、明瞭であると同時に暗黙である）。しかし、メッセージの生産と受容のレベルで生じるいくつかの現象からすでにそれを帰納することができる。［…］」« Or, ce statut purement « dénotant » de la photographie, la perfection et la plénitude de son analogie, bref son « objectivité », tout cela risque d'être mythique [...] La connotation ne se laisse pas forcément saisir tout de suite au niveau du message lui-même (elle est, si l'on veut, à la fois invisible et active, claire et implicite), mais on peut déjà l'induire de certains phénomènes qui se passent au niveau de la production et de la réception du message [...] », Barthes, « Le message photographique », p. 1123. 邦訳 5-6 頁。

用（デノテーションの様態に対するカテゴリー化を支える第二次の意味作用）に基づいてカテゴライズすることによって成立していることである。バルトは、この提喩的意味作用の働きを活かして意味作用のプロセスを前景化していた。

論文「映像のレトリック」で「デノテーションのレベルでの映像」が分析される際にも同様の手法が見られるばかりでなく、この論文では「写真の無意味性」と名づけられていたカテゴリーが、より具体的なかたちで呼び換えられている。

> ［…］写真は、実際のところ、事物がそこに存在するという意識ではなく（それについてはあらゆる模写が喚起し得るだろう）、［事物が］そこに存在したという意識を定める。したがって、空間としては近接していて時間としては先行するという、空間 - 時間の新しいカテゴリーが問題になっている。写真においては、ここととかつてのあいだで非論理的な結びつきが生じる。したがって、デノテーションのメッセージあるいはコードのないメッセージというレベルにおいてこそ、写真が持つ現実的な非現実性を十分に理解することができるのである。写真の非現実性はここの非現実性である。というのも、写真は決して幻想としては体験されないからである。写真は現前［／現在における存在］では全くないのであり、写真からその映像が持つ魔術的な性格を差し引かなければならない。また、写真の現実性はそこに存在したという現実性である。というのも、あらゆる写真には、このように起こったという、常に驚くべき明証性が存在するからである。われわれはそのとき、貴重な奇跡、われわれを保護してくれる現実性を手に入れるのである。この種の時間的な均衡（そこに存在した）は、おそらく映像が持つ投影の能力を弱めることになる（写真を用いる心理テストはほとんどなく、多くはデッサンを用いる）。つまり、それはあったは、それは私だを揺るがせるのである。[56]

---

[56] « [...] la photographie installe, en effet, non pas une conscience de l'*être-là* de la chose (que toute copie pourrait provoquer), mais une conscience de l'*avoir-été-là*. Il s'agit donc d'une catégorie nouvelle de l'espace-temps : locale immédiate et temporelle antérieure ; dans la photographie il se produit une conjonction illogique entre l'*ici* et l'*autrefois*. C'est donc au niveau de ce message dénoté ou message sans code que l'on peut comprendre pleinement l'*irréalité réelle* de la photographie ; son irréalité est celle de l'*ici*, car la photographie n'est jamais vécue comme une illusion, elle n'est nullement une *présence*, et il faut en rabattre sur le caractère magique de l'image photographique ; et sa réalité est celle de l'*avoir-été-là*, car il y a dans toute photographie l'évidence toujours stupéfiante du : *cela s'est passé ainsi* : nous possédons alors, miracle précieux, une réalité dont nous sommes à l'abri. Cette sorte de pondération temporelle (*avoir-été-là*) diminue probablement le pouvoir projectif de l'image (très peu de tests psychologiques recourent à la photographie, beaucoup recourent au dessin) : le *cela a été* bat en brèche le *c'est moi*. », Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 583. 邦訳 38 頁。

バルトは、「デノテーションのメッセージ（message dénoté）」のレベルで、「現実的な非現実性（irréalité réelle）」という、相反する写真の性質を見る。バルトによれば写真の映像は、現在における事物の存在を保証しない点で非現実的であるが、過去における事物の存在を保証する点で現実的である。要するに、写真の「非現実性（irréalité）」は、被写体が現在において存在していない点にあり、写真の「現実性（réalité）」は、被写体が過去において存在した点にある。

引用文のなかで「コノテーション」という用語は用いられていない。しかし、実際のところ問題となっているのは、相反する写真映像の性質（「現実的な非現実性」）をもたらすデノテーションの効果、すなわち「デノテーションのレベルでの映像」（「デノテーションのメッセージ」）から生じる第二次の意味作用である。この引用文で披露されているバルトの分析手法は、次のように解釈できる。バルトは、「デノテーションのレベルでの映像」がそれ自体で充足しているという第一次での意味実践の様態を、第二次の意味作用のレベルで「現実的な非現実性」としてカテゴライズしており、彼は、提喩的意味作用を通じて、デノテーションの様態を包括する「現実的な非現実性」という新たなカテゴリーを創出しているのである。この分析手法は、第一次での意味実践の様態に焦点を当てることによって、第一次での意味実践から第二次の意味作用へと至るプロセスを明るみに出している。

この場合、提喩的意味作用は同語反復的な在り方から免れていると言える。「デノテーションのレベルでの映像」が有するあからさまな明証性に依拠する写真の在り方それ自体についてアプローチされており、写真の映像から自明であることが繰り返されているわけではないからである。「現実的な非現実性」と名づけられたカテゴリーは、「疑似真実」としての写真のステータスを把握する手がかりとなっている。

そこで、バルトが提示しているこのカテゴリー（「現実的な非現実性」）の組成に目を向けると、造語を用いて新たなカテゴリーを創出していた彼の神話分析における場合と同様の操作、すなわち「混合」の操作が見られる。論文「映像のレトリック」では、「現実性」と「非現実性」、その二つの相反する概念が、論理的な根拠に頼らず、提喩的意味作用の働きに基づいて結び合わされているのである。コノテーションを伴わずそれ自体で充足している「デノテーションのレベルでの映像」は、「現実性」（過去における被写体の存在）をあからさまに示すと同時に、「非現実性」（現在における被写体の不在）をもあからさまに示すかたちで、現在における空間（空間の近接性）と過去における時間（時間の先行性）とのあいだに「非論理的な結びつき（conjonction illogique）」を生じさせる。このようなデノテーションの様態（第一次での意味実践の様態）が、提喩的意味作用を通じて、「現実的な非現実性」という「空間 - 時間の新しいカテゴリー（catégorie nouvelle de l’espace-temps）」

として抽出されている。それゆえここでは、ただデノテーションのみが存在していること（デノテーションがそれ自体で充足していること）から「現実的な非現実性」という写真の性質が抽出されることによって、まさに写真のパラドックス（ただデノテーションのみが存在することから生じるコノテーション）として、写真の現実表象が相反する様態（被写体の存在と不在）を同時に伴っていることが明るみに出されているのである。

このようにバルトは、逆説に逆説を重ねるかたちで写真の性質にアプローチしている。彼は、提喩的意味作用に基づいて、相反する抽象的概念を結び合わせる「混合」の操作を行なって写真の現実表象の在り方を明るみに出すのであり、論理的矛盾を厭わずに新たなカテゴリーを創出するこの分析実践は、デノテーションの様態に対する柔軟かつ創造的なカテゴリー化と呼べるだろう。

さらに引用文では、写真が「現実性」を保証するだけでなく「非現実性」を露呈することで「幻想（illusion）」を免れている旨が記述されているが、裏を返せば、もし仮に写真がもっぱら「現実性」を保証するメディアだと見なされるのならば、そうした考え方は「幻想」にすぎないということだろう。つまり、写真を通じて現実を参照することには「幻想」が介在し得るのであり、「現実的な非現実性」と名づけられたカテゴリーはこの点を示唆しているように思われる。この見地からすれば、「現実的な非現実性」というカテゴリーが示唆しているのは、写真の現実表象が被写体の存在と不在を同時に含む点のみならず、それが「幻想」を伴い得る点なのだと言える。

これまで検討してきたように、提喩的意味作用への注視は、デノテーションからコノテーションへと至る意味作用のプロセスを浮き彫りにすることにつながる。バルトは、いわば「意味の限界（*limite* du sens）」に位置する写真の映像を分析することで「意味作用の真の存在論（véritable ontologie de la signification）」と呼べるような探求が可能になるという旨を記述しているが[57]、それは、一見「無意味」であるかのような写真の映像を分析対象にしてこそ、意味作用のプロセスそのものを前景化することができるからだろう。論文「写真のメッセージ」および論文「映像のレトリック」においてバルトは、現実の場面を視覚上忠実に再現することで意味作用を退けるかのように見える写真の映像に意味作用の働きを探る。両論文で一貫して問題になっていたのは、ただデノテーションのみが存在することからコノテーションが生じるという、パラドックスとして存在する意味作用のプロセスで

---

[57] 「ところで、映像がいわば意味の限界であるとしても、またとりわけそうであるとすれば、映像のおかげで、まさに意味作用の真の存在論に戻ることができるのである。」« Or, même et surtout si l’image est d’une certaine façon *limite* du sens, c’est à une véritable ontologie de la signification qu’elle permet de revenir. », Barthes, « Rhétorique de l’image », p. 573. 邦訳 24 頁。

あった。

論文「写真のメッセージ」では、（記号論の用語が整備されていないことから）デノテーションの様態が考慮の外に置かれてしまうようなカテゴリー化の作用がコノテーションの問題として記述されていたが、提喩的意味作用は、付加的意味としてのコノテーションを退けるデノテーションの様態を「無意味性」という名称のもとでカテゴライズすることを支える第二次の意味作用として働いている。論文「映像のレトリック」では、提喩的意味作用を活かしたバルトの分析実践は、同語反復的な様相を呈する一方で、写真の「無意味性」にアプローチしつつ「無意味性」とは別の名称で、写真の現実表象の逆説的な在り方を明確化することにつながっている。その明確化の要点であると言えるのが、写真の映像の相反する二つの様態（過去における被写体の存在および現在における被写体の不在）を同時に把握することができる操作、すなわち、それらの様態を「現実的な非現実性」として、論理的な妥当性に縛られることなくひとまとめにして提示することができる「混合」の操作なのである。

さらに、本節での検討から強調しておきたいのは、提喩的意味作用を通じて写真の映像における第一次での諸々の意味実践をカテゴライズすることが彼の神話分析によって体現されていた活動に直結する点である。その活動とは、写真に備わる明証性によって覆い隠されている「記号の体系」の有り様を明るみに出して諸々の意味実践を位置づけること、つまり分類するということにほかならない。この分類活動においては、造語（的な用語）による命名がなされるとともに、「混合」というかたちで実践される場合には論理的な妥当性に縛られることがなかった。柔軟性に富むこの分類活動は、「現実的な非現実性」と名づけられたカテゴリーによって端的に示されているように、新たなカテゴリーを提示する創造的な活動であると言える。そしてまた、この「現実的な非現実性」というカテゴリーは写真の現実表象が「幻想」を伴い得ることを示唆しており、この点は 1970 年代以降のバルトの写真論を把握するための手がかりになるだろう。

第 4 節　カテゴリーとしての「現実」――「現実効果」

バルトの記号論的な写真分析で論じられていたのは、現実の場面そのものであるように見える「記号体系」の現実表象の在り方であったが、「現実効果」（1968 年）と題された彼の言語論においては、それ自身を現実であるかのように見せる「記号体系」の現実表象の在り方が問われており、そこでも提喩的意味作用を通じた「混合」の分析実践が展開されている。

論文「現実効果」は、テクストと現実世界のあいだの関係性をめぐって、文学理論の成果として大きな影響力を及ぼした。テクスト（写実主義的なテクストおよび歴史のテクスト）は自らを現実世界の直接的な反映であるかのように見せるという働きをしている点を主張するこの論文は、その内在的な力学を尊重することによって、テクストが有するテクスト外の世界とのつながりについて疑問を投げかけているように見える。しかしその議論において、バルトによる第二次の意味作用（コノテーション）の読み取りは、そうした見かけ以上に複雑な様相を呈している。

この論文でバルトが取り上げたのは、テクストに記述されつつも無用の（inutile）ないし無意味な（insignifiant）と考えられるような細部（détail）である。通常テクスト内の諸々の細部は、字義通りの意味ではない二次的な意味（付加的意味としてのコノテーション）を持っており、そのことによってテクストの解釈に役立つ（バルトは自身が取り組んでいた物語の構造分析を念頭に置いており、その観点から言えば、細部は何らかの性格特徴や雰囲気を示す指標（indice）の役割を果たす）。バルトは、そうした付加的意味を持っていないと思われる細部、すなわち何の役にも立たずテクストの構造に回収できないような細部を無意味であると見なすのであり、そのうえで彼は、このような「無意味性（insignifiance）」が発揮する意味作用とはいかなるものであるのか、と問うのである[58]。

バルトが挙げた例は、ギュスターヴ・フロベールとジュール・ミシュレの記述であり、彼は、それらの記述について次のような見解を示している[59]。「晴雨計の下の古いピアノには、木箱や厚紙の箱が、ピラミッドのように積み上げられていた（un vieux piano supposait, sous un baromètre, un tas pyramidal de boîtes et de cartons）」というフロベールの「純な心」での記述において、ピアノはその所有者のブルジョワとしての生活水準を、厚紙の箱は家のなかの混乱した様子を示すが、晴雨計は、そのような付加的意味を担っておらず（晴雨計が存在すること以外）事実上何も意味していない（何の役にも立っていない）。また、「一時間半後、彼女の背後の小さなドアが静かにノックされた（au bout d'une heure et demie, on frappa doucement à une petite porte qui était derrière elle）」というミシュレの『フランス史』での記述において、ドアのサイズや位置といった要素は、話の筋にとって不要である。

---

58 「[…] 物語においては、あらゆるものが意味を持つのか、またそうでないのなら、もし物語の連辞のなかにいくらかの無意味な領域が残っているのならば、結局のところ、いわばその無意味性の意味作用とはどのようなものであるのか？」« [...] tout, dans le récit, est-il signifiant, et sinon, s'il subsiste dans le syntagme narratif quelques plages insignifiantes, quelle est en définitive, si l'on peut dire, la signification de cette insignifiance ? », Roland Barthes, « L'effet de réel » (1968), in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 27（「現実効果」、『言語のざわめき』、花輪光訳、みすず書房、新装版 2000 年（初版 1987 年）、187 頁）.

59 Cf. Barthes, « L'effet de réel », pp. 25-26. 邦訳 184-186 頁。

論文「現実効果」では、写実主義的テクストおよび歴史のテクストにおける記述の細部の無意味さが議論の出発点となっており、この無意味さがこれらのテクストの現実表象の在り方に関連づけられる。

まず、写実主義的なテクストに関して、バルトによればそれは、「ただ指示対象のみによって保証された言表行為を受け入れるあらゆる言説（tout discours qui accepte des énonciations créditées par le seul référent）」であり、一般的意見（大多数の人々の意見）に基づく古代に由来する真実らしさ（vraisemblable）には属していない[60]。つまり写実主義的なテクストの真実らしさは、指示対象への参照（ないし指示対象の存在それ自体）に依拠している。より正確には、写実主義的なテクストにおけるいわゆる「描写（description）」は、指示対象を「現実（réel）」と見なし現実への参照を旨としつつも（その内実として）指示対象に付き従っているかのように「装う（feindre）」という性質を持つ[61]。この性質は、古代にまでさかのぼる美的機能（美的目的に従ったレトリック的な性質）とは異なる。フロベールの「描写」では（実際にはフロベールに限ったことではないだろうが）、これら「美的制約（contraintes esthétiques）」および「現実参照の制約（contraintes référentielles）」が共存しており、またそれだけでなく、とりわけ「指示対象の正確さ（exactitude du référent）」（を追求しているように装われること）によって、「描写」すなわち無意味な細部の記述が根拠づけられる[62]。この場合、先のフロベールの記述が、指示対象（晴雨計）を「デノテーションのレベルで示す（dénoter）」という意味実践として捉えられていることがわかる。

他方、歴史のテクストに関しても、その現実表象の要点になるのは「指示対象の正確さ」（指示対象の正確な記述）である。この点についてバルトは、次のように述べている。

---

[60] Cf. Barthes, « L'effet de réel », pp. 30-31. 邦訳 193-194 頁。

[61] 「[…] 指示対象を現実と措定することによって、隷属的な仕方で指示対象に付き従うかのように装うことによって、写実主義的な描写は、幻想的な活動に引きずり込まれることを避けているのである（報告の「客観性」にとって必要であると思われた用心）。[…]」« [...] en posant le référent pour réel, en feignant de le suivre d'une façon esclave, la description réaliste évite de se laisser entraîner dans une activité fantasmatique (précaution que l'on croyait nécessaire à l'« objectivité » de la relation) [...] », Barthes, « L'effet de réel », p. 29. 邦訳 191 頁。

[62] 「[…] フロベールの描写の美的目的には、「写実主義的な」要請がすっかり盛り込まれている。見たところ、ただ指示対象の正確さ［指示対象を描写する際の正確さ］のみが、他のあらゆる機能に優先するかまたはそれらの機能とは無関係に、指示対象を描写することを、あるいは――描写が一語に縮小されている場合には――指示対象をデノテーションのレベルで示すことを必要とし正当化しているかのようである。つまりここでは、美的制約に現実参照の制約が――少なくともアリバイとして――浸透している。[…]」« [...] la fin esthétique de la description flaubertienne est toute mêlée d'impératifs « réalistes », comme si l'exactitude du référent, supérieure ou indifférente à toute autre fonction, commandait et justifiait seule, apparemment, de le décrire, ou – dans le cas des descriptions réduites à un mot – de le dénoter : les contraintes esthétiques se pénètrent ici – du moins à titre d'alibi – de contraintes référentielles [...] », Barthes, « L'effet de réel », p. 29. 邦訳 190 頁。

機能分析の際の還元できない残余は、「具体的な現実」（取るに足らない仕草、中途半端な態度、無意味な事物、冗長な言葉）と一般に呼ばれるものをデノテーションのレベルで示すという点で共通している。「現実」の純粋かつ飾り気がない「表象」、「存在しているもの」（あるいは存在したもの）のありのままの報告はそれゆえ、意味に対する抵抗として現われる。この抵抗が確証しているのは、生きられたもの（生き生きとしているもの）と理解可能なものという大いなる神話的対立である。［…］（もちろん書かれた形式のもとでの）構造に対する「現実」の抵抗は、虚構の物語においては非常に制限されている。虚構の物語は定義上あるモデルに基づいて構築されており、そのモデルは、大筋において、理解可能なものが課す制約のほかに制約は持っていない。しかしその同じ「現実」が、「現実に起こったこと」を報告すると見なされている歴史的な物語においては、本質的な参照［の対象］［／指示対象］となっている。そうなると細部の非機能性など問題ではなくなる、その細部が「実際に起こったこと」をデノテーションのレベルで示すのであるから。具体的な現実が、述べることへの十分な正当化となるのである。[63]

歴史のテクストにおける無意味な細部の記述が「デノテーションのレベルで示す」のは、些細な要素でありながらも「現実に起こったこと（ce qui s’est réellement passé）」ないし「実際に起こったこと（ce qui a eu lieu）」に属する「具体的な現実（réel concret）」である。歴史のテクストは、そうした「具体的な現実」としての指示対象（先のミシュレの記述での小さなドア）をありのままに（すなわち正確に）示すことを前提としており、指示対象の存在それ自体が、歴史のテクストにおける無意味な細部の記述を根拠づける。

そのうえで押さえておきたいのは、歴史のテクストのこうした現実表象の「純粋かつ飾り気がない（pure et simple）」という在り方である。「生きられたもの（le vécu）」（「生き生きとしているもの［／生きているもの］（le vivant）」）と「理解可能なもの（l’intelligible）」とのあいだの対立を背景にした「意味に対する抵抗（résistance au sens）」と形容されている

[63] « Les résidus irréductibles de l’analyse fonctionnelle ont ceci de commun, de dénoter ce qu’on appelle couramment le « réel concret » (menus gestes, attitudes transitoires, objets insignifiants, paroles redondantes). La « représentation » pure et simple du « réel », la relation nue de « ce qui est » (ou a été) apparaît ainsi comme une résistance au sens ; cette résistance confirme la grande opposition mythique du vécu (du vivant) et de l’intelligible [...] La résistance du « réel » (sous sa forme écrite, bien entendu) à la structure est très limitée dans le récit fictif, construit par définition sur un modèle qui, pour les grandes lignes, n’a d’autres contraintes que celles de l’intelligible ; mais ce même « réel » devient la référence essentielle dans le récit historique, qui est censé rapporter « ce qui s’est réellement passé » : qu’importe alors l’infonctionnalité d’un détail, du moment qu’il dénote « ce qui a eu lieu » ; le « réel concret » devient la justification suffisante du dire. », Barthes, « L’effet de réel », p. 30. 邦訳 191-192 頁。

この点は、現実の場面を視覚上忠実に示す写真の現実表象につながる。写真の映像は、論文「写真のメッセージ」での先に確認した定義によれば、「現実の純粋かつ飾り気がないデノテーション（dénotation pure et simple de la réalité）」であり、またそれは、論文「映像のレトリック」での問題提起によれば、「生きられたもの」と「理解可能なもの」が対立する「意味に抵抗する場（lieu de résistance au sens）」にほかならない[64]。実際バルトは、この引用文の直後で、「「かつてそこにあったもの」のあるがままの証拠（témoin brut de « ce qui a été là »）」として写真を引き合いに出しつつ（またそれに加えルポルタージュをはじめとした事実を証し立てる諸々の手段を挙げながら）、「事物がかつてそこにあったということが言葉にとって十分な原理である（l'*avoir-été-là* des choses est un principe suffisant de la parole）」と述べており[65]、実際に存在した場面から発して成立する歴史のテクストと写真の映像における現実の事象のある種の全能さが問題にされている。「理解可能なもの」に対立する「生きられたもの」（「生き生きとしているもの」）を「純粋かつ飾り気がない（pure et simple）」という仕方で表象する点が明確化されたかたちで、論文「現実効果」では写真の現実表象が念頭に置かれているのである。

このように、写実主義的テクストおよび歴史のテクストにおける記述の細部の無意味さからこれらのテクストの現実表象の特徴を整理したうえで、最終的にバルトは、この無意味さが発揮する第二次の意味作用（コノテーション）を次のように導き出す。

> 記号論的には、「具体的な細部」は指示対象とシニフィアンの直接的な結託によって構成される。シニフィエは記号から追放され、そしてもちろんシニフィエとともに、シニフィエの形式を発展させる可能性、すなわち実際のところ、物語の構造それ自体も追放される。［…］そこにこそまさに、現実参照の幻想とでも呼べるようなものが存

---

64 「映像の言語的性格を疑うのは言語学者たちだけではない。世論も漠然と、「生」についてのある種の神話的観念から、映像を意味に抵抗する場と考えている。映像は、再―現、すなわち結局のところ再生であり、理解可能なものは生きられたものと相容れないと見なされているのである。」« Les linguistes ne sont pas seuls à suspecter la nature linguistique de l'image ; l'opinion commune elle aussi tient obscurément l'image pour un lieu de résistance au sens, au nom d'une certaine idée mythique de la Vie : l'image est re-présentation, c'est-à-dire en définitive résurrection, et l'on sait que l'intelligible est réputé anthipatique au vécu. », Barthes, « Rhétorique de l'image », p. 573. 邦訳 23-24 頁。

65 「こうしたことすべて［写真やルポルタージュなど事実を証し立てる諸々の手段］が告げているのは、「現実」はそれ自体で充足するものと見なされていること、「現実」はあらゆる「機能」という観念を打ち消すほど強力であること、「現実」についての言表行為は構造のなかに組み込まれる必要が少しもないこと、事物がかつてそこにあったということが言葉にとって十分な原理であること、である。」« Tout cela dit que le « réel » est réputé se suffire à lui-même, qu'il est assez fort pour démentir toute idée de « fonction », que son énonciation n'a nul besoin d'être intégrée dans une structure et que l'*avoir-été-là* des choses est un principe suffisant de la parole. », Barthes, « L'effet de réel », p. 30. 邦訳 192-193 頁。

在する。この幻想の真実は次のとおりである。すなわち、デノテーションのシニフィエとして写実主義的な言表行為から遠ざけられた「現実」は、コノテーションのシニフィエとして写実主義的な言表行為に戻ってくる。というのも、このような諸々の細部が現実を直接的にデノテーションのレベルで示すと見なされるまさにそのときに、それらの細部は、そうとは言わずに、現実を意味することしか行なわないからである。フロベールの晴雨計やミシュレの小さなドアは、最終的に次のこと以外の何も語っていない。すなわち、われわれは現実である、と。そのとき意味されるのは、「現実」というカテゴリーである（「現実」の些細な［／偶発的な］内容ではない）。言い換えれば、もっぱら指示対象のためのシニフィエの欠如そのものが、写実主義のシニフィアンそのものになっているのである。ある現実効果、現代のあらゆる通常の作品が持つ美学を形成する無自覚なこの真実らしさに対する根拠が生じるのである。[66]

写実主義的なテクストおよび歴史のテクスト（「写実主義的な言表行為（énonciation réaliste）」）のなかの無意味な細部（「具体的な細部（détail concret）」としての晴雨計や小さなドア）は、デノテーションのレベルにおいて指示対象を直接的に示す。「具体的な細部」が無意味であることは、デノテーションのレベルでのシニフィエの不在（「欠如（carence）」）と言い換えることができる。デノテーションのレベルでのシニフィアンと指示対象の直接的な結びつき（シニフィエが記号から「追放される（être expulsé）」ことになる「結託（collusion）」）は、「写実主義のシニフィアンそのもの（signifiant même du réalisme）」になっている、すなわち、コノテーションのレベルにおいて「写実主義」を示す。その際、デノテーションのレベルでシニフィアンと指示対象が直接的に結びつく「具体的な細部」は、コノテーションのレベルにおいて「「現実」というカテゴリー（catégorie du « réel »）」を示すことによって、「現実効果（effet de réel）」として指示対象の存在それ自体に由来する真実らしさを産み出す。この真実らしさの根拠として、「写実主義的な言表行為」が「現実」（という概念）を意味しているにすぎないにもかかわらず「現実」（に属する個別具体的な要素）

[66] « Sémiotiquement, le « détail concret » est constitué par la collusion *directe* d'un référent et d'un signifiant ; le signifié est expulsé du signe, et, avec lui, bien entendu, la possibilité de développer une *forme de signifié*, c'est-à-dire, en fait, la structure narrative elle-même [...] C'est là ce que l'on pourrait appeler l'*illusion référentielle*. La vérité de cette illusion est celle-ci : supprimé de l'énonciation réaliste à titre de signifié de dénotation, le « réel » y revient à titre de signifié de connotation ; car, dans le moment même où ces détails sont réputés dénoter directement le réel, ils ne font rien d'autre, sans le dire, que le signifier ; le baromètre de Flaubert, la petite porte Michelet ne disent finalement rien d'autre que ceci : *nous sommes le réel* ; c'est la catégorie du « réel » (et non ses contenus contingents) qui est signifiée ; autrement dit, la carence même du signifié au profit du seul référent devient le signifiant même du réalisme : il se produit un *effet de réel*, fondement de ce vraisemblable inavoué qui forme l'esthétique de toutes les œuvres courantes de la modernité. », Barthes, « L'effet de réel », pp. 31-32. 邦訳 194-195 頁。

をありのままに指し示しているかのように見なされること、その点をバルトは「現実参照の幻想（illusion référentielle）」と名づけたのである。

この引用文においては、提喩的意味作用へのバルトの注視を次のように感知することができる。第一次での意味実践を分類することから見れば、それが属する「写実主義」という言説のジャンルが前景化されていることがわかる。なぜならここでは、（特殊でありながらしばしば見られる）シニフィエを介在させないデノテーションがコノテーションのレベルで「写実主義のシニフィアンそのもの」になっている、つまり、それが写実主義的な言説に属することに読者が自覚的であるかどうか（要するに写実主義的なテクストの読者が「幻想」を免れているかどうか）が問題になっているからである。さらにまた、第二次の意味作用を通じて（「コノテーションのシニフィエ（signifié de connotation）」として）導き出されているのは、ほかならぬ「「現実」というカテゴリー」である。この点は、バルトの思考の在り方を明らかにしようとする私たちの議論にとってきわめて重要である。というのも、ここで「現実」と呼ばれているカテゴリーは、「現実効果」および「現実参照の幻想」と呼ばれている現象を伴って提示されていることで、写実主義的な言説を通じてなされる現実参照の様態を包含しているように思われるからであり、言い換えれば、分類するという行為にとどまらないバルトの思考を示唆しているからである。

「「現実」というカテゴリー」に内包されている現実参照の様態を明らかにするために、論文「現実効果」の結論にあたるこの一節では写実主義的な言説（「写実主義的な言表行為」）としてまとめられている歴史のテクストをめぐる「現実効果」および「現実参照の幻想」についてのバルトの記述を確認したい。

論文「現実効果」と同時期に位置する論文「歴史の言説」（1967 年）においてバルトは、論文「現実効果」での場合と同様に、歴史のテクストが「現実参照の幻想」を引き起こすという点を取り上げている。バルトは、歴史の言説が構成される手順を二つの段階に渡るものとして説明しており、指示対象が言説の外に存在し言説の基盤になるという第一段階が存在したうえで、その第二段階について次のように述べている。

> ［…］第二段階においては、シニフィエそれ自体が、追い払われ、指示対象と混同される［／指示対象のなかで一体化する］。指示対象はシニフィアンと直接的な関係を結び、ただもっぱら現実を表現するという役目を担った言説は、想像的な諸構造の基本的な辞項であるシニフィエなしで済まそうと思うようになる。「写実的」と主張するあらゆる言説のように、歴史の言説はこのようにして、指示対象とシニフィアンの二項的な意味論的図式しか知らないと思うようになる。指示対象とシニフィエの混同（幻

想を起こさせる混同）は、周知のとおり、遂行的言説のような自己参照的な言説を定義づける。歴史的な言説は偽りの遂行的言説であり、そうした言説においては実際、見かけ上の事実確認的なもの（描写的なもの）は権威的行為としての言行為［パロールの行為］のシニフィアンにすぎないと言うことができる。[67]

まずわかるのは、論文「現実効果」ではシニフィエが記号から「追放される」ことになる「結託」として、シニフィエを介在させない指示対象とシニフィアンの結びつきがやや芝居がかったかたちで誇張されていたが、その「結託」の具体的な様相がこの引用文では明確に述べられていることである。その具体的な様相とは、指示対象とシニフィエの「混同（confusion）」にほかならず、「現実参照の幻想」はこの混同に由来する。写実主義的なテクストおよび歴史のテクストの（デノテーションのレベルで無意味な）細部において、シニフィエは消失するのではなく指示対象と一体化している、とバルトは見なすのである。

次に見て取れるのは、歴史のテクストが「遂行的言説（discours performatif）」によって体現される「自己参照的な言説（discours *suiréférentiels*）」に関連づけられていることである。この点は、（その名は出されていないがおそらく）エミール・バンヴェニストの遂行的発話についての論考を支えにしている。バンヴェニストによれば、社会的権威によって任命する（nommer）、布告する（déctéter）、あるいはまた個人的責任によって約束する（promettre）といったような、（そうした動詞を含んだ）言表それ自体が（当該の）行為の実現となる遂行的発話（le performatif）は、「言語的な表明（manifestation linguistique）」と「行為の実行（accomplissement d'acte）」が一体になっている、すなわちシニフィエが指示対象と「同一（identique）」になっていることから、ほかならぬそれ自身を参照する「自己参照的（sui-référentiel）」な在り方をしている[68]。歴史のテクストと「遂行的言説」、言説のジャン

---

[67] « [...] dans un second temps, c'est le signifié lui-même qui est repoussé, confondu dans le référent ; le référent entre en rapport direct avec le signifiant, et le discours, chargé seulement d'*exprimer* le réel, croit faire l'économie du terme fondamental des structures imaginaires, qui est le signifié. Comme tout discours à prétention « réaliste », celui de l'histoire ne croit ainsi connaître qu'un schéma sémantique à deux termes, le référent et le signifiant ; la confusion (illusoire) du référent et du signifié définit, on le sait, les discours *suiréférentiels*, tel le discours performatif ; on peut dire que le discours historique est un discours performatif truqué, dans lequel le constatif (le descriptif) apparent n'est en fait que le signifiant de l'acte de parole comme acte d'autorité. », Roland Barthes, « Le discours de l'histoire » (1967), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 1260-1261（「歴史の言説」、『言語のざわめき』、花輪光訳、みすず書房、新装版 2000 年（初版 1987 年）、181 頁）.

[68] 「[…] 遂行的発話は、言葉として発せられなければならないから言語的な表明であると同時に、行為の実行として現実の出来事である。行為が［当該の］行為の言表と一体になっている。シニフィエは指示対象と同一である。[…] それ自身を参照［の対象］［／指示対象］とする言表はまさに自己参照的である。」« [...] il [le performatif] est à la fois manifestation linguistique, puisqu'il doit être prononcé, et fait de réalité, en tant qu'accomplissement d'acte. L'acte s'identifie donc avec

ルが異なる両者に対するバルトによる関連づけは、指示対象とシニフィエの一体性という点を元にしていると考えられる。

同時に、歴史のテクストが「偽りの遂行的言説（discours performatif truqué）」と形容されていることに注意したい。バルトによれば、歴史のテクストは、指示対象とシニフィエを一体化しているように見せている、写実主義的なテクストの特徴について用いられていた用語で言い換えれば、そのように「装う」のである。デノテーションのレベルでの「具体的な細部」としての「見かけ上の事実確認的なもの（描写的なもの）（le constatif (le descriptif) apparent）」は、コノテーションのレベルでそれが属する言説のジャンル（「権威的行為としての言行為（acte de parole comme acte d'autorité）」）を示す。それゆえ、写実主義的なテクストおよび歴史のテクストをめぐってバルトが問題にしているのは、提喩的意味作用を通じた「装う」ことのメカニズムなのだと言える。

また、論文「現実効果」ではデノテーションのシニフィエとして遠ざけられた「現実」がコノテーションのシニフィエとして「戻ってくる（revenir）」と記述されていた点について、先の引用文に続けて次のように述べられている。

> 別の言葉で言えば、「客観的な」歴史において、「現実」とは結局のところ、指示対象の見かけ上の全能さの背後で守られた、表明されざるシニフィエでしかない。こうした状況が現実効果と呼べるだろうことを明確に示している。「客観的な」言説の外へのシニフィエの排除は、見かけのうえでは「現実」とその表現を向かい合わせておきながら、ある新たな意味を必ず産出するのであり、ゆえに、もう一度言うが、体系において要素が欠如していることはすべてそれ自体で意味作用を発揮するのである。この新たな意味――あらゆる歴史の言説に広がっており最終的にその関与性を決定づける意味――、それは、隠れたシニフィエにひそかに変化した、現実そのものである。歴史の言説は、現実に付き従っているのではなく、現実を意味することしかしておらず、それが起こった、と繰り返し述べることをやめないのであるが、そうした断定は、あらゆる歴史の叙述［／語り］の裏側が意味されたということ以外のことでは決してあり得ないのである。[69]

---

l'énoncé de l'acte. Le signifié est identique au référent. [...] L'énoncé qui se prend lui-même pour référence est bien sui-référentiel. », Émile Benveniste, « La philosophie analytique et le langage », in *Problèmes de linguistique générale I*, Gallimard, 1966, p. 274（「分析哲学とことば」、高塚洋太郎訳、『一般言語学の諸問題』、岸本通夫監訳、みすず書房、1983 年、261 頁）.

[69] « En d'autres termes, dans l'histoire « objective », le « réel » n'est jamais qu'un signifié informulé, abrité derrière la toute-puissance apparente du référent. Cette situation définit ce que l'on pourrait appeler l'*effet de réel*. L'élimination du signifié hors du discours « objectif », en laissant s'affronter apparemment

「現実効果」の内実は、歴史のテクスト（および写実主義的なテクスト）が、「指示対象の見かけ上の全能さ（toute-puissance apparente du référent）」のもとで、「表明されざるシニフィエ（signifié informulé）」あるいは「隠れたシニフィエ（signifié honteux）」として、「現実そのもの（réel lui-même）」を、コノテーションのレベルでほのめかしながら示す、言い換えればあたかも不在であるかのように見せるというかたちで示すことにある。「幻想」に陥った（と想定される）読者は、現実の事象の存在に保証された真実らしさを感知するが、その真実らしさが「現実効果」によって産み出されることを感知する立場にはない。「現実そのもの」とは、第二次の意味作用におけるシニフィエ、すなわち先に見た「「現実」というカテゴリー」である。

ここで再度確認しておきたいのは、「現実効果」のいわば源泉とでも呼べる「指示対象の見かけ上の全能さ」である。この全能さは、論文「現実効果」でも取り上げられていた（「事物がかつてそこにあったということが言葉にとって十分な原理である」）。この引用文の直後でもバルトは、「それが起こった［ということ］の威光（prestige du *c'est arrivé*）」を例証するものとして、写実主義小説とともに写真を挙げている。「現実効果」は「指示対象の見かけ上の全能さ」に立脚している。それゆえ「「現実」というカテゴリー」は、この全能さを前提にしているのである。

論文「現実効果」に戻ろう。それ自体では意味を持たない要素が意味作用に参与することの典型的な例証となっているこの論文は、構造主義期の文学理論の遺産であると言える。アントワーヌ・コンパニョンは、この論文が写実主義のイデオロギー性を暴露していることを的確に記述した[70]。同時にコンパニョンは、そこにテクストが持つ現実世界への参照機

---

le « réel » et son expression, ne manque pas de produire un nouveau sens, tant il est vrai, une fois de plus, que dans un système toute carence d'élément est elle-même signifiante. Ce nouveau sens – extensif à tout le discours histrique et qui en définit finalement la pertinence –, c'est le réel lui-même, transformé subrepticement en signifié honteux : le discours historique ne suit pas le réel, il ne fait que le signifier, ne cessant de répéter *c'est arrivé*, sans que cette assertion puisse être jamais autre chose que l'envers signifié de toute la narration historique. », Barthes, « Le discours de l'histoire », p. 1261. 邦訳 181-182 頁。

[70] 「おそらくバルトの見解は常に同じである。つまり写実主義とは、一見すると物語から逃れるような諸々の要素を物語のなかにちりばめることで、自らを自然なものとして通用させようとする意味作用のひとつのコードにすぎない、という見解である。それ自体では意味を持たない諸要素は、コードの遍在を覆い隠したり、ミメーシスの［現実を表象ないし模倣する］テクストが持つ権威を読者に偽ったり、あるいはまた世界を犠牲にして読者との共謀を求めたりする。現実参照の幻想とは、慣習と恣意を隠蔽しつつ、それでもなお記号を順応させることの一例となっている。というのも、指示対象は現実性を持たないからであり、指示対象は言語活動によって生み出されるからであり、指示対象は言語活動より以前には与えられないからである、等々。」« Sans doute la position de Barthes est-elle toujours la même : le réalisme n'est jamais qu'un code de signification qui cherche à se faire passer pour naturel en parsemant le récit d'éléments qui lui échappent apparemment : insignifiants, ils occultent l'omniprésence du code, trompent le lecteur sur l'autorité du

能に対する否認を見て取り[71]、文学理論の極端さを示す一例としてその点を厳しく批判してテクストか現実世界かという二者択一に対する修正を図ったが、バルトの分析実践は、テクストの内在性への依存という点には収まらないと思われる。

論文「現実効果」で記述されていた「「現実」というカテゴリー」は、事実であることの全能さに支えられた指示対象とシニフィエの一体性とともに、両者が一体化しているように装われることを内包している。つまり、写実主義的なテクストおよび歴史のテクストを通じてなされる現実参照の様態として、「現実」と「幻想」、それら相反する二つの要素を内包していると考えられる。バルトは、「「現実」というカテゴリー」のもとで相反する二つの現実参照の様態をひとまとめにしており、提喩的意味作用を活かして「混合」の実践を行なっているのである。この見地からすれば、バルトの分析実践は、テクストが持つ現実世界への参照機能に対する否認には帰結せず、事実であることの全能さに依拠した現実表象において発揮される意味作用の在り方を解明しているのだと言えるだろう。

「現実効果」をめぐるバルトの「混合」の実践は、写真の現実表象について有益な視点をもたらしているように思われる。バルトは、写真を写実主義的なテクストおよびとりわけ歴史のテクストと同列に置いていた。たしかに写真は、実際に存在した場面を文字通り提示するのであって、そのように装っているのではない。しかし少なくとも、事実であることの全能さに依拠した現実表象には「幻想」が介在する余地がある。提喩的意味作用が活かされた論文「現実効果」は、そのことを例証しているのである。

第 5 節　バルトの写真論における提喩的意味作用の射程

---

texte mimétique, ou demandent sa complicité sur le dos du monde. L'illusion référentielle, masquant la convention et l'arbitraire, est encore un cas de naturalisation du signe. Car le référent n'a pas de réalité, il est produit par le langage et non donné avant le langage, etc. », Antoine Compagnon, *Le Démon de la théorie. Littérature et sens commun*, Seuil, coll. « Points », 2001 (1998), p. 136（『文学をめぐる理論と常識』、中地義和・吉川一義訳、岩波書店、2007 年、130 頁）.

[71] 「現実効果、現実参照の幻想とはひとつの幻覚ということになるだろう。バルトは次のように考えることをわれわれに要求している。すなわち、写実主義小説の読者には、仮にその小説が本当に写実主義的であるとすれば、まさにこの幻覚が到来するに違いなく、またその非正当性を諸々の無意味な細部が包み隠すということである。この要請に合わせると、いかなる言語活動も現実を参照しなくなり、いかなる文学も現実を表象［ないし模倣］するものではなくなる。バルトが、読者のモデルとして、文学が持つ幻覚の力の犠牲者であるドン・キホーテやボヴァリー夫人を持ち出さない限りは。」« L'effet de réel, l'illusion référentielle, ce serait une *hallucination*. Barthes nous demande de penser que c'est cela qui devrait arriver au lecteur du roman réaliste si ce roman était authentiquement réaliste, et que c'est cette inauthenticité que les détails insignifiants voileraient. Mesurés à cette exigence, aucun langage n'est référentiel, aucune littérature n'est mimétique, à moins que Barthes ne veuille donner comme modèles du lecteur Don Quichotte et Madame Bovary, victimes de la puissance hallucinatoire de la littérature. », Compagnon, *Le Démon de la théorie*, pp. 137-138. 邦訳 131-132 頁。

本節では、1970 年代以降に位置するバルトの二つの写真論において見出すことができる提喩的意味作用の射程を示したい。1970 年代以降のバルトの写真論は、「デノテーション」および「コノテーション」の読み取りという問題設定のもとで書かれてはいない。しかし提喩的意味作用は、分類活動から逃れる意味を提示するバルトの分析実践に、また相異なる要素に対する彼の「混合」の実践に、その射程を露わにしている。

5-1. 分類活動から逃れる意味をめぐる提喩的意味作用の射程――「第三の意味」

論文「第三の意味」（1970 年）は、セルゲイ・ミハイロヴィチ・エイゼンシュテインの作品のフォトグラム（映画のコマ）を分析対象にしている。文字通りには映画論に属すると言えるこの論文では、映画作品のなかの場面を収めたスチール写真に焦点が当てられたかたちでそこに宿る意味をめぐって分析実践が展開されており、その点においてこの論文を写真論と見なすことができる。この論文は、バルトの関心が記号論から離れようとしていた時期に書かれており、1960 年代の記号論的な写真論の問題設定を直接的には引き継いでいない印象を受ける。しかし、意味の問題から写真（静止した映像としてのフォトグラム）にアプローチするバルトの姿勢は変わっていない。

バルトは、『イワン雷帝』のなかのフォトグラム（イワンに黄金が注がれている写真）をめぐって、そこから受け取れる諸々の意味を次の三通りに区別する[72]。第一の意味は、情報のレベル（niveau informatif）ないしコミュニケーション（communication）のレベルでの意味であり、これは舞台装置や衣装や人物などの同定を助ける。第二の意味は、注がれた黄金を起点とする「象徴のレベル（niveau symbolique）」での意味であり、その例として挙げられているのは、（とりわけイワンという）指示対象に密接に関連する皇帝の儀式（黄金による洗礼）、『イワン雷帝』におけるテーマと仮定できるような黄金や富、エイゼンシュテインに固有と呼べそうなテーマ体系を構成する黄金や雨、等々といった要素である。この第二の意味は、その受け手（バルト）を求めて「迎えに来る（venir au-devant）」と形容できるほど明白な要素として、「自明な意味（sens obvie）」と名づけられている。またそれは、「意味作用（signification）」のレベルに属すると規定されている。第三の意味は、ジュリア・クリステヴァに由来する概念である「意味形成性（signifiance）」、そのレベルに属する意味である。その例として挙げられているのは、イワンに黄金を注ぐ二人の臣下が塗っている「白

[72] Cf. Roland Barthes, « Le troisième sens. Notes de recherche sur quelques photogrammes de S. M. Eisenstein » (1970), in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 485-488（「第三の意味――エイゼンシュテインのフォトグラムに関する研究ノート」、『第三の意味――映像と演劇と音楽と』、沢崎浩平訳、みすず書房、新装版 1998 年（初版 1984 年）、73-77 頁）.

粉（fard）」の「密度（compacité）」ないし塗り方（一方の「厚くて（épais）」また「大げさな（appuyé）」白粉、他方の「滑らかで（lisse）」また「上品な（distingué）」白粉）、彼らの顔の形状（一方の「間の抜けたような（bête）」鼻、他方の眉の「すっきりとした（fin）」輪郭）、臣下の一人が醸し出す色彩（「色がくすんだ金髪の黄金色（blondeur fade）」、「白く萎えた顔色（teint blanc et passé）」）、等々といった要素である。この第三の意味は、明瞭すぎる意味（「自明な意味」）を鈍化させる（いわばそれに丸みを持たせる）要素として、「鈍い意味（sens obtus）」と名づけられている。

これら三つの意味のうち、「自明な意味」（第二の意味）と「鈍い意味」（第三の意味）がバルトの分析対象として取り上げられている。とはいえ「自明な意味」に関しては、簡潔な指摘がなされるだけであり（バルトは、『戦艦ポチョムキン』のフォトグラムのひとつ（握り拳を写した写真）では、労働者階級の力や意志と結びついた憤りや戦いへの決意を読み取り、あるいはまた彼は、より広くエイゼンシュテインの美学の基盤となる「自明な意味」として、革命（というテーマ）を挙げている）、重点的に論じられているのは、無意味ではないものの際立つことのない第三の意味、写真の細部を通じてもたらされる「鈍い意味」である。

「鈍い意味」は、そのシニフィアンに関しては感知できるがそれに対応するべきシニフィエを見出すことができない、およびそのシニフィアンが指示対象とは混同され得ないという性質を有している。この二点についてのバルトの記述を確認しておきたい。

> 私は、はっきりとしていて、不安定で頑固な、第三の意味を読み、受け取る（おそらく第一の意味のなかにさえも）。私は、そのシニフィエが何であるのかわからず、少なくともそれを名づけることができないものの、そうであるからには不完全であるところのこの記号を構成するシニフィアンとなる特徴やシニフィアンの偶発的生起についてはたしかに見ている。［…］私はこの第三の意味の読み取りが根拠づけられているのかどうか――その読み取りを一般化できるかどうか――わからない。しかしすでに、そのシニフィアン（記述するとは言わないまでも私が語ろうと試みた諸々の特徴）は理論的な個別性を持っているように思われる。というのも、一方で、それは、［当該の］場面が単純にそこに存在することとは混同し得ず、指示対象となるモチーフのコピーを超えており、疑問を投げかけるような読み取りを強制するからである（疑問はまさしく、シニフィエではなくシニフィアンに関してであり、知性の働きではなく読み取りに関してであり、つまりそれは「詩的な」把握である）。また、他方で、それは、挿

話の劇的な意味とも混同されない。［…］[73]

第一の点として、「鈍い意味」は、そのシニフィアンの生起（そのシニフィアンとなる特徴）に関しては明瞭に感知することができる。「鈍い意味」のシニフィアンに該当する諸々の要素は、この引用ではそれらが列挙されている箇所を省略したが（一つ目の省略部分）、イワンの臣下たちの白粉の密度（一方の厚くて大げさな白粉、他方の滑らかで上品な白粉）、彼らの顔の形状（一方の間の抜けたような鼻、他方の眉のすっきりとした輪郭）、臣下の一人が醸し出す色彩（色がくすんだ金髪の黄金色、白く萎えた顔色）、等々である。「鈍い意味」においては、こうしたシニフィアンに対応するべきシニフィエを名づけることができない。「鈍い意味」に対する「はっきりとしていて、不安定で頑固な（évident, erratique et têtu）」という一見矛盾した記述の内実は、「鈍い意味」のシニフィアンの生起は明瞭かつ執拗であるがそれがシニフィエとして定着しないことであると理解できる。

この点からうかがえるのは、「鈍い意味」は概念化（カテゴリー化）できる対象として明確に位置づけることができないこと、すなわち分類することができないということである。バルトは「鈍い意味」を、「シニフィエのないシニフィアン（signifiant sans signifié）」と呼び換え[74]、メタ言語（métalangage）を混乱させる要素として[75]、あるいは「変奏も展開もないテーマ（[t]hème sans variations ni développement）」として提示し[76]、またその鈍さを「漂流

---

[73] « Je lis, je reçois (probablement même, en premier), évident, erratique et têtu, un troisième sens. Je ne sais quel est son siginifié, du moins je n'arrive pas à le nommer, mais je vois bien les traits, les accidents signifiants dont ce signe, dès lors incomplet, est composé [...] Je ne sais pas si la lecture de ce troisième sens est fondée – si on peut la généraliser –, mais il me semble déjà que son signifiant (les traits que je viens de tenter de dire, sinon de décrire) possède une individualité théorique ; car, d'une part, il ne peut se confondre avec le simple *être-là* de la scène, il excède la copie du motif référentiel, il contraint à une lecture interrogative (l'interrogation porte précisément sur le signifiant, non sur le signifié, sur la lecture, non sur l'intellection : c'est une saisie « poétique ») ; et d'autre part, il ne se confond pas non plus avec le sens dramatique de l'épisode [...] », Barthes, « Le troisième sens », p. 487. 邦訳 75 頁。

[74] 「［…］鈍い意味はシニフィエのないシニフィアンである。そこに鈍い意味を名づける困難さがある。すなわち私の読み取りは、視覚イメージとそれの記述、定義とおおよその近似のあいだで宙吊りになっているのである。もし鈍い意味を記述できないとすれば、それは自明な意味とは反対に、鈍い意味が何も写していないからである。何も表象していないものをどのように記述すれば良いのか？」« [...] le sens obtus est un signifiant sans signifié ; d'où la difficulté à le nommer : ma lecture reste suspendue entre l'image et sa description, entre la définition et l'approximation. Si l'on ne peut décrire le sens obtus, c'est que, contrairement au sens obvie, il ne copie rien : comment décrire ce qui ne représente rien ? », Barthes, « Le troisième sens », p. 500. 邦訳 88 頁。

[75] 「要するに、鈍い意味が乱し不毛にするもの、それはメタ言語（批評）である。」« En somme, ce que le sens obtus trouble, stérilise, c'est le métalangage (la critique). », Barthes, « Le troisième sens », p. 500. 邦訳 89 頁。

[76] 「変奏も展開もないテーマ［…］、鈍い意味は、現われたり見えなくなったりすることによってしか動くことができない。［…］」« Thème sans variations ni developpement [...] le sens obtus ne peut se mouvoir qu'en apparaissant et disparaissant [...] », Barthes, « Le troisième sens », p. 502. 邦訳 91 頁。

（dérive）」[77]と形容しているが、端的に言えば「鈍い意味」とは、分類活動から逃れる意味なのである。

第二の点として、「鈍い意味」のシニフィアンは、「場面が単純にそこに存在すること（simple *être-là* de la scène）」、すなわちエイゼンシュテインによる虚構の物語のなかであっても写真に撮影された場面が実際に存在している（存在していた）こととは混同し得ない。このシニフィアンは、シニフィエを伴わないものの指示対象（の存在）を直接的に参照するのではない（論文「現実効果」で問題になっていた無意味な細部とは異なる）。指示対象を参照しないということではなく（指示対象への参照そのものが否定されているわけではないと思われる）、指示対象への参照を目的とするのではないこと、あるいは少なくとも指示対象への直接的な参照を行なうのではないこと、この点をバルトは、「鈍い意味」が有する「反‐自然の効果（effet de contre-nature）」と呼んでいる[78]。

指示対象の存在よりも注目すべきなのは、「鈍い意味」の受け手（バルト）の存在である。「鈍い意味」は、それにバルトが与えた定義のなかで[79]、「補足（supplément）」と形容されている。つまり「鈍い意味」は、写真の映像にあらかじめ存在していながらバルトによって付け足されるのであり、「鈍い意味」のこの逆説的なステータスをこそ押さえておくべきだろう。さらにまたバルトは、「鈍い意味」の読み取りを一般化できるかどうかわからないと告げているが、むしろ実際のところ彼は、「鈍い意味」の読み取りを「錯誤（aberration）」にさえ結びつけている[80]、別の言い方をすれば写真の映像を分析するにあたって「錯誤」を

---

[77] Barthes, « Le troisième sens », p. 498. 邦訳 86 頁。

[78] 「[…] 鈍い意味は不連続的で、物語内容や（物語内容が持つ意味作用としての）自明な意味とは無関係である。こうした分離は、反‐自然の効果あるいは少なくとも指示対象（写実主義的な審級、自然としての「現実」）に対して距離を取るという効果を持っている。エイゼンシュテインならばおそらく、シニフィアンのこのような非‐適合性や非‐関与性を引き受けたことだろう。[…]」« [...] le sens obtus est discontinu, *indifférent* à l'histoire et au sens obvie (comme signification de l'histoire) ; cette dissociation a un effet de contre-nature ou tout au moins de distancement à l'égard du référent (du « réel » comme nature, instance réaliste). Eisenstein eût probablement assumé cette in-congruence, cette im-pertinence du signifiant [...] », Barthes, « Le troisième sens », p. 500. 邦訳 89 頁。

[79] 「自明な意味」を定義したあとでバルトは、次のように述べている。「もうひとつの意味、第三の意味、私の知性の働きがうまく吸収するに至らない補足のように、「余分に」やって来る意味、頑固であると同時に捉えどころがなく、滑らかであると同時に逃れ去った意味については、私はそれを鈍い意味と呼ぶように提案する。」« Quant à l'autre sens, le troisième, celui qui vient « en trop », comme un supplément que mon intellection ne parvient pas bien à absorber, à la fois têtu et fuyant, lisse et échappé, je propose de l'appeler le *sens obtus*. », Barthes, « Le troisième sens », p. 488. 邦訳 76-77 頁。

[80] 「[…] 鈍い意味は、構造的には位置づけられない。[…] そして鈍い意味が私には（まさに私には）はっきりしているのは、おそらく、まだ（今のところ）、孤独で不幸なソシュールに、古詩において、謎めいていて起源がなく心に付きまとう声、アナグラムの声を聴くことを余儀なくさせていたのと同じ「錯誤」によるのだろう。鈍い意味を記述する際にも同じ不確かさがある。

自ら進んで介入させているのであり、ここでバルトが「錯誤」を伴って写真の映像にアプローチしていることも押さえておきたい。

「鈍い意味」が旨とするのは、「意味の場（champ du sens）」を「無限に（infiniment）」開くこと[81]、あるいは「言語活動の無限に向かって開いている（ouvrir à l'infini du langage）」[82]というその性質を最大限に活かすことであると言える。私たちは、こうした展望のもとで分類活動から逃れる「鈍い意味」の在り方を、提喩的意味作用の射程を示す在り方として捉えたい。

たしかに、「鈍い意味」は「意味作用」のレベルではなく「意味形成性」のレベルに属すると規定されている。先の第 1 章で確認したとおりバルトは、そのテクスト理論において、「意味形成性」の概念とともに絶え間ない変転を通じた換喩的な意味の増殖を称揚していた。しかし、論文「第三の意味」で記述されている「意味作用」とは、ひとつの観点から、すなわちバルトが述べるところの「象徴のレベル」から取り上げられているにすぎず、提喩的意味作用の働き（カテゴリー間の関係性に基づく第二次の意味作用の働き）をカヴァーしているのではない。また、「意味形成性」の概念を提唱したクリステヴァによれば、「意味形成性」の現われは、意味を構成する諸々の要素が集まる「領域（zone）」（端的に言えば意味の「領域」）にまで及ぶのであり[83]、この「領域」は、換喩的な意味の変転によって具

［…］」« [...] le sens obtus n'est pas situé structuralement [...] et s'il m'est évident (à moi), c'est peut-être *encore* (pour le moment) par la même « aberration » qui *obligeait* le seul et malheureux Saussure à entendre une voix énigmatique, inoriginée et obsédante, celle de l'anagramme, dans le vers archaïque. Même incertitude lorsqu'il s'agit de *décrire* le sens obtus [...] », Barthes, « Le troisième sens », p. 500. 邦訳 88 頁。

[81] 「［…］第三の意味は、意味の場を全面的に、すなわち無限に開くように思われる。［…］」« [...] il [le troisième sens] me paraît ouvrir le champ du sens totalement, c'est-à-dire infiniment [...] », Barthes, « Le troisième sens », p. 488. 邦訳 77 頁。

[82] Barthes, « Le troisième sens », p. 488. 邦訳 77 頁。

[83] 「意味形成性」にクリステヴァが与えた定義は必ずしも明瞭であるようには思われないが、少なくとも「意味形成性」の現われが意味の「領域」にまで及ぶことはわかる。クリステヴァは、言葉（パロール）の「表層（surface）」にテクストが穿つ「垂直線（verticale）」に「意味形成性」の複数存在するモデル（modèles）が探し求められると想定し、その鍵がテクストによるシニフィアンへの働きかけにあるという旨を述べた直後の箇所で、「意味形成性」を次のように定義している。「われわれは、言語体系［／ラング］において実践され、また、語る主体の線上に、コミュニケーションに資する文法的に構造化された意味の連鎖を置くところの、差異化、成層化、突き合わせのこうした働きを、意味形成性［という用語］によって指し示すことにしよう。意味形成性およびその諸々のタイプをテクストにおいて研究するであろう記号分析はしたがって、主体および記号とともにあるシニフィアンを横断し、言説の文法的な組織をも同様に横断しなければならないことになり、その結果として言語体系［／ラング］の存在において意味を生成してゆく諸々の萌芽が集まるこの領域に到達するのである。」« Nous désignerons par *signifiance* ce *travail* de différenciation, stratification et confrontation qui se pratique dans la langue, et dépose sur la ligne du sujet parlant une chaîne signifiante communicative et grammaticalement structurée. La *sémanalyse* qui étudiera dans le *texte* la signifiance et ses types, aura donc à traverser le signifiant avec le sujet et le signe,

現化されるに至ると考えられるが、それだけでなく、むしろ文字通りのかたちでは諸々の要素がグループを形成するという、提喩的関係性（カテゴリー間の関係性）につながるクリステヴァの知見を露わにしている。それゆえここでは、バルトが用いている「意味作用」という用語そのものにこだわることなく、「シニフィエのないシニフィアン」として、すなわちそのようなかたちでの記号の一様態として提示されている「鈍い意味」が、分類活動から逃れながらも意味の「領域」を形成することで提喩的意味作用の射程を照らし出していることを示したい。

そのために、先に取り上げたバルトの写真論「映像のレトリック」を参照しよう。パンザーニ社の広告の写真からバルトは、「イタリア性（italianité）」や「豊かさ（abondance）」、あるいはまた「食事の準備（préparation culinaire）」や「静物画（nature morte）」といった「コノテーションのシニフィエ（signifiés de connotation）」を抽出していたとともに、そうした「コノテーションのシニフィエ」は包括的なカテゴリーとして存在していた。

ここで取り上げるのは、バルトが、「コノテーションのシニフィエ」に対応する「コノテーションのシニフィアン（signifiants de connotation）」ないし「コノテーター［／共示体］（connotateurs）」、それらを「レトリック（rhétorique）」として分類することを念頭に置きながらも[84]、その「不安定な（erratiques）」性質を重要視していることである。「コノテーター」を分類する見通しについて言及した直後の箇所で、バルトは次のように述べている。

> しかしながら少なくともさしあたり最も重要なのは、諸々のコノテーターの目録を作ることではなく、それらが映像全体において不連続な特徴を、あるいはまたより正確には、不安定な特徴を構成していることを理解することである。諸々のコノテーターはレクシ［読み取りの単位］全てを満たしはせず、諸々のコノテーターの読み取りがそれをくみ尽くすことはない。さらに言い換えれば（これは記号学一般にとって有効な命題だろう）、レクシのあらゆる要素がコノテーターに変わるということはできず、言説にはかなりのデノテーションが残るのであり、デノテーションなしではまさに言説は不可能だろう。［…］パンザーニの広告においては、地中海的野菜、色彩、構図、

---

de même que l'organisation grammaticale du discours, pour atteindre cette zone où s'assemblent les *germes* de ce qui *signifiera* dans la présence de la langue. », Julia Kristeva, « Le texte et sa science », in *Sêméiôtikê. Recherches pour une sémanalyse*, Seuil, 1969, p. 9（「テクストとその科学」、『記号の解体学――セメイオチケ 1』、原田邦夫訳、せりか書房、1983 年、10 頁）.

[84] バルトが「コノテーションのシニフィアン」を「コノテーター」と呼び、また「コノテーターの集まり（ensemble des connotateurs）」を「レトリック」という用語のもとで分類することを念頭に置いていた点の詳細については、当該の論文「映像のレトリック」からの引用文を検討するかたちですでに第 1 章第 4 節で取り上げているため、その箇所を参照のこと。

豊富さそのものが、まるで不安定なブロックのように現われており、それら諸々のブロックは、孤立していると同時に、固有の空間と［すでに］見たようにその「意味」とを持つ場面一般のなかにはめ込まれている。つまりそれらは、自身の連辞ではなくデノテーションのそれである連辞のなかに「捉えられて」いるのである。[85]

「コノテーター」（「コノテーションのシニフィアン」）が「不安定な」性質を有することは、あくまでコノテーションとデノテーションの均衡という観点のもとで述べられている。先に見たようにその均衡とは、広告の写真の場合、付加的意味でありかつ包括的カテゴリーである「コノテーションのシニフィエ」を導く提喩的意味作用として感知できるコノテーションは存在するものの、デノテーションの影響力の方が強いというかたちでの均衡である。

このように論文「第三の意味」とは異なるアプローチがなされているが、引用文において、「コノテーションのシニフィアン」としての諸々の要素、すなわち「地中海的野菜（légumes méditerranéens）」、「色彩（couleur）」、「構図（composition）」、「豊富さそのもの（profusion même）」といった諸々の要素が「不安定なブロック（blocs erratiques）」と形容されている点に注目したい。この点からわかるのは、それら諸々の要素がコノテーションのレベルで、ある一定の意味のグループないし意味の「領域」（いわば意味グループないし意味領域）を形成しているということである。

「地中海的野菜」をはじめとした諸々の要素は、デノテーションの影響力から「不安定な」意味グループしか形成し得ないが、そのステータスに焦点を当てると、これらの要素は、「イタリア性」や「豊かさ」、あるいはまた「静物画」といった「コノテーションのシニフィエ」として命名されていないという状態を示している。つまり諸々の要素は、それ自体としては分類されておらず、「レトリック」というかたちで目録作成を行なう分類活動に加えて、「イタリア性」をはじめとした諸々の包括的なカテゴリーによる分類活動からも逃れているのである。この見地からすれば、「コノテーションのシニフィアン」が形成する

[85] « Le plus important toutefois du moins pour le moment ce n'est pas d'inventorier les connotateurs, c'est de comprendre qu'ils constituent dans l'image totale des *traits discontinus* ou mieux encore : *errratiques*. Les connotateurs ne remplissent pas toute la lexie, leur lecture ne l'épuise pas. Autrement dit encore (et ceci serait une proposition valable pour la sémiologie en général) tous les éléments de la lexie ne peuvent être transformés en connotateurs, il reste toujours dans le discours une sertaine dénotation, sans laquelle précisément le discours ne serait pas possible [...] Dans la publicité *Panzani*, les légumes méditerranéens, la couleur, la composition, la profusion même surgissent comme des blocs erratiques, à la fois isolés et sertis dans une scène générale qui a son espace propre et, comme on l'a vu, son « sens » : ils sont « pris » dans un syntagme *qui n'est pas le leur et qui est celui de la dénotation*. », Barthes, « Rhétorique de l'image », pp. 587-588. 邦訳 45 頁。

「不安定なブロック」とは、「コノテーションのシニフィエ」によって命名されない限り定着することのない意味の「領域」であると解釈できるのであり、当該の写真の映像に現われている「コノテーションのシニフィアン」とは、「シニフィエのないシニフィアン」の一様態であると見なせる。無論、諸々の意味の「領域」は「イタリア性」等々のカテゴリーによって命名されて定着するに至る。しかし、「コノテーションのシニフィアン」となる諸々の要素は、それ自体としては、「コノテーションのシニフィエ」によって命名されずとも何らかのグループ（野菜のグループ、色彩のグループ、構図のグループ、豊富な（とさしあたり言えるくらいの）量のグループ）というかたちで意味の「領域」を示している。そうした諸々の要素は、「類」を持たずとも潜在的にはそれを求心力にしながら諸々の「種」として集まることで意味の「領域」を形成してゆくという点で、提喩的関係性（カテゴリー間の関係性）に貫かれているのである。

「鈍い意味」を構成する諸々の要素（シニフィアン）は、その延長線上にあると捉えることができる。「鈍い意味」は、シニフィエが定着しないシニフィアンによって形成される「不安定なブロック」として把握できるのである。イワンの臣下たちの白粉の密度（一方の厚くて大げさな白粉、他方の滑らかで上品な白粉）、彼らの顔の形状（一方の間の抜けたような鼻、他方の眉のすっきりとした輪郭）、臣下の一人が醸し出す色彩（色がくすんだ金髪の黄金色、白く萎えた顔色）といった諸々の要素は、（複数の）「不安定なブロック」を形成している（白粉の密度のブロック、顔の形状のブロック、色彩のブロック）。これらの集合は、「類」を持たない「種」のグループとして、提喩的関係性が特異なかたちで展開された意味の「領域」として存在していると考えられる。原理的には、シニフィエによって定着することのないシニフィアンのこうしたグループ（いわば集合体）は、「意味の場」を際限なく開くことにつながるだろう。

分類活動から逃れる「鈍い意味」は、カテゴライズされずともカテゴリー間の関係性が特異なかたちで現われる意味の「領域」を体現する。この点が提喩的意味作用の射程を示しているのである。

5-2. 提喩的意味作用を活かした「現実」と「真実」の「混合」――『明るい部屋』

提喩的意味作用の射程は、バルトの生前最後の著作となった『明るい部屋』（1980 年）にまで広がっている。その射程は、カテゴリー間の関係性が特異なかたちで展開される意味の「領域」という点とは別の様相のもとで見て取れる。それは、本章において、バルトの神話分析をはじめとして、彼の記号論的な写真論および写真の現実表象が念頭に置かれた言語論を通じて私たちが浮き彫りにしてきた彼の「混合」の実践である。バルトが最後に

残した写真論である『明るい部屋』における彼の「混合」の操作は、この写真論の帰着点そのものに直結しているだけでなく、この「混合」の実践には、本章でこれまで検討してきた数々の「記号体系」の現実表象に対する彼の取り組みの蓄積が凝縮されている。

『明るい部屋』では様々な写真家による作品が取り上げられており、またそもそもこの著作は複数的な面から成り立っているが（とりわけ最愛の母を失った喪の悲しみ）[86]、提喩的意味作用の射程を示す「混合」の実践として把握できる論点に的を絞って、この実践の内実に迫ってゆきたい。

そのための前提として、いくつかの点を押さえておく必要がある。最初に、『明るい部屋』で提示されている「ストゥディウム（studium）」と「プンクトゥム（punctum）」の区別を取り上げよう（10 番目のセクション）。「ストゥディウム」は、写真の映像において文化の枠組みから認識することができる要素、あるいは「一般的関心（intérêt général）」に基づく要素である（11 番目のセクションでは、「気楽な欲望、多様な関心、無定見な好みのきわめて広い場（champ très vaste du désir nonchalant, de l'intérêt divers, du goût inconséquent）」と呼ばれている）。「プンクトゥム」は、「ストゥディウム」を「乱す（déranger）」とともに、写真の映像から矢のように発してバルトを「刺し貫く（percer）」要素であり（「刺し傷（piqûre）」、「小さな穴（petit trou）」等々と呼ばれている）、あるいはまた、彼を「突き刺す（poindre）」ところの「偶然（hasard）」と形容されている。

確認しておきたいのは、「プンクトゥム」の特徴についてである。「プンクトゥム」は、写真の「細部（détail）」に宿る（18 番目のセクション）。同時に、それは「名づける（nommer）」ということができないとともに、その効果（effet）は「ゆらめく閃光（éclair qui flotte）」のようなものである（22 番目のセクション）。こうした性質から、「プンクトゥム」が先に検討した「鈍い意味」と親近性を持っていることがうかがえる（「ストゥディウム」に関しても、それが「自明な意味」の延長線上にあると考えることができる）。「プンクトゥム」の特徴は、「補足（supplément）」として存在していること、すなわち、写真の映像にあらかじめ存在していながらバルトによって付け足されるという逆説的なステータスを有していることにあり[87]、この点に「鈍い意味」との共通性がはっきりと見て取れる。「プンクトゥム」

---

[86] 『明るい部屋』が、写真の「本質」（「ノエマ」）を探求する「現象学的写真論」であるとともに、その探求のプロセスを語る一種の「自叙伝」ないし「小説」、あるいはまた、喪の悲しみを語る「亡き母に捧げられた鎮魂の書」であるという、この著作の基本的な枠組みについては、花輪が的確に整理している。Cf. 花輪『ロラン・バルト——その言語圏とイメージ圏』、233-241 頁。

[87] 「[…] それ［プンクトゥム］は標定されていてもいなくとも、補足的なものである。すなわちプンクトゥムは、私が写真に付け加えるものであり、またそれにもかかわらずすでにそこに存在するものである。」« [...] qu'il [le punctum] soit cerné ou non, c'est un supplément : c'est ce que j'ajoute à la photo et *qui cependant y est déjà*. », Roland Barthes, *La Chambre claire. Note sur la*

のこうした特徴は、『明るい部屋』における写真へのバルトのアプローチを個人色の強いものにする要因のひとつになっていると言える。

そのうえで『明るい部屋』の中核を成す議論に目を向けると、この著作の前半部分にあたる第 1 部（最初のセクションから 24 番目のセクションまで）においては、「ストゥディウム」と「プンクトゥム」を軸にして論述が進められているが、第 1 部の末尾（24 番目のセクション）でバルトは、自身の考察が写真の特殊性を捉えきれていないと見なし、より深く彼自身の個人的体験に基づくべきであるという方針を取る[88]。そしてバルトは、後半部分にあたる第 2 部（25 番目のセクションから最後のセクションまで）において、いわゆる「温室の写真（Photographie du Jardin d'Hiver）」（少女の頃のバルトの母を写した写真）について語ることになる。

ほかの写真（バルトの母を写したほかの写真）とは異なる「温室の写真」（この写真は掲載されていない）、バルトによればその写真は、顔の明るさ（clarté）や手のポーズなどを通じて、彼の母の善良さ（bonté）や優しさ（douceur）、あるいはまた至高の純真無垢さ（innocence souveraine）を示しており、「真実（vérité）」を帯びた「本質的な（essentielle）」写真である（28 番目のセクション）。「温室の写真」は、類似性（ressemblance）に依拠してバルトの母（の存在）を同定しその同一性（identité）を保証しているのではない（存在の再認が目指されているのではない）。言い換えれば、バルトが知らない少女の頃の母を写していることから彼女に似ていないとすら言える「温室の写真」は、本人として（en tant que lui-même）認識することができる彼の母ではなく、バルトにとって「それ自身そのもののような［／あるがままの］（tel qu'en lui-même）」と感じられる彼の母を写している（42 番目のセクション）。

『明るい部屋』の第 2 部は、バルトが亡き母の写真を整理することから開始される（25 番目のセクション）。その出発点において、第 1 部で導入された「プンクトゥム」は、バルトが「温室の写真」にたどり着く手助けをしていると言える。というのも、27 番目のセクションで語られているように、バルトは母の同一性の「本質（essence）」を体現する写真を見出せずにいたものの、バルトをその「本質」に導いたのが、彼を満足させることのない写真においても存在する母の眼の「明るさ（clarté）」という、（バルトにとって）「一般的関

---

photographie (1980), in *Œuvres complètes*, t. V (1977-1980), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 833（『明るい部屋――写真についての覚書』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1997 年（初版 1985 年）、68 頁）.

[88] 「私は「写真」の明証性を見出すために、私自身のなかにいっそう深く降りてゆかなければならなかった。［…］」« Je devais descendre davantage en moi-même pour trouver l'évidence de la Photographie [...] », Barthes, *La Chambre claire*, p. 836. 邦訳 72 頁。

心」（「ストゥディウム」）には還元できない「細部」にほかならないからである[89]。

「温室の写真」を手がかりにしてバルトは、写真の「本質（essence）」を改めて探求し、次のような定義を提示する（「本質」という用語の原文表記を再び挙げた理由は、バルトの探求が個人色の強いものであることを示すためである）。写真の「本質」（「ノエマ（noème）」）とは「それは - かつて - あった（Ça-a-été）」あるいは「手に負えないもの（Intraitable）」であり、写真を基礎づけるのは「芸術（Art）」でも「コミュニケーション（Communication）」でもなく「指示機能［／現実参照］（Référence）」にある、という定義である（32 番目のセクション）。

バルトは、「意味作用」のプロセスを前景化した 1960 年代の記号論的な写真論での場合とは異なり、「記号体系」としての写真の特殊性をその「指示機能」（現実の場面を直接的に示すないしはそれを忠実に反映する機能）のうちに見たのであり、ここでは明らかに、写真の「意味作用」ではなくその「指示機能」が問題になっている[90]。しかし、先に検討したとおり（写真の「コノテーション」はその「デノテーション」によって覆い隠される）、提喩的意味作用の働きは必ずしも際立ったかたちでは現われないのであり、表面上明らかでなくとも、提喩的意味作用の痕跡をたどることは可能であると思われる。私たちが示したいのは、写真の特殊性に対する探求としてはこの定義に収斂されると言える『明るい部屋』におけるバルトの論述の要点となっているのがほかならぬ「混合」の実践であること、

---

[89] 「しかしながら、母のそうした写真［「温室の写真」ではない諸々の写真］においては、あるひとつの運命づけられ保護された場が常に存在した。すなわち、母の眼の明るさである。さしあたりそれは、完全に物理的な明度、母の瞳の緑がかった青という色彩が写真に写った跡にすぎなかった。しかしその光はすでに一種の媒介だったのであり、私を本質的な同一性の方へ、私が愛した母の顔の精髄へと導いたのであった。」« Pourtant, il y avait toujours dans ces photos de ma mère une place réservée, préservée : la clarté de ses yeux. Ce n'était pour le moment qu'une luminosité toute physique, la trace photographique d'une couleur, le bleu-vert de ses prunelles. Mais cette lumière était déjà une sorte de médiation qui me conduisait vers une identité essentielle, le génie du visage aimé. », Barthes, *La Chambre claire*, p. 843. 邦訳 80 頁。

[90] 無論、「記号体系（système sémiologique）」（神話分析での用語）ないし「記号の体系（systèmes de signes）」（1960 年代の写真論での用語）という写真のステータスが失われるのではない。写真の特殊性に対する定義がなされた 32 番目のセクションでバルトは、次に挙げるように、写真における指示対象について説明しているが、問題になっているのは「記号体系」としての写真の現実表象の在り方である。「私はまず、どのような点で「写真」の「指示対象」がほかの表象の体系のそれとは異なっているのかということを正確に理解し、したがって、できればそのことを（たとえ単純な事柄であっても）正確に述べなければならなかった。私が「写真の指示対象」と呼ぶのは、映像ないし記号が指示する事物であるが、任意のかたちで現実であるという事物ではなく、カメラのレンズの前に置かれた必ず現実であるという事物であり、それがなければ写真は存在しないだろう。」« Il me fallait d'abord bien concevoir, et donc, si possible, bien dire (même si c'est une chose simple) en quoi le Référent de la Photographie n'est pas le même que celui des autres systèmes de représentation. J'appelle « référent photographique », non pas la chose *facultativement* réelle à quoi renvoie une image ou un signe, mais la chose *nécessairement* réelle qui a été placée devant l'objectif, faute de quoi il n'y aurait pas de photographie. », Barthes, *La Chambre claire*, p. 851. 邦訳 93 頁。

また、その「混合」の実践において、彼が「記号体系」の現実表象の在り方に取り組んできた蓄積とともに（同時にまたその蓄積のひとつとして）提喩的意味作用が活かされていることである。

今しがた確認したバルトによる写真（の「本質」）の定義は『明るい部屋』の出発点での見解を「新たに（à neuf）」提示したものにほかならないという点が、32 番目のセクションの冒頭で述べられていることに注目したい。

> 最初に方法という口実のもとに、気軽に指摘しておいたこと、すなわち、あらゆる写真はその指示対象に対していわば共 - 自然的である点、私はそのことを再び、新たにと言うべきか、映像の真実を伴って発見していた。それゆえ私は、いまや二つの声を混ぜ合わせることを是認しなければならなかった。つまり、平凡さの声（誰もが見知っていることを述べること）および単独さの声（その平凡さを私だけのものである感動に備わる衝動［／躍動］を尽くして離礁させること）である。[91]

写真はその指示対象（référent）に対して「共 - 自然的（co-naturelle）」である、すなわち写真の特徴は被写体を指示する（直接的に示す）ことにあるとする見解は、『明るい部屋』の出発点で取り上げられたものである（2 番目のセクションでその旨が述べられている）。写真の特殊性が定義された 32 番目のセクションでは、この見解が単に繰り返されているのではなく、「温室の写真」を通じた「真実」とともに提示されているのである。その内実は、『明るい部屋』の出発点で取り上げられた常識的な観点（「平凡さ（banalité）」）と「温室の写真」が帯びる「真実」に基づく観点（「単独さ（singularité）」）とを「混ぜ合わせる（mêler）」ことによって、ともすれば自明なこととして埋没しかねない写真の「指示機能」を「新たに」前景化することにある。言い換えれば、「それは - かつて - あった」という事実が、「真実」に由来する「手に負えないもの」と形容されているステータスをまとったかたちで、「新たに」提示されているのである。ここでは、相異なる観点を「混ぜ合わせる」というバルトによる「混合」の実践が見て取れる。

この「混合」の実践は、32 番目のセクションの末尾において、提喩的意味作用の応用と呼べる点が感知できるかたちで現われている。バルトは、写真の「指示機能」がその自明

[91] « Ce que j'avais remarqué au début, d'une façon dégagée, sous couvert de méthode, à savoir que toute photo est en quelque sorte co-naturelle à son référent, je le découvrais de nouveau, à neuf, devrais-je dire, emporté par la vérité de l'image. Je devais donc, dès lors, accepter de mêler deux voix : celle de la banalité (dire ce que tout le monde voit et sait) et celle de la singularité (renflouer cette banalité de tout l'élan d'une émotion qui n'appartenait qu'à moi). », Barthes, *La Chambre claire*, pp. 850-851. 邦訳 92-93 頁。

さから無関心（indifférence）のもとにさらされかねないと述べつつも、「温室の写真」がそうした無関心から彼自身を目覚めさせる（réveiller）ことになったと告げた直後の箇所で、次のように記述している。

> 通常は諸々の事物の存在を確認したあとでそれらが「真実である」と明言するわけであるから、逆説的な順序にしたがって、ある新しい経験、強度に属する経験の効果のもとで、私は映像の真実から、その映像の起源にある現実［／現実性］を帰納して導き出したことになる。私は独自の感動のなかに真実と現実［／現実性］を混合させたのであり、いまや私はその点に「写真」の本質―精髄―を位置づけたのである。［…］[92]

バルトは、「温室の写真」の「真実」からその「現実［／現実性］（réalité）」を引き出すことを、「真実」および「現実」を一体化させることとして捉えており、ほかならぬ「混合」の操作が、写真の「本質」に対するバルトの探求の要点になっていることがわかる。

この引用文での「混合」の実践に提喩的意味作用の応用を見るのは、次の理由による。引用文での「混合」の実践は、「強度（intensité）」に基づく「ある新しい経験の効果のもとで（sous l'effet d'une expérience nouvelle）」、「真実」と「現実」とをひとまとめにすること、言い換えれば、「独自の感動のなかに（dans une émotion unique）」、「真実」と「現実」とを含めることとして解釈することが可能であり、そうしたかたちでグルーピングの操作が行なわれていると見なせるからである。39 番目のセクションでは、このグルーピングの操作がカテゴリー間の関係性を背景にしていることが露わになっており、そのセクションでは、「強度」が写真の「細部」とは別の観点から記述される「プンクトゥム」としての「時間（Temps）」の基盤になっているとともに[93]、「温室の写真」を目の前にしてバルトは、「過去（passé）」（彼の母はすでに亡くなっている）と「未来（futur）」（彼の母はこれから亡くな

---

[92] « Suivant un ordre paradoxal, puisque d'ordinaire on s'assure des choses avant de les déclarer « varaies », sous l'effet d'une expérience nouvelle, celle de l'intensité, j'avais induit de la vérité de l'image, la réalité de son origine ; j'avais confondu vérité et réalité dans une émotion unique, en quoi je plaçais désormais la nature – le génie – de la Photographie [...] », Barthes, *La Chambre claire*, p. 852. 邦訳 95 頁。

[93] 「いまや私は、「細部」とは別のプンクトゥム（別の「傷の跡」）が存在することを知っている。もはや形式にではなく強度に属するこの新しいプンクトゥムとは、「時間」であり、それは、ノエマ（「それは - かつて - あった」）の悲痛な強調であり、その純粋な表象である。」« Je sais maintenant qu'il existe un autre *punctum* (un autre « stigmate ») que le « détail ». Ce nouveau *punctum*, qui n'est plus de forme, mais d'intensité, c'est le Temps, c'est l'emphase déchirante du noème (« *ça-a-été* »), sa représentation pure. », Barthes, *La Chambre claire*, p. 865. 邦訳 118 頁。

ろうとしている）の「等価関係［／等価性］（équivalence）」を見る[94]。このことをバルトは「時間」の「圧縮（écrasement）」と形容しており、つまり彼は、「時間」というカテゴリーのもとで、「過去」と「未来」をひとまとめにしているのである。

このように提喩的意味作用の応用が見られる「真実」と「現実」の「混合」の操作、この実践がバルトによる写真の「本質」に対する探求（写真の現実表象の在り方に対するアプローチ）の要点となっていることは、バルトが写真の映像を「狂気の地点（point fou）」に近づけていることからも読み取れる（46 番目のセクション）。

> ［…］「完全な真実の写真」を見出したと私に信じさせることによって（それはたしかであるが、何度に一度だろうか？）、「写真」は現実（「それはかつてあった」）と真実（「それだ！」）との前代未聞の混同を果たす。「写真」は、事実確認的であると同時に感嘆詞的なものとなり、情動（愛、憐憫、喪の悲しみ、衝動、欲望）がその存在の保証となるあの狂気の地点に、肖像を運ぶのである。[95]

この引用文においては、「現実」（「それはかつてあった（*cela a été*）」）と「真実」（「それだ！（*C'est ça !*）」を一体化させる操作が「混同（confusion）」と呼ばれている。その理由は、写真の「真実」が「情動（affect）」を原動力とする「狂気の地点」として捉えられているからである。「狂気の地点」は、この引用文の直後では端的に「狂気（folie）」と呼び換えられている。この引用文でバルトが述べている「狂気」とは、写真の「本質」であると定義さ

---

[94] バルトは、絞首刑を待つルイス・ペインを撮影したアレクサンダー・ガードナーによる写真をきっかけにして、次のように述べている（原文の 866 番目のページ全体がガードナーによる写真にあてられている）。「この写真［ガードナーが撮影した写真］は美しい。この青年もまた美しい。それがストゥディウムである。しかしプンクトゥム、それは、彼が死のうとしている、ということである。私は、それはこれからそうなるだろうおよびそれはかつてあった、ということを同時に読み取る。私は、死が賭けられている過去となった未来を恐怖とともに注視する。この写真は、ポーズの絶対的な過去（アオリスト［無限定過去］）を私に示すことによって、未来の死を私に告げているのである。私を突き刺すもの、それは、この等価関係［／等価性］の発見である。子供だった母の写真を前にして、私はこう思う。彼女は死のうとしている、と。［…］」« La photo est belle, le garçon aussi : c'est le *studium*. Mais le *punctum*, c'est : *il va mourir*. Je lis en même temps : *cela sera* et *cela a été* ; j'observe avec horreur un futur antérieur dont la mort est l'enjeu. En me donnant le passé absolu de la pose (aoriste), la photographie me dit la mort au futur. Ce qui me point, c'est la découverte de cette équivalence. Devant la photo de ma mère enfant, je me dis : elle va mourir [...] », Barthes, *La Chambre claire*, pp. 865-867. 邦訳 119 頁。

[95] « [...] en me donnant à croire (il est vrai, une fois sur combien ?) que j'ai trouvé « la vraie photographie totale », elle [la Photographie] accomplit la confusion inouïe de la réalité (« *cela a été* ») et de la vérité (« *C'est ça !* ») ; elle devient à la fois constative et exclamative ; elle porte l'effigie à ce point fou où l'affect (l'amour, la compassion, le deuil, l'élan, le désir) est garant de l'être. », Barthes, *La Chambre claire*, p. 880. 邦訳 138-139 頁。

れた「手に負えないもの」、「温室の写真」の「真実」に由来するこの「手に負えないもの」が可視化されている状態であると理解することができる。

33 番目のセクションでは、「現実のもの（le Réel）」と「生きているもの（le Vivant）」という二つの「概念（concepts）」の「倒錯的な混同（confusion perverse）」が「錯覚［／おとり］（leurre）」として記述されており、この「錯覚」もまた、写真における「手に負えないもの」が「混合」の実践を通じて可視化されている状態であると把握できる。そしてその記述には、提喩的意味作用の応用をはじめとして、数々の「記号体系」にアプローチしてきたバルトの蓄積が凝縮されていることがうかがえる。バルトは、死体を写した写真を「死んでしまったものの生きている映像（image vivante d'une chose morte）」と形容した直後の箇所で、次のように述べている。

> というのも、写真の静止状態は、「現実のもの」と「生きているもの」という二つの概念の倒錯的な混同の結果として存在しているからである。対象が現実のものであったことを証明することによって、写真はひそかに、対象が生きていると信じるように仕向けるのであるが、その理由は、われわれをして「現実のもの」に、永久に変わらないといったような完全に上位の価値を付与させてしまう錯覚［／おとり］にある。しかし写真は、この現実のものを過去の方へと逸らせながら（それはかつてあった）、それがすでに死んでしまっていることを示唆する。[96]

「倒錯的な混同」は、相異なるカテゴリー（「現実のもの」と「生きているもの」という二つの「概念」）を結び合わせるかたちで、提喩的意味作用を活かした「混合」の実践として把握することができる。なぜなら、提喩的意味作用を通じて相異なるカテゴリーを一体化させるという、私たちがこれまでに見た分析実践の蓄積を感知できるからである（神話分析での「フランス性と軍隊性の意図的な混合」、論文「映像のレトリック」での「現実的な非現実性」）。神話分析でのバルトによる「混合」の実践は、抽象的概念に限らない幅広い対象に応用されていた（雑多な具体的事象、「神話」が消費される様態）。『明るい部屋』においてバルトは、「真実」（「それだ！」）および「現実」（「それはかつてあった」）と呼ばれているところの、「温室の写真」に備わる抽象的概念というよりはむしろ具体的事象とし

[96] « Car l'immobilité de la photo est comme le résultat d'une confusion perverse entre deux concepts : le Réel et le Vivant : en attestant que l'objet a été réel, elle induit subrepticement à croire qu'il est vivant, à cause de ce leurre qui nous fait attribuer au Réel une valeur absolument supérieure, comme éternelle ; mais en déportant ce réel vers le passé (« *ça a été* »), elle suggère qu'il est déjà mort. », Barthes, *La Chambre claire*, p. 853. 邦訳 97 頁。

て想定されている相異なる二つの様態（ないしステータス）を結び合わせており、提喩的意味作用が応用される対象は決して狭くない。

見かけ上「コノテーション」ないし「第二次の記号体系（système sémiologique second）」（神話分析での用語）の読解という問題設定が前景化されていなくとも、「意味作用」の問題が存在している。この点が、『明るい部屋』における提喩的意味作用の射程を示していると言える。すなわち、写真の「指示機能」に対する定式化が明確になされていても、それは「新たに」というかたちでの定式化（端的に言えば再定式化）にほかならず、この再定式化には、カテゴリー間の関係性に基づく「意味作用」の働きへの注視に根ざしたバルトの分析実践の蓄積が活かされているのである。

また、この引用文には、現実に存在しているものおよび現実に存在していたものを指示する（直接的に示す）という表象の在り方に対するバルトのアプローチが集約されている。論文「現実効果」では、写実主義的なテクストおよび歴史のテクストがこのような表象を装っている点が明るみに出されていた。そこでバルトが指摘していたのは、「生きられたもの（le vécu）」（「生き生きとしているもの［／生きているもの］（le vivant）」）と「理解可能なもの（l'intelligible）」とのあいだの対立を背景にして、「生きられたもの」（「生き生きとしているもの」）を直接的に示す「純粋かつ飾り気がない（pure et simple）」現実表象が「意味に対する抵抗（résistance au sens）」として働いていることであった（論文「映像のレトリック」でも同様の問題提起が見られた）。論文「現実効果」によってもたらされた知見として、論文「映像のレトリック」においてもすでに示唆されていたが、こうした現実表象には「幻想（illusion）」が介在し得るのであり、バルトは、「現実のもの」と「生きているもの」の「倒錯的な混同」について記述することで、その点を明確にしているのである。

この「倒錯的な混同」が「錯覚」として記述されている点に、論文「第三の意味」での議論が反映されている。論文「第三の意味」でバルトは、「鈍い意味」の読み取りを「錯誤（aberration）」に結びつけていた。先に確認したように、「鈍い意味」と「プンクトゥム」には、写真の映像にあらかじめ存在していながらバルトによって付け足されるという共通性が存在するのであり、バルトは、現実の場面を直接的に示す表象の在り方に「倒錯的な混同」という観点を、自ら進んで介在させている、すなわち付け足しているのである（今しがた取り上げた引用文は 33 番目のセクションで述べられており、「プンクトゥム」によって導かれた「温室の写真」を通じた「手に負えないもの」が念頭に置かれている）。

写真の現実表象の在り方を「狂気」や「錯覚」に近づけること、この点は『明るい部屋』におけるバルトの論述の帰着点に位置しており、そこでは、「狂気」を含めた「手に負えないもの」のいくつかの現われ（と見なせる状態）が記述されている（「狂気の地点」という

用語を含んだ先に取り上げた引用文は 46 番目のセクションで述べられている)。被写体の過去における存在と現在における不在から「分裂した（partagée)」と形容されるところの、「知覚のレベルでは虚偽であるが時間のレベルでは真実である（fausse au viveau de la perception, vraie au niveau du temps)」という（新しい形（forme）の)「幻覚（hallucination)」（47 番目のセクション)、また、「手に負えない現実（intraitable réalité)」に対する否定的な意味合いが込められた呼び換えとしての「幻想（illusions)」(最後のセクションにあたる 48 番目のセクション）[97]、その両者はともに「手に負えないもの」の現われを示している。

『明るい部屋』においてバルトは、写真の「指示機能」を捉え直しつつ、映像の根源に位置する「現実」を、「狂気」や「錯覚」が体現する「手に負えないもの」として提示する。この『明るい部屋』の帰結は、「現実」と「真実」を一体化させる「混合」の実践とともにあり、また、バルトが行なう「混合」の実践には、数々の「記号体系」の現実表象に対する彼の取り組みが集約されており、その射程が露わになるかたちで提喩的意味作用が活かされているのである。

第 6 節　結論

提喩的意味作用（カテゴリー間の関係性に基づく第二次の意味作用）へのバルトの注視およびそれを活かした「混合」の実践は、バルトの記号論的テクストにおいて開花するのみならず、その射程は、1970 年代以降の写真論にまで広がっている。私たちは、提喩的意味作用を活かしたバルトによる「混合」の実践を検討することによって、意味作用のプロセスを前景化するというかたちでの分類活動として、また、分類活動にとどまらない現実表象への取り組みとして、彼の思考の在り方を明らかにした。

バルトは、彼の記号論的実践の出発点に位置する神話分析において、言語活動の類型性を念頭に置いて、意味作用のプロセスを可視化するかたちで、第一次での意味実践の様態を第二次の意味作用のレベルにおいてカテゴライズしていた。言い換えればこの分類活動は、提喩的意味作用を通じてなされていた。またバルトは、「神話」をもっぱら消費する受け手には見えない「記号体系」の存在およびそれに備わる意味作用のプロセスを明るみに出しながら、提喩的意味作用を通じて相異なる様々な要素を結び合わせる「混合」の実践

[97] 『明るい部屋』全体における最後の一文としてバルトは、次のように述べている。「写真が見せる光景を完璧な幻想として文化的なコードに従わせるか、あるいは写真のなかで手に負えない現実が覚醒することに向き合うのか、選ぶのは自分である。」« A moi de chosir, de soumettre son spectacle au code civilisé des illusions parfaites, ou d'affronter en elle le réveil de l'intraitable réalité. », Barthes, *La Chambre claire*, p. 885. 邦訳 146 頁。

を行なっていた。

1960 年代の記号論的な写真論では、もっぱら無意味さを示すように見える写真の現実表象の在り方に意味作用のプロセスが見出されていた。バルトは、分類活動の実践として、付加的意味としての「コノテーション」を伴わずにただ「デノテーション」のみが存在するというかたちで現われる第一次の意味作用、その様態を、提喩的意味作用としての「コノテーション」に基づいてカテゴライズしていた。そうした意味作用の様態は、論文「写真のメッセージ」では「写真の無意味性」としか名づけられていなかったものの、論文「映像のレトリック」においては、相異なるカテゴリーを結び合わせる「混合」の操作によって「現実的な非現実性」として明確化されていた。

写真の現実表象の在り方が念頭に置かれた記号論的な言語論である論文「現実効果」においては、指示対象の見かけ上の全能さのもとでもっぱら無意味さを示すかのような写実主義的なテクストおよび歴史のテクストの諸々の細部が発揮する意味作用の働きが、提喩的意味作用に基づいて「「現実」というカテゴリー」のもとで提示されていた。この「「現実」というカテゴリー」は、事実であることの全能さに支えられた指示対象とシニフィエの一体性とともに、両者が一体化しているように装われることを内包しており、このカテゴリーによって写実主義的なテクストおよび歴史的なテクストを通じてなされる現実参照が「現実」および「幻想」というかたちで相反する様態を伴っていることが、「現実」と「幻想」の「混合」の実践として明るみに出されていた。論文「現実効果」は、提喩的意味作用というかたちで意味作用の働きが前景化されつつ、指示対象を忠実に示すことを旨とする現実表象に「幻想」が介在し得るという観点をもたらしており、写真論ではないもののこの論文を本章における議論の結節点として位置づけることができる。

「デノテーション」と「コノテーション」の読み取りという問題設定が前景化されていない 1970 年代以降のバルトの写真論においては、写真の現実表象が「幻想」につながる点が意識的に取り上げられつつ、提喩的意味作用の射程が示されている。論文「第三の意味」では、その読み取りが「錯誤」に関連づけられていた「鈍い意味」を通じて、定着することのない意味の「領域」として、すなわち「類」を持たない諸々の「種」のグループとして、特異な提喩的関係性が提示されていた。バルトの生前最後の著作である『明るい部屋』においては、写真の「指示機能」（現実の場面を忠実に示す機能）が、「狂気」や「錯覚」に関連づけられるかたちで、「現実」と「真実」を一体化させる「混合」の実践を通じて再定式化されていた。この「混合」の実践には数々の「記号体系」へのアプローチの蓄積に基づいた提喩的意味作用の応用が見られたのであり、バルトは、初期から晩年に至るまで様々なかたちで、提喩的意味作用を活かした「混合」の実践を行なっていたのである。

第 3 章　提喩的意味作用と「体系」の問題

第 1 節　はじめに

『モードの体系』（1967 年）は、ファッションの言説（モード雑誌）における衣服に対する分類活動（体系化）の試みであり、1960 年代のバルトの代表的な著作である。構造言語学の記号論への応用として、『モードの体系』という記号論的分析が、ひとつの達成を示していることは疑いを容れない[1]。

現在まで、記号論の歴史にとっての、そしてバルトの活動における『モードの体系』の位置づけに対しては、それなりに注意が払われてきたと言える。この著作の前書きにおいて、記号論は言語学を包括しながらもその仕事は言語記号の意味作用に依拠している点で記号論の方が言語学の一部分であるとして、バルトがソシュールのスローガンを逆転させたことはよく知られており[2]、また『モードの体系』の衣服論としての緻密さは、1950 年代半ばから 1960 年代半ばにかけて行なわれた衣服分析に対してなされたバルトの方法論的考察[3]、言い換えれば、当時行なわれていた衣服分析に対するバルトの問題意識を反映していると見て良い[4]。

『モードの体系』は、イデオロギー批判の実践としての意義を有している。実際、刊行直後ただちに、ジュリア・クリステヴァが『モードの体系』について含蓄に富む議論を展開したが、そこで強調されたのは、「モード」が持つ合理、すなわち自然の体系（物質としての衣服）がレトリックの体系（衣服記述の様態という広い意味合いでのレトリック）に

---

[1] Cf. Driss Ablali et Dominique Ducard (dirs.), *Vocabulaire des études sémiotiques et sémiologiques*, Éditions Champion / Presses Universitaires de Franche-Compté, 2009, p. 111.

[2] Cf. Roland Barthes, *Système de la Mode* (1967), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 898-899（『モードの体系』、佐藤信夫訳、みすず書房、1972 年、7-8 頁）.

[3] その最初のものは、舞台俳優の衣装に関する論考であり（「舞台衣装の病い」、1955 年）、またとりわけ「今年はブルーが流行」（1960 年）は、モード雑誌の意味作用の在り方に焦点を当てている点で、『モードの体系』への準備段階にある考察と見なすことができる。なお、これらの論考については、バルトの衣服論を集めた次の日本語版のアンソロジーを参照することができる。ロラン・バルト『ロラン・バルト　モード論集』、山田登世子編訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2011 年。

[4] その代表的な例として挙げられるのは、ジョン・カール・フリューゲル（John Carl Flügel）を源流とするフランツ・キーナー（Franz Kiener）による衣服の心理学的分析に代わる、形式的な方法の重要性である。Cf. Olivier Burgelin, « Barthes et le vêtement », *Communications*, no. 63, 1996, pp. 88-90.

転換される際に露わになるイデオロギーの在り方であった（それをクリステヴァは「イデオロギー素（idéologème）」と名づけていた）[5]。

『モードの体系』がそれ自体として高い完成度を有していること、およびこの著作の位置づけが明確であること、この二点はしばしば、『モードの体系』に対する固定した捉え方をもたらしたと言える。つまり『モードの体系』は、1960 年代の記号論に傾倒していた時期のバルトの仕事を象徴するものであり、この著作は基本的に、1970 年代以降のバルトの知的活動と直結しないと見なされている。しかし、この著作にバルトの他のテクストにも通底するような論点が存在するのかどうか検討する余地がある。

先の第 1 章および第 2 章では、第二次の意味作用（コノテーション）に焦点を当てて、そこに「類」と「種」の関係性を見ることで提喩的意味作用の現われを明確化するとともに、柔軟かつ創造的なグルーピングの実践として提喩的意味作用を応用するバルトの思考を浮き彫りにした。本章では、第二次の意味作用の活用とは別の点から、『モードの体系』における提喩的意味作用の現われおよび提喩的意味作用を活かすバルトの思考を明らかにする。『モードの体系』では、第一次の意味作用（デノテーション）から第二次の意味作用（コノテーション）に至るプロセスとは別の意味作用のプロセスに焦点が当てられているからである。また『モードの体系』においては、提喩的関係性（「類」と「種」のあいだの関係性）が前景化される分類活動というかたちで、バルトの思考の在り方が現われているように思われる。

『モードの体系』における提喩的意味作用の在り方を提示するにあたって私たちは、バルトが構築した「体系」に、「体系」とは性質の異なる（「体系」には還元されない）様態を見出そうとする。その理由は、意味の統御を旨とする「体系」には、意味作用の働き（意味作用のプロセス）そのものを前景化して意味の統御を免れる別の様態が存在するからである。この意味作用の働きを前景化する「体系」の様態は、「体系」と相反する「ル・システマティック（le systématique）」としてバルトが記述していた様態である。本章では、「体系」のなかで「ル・システマティック」が顕在化し得るという点、すなわち「体系」と「ル・システマティック」の共存関係という点を「体系」の問題性として提示しつつ、「類」と「種」の往復運動が備わる提喩的意味作用を活かしたかたちで「ル・システマティック」が具現化されることを明らかにする。そして、提喩的意味作用を活かして「ル・システマティック」を「体系」に含み持たせるバルトのテクスト実践を、創造的な活動として示したい。

---

[5] Cf. Julia Kristeva, « Le sens et la mode » (1967), in *Sêméiôtikê. Recherches pour une sémanalyse*, Seuil, 1969, pp. 60-89（「意味とモード」、松浦寿夫・松枝到訳、『記号の生成論――セメイオチケ 2』、中沢新一ほか訳、せりか書房、1984 年、33-80 頁）.

第 2 節　「ル・システマティック」と衣服分類

提喩性という見地から『モードの体系』にアプローチするにあたって私たちは、衣服（モード雑誌に記載された衣服）を分類する活動それ自体と『モードの体系』の「体系」としての在り方に着目する。というのも第 1 章で私たちは、下位カテゴリーと上位カテゴリーのあいだを往復するという概念的な運動性を提喩的意味作用の運動性として提示したが、そうしたカテゴリー間での往復運動は、衣服に対するバルトの分類活動に内在しており、また彼の衣服分類の実践は、「体系」の一枚岩的ではない在り方と密接な関連を持つように思われるからである。本節では「体系」の問題性を提起したうえで、その論点と分類活動というもうひとつ別の論点とのつながりを明確にしておきたい。

2-1. 「体系」と「ル・システマティック」

まず「体系」の問題について、バルトが「体系［／システム］（système）」と対比していた「ル・システマティック［／体系的なもの］（le systématique）」という概念を取り上げたい。『サド、フーリエ、ロヨラ』（1971 年）のフーリエ論（初出 1970 年）における記述を参照しよう[6]。

「体系」と「ル・システマティック」の区別は、文体（style）とエクリチュール（écriture）、小説（le roman）とロマネスクなもの（le romanesque）、構造（structure）と構造化（structuration）、生産物（produit）と生産活動（production）等々の区別に対応する。バルトにとって、体系（文体・小説・構造・生産物）は否定的な価値を、ル・システマティック（エクリチュール・ロマネスクなもの・構造化・生産活動）は肯定的な価値を帯びており、体系の「活動［／戯れ］（jeu）」としてのル・システマティックは、次のように体系と対比されている。

> 体系というものは、閉じられていて（あるいは単義的であり）、常に神学的、独断的である。体系は二つの幻想を持って生きている。つまり、透明性という幻想（体系を説明するために用いられる言語活動はもっぱら道具であると見なされており、そうした言語活動はエクリチュールではない）、および現実性という幻想（体系の目的は適用されることであり、すなわち、体系が言語活動から抜け出して、言語活動の外在性その

[6] Roland Barthes, *Sade, Fourier, Loyola* (1971), in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 796-797（『サド、フーリエ、ロヨラ』、篠田浩一郎訳、みすず書房、新装版 2002 年（初版 1975 年）、150-153 頁）.

ものとして誤って定義された現実を根拠づけようとする）［…］。ル・システマティック［／体系的なもの］は体系の活動［／戯れ］である。それは、開かれていて、無限で、あらゆる現実参照の幻想（思い上がり）から解放された言語活動に属している。その現われの様態、構成の様態は、「展開［／発展］」ではなく、分散、散布［／散種］（シニフィアンの金色の粉塵）である。［…］[7]

ル・システマティックは、体系が持つ二つの「幻想（illusion）」、すなわち体系の透明性（言語活動が体系を説明するためだけに用いられる道具であると見なされること）および現実性（体系の在り方として適用に重点が置かれること）という二つの幻想を免れる。これら二つの「幻想」は、適用に重点が置かれた客観的な構築物という体系に対する通常流布されている見方を示しており、それに対しル・システマティックとは、言語活動の働きと切り離せない動的な体系、いわば活動状態にある体系のことである。

適用に重点が置かれないというル・システマティックの在り方に目を向けると、それが言語活動の道具的でない性質、すなわち言語活動の自動詞性に支えられていることが見て取れる。言語活動の自動詞性は、ヤコブソンが提唱したメッセージそのものを強調する役割を持つ言語の詩的機能（fonction poétique）に見られるように、詩学とつながりを持つ論点であり、バルトの思索においては、たとえば「作家と著述家」（1960 年）[8]というテクストにおいてこの論点が直接的に扱われており、そのテクストでは、作家（écrivain）が記述それ自体を目的とするような自動詞的な活動、著述家（écrivant）が何か言うべきことを伝える他動詞的な活動に結びつけられていた。ここでは、自動詞的という言語活動の性質が、道具的でない在り方として、すなわち特定の目的や伝達すべき事柄を持たない在り方として、ル・システマティックに敷衍されていると理解できる。

ル・システマティックが顕在化する様相に目を転じると、それは、「分散（pulvérisation）」や「散布［／散種］（dissémination）」といったかたちで、シニフィアンが散ってゆく状態を

[7] « Le système étant fermé (ou monosémique) est toujours théologique, dogmatique ; il vit de deux illusions : une illusion de transparence (le langage dont on se sert pour l'exposer est réputé purement instrumental, ce n'est pas une écriture) et une illusion de réalité (la fin du système est qu'il soit *appliqué*, c'est-à-dire qu'il sorte du langage pour aller fonder un réel défini vicieusement comme l'extériorité même du langage) [...] le *systématique* est le jeu du système ; c'est du langage ouvert, infini, dégagé de toute illusion (prétention) référentielle ; son mode d'apparition, de constitution, n'est pas le « développement » mais la pulvérisation, la dissémination (la poussière d'or du signifiant) [...] », Barthes, *Sade, Fourier, Loyola*, pp. 796-797. 邦訳 151 頁。

[8] Roland Barthes, « Écrivains et écrivants » (1960) [in *Essais critiques* (1964)], in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 403-410（「作家と著述家」、『ロラン・バルト著作集 5　批評をめぐる試み　1964』、吉村和明訳、みすず書房、2005 年、219-230 頁）.

指していることがわかる。無論その状態は、「粉塵（poussière）」という隠喩を用いて比喩的にしか表現されていないのであくまで視覚的なイメージでしかないが、それでもル・システマティックが顕在化する様相と見なせるのは、シニフィアンが散るのであるから、ある空間に複数のシニフィアンがそれぞれ距離を置いて位置しているという状態である。言い換えれば、ある空間の一点からシニフィアンが広がりを持ちつつ展開すること、すなわちシニフィアンが拡散することである（ここで用いられている「展開（développement）」という用語は、何らかの目的に向かっての発展という意味合いで否定されており、展開するという事象それ自体については否定されていないと捉えるのが穏当だろう）。

「散種」という用語は、すぐさま同時代のジャック・デリダの著作『散種』（1972 年）を喚起せずにはおかないが[9]、そうした用語上での一致よりも興味深いと思われるのは、1970 年ではなく 1960 年の時点ですでに、分散ないし拡散という発想をバルトが持っていたことである。バルトの衣服論のなかでもとりわけ『モードの体系』との関連性を有している「今年はブルーが流行」（1960 年）というバルトの論考は、衣服の記号論に対するバルトの問題意識とともにそのことを示している。

> ところで、非常にしばしば、モード雑誌は私に常に同じ意味を持つ語彙しか与えてくれない（それを絶対的語彙と呼ぶことにしよう）。神話的使命によってモード雑誌は、諸々の記号を不動の本質として提示する傾向があるからである。たとえばモード雑誌が私に表明するところによれば、アルパカ［の毛織物］は夏を、レース［の柄］は神秘を意味する。まるで、ほかの諸々の意味作用全体の一覧がどのようなものであっても、「真実の」、永遠の同一性［／アイデンティティ］が問題になっているかのように。［…］賭けられているものは重要である。というのも、もし私が単純な等式で満足するのであれば（アルパカ＝夏）、私は意味作用を実体化することになってしまい、シニフィエの神話的な性格を見失ってしまうことになるだろう。それに対して、もし私が

[9] ここは両者の方法論や分析例を比較する場ではないので（その比較は用語上での一致を越えてきわめて魅力的な試みであるかもしれないが）、次のデリダの記述から、『散種』でのデリダと『サド・フーリエ・ロヨラ』でのバルトが、道具的でない自動詞的な「体系」観を共有している点を指摘するにとどめよう。「プラトンのテクストに戻ろう［…］。そこではパルマコンという語は、意味作用の連鎖のなかに捕えられている。この連鎖の戯れは体系的であるように見える。しかしその体系はここでは、単にプラトンという名で知られている著者の諸々の意図の体系であるのではない。この体系はなにより、言わんとすることの体系ではない。」« Revenons au texte de Platon [...] Le mot *pharmakon* y est pris dans une chaîne de significations. Le jeu de cette chaîne semble systématique. Mais le système n'est pas ici, simplement, celui des intentions de l'auteur connu sous le nom de Platon. Ce système n'est pas d'abord celui d'un vouloir-dire. », Jacques Derrida, « La pharmacie de Platon », in *La dissémination*, Seuil, coll. « Points », 1993 (1972), p. 118（「プラトンのパルマケイアー」、藤本一勇訳、『散種』、藤本一勇ほか訳、法政大学出版局、2013 年、146-148 頁）.

モードの絶対的語彙を諸々の相対的対立関係の一覧に四散させることに成功すれば、私はモードの言語活動の二重化された構造［字義的な意味と神話的な意味とに二重化された構造］を重んじて、シニフィエをその神話的風土に送り返すだろう。[10]

この引用文は、神話批判の枠組みのもとでモード雑誌の意味作用について触れているが、「絶対的語彙（lexique absolu）」という特殊な呼び方をしてまでバルトが問題視しているのは、諸々の記号の意味からその可変性を奪いステレオタイプを流布するモード雑誌の意味作用の硬直した性質である。バルトの狙いは、そのような硬直した性質を越えてモード雑誌の意味作用の射程を切り開くこと、すなわち、シニフィエの神話的な性格を見定めながら「絶対的語彙」という記号を「四散させる（disperser）」ことにある。記号を「四散させる」という発想は記号論に着手した当初からバルトに存在しており、この時点ですでにル・システマティックが彼の記号論に胚胎していたのではないだろうか。

さらに、「モードの絶対的語彙を諸々の相対的対立関係の一覧に四散させる（disperser le lexique absolu de la mode en tables d'oppositions relatives）」と記述されているのであるから、ただ単に「絶対的語彙」が無秩序なかたちで分散させられるのではなく、諸々の記号は対立に基づいて互いに関係づけられながら四散させられる。ゆえにこの記述からは、分類活動という本節でのもうひとつの論点を見出すことができる（「四散させる」ことと分類活動のつながりについては、本節の後半で取り上げる）。他の点に関してもそうであるが私たちの議論で重要な点に限って言えば、この引用文のあとで示されている初歩的な衣服分類、ならびに道筋という意味作用に対するヴィジョン[11]、それらはともに『モードの体系』で洗練されることになる。

---

[10] « Or, très souvent, le journal de mode ne me fournit qu'un lexique univoque (que j'appellerai *lexique absolu*), dans la mesure où il tend, par vocation mythologique, à présenter les signes comme des essences immobiles ; il me déclarera par exemple que l'*alpaga* signifie l'*été* ou la *dentelle* le *mystère*, comme s'il s'agissait d'identités éternelles, « vraies », quelle que soit la table générale des autres significations [...] L'enjeu est important, car si je me contente d'équations simples (alpaga = été), je serai entraîné à substantialiser la signification et à perdre de vue le caractère mythologique du signifié ; tandis que si je parviens à disperser le lexique absolu de la mode en tables d'oppositions relatives, je respecte la structure dédoublée du langage de mode, je renvoie le signifié dans son ciel mythologique. », Roland Barthes, « Le bleu est à la mode cette année. Note sur la recherche des unités signifiantes dans le vêtement de mode » (1960), in *Œuvres complètes*, t. I (1942-1961), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 1030-1031（「「今年は青が流行です」――モード服における記号作用単位の研究ノート」、『ロラン・バルト著作集 4　記号学への夢　1958-1964』、塚本昌則訳、みすず書房、2005 年、168 頁 ;「今年はブルーが流行――モードの衣服における記号作用単位についての研究ノート」、『ロラン・バルト　モード論集』、山田登世子編訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2011 年、119-120 頁）.

[11] 「［…］モードは意味作用の行程を構成している。」« [...] la mode constitue le *parcours de signification*. », Barthes, « Le bleu est à la mode cette année », p. 1037. 塚本訳 175 頁、山田訳 129 頁。

『サド・フーリエ・ロヨラ』のフーリエ論に戻ると、そこで述べられている「幻想」（体系の持つ幻想）は、ル・システマティックという性質を持たない（あるいはより正確にはそれが過度に抑制されている）場合における体系の在り方を示している。また、「現実性という幻想（illusion de réalité）」は、「現実（le réel）」を言語活動の外部として「誤って（vicieusement）」定義すること（そして体系がそのような現実に根拠を与えようとすること）を指している。さらに、『彼自身によるロラン・バルト』（1975 年）では、現実を制御しようとする体系に対し、現実を制御することを拒むという在り方がル・システマティックとして記述されている[12]。

この場合、現実（言語活動の外部としての現実）が言語活動とは無関係に存在するという考え方に対する否定が表明されていると理解できるが、そうであるからと言って、現実を言語活動そのものと見なすような構造主義的な世界観（まさしく『モードの体系』が体現するような世界観）に対するバルトの距離を置いた態度を見逃してはならないだろう。というのも、もし現実を制御することが目指されているのならば、現実を言語活動の内部に取り込みそれをいわば言語活動そのものとして規定することになるだろうからである。それは体系の在り方であって、ル・システマティックの在り方ではない。

ゆえにル・システマティックの眼目は、現実を言語活動として分析するのではなく、現実を言語活動と関連させて分析することにあると言えるのではないだろうか（同時にそれは、現実が位置するのは言語活動の内部であるのか外部であるのかという二項対立的な考え方から脱却することでもある）。

無論『モードの体系』は、言語活動（モード雑誌というファッションの言説）を介したかたちでの現実（衣服という私たちに身近な存在）に対する体系化の試みである以上、『モードの体系』はバルトが構築した「体系」、あるいはバルトの分析から見えるファッションの言説の「体系」としての在り方にほかならない。『モードの体系』が現実を制御しようとするかのような網羅性を伴っていることに異論はないだろう（バルトの分析がどの程度の不備を持っているのかという点は別の話であり、それを標定することは私たちの目的では

---

[12] 「現実の固有性とは、制御することができないという点なのではないか？そして体系の固有性とは、現実を制御するという点なのではないか？それゆえ制御することを拒否する人間は、現実に直面して、何をすることができるのか？装置としての体系を追い払うこと、エクリチュールとしてのル・システマティックを受け入れることである。［…］」« Le propre du réel ne serait-il pas d'être *immaîtrisable* ? Et le propre du système ne serait-il pas de le *maîtriser* ? Que peut donc faire, face au réel, celui qui refuse la maîtrise ? Econduire le système comme appareil, accepter le systématique comme écriture [...] », Roland Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes* (1975), in *Œuvres complètes*, t. IV (1972-1976), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 744（『彼自身によるロラン・バルト』、佐藤信夫訳、みすず書房、新装版 1997 年（初版 1979 年）、273 頁）.

ない)。ほかならぬバルト自身が『モードの体系』をそうした科学的な体系化を旨とする著作だと見なしていたことを付け加えることもできる。

しかし、『モードの体系』においてル・システマティックが存在しないと考えるのは早計だろう。『サド・フーリエ・ロヨラ』のフーリエ論への参照を続けよう。フーリエの「体系」は次のように形容されている。

> ［…］抑制が利かない［／狂ったようになった］ひとつの体系、その過剰さそのもの、幻想的な緊張は体系を乗り越え、ル・システマティック、すなわちエクリチュールを成し遂げるのである。［…］[13]

「抑制が利かない（éperdu）」体系とは本来の目的から逸脱する倒錯したそれであると見なせるため、また「幻想的な緊張（tension fantastique）」に関してはファンタスム（fantasme）という概念への参照ができるため、精神分析的な見地からも読めるだろうこの記述から引き出したいことは、体系とル・システマティックが互いに独立して存在しているのではないという点、言い換えれば、両者がいわば表裏一体であり、ある特定の状態のもとでの体系がル・システマティックの相貌を見せるという点に尽きている。私たちは、バルトが述べていた体系とル・システマティックの対立に基づいて議論を進めているわけであるが、実際には、両者は二項的な対立図式では把握しきれないのである。ゆえにこの引用文では、ル・システマティックを体系と切り離せない様態として、体系に内在する（体系が元々含み持つ）様態として捉えるべきであるということが示唆されているのだと言える。

エヴリヌ・グロスマン（Evelyne Grossman）は、近年発表された論考のなかで『モードの体系』について言及しており、細部の扱いに多大な注意を払うバルトの分析例をいくつか挙げながら、次のように述べている。

> 『モードの体系』はそれゆえ、そのモデルの形式的な完璧さによって、（構造主義者的かつ女性服の仕立て屋的な）切り分けの作業、ならびに体系が我を忘れる地点としての諸々の細かい間隙に魅了された探求との両者に対する、同時的なバルトの愛着を示す最も鋭敏なデモンストレーションのひとつであると言えるだろう。このように私としては、あの諸々の微細な区別の競り上げを読む必要があり、そうした諸々の微細な区別は、結局のところ衣服の様々なクラスの単純すぎる対立を屈服させることにな

[13] « [...] un système éperdu, dont l'excès même, la tension fantastique, dépasse le système et accomplit le systématique, c'est-à-dire l'écriture [...] », Barthes, *Sade, Fourier, Loyola*, p. 797. 邦訳 152 頁。

る。それゆえ体系は複雑化し、［対立の］ヴァリエーションは増大し、見事な構造の秩序立てをほとんど頓挫させてしまうのである。[14]

グロスマンによれば『モードの体系』には、体系が「我を忘れる（défaillir）」瞬間が存在しており、分析の作業と共存するその瞬間は、バルトが衣服の対立関係のヴァリエーションを過剰なまでに記述することで訪れる。実際、グロスマンが挙げているように、たとえば衣服パーツの留め方に関して言えば、留め方が限定されていない場合と限定されている場合の対立関係は、前者のヴァリエーションとして「つけられた（posé）」、「置かれた（placé）」、「位置した（situé）」、後者のヴァリエーションとして「ホックでとめた（agrafé）」、「ボタンでとめた（boutonné）」、「クリスでとめた（coulissé）」、「縫いつけた（cousu）」、「ジッパー留めの（à glissière）」、「［袖を］縫い合わせてつけた（monté）」、「結んだ（noué）」、「スナップでとめた（à pression）」といったように、対立関係のヴァリエーションはまるで熱に浮かされたかのように増えてゆく。そのようにエスカレートするバルトの記述、細部へのまなざしに根ざした彼の記述が体系を極度なまでに繊細なものにし、またその結果として、体系を瓦解同然にまで至らせるのである。

引用文と同じページでグロスマンはまた、必ずしも目立ってはいない箇所での「構造が解体する（la structure se défait）」というバルトの記述を拾い上げ、それを受けて「構造は実際のところ解体するとともに体系から外れる横溢をにじみ出している（Elle [la structure] se défait en effet et sécrète ses échappées hors du système.）」とまで述べている（「解体する」と訳した「se défaire」という語は、「乱れる」や「解きほぐされる」とも翻訳できる）。グロスマンは、そうした構造ないし体系の様態とル・システマティックとの関連には言及していないが、ル・システマティックのいわば徴候としての構造が乱れる瞬間を注視しており、バルトによる体系の実践が抑制の利かなくなる瞬間と共存していること、すなわちル・システマティックを内包していることを示している。

そして実際のところ、体系がル・システマティックへと変貌するメカニズムは、ほかならぬバルト自身のテクストに書き込まれている。『サド・フーリエ・ロヨラ』の序文から引用しよう。

---

[14] « On pourrait dire alors que le *Système de la Mode*, par la pureté formelle de son modèle, est l'une des démonstrations les plus aiguës de son amour simultané de la découpe (structuraliste et couturière) *et* de l'exploration fascinée des minces interstices où le système défaille. C'est ainsi qu'il faut lire selon moi la surenchère de ces distinctions infimes qui finissent par faire céder l'opposition trop simple des différentes classes de vêtements ; alors le système se complexifie, les variations foisonnent et font quasi chavirer le bel ordonnancement structural. », Evelyne Grossman, « La Semence de Roland Barthes (la French theory et après) », *Contemporary French and Francophone Studies*, vol. 18, no. 1, 2014, p. 92.

文体は、内容と形式の対立を想定し実践することである。文体は、土台に張られたベニヤ板のようなものだ。エクリチュール、それは、シニフィアンの一定間隔の配置が生じるときに到来するのであり、そうしたシニフィアンの一定間隔の配置には、もはやいかなる言語活動の内容も標定され得ない。［…］文体がエクリチュールに吸収されるにつれて、体系はル・システマティックへと、小説はロマネスクなものへと、祈祷は幻想的なものへと解きほぐされる［／乱れる］。［…］[15]

内容に対する形式としての文体の概念は、内容（シニフィエ）をいかに表現するかという問題圏に位置しており、そこには常に言わんとすることや言うべきことが存在している（先の第 1 章で取り上げた文体に対するバルトのヴィジョンにおいて、内容と形式の二項的な図式が退けられていたことを思い起こそう）。それに対してエクリチュールは、シニフィアンが「一定間隔の配置（échelonnement）」を取ったかたちで、言わんとすることを見定めることができない自動詞的な実践として現われる。

シニフィアンが一定の間隔で配置されるという点は、シニフィアンの分散ないし拡散と理解できる。注意を払っておきたいのは、エクリチュールにおいて言語活動の内容を見定めることができないという点であるが、あくまで内容が「標定され（repéré）」得ないのであって、内容がまるで存在しないということをバルトが述べているわけではないだろう。もっぱら「文体」の概念のみに立脚するような言語活動は存在しないだろうし、また同様にもっぱら「エクリチュール」の概念のみで成り立つような言語活動も存在しないだろう。それゆえ、言わんとすることを見定めることができないのは、シニフィアンが活発に分散しシニフィアンの配置それ自体が前景化されるためであると解釈しよう。これまで私たちは、「ル・システマティック」を「自動詞的な」様態であると記述してきたが、その内実は、言わんとする最終的な目標としてのシニフィエを見定めることができないほどシニフィアンが活発に働くということになる。

文体の概念がエクリチュールの概念に変わるにつれて、すなわち内容と形式の二項的な図式が解消されるにつれて、硬直したものが柔軟なものへと「解きほぐされる（se défaire）」ように、統御可能なものが抑制の利かないものへと「乱れる（se défaire）」ように、体系は

[15] « Le style suppose et pratique l'opposition du fond et de la forme ; c'est le contre-plaqué d'une substruction ; l'écriture, elle, arrive au moment où il se produit un échelonnement de signifiants, tel qu'aucun fond de langage ne puisse plus être repéré [...] au fur et à mesure que le style s'absorbe en écriture, le système se défait en systématique, le roman en romanesque, l'oraison en fantasmatique [...] », Barthes, *Sade, Fourier, Loyola*, p. 703. 邦訳 7-8 頁。

ル・システマティックへと変貌を遂げる。ル・システマティックが可視化する契機は、言わんとすることとしてのシニフィエを置き去りにしそれにこだわらないシニフィアンの動きないし働きによってもたらされるのだと言える。したがって、ル・システマティックは体系に内在していると考えられる。

このように、ル・システマティックを『モードの体系』において見出すことには十分な根拠が存在する。バルトにおける「体系」の問題性とは、体系が必然的に不安定性をまとわざるを得ないということ、すなわち、体系が統御可能でありかつ統御不可能であるという逆説的なステータスを持つ点に存するのである。

2-2. 分類活動と「ル・システマティック」

「ル・システマティック」という概念が『モードの体系』において占め得る位置を標定することに努めよう。その際の鍵になるのが、分類活動という論点である。「記号学の冒険」（1974 年）と題されたイタリアでの講演においてバルトは、記号論に傾倒していた時期（そのなかでもとりわけ『モードの体系』に取り組んでいた時期）を振り返って、次のように述べている。

> 私について言えば、この時期の私の仕事の中心となっているのは、記号学を科学として打ち立てる計画というよりも、ひとつの「分類法［／システマティック］」を遂行する快楽であると思います。分類という活動においては、サドやフーリエのような偉大な分類家のそれであったところの一種の創造的な陶酔があります。その科学的な段階において、記号学は私にとってそうした陶酔でした。私は諸々の体系や作用を再構成しそれらに手を加えていました（手を加えるというこの表現に［ブリコラージュというレヴィ＝ストロース的な］高度な意味を与えながら）。私は、書物を快楽のため以外には決して書いたことがありません。私のなかで、「体系」の快楽が「科学」の超自我の代わりになっていました。［…］[16]

[16] « Pour moi, ce qui domine cette période de mon travail, je crois, c'est moins le projet de fonder la sémiologie en science, que le plaisir d'exercer une *Systématique* : il y a, dans l'activité de classement, une sorte d'ivresse créative qui fut celle de grands classificateurs comme Sade et Fourier ; dans sa phase scientifique, la sémiologie fut pour moi cette ivresse : je reconstituais, je bricolais (en donnant un sens élevé à cette expression) des systèmes, des jeux ; je n'ai jamais écrit de livres que *pour le plaisir* : le plaisir du Système remplaçait en moi le surmoi de la Science [...] », Roland Barthes, « L'aventure sémiologique » (1974), in *Œuvres complètes*, t. IV (1972-1976), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 523（「記号学の冒険」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1988 年）、10 頁）.

快楽（plaisir）のため以外に書物を書いたことがなく、また体系の快楽が科学の超自我（surmoi）に取って代わっていたという最後の箇所に関しては、この講演が『テクストの快楽』（1973 年）刊行の翌年に行なわれたことからそのまま真に受けるわけにはいかないが、少なくとも、記号論に傾倒していた時期のバルトの企図において、分類活動それ自体を実行することの方が科学的な（あるいは理論的な）厳密さを追求することよりも優先されていたことがわかる。

男性名詞である「ル・システマティック」とは異なる女性名詞としての「ひとつのシステマティック（une Systématique）」とは、ひとつの分類法というほどの意味であり、それを実践することは要するに、「分類という活動（activité de classement）」にほかならない。その分類活動には「創造的な陶酔（ivresse créative）」が伴っている以上、バルトにとって分類するという行為が作品創造に比すべき重要性を持っていることがうかがえる。端的に言えば、ここでは分類するという行為を創造的な活動と見なすバルトの考え方が示されている。

そして、まさしく分類活動という論点こそが、ル・システマティックという概念と連動しながら『サド・フーリエ・ロヨラ』で前景化されているのである。『サド・フーリエ・ロヨラ』の序文から引用しよう。

> したがってサド、フーリエ、ロヨラが言語体系［／ラング］の創設者であり、また彼らがそうでしかないのは、まさしく何も語らないためであり、ある不在を守るためなのである（もし彼らが何かを言おうとしているのだとすれば、言語学の言語体系、コミュニケーションと哲学の言語体系で十分だろう。彼らが言わんとしていることを要約することができるだろうからであるが、これは彼ら誰のケースにも当てはまらない）。［…］［彼らのなかで］もっとも中心が不在である「言語体系の創設」はたしかにフーリエのそれであり（諸々の情念と天体は絶え間なく四散させられ分類される）、そしておそらくこのために、もっとも幸福感に満ちている。[17]

引用文の前半では、バルトによれば、サド、フーリエ、ロヨラの三者のテクスト実践が、何らかの目的に従って行なわれているのではないという点で、「体系」ではなく「ル・システマティック」が顕在化する磁場となっていることを示している。「何も語らない（ne rien

[17] « Si donc Sade, Fourier et Loyora sont des fondateurs de langue et s'il [sic] ne sont que cela, c'est justement pour ne rien dire, pour observer une vacance (s'ils voulaient dire *quelque chose*, la langue linguistique, la langue de la communication et de la philosophie suffirait : on pourrait les *résumer*, ce qui n'est le cas pour aucun d'eux) [...] La *Logothesis* la moins centrée est certainement celle de Fourier (les passions et les astres sont incessamment dispersés, ventilés), et c'est sans doute pour cela que c'est la plus euphorique. », Barthes, *Sade, Fourier, Loyola*, p. 704. 邦訳 8 頁。

dire)」とは、文字どおり何も言わないことではなく、言わんとすることを何も持たないことである（言わんとすることを標定できない、あるいはこの引用文での記述に従えば、言わんとすることを要約できない、そのような自動詞的な実践）。また、バルトが彼らに見ているのは、要約できないのであるからその内部でまとまりを持たない、すなわち、その内部の諸要素であるシニフィアンが常に不安定な（可変的な）ステータスしか持ち得ないようなエクリチュールの実践である。それゆえそのエクリチュールの実践からバルトが読み取っているのは、要約を保証する「体系」の安定性ではなく、固定することのないシニフィアンを動力とする「ル・システマティック」の動的な在り方であるということになるだろう。さらに注目したいのは、三者（とりわけフーリエ）が行なった「言語体系の創設（Logothesis）」には中心的な要素が存在しないという旨が記述されていることであり、つまり、フーリエらはたしかにある種の「体系」を構築したがその「体系」には中心的な要素が存在しないということである。この点は、バルトが構築する「体系」においても中心的な要素が存在しないことが「ル・システマティック」を見出す際の手がかりになることを示していると思われる。

引用文の後半では、フーリエを典型例とするテクスト実践が、止むことのない分類活動に基づいているということがわかる。この場合、諸要素（シニフィアンとしての諸々の情念と天体）は「四散させられる（dispersés）」というかたちで分類される。「分類される（ventilés）」と訳した動詞「ventiler」は、グループに分けることを意味するとともに、（まるで図られたかのような両義性であるが）風を通すことないし換気することをも意味する。つまり、分類される諸要素（シニフィアンとしての諸要素）が風によって散らされることで、「四散させられる」および「分類される」という一見矛盾するように思われる二つの操作が対立することなく、両者が一体となってフーリエのテクスト実践を支えることになるのである。このように、シニフィアンの分散ないし拡散は分類活動と切り離せない。

引用文の前半と後半の両方の部分に対する読解を合わせると、ル・システマティックの発現形態であるシニフィエ（言うべきこと）を持たずシニフィアンが分散する状態は、中心的な要素が存在しないかたちでの分類活動という論点への参照を促していると解釈することができる。

その両義性を推し進めれば「ventiler」という語は、分類活動と空気の入れ換えを同時に意味するのであるから、先に見た比喩表現である粉塵としてのシニフィアン、その輪郭が空気の入れ換えによって浮かび上がること（冬の室内を換気した際、陽光に照らされて微細な粉塵がはっきりと目に映るように）、つまり、分類活動を通じてシニフィアンの布置が浮き彫りにされるということが示唆されているように思われる。シニフィアンの配置を明

確にすること、それは、シニフィアンが拡散する場としてのル・システマティックを可視化することにつながる。

このような推論は、「体系」の基盤である分類活動それ自体を前景化して「ル・システマティック」の在り方を捉えることに私たちを導く。次節以降での論証の前に、分類するという行為が『モードの体系』の根幹を形成する論点として存在していることを確認して本節を締めくくろう。

> ［…］それが世界に関わるのであれ「モード」であるということであれ、シニフィエの貧しさはこのように、意味の力の主要部分を受け入れシニフィエとはほとんどいかなる関連も保っていないシニフィアンの「賢明な」構成によって、補われている。「モード」はそれゆえ本質的に――これが「モード」の組織［／エコノミー］の究極的定義であるが――シニフィアンの体系として、分類する活動として、［そしてまた］意味論的なというよりもずっと記号学的な秩序として現われているのである。[18]

モード雑誌におけるシニフィアンの配置と解釈できるシニフィアンの「構成（construction）」は、モード雑誌が有する「意味の力（pouvoir sémantique）」を体現する役割を担っている。この「構成」ないし配置を踏査するためにシニフィアンを体系化する作業が、「分類する活動（activité classificatrice）」にほかならない。この分類活動に、中心的な要素が存在しないという点を付け加えれば、分類活動という論点を手がかりにして、『モードの体系』におけるル・システマティックを捉える準備が整うだろう。つまり私たちは、シニフィアンの働きに焦点を当てつつ中心的な要素を存在させずにバルトが実践する分類活動において、ル・システマティックを見出そうとするのである。

第 3 節　『モードの体系』における換喩的意味作用と「ル・システマティック」

本節では、（本章でのこのあとの節全体の前提でもあるが）『モードの体系』の方法論を確認したうえで、隣接関係に基づく換喩的意味作用を通じた「ル・システマティック」の具現化を示す。『モードの体系』の方法論においてとりわけ押さえておきたいのは、「意味

[18] « [...] la pauvreté du signifié, qu'il soit mondain ou de Mode, est ainsi rachetée par une construction « intelligente » du signifiant qui reçoit l'essentiel du pouvoir sémantique et n'entretien à peu près aucun rapport avec ses signifiés. La Mode apparaît ainsi essentiellement – et c'est la définition finale de son économie – comme un système de signifiants, une activité classificatrice, un ordre bien plus sémiologique que sémantique. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1178. 邦訳 383 頁。

作用の母型」という、意味作用の具体的な様相（モード雑誌におけるシニフィアンの配置）を把握するための理論装置である。この理論装置は、『モードの体系』がまさしく意味作用に対する探求であることを示している。

3-1. 『モードの体系』の方法論

『モードの体系』にアプローチするにあたって、議論の前提として、その方法論を確認することから始めよう。そもそも「書かれた衣服（vêtement écrit）」、すなわちモード雑誌に「記述された（décrit）」衣服というコーパス選定は、それが、実用的な機能（現実の衣服）でも美的な機能（写真に代表される視覚的イメージとしての衣服）でもなく、意味作用の様相を観察することに適しているからである（1.5：『モードの体系』でのセクション番号、以下同様）。バルトの目的は、言語活動を通じて衣服がどのように意味作用を発揮するのかを観察することにあり、彼はモード雑誌における衣服というコーパス選定のことを「用語法規則（règle terminologique）」と呼んでいた（1.8）。

書かれた衣服の意味作用を観察するにあたりバルトは、モード雑誌における諸々の言表を、言表内の要素を入れ換えることで言表の意味に変化が生じるかどうかチェックするのに適した二つの作業領域、すなわち衣服と現実世界との関係性を示す「集合 A（ensembles A）」および衣服と「モード」それ自体との関係性を示す「集合 B（ensembles B）」に割り振ることから始める（2.1-2.4）[19]。

「集合 A」は、モード雑誌におけるシニフィアンとしての衣服とシニフィエとしての現実世界（様々な状況、職業、状態、気分）との関係性に基づく。「競馬場ではプリントの［／柄ものの］布地が全盛です（les imprimés triomphent aux Courses）」という言表は、シニフィアンとしての衣服（「プリントの布地（imprimés）」）とシニフィエとしての現実世界（「競馬

[19] モード雑誌における言表の意味の変化を把握するために参照されているのが、構造言語学の「換入テスト（épreuve de commutation）」という操作であり（2.1）、これは、言連鎖の一点において、特定の要素（シニフィアン）を入れ換えることで意味内容（シニフィエ）の変化を引き起こすかどうかチェックすることを指す。バルトは、この操作を書かれた衣服の分析に応用しており、モード雑誌のひとつの言表のなかで意味の変化が顕著に現われているケースを、意味が有する「二重のかたちで同時に起こるヴァリエーション（double variation concomitante）」と呼んでいる（既訳では「二重型の共変異」）。たとえば、「この長いカーディガンは裏地なしならおとなしい感じでリバーシブルなら楽しい感じです（ce cardigan long est sage lorsqu'il n'est pas doublé et amusant lorsqu'il est réversible）」という言表、衣服と現実世界との関係性を示す「集合 A」に属するこの言表において、衣服の差異（シニフィアン「裏地なし」から「リバーシブル」への移行）が、性格（や環境）の差異（シニフィエ「おとなしい感じ」（平日）から「楽しい感じ」（週末）への移行）を伴う（2.2）。のちに取り上げる「えりを開けるか閉じるかに応じてスポーティーもしくはドレッシーになるカーディガン」（本節）や「朝か晩かによって縞のフランネルか水玉のツウィルを」（第 5 節）といった言表も、ひとつの言表のなかで意味の変化が顕著に現われているケースである。

場（Courses）」）との関係性を示している。この場合、当該の言表ひとつのなかで意味の変化が顕著に現われているわけではないが、コーパス内の他の言表に頼りながら、たとえば「プリントの布地」を「無地（tissus unis）」に置き換えると、「競馬場」から「庭でのパーティー（garden-parties）」へ意味が変化する、別の言い方をすれば、プリントものから無地への移行が競馬場から庭でのパーティーへの移行をもたらす。「アクセサリーが春を作ります（l'accessoire fait le printemps）」や「この帽子は額を見せるので若々しいです（[c]e chapeau est jeune parce qu'il dégage le front）」といった言表も、シニフィアンとしての衣服（「アクセサリー（accessoire）」、「この帽子（ce chapeau）」）とシニフィエとしての現実世界（「春（printemps）」、「若さ（jeunesse）」）との関係性に基づき「集合 A」に属する。

「集合 B」は、モード雑誌におけるシニフィアンとしての衣服とシニフィエとしての「モード（la Mode）」それ自体との関係性に基づく。「集合 B」のシニフィエとしての「モード」それ自体とは、モード雑誌において明示的には述べられないもののモード雑誌の読者が認識できるファッション性である。別の言い方をすれば、モード雑誌には流行に適っている衣服が記載されるため、シニフィアンとしての衣服を通じてシニフィエとしての「モード」（流行に適ったファッション性）が伝達される。「背中ですっかりボタンを留めたヴェスト・ブラシエール［胸衣］、小さなスカーフのように結んだえり（veste brassière toute boutonnée dans le dos, le col noué comme une petite écharpe）」という言表では、シニフィアンとしての衣服（「背中ですっかりボタンを留めたヴェスト・ブラシエール（veste brassière toute boutonnée dans le dos）」）とシニフィエとしての「モード」それ自体との関係性を示している。この場合、たとえばボタンを留める位置である「背中で（dans le dos）」を「前面で（devant）」に置き換えると、「モード」（流行）から「モード外（démodé）」（流行外れ）に意味が変化する（ボタンを留める位置が背中から前面に移行すると流行から流行外れに移行する）。「短いボレロ、丈はウエストまで［…］（un boléro court, taille à la taille [...]）」という言表も、シニフィアンとしての衣服（丈がウエストまでの短いボレロ）とシニフィエとしての「モード」との関係性に基づき「集合 B」に属する。このようにモード雑誌における諸々の言表は、「集合 A」あるいは「集合 B」のどちらかに割り振られる[20]。

[20] 当該の箇所（2.1-2.4）から確認できる事柄として付け加えておくと、モード雑誌における諸々の言表の性質を区別するこうした割り振りとは別に、私たちは、書かれた衣服に「換入テスト」が施されることで、『モードの体系』におけるバルトの分類活動が開始されるのだと見なせる。というのも、衣服の差異を構成する諸要素（プリントの布地、アクセサリー、背中でボタンを留めたヴェスト・ブラシエール、丈がウエストまでの短いボレロ、等々）、現実世界における状況や状態の差異を構成する諸要素（競馬場、春、若さ、等々）、「モード」であるかどうかの差異を構成する諸要素（「モード」と「モード外」）、それら全ての要素は、モード雑誌における言表の意味の変化に関与する「辞項（terme）」として「諸々の換入のクラス（classes commutatives）」、

この「集合 A」と「集合 B」のそれぞれに「用語体系（système terminologique）」と「レトリックの体系（système rhétorique）」が存在し（3.7-3.8）、この二つの「体系」が『モードの体系』を構成する（用語体系が第 1 部で、レトリックの体系が第 2 部で分析される）[21]。正確に言えば、「集合 A」における用語体系とレトリックの体系のあいだには「「モード」のコノテーション（connotation de Mode）」と呼ばれる領域が存在し[22]、これは、モード雑誌に表記されていること（シニフィアン）が二次的に「モード」それ自体（シニフィエ）を表わし、「集合 B」とは異なったかたちで「モード」が喚起される領域であるが[23]、この領域は用語体系に完全に依存していることから自律性を持たないとされ、独立した分析にはかけられない（3.12）。また用語体系は、「書かれた衣服のコード（code vestimentaire écrit）」と「現実の衣服のコード（code vestimentaire réel）」という衣服をめぐる言語と現実の両面が混合した分析領域であり、それを分析するための準備作業が『モードの体系』の 4 番目のチャプターで述べられているが、ここではその手順の詳細には立ち入らず、用語体系に対するバルトの分析においては、レトリックの体系に対する分析の場合とは異なり、モード雑誌の意味作用のプロセスそれ自体に焦点が当てられていることを押さえておけば十分である。

モード雑誌の「コノテーション」およびそこから検知されるイデオロギーに対する分析は、『モードの体系』の第 2 部（16 番目のチャプターから 19 番目のチャプター）におけるレトリックの体系に対する分析に該当する。たとえば、モード雑誌には女性の秘書がしばしば登場するが（文面上、「私は秘書、完璧でありたい（secrétaire, j’aime être impeccable）」

すなわち「衣服（le vêtement）」、「現実世界（le monde）」、「モード（la Mode）」と名づけられた諸々のクラスに分類されているからである。

[21] 『モードの体系』では「体系（système）」という用語が次の三通りに使用されている。第一に、この用語は「用語体系」や「レトリックの体系」というように、モード雑誌に同時的に存在する意味作用の領域のことを指し、第二に、その用語は「用語体系」や「レトリックの体系」を含んだ全般的な「モードの体系」のことを指し、第三に、その用語は構造言語学における範列（paradigme）と同様に、衣服論における諸辞項の潜在的ストックのことを指している。

[22] この領域もやはり「体系」として記述されており、この領域が「コノテーション」と呼ばれているのは、用語体系（書かれた衣服のコード）におけるシニフィアン（モード雑誌の文章、すなわち雑誌に表記されている衣服）とシニフィエ（命題、すなわちモード雑誌に表象されている現実世界）が、モード雑誌に表記されていることというかたちで（すなわちシニフィアンの面で）引き受けられるからである。

[23] 「集合 B」においては、モード雑誌に表記されている衣服（シニフィアン）が第一次のレベルで「モード」それ自体（シニフィエ）を表わす（ただしそれは明示的ではなく暗黙のうちになされる）。「集合 A」においては、モード雑誌に表記されている衣服（シニフィアン）とモード雑誌に表象されている現実世界（シニフィエ）という第一次のつながりが、第二次のレベルでモード雑誌に表記されていること（シニフィアン）に引き受けられ（組み込まれ）、その第二次のレベルでのシニフィアンが「モード」それ自体（シニフィエ）を表わす。つまり、「集合 A」においては第二次のレベルで間接的に表わされ、「集合 B」においては第一次のレベルで暗黙のうちに表わされるというかたちで、常に「モード」それ自体の在り方が問題になっている。

というように現われる）、これは、その高級感に支えられたかたちで、（男性の）上司に奉仕する女性というイデオロギー的意味を含む（18.7）。あるいは、より複雑な例として、「小さなガンス［飾りひも］がエレガンスを作ります（une petite ganse fait l'élégance）」という言表では、音の類似性の利用や動詞の隠喩的使用（元々「作る」は人間の行為である）が見られるとともに、この言表それ自体がことわざ風の気取りとして存在し、さらに、「小さな」がいくつかの倫理的価値（ささやかな、つつましい、感じが良い）を担う（3.11）、言い換えれば幸福さを喚起する（17.6）。そして、モード雑誌で展開されている諸々の記号は恣意的であるため（用語体系は「モード」に適っていることを断定的に反映するだけである）、レトリックの体系は「合理（raison）」（自然らしさを伴った現実あるいは合理的な制度）のもとに、その恣意性を覆い隠している（19.1）。こうした分析は『現代社会の神話』（1957年）の延長線上にあり、モード雑誌を通じて検知されるイデオロギーに対するバルトの批判的なまなざしは、たしかに『モードの体系』に引き継がれているものの、それはこの著作固有の性質ではない[24]。

モード雑誌のレトリックの問題は言語活動の自動詞性という論点に結びついているため、レトリックの「体系」に「ル・システマティック」の現われを見出そうと試みるのは一見当然のことのように思われる。『モードの体系』の 17 番目のチャプターにおいてバルトは、そのチャプターを「衣服の「詩学」（Poétique du vêtement）」と題して、レトリックの体系のシニフィアンの面について論じており、そのチャプターの冒頭で（17.1）、コノテーションの特徴が言語活動の「自動詞性（intransitivité）」に存することを記述し、その点に基づいてモード雑誌のレトリックが分析されることを予測させるような議論展開になっている。しかしその直後のセクションで（17.2）、モード雑誌は、詩的な想像力を喚起するようなレトリックではなく、単純な押韻（「凝った、雲のような、ふんわりした、ペチコート（précieux, nuageux, vaporeux, les jupons）」）や平凡な直喩（「絆のように細いベルト（ceinture aussi fine qu'un lien）」）といったように、ステレオタイプ化したレトリックを用いることから、モード雑誌のレトリックは貧弱なものであることが確認され、またそのあとではイデオロギー批判の枠組みのもとで分析が行なわれており、モード雑誌の言語活動の自動詞性という論点が深められていない。要するに、モード雑誌における技巧としてのレトリックが問題になっているため、私たちはこの点から「ル・システマティック」にアプローチすることはしない。

---

[24] 先の第 1 章および第 2 章ではバルトにおけるコノテーションの問題を論じたが、『モードの体系』でのコノテーションに対する分析はイデオロギー批判という枠組みで捉えきれるため、本章ではレトリックの体系としてのコノテーションの問題は取り上げない。

バルトの分析の特徴的な部分は、用語体系に対する分析、すなわちモード雑誌の意味作用のプロセスそれ自体を扱う箇所（『モードの体系』の第 1 部、すなわち 5 番目のチャプターから 15 番目のチャプター）である。そして、モード雑誌の意味作用のプロセスを捉えるためにバルトが導入したのが、「意味作用の母型（matrice signifiante）」と彼が呼んだ分析装置である。言い換えれば「意味作用の母型」という装置は、モード雑誌の意味作用を観察するにあたり、言表内の辞項を入れ換えることで言表の意味に変化が生じるかどうかチェックするだけでは足りない点を補うために、すなわち、言表内の辞項がどのようなかたちで意味の変化に関与するのか微細に分析するために導入されている。「意味作用の母型」という理論装置が私たちにとって重要性を持つのは、シニフィアンとしての衣服に対するバルトの分類活動を検討するにあたって、この理論装置が諸々のシニフィアン（として要素ないし辞項）の配置（位置関係）を明確にするというかたちで意味作用の具体的な様相を示しているからである。

「意味作用の母型」は、「対象（objet）」（O）、「支持項（support）」（S）および「変異（variant）」（V）の三つの要素で構成される（5.4）。たとえば、言表ひとつのなかで意味の変化が顕著に現われているケースである「えりを開けるか閉じるかに応じてスポーティーもしくはドレッシーになるカーディガン（cardigan sport ou habillé selon que son col est ouvert ou fermé）」という言表、「集合 A」に属するこの言表では、「スポーティー」というシニフィエを表わす「えりの・開いた・カーディガン」というシニフィアンと「ドレッシー」というシニフィエを表わす「えりの・閉じた・カーディガン」というシニフィアンの対立関係が生じており[25]、この場合、意味作用の対象は「カーディガン（cardigan）」、支持項は「えり（col）」、変異は「開いた／閉じた（ouvert/fermé）」の対立にそれぞれ対応する。この母型のうちで意味作用の対象は、衣服の物質性を引き受け、意味作用の影響を被るだけで、それ自体で意味作用を発揮せず（5.6）、また支持項は、衣服の物質性を引き受け、意味作用を支える（すなわち対象と変異の中継となる）が、意味作用の対象と同様に、それ自体では意味作用を発揮しない（5.7）。

意味作用の元となるのは「変異」であり、これは実際の変異形（「開いた／閉じた」、等々）と変異形のクラスないし集まりという二つのアスペクトを持ち、バルトは後者の抽象的なクラスを「衣服素（vestème）」と呼ぶとともに、この変異形の集まりのことを「変異」（既訳では「変異項」）と呼ぶと記述している（5.8）。たとえば、「長さ（longueur）」という変異

[25] フランス語原文での表記は以下のとおり（5.3）。「·」は衣服の組み合わせの関係、「≡」は同値関係を表わす。
cardigan · col · ouvert ≡ sport.
cardigan · col · fermé ≡ habillé.

（衣服素）は、変異形としての「長い（long）」と「短い（court）」の両辞項を含む。変異が持つ独自の性質は、その非物質性、すなわち衣服の実際的な様相に左右されないという点に存する。それゆえ書かれた衣服の意味作用を記述する際には、衣服の物質性は考慮に入れられないということになる。

変異は二項対立（「開いた／閉じた」）だけではなく、二項対立に収まらない様々な差異を引き受ける。たとえば、「閉じ具合（clôture）」の変異の場合（9.23）、コートを例に挙げれば、「［前身ごろが］開いた（ouvert）／つき合わせた［前身ごろが重なり合わずに触れ合うくらいに開いた］（bord-à-bord）／［前身ごろを］閉じた（fermé）［前身ごろの一方の縁が他方の縁をわずかに覆っている状態］／［前身ごろを］交差した（croisé）／巻きつけた［と言えるくらい前身ごろを交差した］（enroulé）」というように、コート（O）の前身ごろ（S）の様々な「閉じ具合」が変異（V）となっている（「開いた」→「つき合わせた」→「閉じた」→「交差した」→「巻きつけた」の順に、閉じ具合の度合いが強くなる）。変異は、諸々の変異形として抽象的な対立関係を示すとともに、それら変異形が集まった状態をも指している。変異は多様な様相を帯びており、その主要なケースとして、「開いた／閉じた／交差した、等々」の差異が属する「系列的な対立（opposition sérielle）」のほか、衣服パーツの「有無」[26]が属する「二者択一的な対立（opposition alternative）」、さらには「長い／短い」や「重い／軽い」といった「両極的な対立（opposition polaire）」が存在する（11.3-11.5）。このように変異は、衣服の形状のうえでの様々な差異を表わすが、決して衣服の物質性を引き受けるのではなく（それは意味作用の対象と支持項の役割である）、ただもっぱら抽象的な対立関係（の集まり）を示している。

変異が持つこのような抽象的な性質は、「原衣服素（archi-vestème）」に対するバルトの不明瞭な位置づけにおいても見て取れる。「記号学の原理」（1964 年）では、シャンダイユ（丸首の厚手のセーター）とセーター（カーディガン風のセーター）の関与的対立が中性化された場合、原衣服素は「毛織物（lainage）」という素材であると記述されているが[27]、『モードの体系』で原衣服素について論じられた箇所においては（11.9）、「軽い／重い」の対立関係が中性化された際に生じる原衣服素は「重さ（poids）」であると記述されている。

---

[26] ある衣服パーツの「現前／不在」という対立に該当する。たとえば、「フラップ［あまぶた］があるポケット（poches à rabat）」や「ベルトがないドレス（robe sans ceinture）」。ポケットとドレスが（意味作用の）対象に、フラップとベルトが支持項に、支持項の有無が変異に、それぞれ対応する。バルトはこの変異を「存在の断定（assertion d’existence）」と名づけている（9.3）。

[27] Cf. Roland Barthes, « Éléments de sémiologie » (1965 [1964]), *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 691（「記号学の原理」、沢村昂一訳、『零度のエクリチュール　付・記号学の原理』、渡辺淳・沢村昂一訳、みすず書房、1971 年、189-190 頁）.

［…］軽い／重い［の対立］についての原衣服素は重さである（重さはどうであろうと、これこそリネンです）。しかしここで、衣服にまつわる現象は音韻論のモデルから離れてゆく。［…］［衣服論の場合、］中性化［／中和］によって生じる辞項は自由辞項［自由変異体、すなわち関与性を持たない音素の変異］ではなく、類としての辞項である。［…］重いから軽いまで「重さ」は常に存在している。言い換えれば、対立が一度中性化されてもなお、重さはある概念的な存在を保っているのである。そうであるからこそ、原衣服素は、それがどの対立関係（二者択一的、両極的、系列的）に由来していても、ある種の機能を果たすことになる。つまり、中性化は無差異ということにはならない。［…］軽かろうが重みがあろうがこれこそリネンです［という言表］のなかで、意味を発揮しているのはリネンであり、作用している変異は種の断定である。［…］その重さがどうであろうと、まさにリネンこそが意味を発揮している［というかたちでリネンの存在が肯定されている］。原衣服素の機能は要するに、充実している変異（［この場合は］種の断定）と、言表されていながら実は効能を持っていない見かけ上の変異とのコントラストによって、言表全体を［通常の言表よりも］強固に打ち立てるということである。[28]

「種の断定（assertion d'espèce）」については後述するとして（第 4 節）、確認しておきたいのは、「軽い／重い」の対立関係の中性化において、「重さ」は「類としての辞項（terme générique）」と想定されていること、およびその理由として、「軽い」と「重い」には程度の差はあれ「重さ」が常に存在していることである。ここで記述されている「重さ」とは、「軽い／重い」という変異形ないし対立関係が集まった抽象的なクラスとして衣服素と呼ばれるべきであり、衣服素と原衣服素のステータスの相違が明確でない[29]。

---

[28] « [...] pour *léger/lourd*, l'archi-vestème est le poids (*voici la toile, quel qu'en soit le poids*) ; mais ici le phénomène vestimentaire s'éloigne du modèle phonologique [...] la neutralisation ne se fait pas au profit du terme libre, mais au profit d'un terme générique [...] de *lourd* à *léger*, il y a toujours « du poids » ; autrement dit, l'opposition une fois neutralisée, le poids garde encore une certaine existence conceptuelle. Ceci explique que, d'où qu'il provienne (d'oppositions alternatives, polaires ou sérielles), l'archi-vestème remplit une certaine fonction : la neutralisation n'est pas indifférente [...] dans *voici la toile, légère ou de poids*, c'est la toile qui signifie, le variant effectif est l'assertion d'espèce [...] quel que soit son poids, c'est la toile qui signifie ; l'archi-vestème a en somme pour fonction de nouer plus fortement l'énoncé par le contraste d'un variant plein (l'assertion d'espèce) et d'un variant postiche, à la fois énoncé et esquivé [...] », Barthes, *Système de la Mode*, pp. 1067-1068. 邦訳 238-239 頁。

[29] 私たちは、中性化の作用について検討する際に（第 5 節）、原衣服素のステータスを明確化するように努めるが、その際には、この引用文でのケースのようなシニフィアンの対立関係（「軽い／重い」）に対する中性化ではなく、シニフィエの対立関係（街と田園、等々）に対する中性化について取り上げることになるだろう。

原衣服素についてのこの引用文で押さえておくべきなのは、対立関係が中性化された場合でも「重さ」が概念的な存在としての資格を失わないということが示す次の点、すなわち、変異としての「軽い／重い」の対立関係の根元に位置するのは衣服の物質性ではなく概念としての「重さ」であるという点だろう。なぜならバルトによれば原衣服素は、「種の断定」（衣服の諸々の「種」それ自体の存在に対する肯定）がもたらす「肯定／沈黙（肯定しないこと）」という対立関係（変異）と「軽い／重い」という見かけ上の対立関係（変異）のコントラストを生じさせることになるが、そのどちらの変異においても衣服の物質性は問題となっていないからである。

「集合 A」においても「集合 B」においても、そのシニフィアンの部分を構成している諸々の衣服パーツは、変異というかたちを取って、多様な対立関係を形成している。実際バルトは、『モードの体系』の 9 番目と 10 番目のチャプターにおいて、衣服パーツの様々な変異を記述しており、たとえば、「開いた／閉じた／交差した」や「軽い／重い」などの衣服パーツの属性に関する変異形から、衣服パーツ同士の連結（組み合わせ）の仕方である「上に（par-dessus）」、「上にふんわりとただよう（flottant sur）」、「下に（par-dessous）」、「重なり合っている（chevauchant）」、「中に（dans）」等々といった衣服パーツそのものが持つ属性に還元されない変異形、さらには、変異それ自体を修飾する「少し（un peu）」、「控えめな（discret）」、「それとなくおぼろげに（vaguement）」、「ある程度（pas trop）」、「とても（très）」、「可能である限界まで（aux limites du possible）」等々といった変異形に至るまで、事細かに列挙されている。

このように変異の豊富さ、すなわち対立関係の多様なヴァリエーションは、シニフィアンの戯れとでも呼べる様相を呈しており、グロスマンが指摘していたように、バルトの記述は微々たる細部にまで行き渡るほどエスカレートしてゆくのであり、こうした変異の豊富さは『モードの体系』のなかで際立っていると言える。『モードの体系』の分析対象として照準を定められたモード雑誌の意味作用は、抽象的な対立関係としての変異を原動力とするのである。

3-2. 「ル・システマティック」の換喩的な具現化

私たちは先に、バルトの分類活動に焦点を当てて「体系」と「ル・システマティック」の共存関係を論証するという方針を取った。その際の手がかりとなる点として挙げたのは、シニフィアンの働きおよび中心的な要素の不在である。ここでは、衣服を「類」と「種」の諸々のカテゴリーへと分類するバルトの作業（私たちが提喩的と呼ぶ作業）とル・システマティックのつながりを示す前に、「意味作用の母型」をめぐるバルトの記述から、ル・

システマティックの換喩的な具現化と呼べる事象とその構造的な限界についてまとめておきたい。そうすることで、ル・システマティックの提喩的な具現化と呼べる事象の内実が把握しやすくなるだろう。あらかじめ議論の見通しを示しておくと、ル・システマティックの換喩的な具現化は、シニフィアンの働きに基づいているが、中心的な要素を持たざるを得ないという構造的な限界を有している。

書かれた衣服を構成する諸部分（カーディガン、えり、「開いた／閉じた」の対立関係、等々）は、意味作用の母型において「対象」（O）、「支持項」（S）、「変異」（V）のいずれかの要素に分類される（後述するがバルトが行なった目録作成の際には、対象と支持項は書かれた衣服の諸々の「類」および「種」として分類され、変異はその両者とは別に分類される）。

先に見たように、書かれた衣服の意味作用は変異を元に産み出される。そこで、書かれた衣服の意味作用がどのように展開されるのかという点に目を向けると、母型構造を通じて、すなわち変異から出発し支持項を経て意味作用の対象に至るというかたちで、変異を元に産み出された意味が、ある一定のプロセスを経ることがわかる。「えりを開けるか閉じるかに応じてスポーティーもしくはドレッシーになるカーディガン」という言表を例に、バルトは次のように述べている。

> 結局のところ、こうした種類の言表において、意味作用はある種の経路をたどるように思われる。すなわち意味作用は、二者択一（開いた／閉じた）から出発し、部分的な要素（えり）を通過して、最後に衣服（カーディガン）にたどり着いていわば浸透するのである。[30]

意味作用は、ある一定の「経路（itinéraire）」、変異（「開いた／閉じた」の対立関係）を出発点とし、支持項（えり）を経たうえで、目標となる対象（カーディガン）に至るというプロセスに従う。意味作用が展開する様相は、意味作用が衣服に「浸透する（imprégner）」と表現されている。このプロセスは、意味作用の対象が個別に取り上げられた箇所で（5.6）、詳細に論じられている。

> ゆったりとしたブラウスがあなたのスカートにロマンティックな様子を与えるでしょ

[30] « En somme, dans un énoncé de ce genre, la signification semble suivre une sorte d'itinéraire : partie d'une alternative *(ouvert/fermé)*, elle traverse un élément partiel *(le col)* et vient enfin toucher et pour ainsi dire imprégner le vêtement *(le cardigan)*. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 961. 邦訳 87 頁。

う［という言表］において、ブラウスとスカートはまったく異なるパーツであり、せいぜい隣接しているにすぎない。それでも、ただスカートだけが意味作用を受けるのである。ブラウスは［意味作用の］中継点でしかなく、意味を支えはするが、意味を享受するわけではない。スカートの物質全体は、意味作用を持たず、何もしない［意味作用に参与しない］が、それにも関わらず、スカートこそがロマンティックに輝くのである。ここからわかることとして、［意味作用の］目標となる対象を特徴づけるのは、自身が有するこのうえない意味への浸透性であり、さらにまた、意味の源泉（ブラウスがゆったりとしていること）に対して自身が有する距離なのである。この道筋、意味のこうした放射が、書かれた衣服を独特な構造にすることに寄与するのである。［…］[31]

当該の言表「ゆったりとしたブラウスがあなたのスカートにロマンティックな様子を与えるでしょう（une blouse ample donnera à votre jupe un air romantique）」は、シニフィエ「ロマンティック」を表わすシニフィアン「スカートにゆったりとしたブラウス（Jupe avec une blouse ample）」として、意味作用の対象（スカート）、支持項（ブラウス）および変異（「ゆったりとした」）が母型構造のなかで占める位置を明確に示している。意味の「道筋（trajet）」において、スカートは「目標となる対象（objet visé）」、ブラウスは「中継点（relais）」、「ゆったりとした」は「源泉（source）」にそれぞれ位置づけられる。目標となる対象（スカート）に「浸透する」のは、「ロマンティック」という特定の意味（シニフィエ）であり、意味作用は、その意味（「ロマンティック」）が「経路」としての母型構造（シニフィアンの配置）を通じて「浸透する」という作用それ自体、すなわち意味が浸み込むプロセスそれ自体として存在している。この場合、シニフィエ「ロマンティック」は、変異「ゆったりとした」を起点にして、変異が支持項を経由して目標となる対象に到達した結果として認識されるが、母型構造を通過するのは変異であってシニフィエではなく、シニフィアンの配置が問題になる。

意味作用の目標となる対象（スカート）が特定の意味（「ロマンティック」）を受け取る「浸透性（perméabilité）」という用語が示しているのは、意味作用がスカートの物質として

[31] « Dans : *une blouse ample donnera à votre jupe un air romantique*, la blouse et la jupe sont des pièces tout à fait distinctes, tout juste contiguës ; c'est pourtant la jupe seule qui reçoit la signification ; la blouse n'est qu'un relais, elle soutient le sens, elle n'en bénéficie pas ; toute la *matière* de la jupe est insignifiante, inerte, et pourtant c'est la jupe qui rayonne de romantisme. On voit par là que ce qui caractérise l'objet visé, c'est son extrême perméabilité au sens, mais aussi sa distance par rapport à la source de ce sens (*l'ampleur* de la blouse). Ce trajet, ce rayonnement du sens contribue à faire du vêtement écrit une structure originale [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 964. 邦訳 91 頁。

の性質を少しも変えずに、スカートに特定の意味を付与するないしは伝達するということであり、また、そのことの帰結である。つまりスカートは、その物質的な性質を何ら変えることなく、意味作用を通じて付与される特定の意味に従って、様々なステータスを獲得することができるという点である。カーディガンであれスカートであれ、衣服は意味作用が生じる前から物質として存在する。しかし衣服は、モード雑誌に記載され意味作用に組み込まれることによって、その都度異なったステータスを獲得することになる。

意味が受信されるプロセスは、意味の「放射（rayonnement）」と記述されており、それが隣接性に基づいている以上、変異から出発し支持項を経て目標となる対象に至る意味作用のプロセスは、換喩的に展開されるのだと言える。意味のこうした「放射」は、この引用文と同じ箇所では（5.6）意味の「伝播（diffusion）」、さらにまた、母型構造内の各要素について総括されている箇所では（5.9）、変異の「散在するような（sporadique）」かたちでの「拡散の作用（action irradiante）」であると形容されている[32]。

このように意味作用は、母型構造を通じた変異の拡散として展開するのであり、変異が通過する「道筋」として機能している。こうしたシニフィアンの布置を通じた変異の拡散という様態を、「ル・システマティック」の換喩的な具現化と名づけることができる。

しかし同時に、ここで注意しなければならないのは、母型構造が意味作用の「目標（objet）」なしには成立し得ず、またシニフィエから免れることのないこの構造的な桎梏が「ル・システマティック」の顕在化を抑制するという点である。意味作用は「目標」に至る行程として展開され、シニフィアンの配置は特定のシニフィエが伝達される「目標」へと方向づけられている。それゆえシニフィアンの布置は統御されるのであり、変異の拡散はシニフィエの伝達を担った「目標」へと収束することになる。つまり、シニフィアンの布置を明確にするバルトの分類活動に中心的な要素が存在するということであり、それは「ル・システマティック」の在り方に反する。

実際のところ、このシニフィアンの布置には、拡散と呼ぶにはやや乏しい広がりしか備わっていない。変異の力は際限なしに広がるのではなく、言表「ゆったりとしたブラウスがあなたのスカートにロマンティックな様子を与えるでしょう」では、「ロマンティック」というシニフィエが伝達されるスカートという目標対象へと収束し、言表「えりを開ける

---

[32] 「（書かれた）衣服の場合、体系［変異のパラディグム（範列）］は散在するような仕方で、元々は意味作用を発揮しない総体に標識を与えているが、この標識は母型の道程によって、衣服全体にある種の拡散の作用を及ぼしている。」« Dans le vêtement (écrit), le système marque d'une façon sporadique une masse originellement insignifiante, mais cette marque, par le chemin de la matrice, a une sorte d'action irradiante sur tout le vêtement. », Barthes, *Système de la Mode*, pp. 967-968. 邦訳 96 頁。

か閉じるかに応じてスポーティーもしくはドレッシーになるカーディガン」では、「スポーティー」ないし「ドレッシー」というシニフィエが伝達されるカーディガンという目標対象へと収束する。

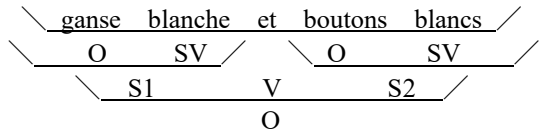
こうした収束については、母型構造の諸要素の基本的な順序（OSV）に「倒置（interversion）」が生じる場合でも（6.2）、諸要素の「融合（confusion）」という、母型構造の諸要素があるひとつの衣服パーツの用語にまとめられている場合でも（6.3-6.5）、支持項と変異の「増加（multiplication）」という、母型構造において支持項と変異が複数存在している場合でも（6.6-6.7）、あるいはまた、母型構造の「建築（architectures）」という、ひとつの言表において複数の母型構造が組み合わせられている場合でも（6.9-6.11）、事情は変わらない。言い換えれば、シニフィアンの配置は非常に可変的でありながらも、そこには常にひとつの目標対象を終着点とする強固な整合性が伴う。その典型的な例として、（諸）要素の「融合」と「増加」が生じつつ複数の母型構造が存在しているケース「白い飾りひもと白いボタン（ganse blanhe et boutons blancs）」においては（6.9）、複数の母型構造が階層をなすかたちで組み合わされているが、その階層は、最終的な目標対象に方向づけられた秩序を形成しており[33]、そうした階層秩序は「意味のピラミッド（pyramide du sens）」と呼ばれている（6.10）。

変異の働きがひとつの最終的な目標対象へと収束するという、この構造的な桎梏はバルトの「体系」観に深く影響を及ぼしている。支持項と変異とは異なり意味作用の対象（objet）はひとつの母型のなかで複数存在することがないことに言及している箇所（6.8）でバルトは、モードの「体系」のエコノミーが意味作用を方向づけることに存する点を明確にしている。

> ［…］問題となるのは、しばしば離れた諸要素の錯綜を通じて、ただひとつの対象に向けて意味を収斂させることである。「モード」の体系の目的そのものは、多数のものからひとつのものへのこうした難しい還元にある。というのも一方では、衣服の多様性、その非連続性、その構成要素の豊富さを保存しなければならないからであり、また他方では、この豊富さを統御し、唯一の標的というかたちで、ある統一的な意味をこの豊富さに課さなければならないからである。したがって結局のところ、意味作用

---

[33] バルトが示している母型構造の階層秩序の図式は次のとおりである。最終的な目標対象（三段目の O）は、暗黙のうちに示されていると想定された「身なり全体（tenue entière）」であるとされている。



によって目標とされる対象の単一性こそが母型の統一性を保証する。ただひとつの対象にしっかりと依拠しているがゆえに母型は、解体するおそれなしに、その支持項と変異を自由に増やすことができるのである。また他方、複数の母型が組み合わされるときには、その組み合わせは収斂するという構造に基づき、言表全体は最終的に、他のすべての母型を外延とするたったひとつの母型によって満たされる。この最終的な母型の目標対象はしたがって、ただひとつであるがゆえに、先行する母型という複数のレベルで段階的に作り上げられたすべての意味をまとめる。つまり目標対象の単一性がいわば、「モード」の体系の組織［／エコノミー］全体を基礎づけているのである。[34]

この引用文では、モードの「体系」の構造的な限界、すなわち「ル・システマティック」の顕在化が抑制されるメカニズムがそのまま姿を現わしている。モードの「体系」は、散在する支持項と変異の多彩なヴァリエーションを許容しつつ、また母型それ自体を積み重ねることによって、シニフィアンの配置を可変性に富むものにする。しかし同時に、多数的な諸々の支持項と変異は母型における意味作用のひとつの対象へというかたちで、多層的な諸々の母型構造は最終的な母型（における意味作用のひとつの対象）へというかたちで、支持項と変異の多数性および母型構造の多層性は両者ともに、意味作用の目標対象の単一性に還元される。このようにしてシニフィアンの布置は統御され、モードの「体系」は「解体する（se défaire）」ことがない。この点がバルトの「体系」観を形成しており、「体系」は乱れることがないのである。この場合、中心的な要素が存在する「体系」のもとで「ル・システマティック」は十全には顕在化され得ない。

乱れることがないというバルトの「体系」観は、『モードの体系』の結論部分（20.2）においても確認することができる。多層的に継起する母型構造というフィルターを通じて、「粉塵（poussière）」としての状態から統一的な意味が抽出されることが、意味作用を方向づける目標対象のただひとつという存在様態を確証する、その点について言及したうえで

[34] « [...] à travers un dédale d'éléments souvent éloignés, il s'agit de faire converger le sens vers un objet unique ; la fin même du système de la Mode est cette réduction difficile du multiple à l'un ; car il faut, d'une part, préserver la diversité du vêtement, son discontinu, la profusion de ses composants, et d'autre part, discipliner cette profusion, lui imposer un sens unitaire, sous les espèces d'une visée unique. C'est donc en définitive la singularité de l'objet visé par la signification qui garantit l'unité de la matrice ; fortement appuyée sur son objet unique, elle peut librement multiplier ses supports et ses variants, sans risque de se défaire. Et comme d'autre part, lorsque les matrices se combinent, c'est selon une organisation convergente, tout l'énoncé est finalement empli par une seule matrice, extensive à toutes les autres : l'objet visé de cette dernière matrice, étant unique, recueille donc tout le sens élaboré progressivement au niveau des matrices antérieures : la singularité de l'objet visé fonde en quelque sorte toute l'économie du système de la Mode. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 979. 邦訳 111-112 頁。

バルトは、『モードの体系』において彼が行なった「分類（classification）」の作業が二つの特徴を持つと総括している。第一の特徴は、母型構造が私たちに、元々は意味作用を発揮しない物質に意味が浸み込む有り様を見させるという点であり、第二の特徴は、シニフィエに比してのシニフィアンの過度の豊富さにもかかわらずモードの「体系」が「無秩序（anarchie）」には陥らないという点である。

『モードの体系』が「体系」としての面目を保つのは、母型構造の「配列（distribution）」が意味作用の目標対象へと方向づけられるからである[35]。しかしながらここでは、「ル・システマティック」輪郭が部分的には顕在化されていると言える。というのも先に見たように、シニフィアンの豊かな布置は、ル・システマティックの可視的な部分にほかならなかったからである。ひとつの目標対象に向けられている意味作用の展開（母型構造の展開）は、母型構造の多彩さを示す展開するという事象それ自体を重視すればル・システマティックの現われとして捉えることができる。ただしこの場合、ル・システマティックの現われは制限されることになるのである[36]。

私たちは次節において、意味の統御を回避するル・システマティックの顕在化を示すケースとして、母型構造の展開とは異なる意味作用の展開、すなわち衣服パーツのカテゴリー間での展開という点に焦点を当てる。言い換えれば、母型構造の諸要素の隣接関係に基づいた換喩的な意味作用の展開ではなく、母型構造の諸要素に備わるカテゴリー的な関係に基づく提喩的な意味作用の展開という点を問題にする。

第 4 節　『モードの体系』における提喩的意味作用と「ル・システマティック」

書かれた衣服を「類」と「種」の両カテゴリーへと分類するバルトの作業において、提喩的意味作用が見出される。その輪郭を明確に示すために、（「意味作用の母型」を前提にした）用語体系におけるシニフィアンの働きに対する彼の分析の理論装置を確認したうえ

---

35 「[…] 多数のシニフィアンとごく少数のシニフィエからなる体系が陥りかねない無秩序は、強固に階層序列化された［母型構造の］配列によって、ここでは克服されるようになっているのである。[…]」« [...] l'anarchie qui risquerait de frapper un système à signifiants nombreux et à signifiés rares, est ici combattue par une distribution fortement hiérarchique [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1178. 邦訳 383 頁。

36 『モードの体系』の結論部分（20.8-20.9）でのバルトの記述をたどれば、ある条件のもとで、すなわち明確なシニフィエを持たない（「モード」という漠然としたシニフィエしか持たない）場合には、母型構造の展開（可変性に富むシニフィアンの配置）が、「意味への裏切り（déception du sens）」というかたちで、「体系」のもとでの意味の統御を和らげる、言い換えれば「ル・システマティック」の現われの制限を和らげることがわかる。この点については、次節で再び取り上げる。

で、書かれた衣服の「類」と「種」の関係性について検討しよう。そうすることによって、モード雑誌の意味作用の発現および展開の様態が換喩的であるばかりではなく提喩的でもあるということ、さらにまた、そうした意味作用の提喩的な様態を通じて、「体系」の制御下には置かれない「ル・システマティック」の顕在化が実現されるということを明らかにしたい。

具体的には次のような手順を取ることにしたい。まず、バルトによる書かれた衣服の「類」と「種」の分類方法、そのなかでもとりわけ「種の断定」という理論装置を通じて「類」と「種」のカテゴリー間の関係性が前景化されていることを確認することによって、意味作用の働きへの注視に根ざすバルトの分類活動が提喩的意味作用を基盤にしていることを示す。次に、この提喩的意味作用には「類」と「種」のあいだの往復運動が胚胎していることを明らかにしたうえで、この運動性が備わった「種の断定」という知的操作が際限のない意味作用という動的な意味作用を体現していること、およびこの無尽蔵な意味作用が、中心的な要素を介在させずに、シニフィアンの循環という再帰的な様態を元にして「ル・システマティック」の具現化に資することを示す。

4-1. 書かれた衣服の「類」と「種」の分類方法

書かれた衣服を「類」と「種」の両カテゴリーへと分類するための理論装置、その一つ目は、「肯定／沈黙」の対立というかたちで書かれた衣服の「種」の変異を捉える「種の断定（assertion d’espèce）」である（7.4）。

> ［書かれた衣服の］種はそれ自身で意味作用を持つことができる。ツインセットを着ていると目立ちますという言表で言いたいことは、まず、ツインセット［同色のプルオーバーとカーディガンの組み合わせ］に「モード［であること］」を意味させるのは、ツインセットの存在そのものであって、その長さやしなやかさや形ではない、ということである。まさしくツインセットという種が他の衣服と区別されるがゆえに、ツインセットはここで直接的に「モード」という意味を担っているのである。ツインセットにとって、意味作用を持つためには自分自身の種を肯定するだけで十分である。［…］意味作用の変異をこのうえなく受けているものは物質としてのツインセットではまったくない。ここでの対立関係は、何よりもまず、ツインセットとその姉妹種たちとの間にあるのではなく、より形式的でより直接的なかたちで、あるひとつの選択（それがどのような選択であっても構わない）に関する肯定とその選択に関する沈黙とのあいだに存在する。要するに、種の命名が修飾されていないときには、種のうち

で二つの価値、あるいは、もしお望みならそう言っても良いが、二つの形態を常に区別しなければならない。ひとつは、物質的な［／実際上の］形態であり、これは［意味作用の］母型において事物が占める部分（対象あるいは支持項）に適合する。もうひとつは、その物質がある選択された形態のもとで存在しているという肯定であり、すなわち断定［という知的操作が行なわれた］形態である。そして、（変異として）意味作用を発揮するのは、種の物質性では決してなく、種の肯定である。[37]

書かれた衣服の諸々の「種」が持つ意味作用は、それ自身（「種」それ自体）を肯定することで生じる。ここで問題になるのは、衣服の物質性に基づいた近似的な姉妹種との対立関係ではなく、「種」それ自体の存在に対する肯定と沈黙（肯定しないこと）という対立関係である。「肯定／沈黙」という対立は、書かれた衣服の諸々の「種」がその物質性に頼ることなくそれ自体で意味作用を発揮するための変異である（すでに見たように変異は衣服の物質性に基づかない以上、衣服の実際的な様相のうえでの差異とは異なったかたちでの対立が必要になる）。「肯定／沈黙」という対立が変異として機能するのは、この場合ではツインセットをそれそのものとして肯定すること（断定すること）が、ツインセットを意識的に選ばないこと（退けること）に対立するかたちで、ツインセットの実際的な様相に依拠していないからである。このように「種の断定」は、意味作用を発現する理論装置として働いている[38]。

二つ目の理論装置は、書かれた衣服の諸々の「種」を体系化する際の基準となる「非両立性テスト（épreuve d'incompatibilité）」である（7.7）。「非両立性テスト」は、「種の断定」と連動している。

---

[37] « L'espèce peut signifier en soi. Si l'on énonce que le *twin-set fait une apparition remarquée*, cela veut dire à première vue que c'est l'être même du twin-set qui lui fait signifier la Mode, non sa longueur, sa souplesse ou sa forme ; c'est parce que l'espèce *twin-set* se distingue d'autres vêtements qu'elle se trouve ici immédiatement pourvue d'un sens de Mode : il suffit au twin-set d'affirmer son espèce pour signifier. [...] ce n'est nullement la matière du twin-set qui subit, au premier chef, la variation signifiante ; l'opposition n'est pas ici *d'abord*, entre le twin-set et ses espèces-sœurs, mais plus formellement et plus immédiatement, entre l'affirmation d'un choix (quel qu'il soit) et le silence de ce choix. En somme, lorsque la nomination de l'espèce est mate, il faut toujours distinguer en elle deux valeurs, ou, si l'on préfère, deux formes : une forme matérielle, qui s'accorde à la partie objective de la matrice (objet ou support), et une forme assertive, l'affirmation que cette matière existe sous une forme chosie ; et ce qui signifie (à titre de variant), ce n'est jamais la matérialité de l'espèce, c'est son affirmation. », Barthes, *Système de la Mode*, pp. 988-989. 邦訳 124-125 頁。

[38] この場合、「種の断定」は、「種」に対する肯定という仕方で衣服の物質性を捨象する役割を担っている。しかし直ちに注記しなければならないのは、「種の断定」が衣服の物質性に対して機能するそのメカニズムの複雑さであり、この点については、書かれた衣服の「類」と「種」の関係性を論じる際に取り上げることにする。

ところで、当たり前のことだが、たとえばもしリネン［亜麻布の平織物］とアルパカ［アルパカの毛織物］とタッサー［薄地の絹布］とが意味作用を持つ対立関係に立っているとしたら、それは、実際にこれらの布地が衣服の同一の場所に同時に使われることはありえないからである。逆に、リネンとパンプスとが意味作用を持つ対立関係に立つことはありえないが、それは両者が同一の服装［／身なり］のなかで完全に共存できるからである。つまりリネンとパンプスは異なる［意味作用の］行程に属しているということになる。［…］両立できない種を頭のなかですべて集めてみれば、いわば包括的な種のようなもの［上位クラス］が出来上がるわけで、この包括的な上位クラスは、意味作用を発揮する排他性に基づいたひとつの行程の全体をうまく要約したものとなる。[39]

非両立性テストの基準は、諸々の衣服パーツが同一の場所に同時に使われるかどうかに存するのであり、言い換えれば、衣服の各パーツがひとつの箇所に同時には現われないことを根拠にしている（水着とスキーウェア（胴体）、帽子とヘッドバンド（頭部）、等々）。非両立性テストは、モード雑誌の意味の最小単位を確定するために行なわれる換入テスト（épreuve de commutation）とは異なった分析手順であり、書かれた衣服の意味作用が有する「排他性に基づいたひとつの行程（un parcours d'exclusions）」を生じさせる。書かれた衣服の意味作用はプロセス（「行程」）として展開されるのであり、非両立性テストは意味作用の展開という点と結びついている。

書かれた衣服の諸々の「種」に対する分類は、「種の断定」によって物質性に頼ることなく諸々の「種」に変異というかたちで対立関係を生じさせることから出発し（意味作用の発現）、非両立性テストを通じて諸々の「種」をまとめあげるという手順を踏む（意味作用の展開）。そうした諸々の「種」をまとめあげる、すなわち意味作用が展開する「行程」を要約する上位クラスが「類（genre）」である（7.8）。たとえば書かれた衣服の「種」としてのリネンは、生地という「類」のなかで意味作用を持つ対立関係に参与しており、生地という「類」は、諸々の「種」の対立関係を元にして意味作用が展開する範囲を示している

[39] « Or il est évident que si la toile, l'alpaga, et le tussor, par exemple, entrent en opposition signifiante, c'est parce qu'en fait ces tissus ne peuvent être employés *en même temps sur le même point du vêtement* ; inversement, la toile et les escarpins ne peuvent entrer en opposition signifiante, parce qu'ils peuvent parfaitement coexister dans une même tenue : ils appartiennent donc à des parcours différents. [...] en réunissant par l'esprit toutes les espèces incompatibles, on produit une sorte d'espèce générique, qui résume économiquement tout un parcours d'exclusions signifiantes [...] », Barthes, *Système de la Mode*, pp. 991-992. 邦訳 128-129 頁。

と考えられる[40]。それゆえ、肯定されること（断定されること）によって意味作用の発現を示す「種」および意味作用の展開を要約する「類」、その両者のつながりから、提喩的意味作用の現われを感知することができる。

書かれた衣服の「類」に凝縮されている意味作用のプロセス（「行程」）は排他性（非両立性）に基づくのであるが、この点は、書かれた衣服の「種」から「類」へというバルトの分析手順が非両立性テストに支えられていることを示している。

> 類とは総計ではなく、種で構成されたクラスのことである。類は、意味のうえで排他的なあらゆる種を論理的に集める。ゆえに類とは排他性に基づくクラスのことである。この点は強調されねばならない。というのは、直感的に見て親近性［／類似性］のある種を何でも集めてひとつの類を満たしたくなるからだ。ところで、親近性［／類似性］と相違は実際に、ひとつの類に属する諸々の種が持つ物質としての特徴であるとしても、それらは操作上の［分析する手順のうえでの］基準とはならない。類の構成は、物質に対する判断に基づくのではなく、形式的な非両立性テストに基づく。［…］[41]

書かれた衣服の「類」は、非両立性テストに基づき、親近性のある「種」（たとえば、両立できるすなわち同時に着用できる帽子と櫛隠し）を集めるのではなく、両立不可能な諸々の「種」を集める（たとえば「ドレス類」として、胴体（上半身と下半身を含めた胴体）に同時には着用できない水着とスキーウェアがまとめあげられ、あるいは「かぶりもの類」として、頭部に同時には着用できない帽子とヘッドバンドがまとめあげられる）。書かれた衣服の「類」とは、同時には現われない（同時には着用できない）諸々の「種」が属する

---

[40] 「意味作用を発揮するためには、リネンが、首飾りや色やジャケットやひだ等々を無差別に含むような「残余」から引き出されるということがない。［…］意味が存在するためには、一方で、選択の自由が必要であるが（x／残余）、他方では、その自由が諸々の対立関係のある一定の行程［／範囲］に限られていなければならない（残余とは衣服全体のうちのある部分にすぎない）。」« Pour signifier, la toile n’a pas à s’extraire d’un « reste » qui comprendrait indifféremment des colliers, des couleurs, des vestes, des plis, etc. [...] pour qu’il y ait sens, il faut, d’une part, qu’il y ait liberté de choix *(x/le reste)*, et d’autre part, que cette liberté soit limitée à un certain parcours d’oppositions (*le reste* n’est qu’une *certaine* partie du vêtement total). », Barthes, *Système de la Mode*, pp. 990-991. 邦訳 127-128 頁。

[41] « Le genre n’est pas une somme, c’est une classe d’espèce, il réunit logiquement toutes les espèces qui s’excluent sémantiquement ; c’est donc une classe d’exclusions ; ceci doit être souligné, car il peut être tentant de remplir un genre avec toutes les espèces intuitivement affinitaires ; or si l’affinité et la dissemblance sont effectivement des caractères substantiels des espèces d’un genre, ce ne sont pas des critères opératoires ; la constitution des genres ne repose pas sur un jugement appliqué à la substance, mais sur une épreuve formelle d’incompatibilité [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 992. 邦訳 130 頁。

クラス、言い換えれば「排他性に基づくクラス（classe d'exclusions）」のことであり、両立できない（同時には着用できない）という点で相互に排他的な諸々の「種」を集めることによって構成される。たとえば「かぶりもの類（coiffure）」として、ヘッドバンド（bandeau）、頭巾のように深くかぶる縁なし帽（bonnet）、ウイッグキャップ（bonnet perruque）、麦わら帽（canotier）、縁の広い麦わら帽（capeline）等々がまとめあげられるが、この「類」においては、単に帽子だけではなく、帽子ではないヘッドバンドやウイッグキャップが集められている。書かれた衣服の「類」は、あらかじめ確定したものとして存在していないため、「類」のステータス（より正確には諸々の「種」がどの「類」に属するのかということ）は不安定である（8.5）[42]。

相互に排他的な（非両立的な）諸々の「種」をまとめあげるという、この書かれた衣服の「類」の特殊性は、通常の意味合いでの「類」と「種」の関係性（互いに親近性がある諸々の「種」を包含する「類」）と比較すれば理解しやすいだろう。バルトは、「ディテール（détail）」に属するネックレス、ブレスレット、ハンドバッグ、手袋など相互に排他的ではない（互いに両立することができる）「種」を「変種（variété）」と呼び、書かれた衣服の「類」を構成する「種（espèce）」と区別している（8.3）。

書かれた衣服の「類」の場合、バルトが作成した「類」（とそれに属する「種」）の目録（8.9）においては、非両立性テストによって相互に排他的と見なされる「種」のみが諸々の「類」のもとに集められている。たとえば「ドレス類（robe）」には、ドレス（robe）およびその下位区分（ブレザードレス（robe blazer）やブラウスドレス（robe blouse）等々）のほかに、ベビードール（baby doll）、スキーウェア（combinaison de ski）、水着（maillot）、オーバーオール（salopette）などが挙げられている。この場合、ブレザードレスやブラウスドレスのみならず、（下半身と上半身を含めた）胴体に同時に着用できるかどうかテストを進め、同時には着用できないベビードールやスキーウェア等々を集めることによって、それらを包括する「類」が得られる。この「類」の名称は、赤や緑や青などの諸々の「種」を包括する「色（couleur）」のような独立した名称、すなわちドレスやスキーウェアやオーバーオール等々を包括する独立した名称が存在しないため、いわば仕方なしに、そのなかの代表的な「種」（ドレス）から採られている。書かれた衣服の「類」は「非排他的なクラス（classe inclusive）」（「ディテール」のような通常の意味での「類」としての「非排他性に基づくクラス（classe d'inclusions）」）ではないという理由から、目録のなかの「ドレス類」

[42] 「類」のステータスについて述べられているこの箇所において（8.5）、書かれた衣服の「類」は、意味が互いに類似した諸要素で構成されるクラスではなく、あくまでも「意味の一時的な非両立性（incompatibilité sémantique temporaire）」を通じて構成されるクラスであることが強調されている。

の項目でバルトは、スキーウェアやオーバーオール等々の形状が非常に異なるのも驚くにはあたらないと記述している。

しかし、形状が非常に異なるのは「ディテール」に属するネックレスやハンドバッグ等々についても同様である。親近性ではなく排他性に基づくという性質を持った書かれた衣服の「類」について押さえておくべきことは、衣服の物質性を捨象するというバルトの分析方法の一貫性だろう（先の引用文で親近性という基準は、衣服の物質的な特徴として退けられていた）。書かれた衣服の諸々の「種」を分類する基準について、バルトは次のように述べている。

> ［…］書かれた衣服の諸々の種［の分類］に必要なのは、体系それ自体に内在する固有の秩序、すなわち意味作用の基準に従った秩序であり、製造上の基準や語彙の親近性による基準に従うのではない。[43]

書かれた衣服の分類に必要とされる「意味作用の基準（critères de signification）」は、体系の外に存在するのではなく、体系それ自体に内在する分類原理として存在している。書かれた衣服の「種」の分類原理としての「意味作用の基準」は、「種の断定」による意味作用の発現および非両立性テストを通じた意味作用の展開に基づくと理解することができる。それゆえ、「体系それ自体に内在する（immanent au système lui-même）」秩序とは、意味作用の発現と展開に基づいた秩序のことであると言える。

書かれた衣服に対するバルトの分類方法を押さえるためには、書かれた衣服の「類」がどのように形成されるのかという点だけではなく、書かれた衣服の「類」がどのように配列されるのかという点についても考慮に入れる必要がある。書かれた衣服の「類」の目録において、諸々の「類」は、それに属する諸々の「種」とともに、アルファベット順に並べられている。「類」の配列の際には、諸々の「種」を「類」にまとめあげる作業と同様に、書かれた衣服の体系の外に存在する基準は退けられる。アルファベットによる順序を採用することについて、バルトは次のように述べている。

> なるほど、アルファベット順による分類法は、その場しのぎの手段、もっと豊かな分類法の貧しい親といったもののように見えることが有り得る。しかしそれは偏った見

[43] « [...] il faut aux espèces du vêtement écrit un ordre propre, immanent au système lui-même, c'est-à-dire soumis à des critères de signification, et non à des critères de fabrication ou d'affinité lexicale. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 987. 邦訳 123 頁。

方であり、要するにイデオロギーがかった見方であり、それはそうした見方が、逆に、「自然的」ないし「合理的」な分類法に特権や威厳を与えているからである。しかしながら、もし分類法のあらゆる様態に等しく深い意味を与えるのならば、アルファベット順による分類法は、分類の自由自在な形式であることが認められるだろう。特徴のないもの［／偏りのないもの／中性的なもの］は「充実した」ものよりも制度化され難いのである。書かれた衣服の場合、まさに、アルファベット順による分類法は偏りがない［／中性的である］という長所を持っている。なぜならそれは、技術的な現実にも言語的な現実にも頼っていないからである。アルファベット順による分類法は、［書かれた衣服の］類（それは排他性に基づくクラスである）が持つ非実体的な［／非物質的な］本性を露わにしたままにしておく。［書かれた衣服の］類の隣接性が存在し得るのは、ほかのあらゆる分類法では明確に述べられた連結が考慮されずそうした類を直接的に「近づける」ことを余儀なくされることになろうとも、その隣接性が連結の特別な変異によって引き受けられる場合に限られる。[44]

アルファベットによる順序は、衣服の実際上の様相（衣服に関する技術的な様相）にも語彙上の様相（言語の意味論的な様相）にも頼っておらず、非両立性テストを通して形成される排他性に基づくクラスである書かれた衣服の「類」の非物質的な性質を示すのに適した分類方法として採用されている。

書かれた衣服の「類」の目録作成に際してバルトは、アルファベット順以外の配列方法を念頭に置いている（8.7）。解剖学的と呼べる基準（人体をいくつかの部分に分けその区分を細分化したうえで、その区分ごとに衣服の「類」を当てはめる）、機械の部品を倉庫に分類するときのような技術的基準、あるいはまた言語の意味論的なグループ分けといった方法は、どれもみな書かれた衣服の体系外の事実であり、書かれた衣服の「類」に対して行なう分類には適さない。こうした分類方法は、書かれた衣服の「類」にとって関与的でない隣接性を想定することになるからである。たとえば、上半身に用いられるという理由で

[44] « Sans doute, le classement alphabétique peut apparaître comme un pis-aller, le parent pauvre de classements plus riches ; mais c'est là une vue partiale, et pour tout dire idéologique, dans la mesure où elle accorde par contraste un privilège et une dignité aux classements « naturels » ou « rationnels ». Cependant, si l'on attribue un sens également profond à *tous* les modes des classements, on conviendra que le classement alphabétique est une forme émancipée de classification : le neutre est plus difficile à institutionnaliser que le « plein ». Dans le cas du vêtement écrit, le classement alphabétique a l'avantage, précisément, d'être neutre, puisqu'il ne recourt ni à la réalité technique, ni à la réalité linguistique ; il laisse à découvert la nature insubstantielle des genres (ce sont des classes d'exclusions), dont la contiguïté ne peut exister que si elle est prise en charge par un variant spécial de connexion, alors que dans tout autre classement, on serait obligé de « rapprocher » les genres directement, sans faire état d'une connexion explicite. », Barthes, *Système de la Mode*, pp. 1002-1003. 邦訳 144-145 頁。

「ブラウス類（blouse）」と「ジャケット類（veste）」を隣り合わせに並べることを、アルファベット順は許容しない。書かれた衣服固有の論理から言えば、「類」の隣接性が存在するのは連結（connexion）の変異が顕在化したとき、すなわち衣服パーツの組み合わせの仕方が問題になる場合であり（10.6）、たとえば「スカートの上にふんわりとただようブラウス（blouse flottante sur la jupe）」というように、「スカート類」と「ブラウス類」が並置され、両者の組み合わせが前景化される場合である。

また、こうしたアルファベット順による分類法が「分類の自由自在な形式（forme émancipée de classification）」と呼ばれていることに注意を払いたい。なぜアルファベット順が自由自在であるのかという点について議論が深められていないが（引用した箇所は、『モードの体系』でアルファベット順について述べられた箇所（8.8）の（ほぼ）全てに該当する）、それがアルファベット順の「偏りがない（neutre）」という性質に関連していることは見て取れる。つまり言葉を補うべきなのは、偏りのないことが自由自在であることの理由であり、私たちはその理由を、アルファベット順が特定の方向性を持っていないという点に見出したい。言い換えれば、特定の方向性を持たないことを、偏りのない状態と自由自在である状態とを結ぶ論理として捉えるということである。ここで記述されている「偏りがない」という性質は、特定の方向性に基づいて序列化される秩序から解放された状態を指し示しているのではないだろうか。そのようにバルトの記述を読解すると、特定の方向性を持たないアルファベットによる順序が、書かれた衣服の「類」を配列するのに適していると想定されていることがわかる（「ル・システマティック」の提喩的な具現化を示す際に、私たちはこのアルファベット順の性質について再び取り上げるだろう）。

「種の断定」から「類」の配列に至るバルトの分析手順は、「意味作用の母型」における「変異」のステータスを想起させる。「変異」は物質性に基づかない抽象的な関係性として措定されていたからである。諸々の衣服パーツは、「意味作用の母型」という媒介ないしフィルターを通じて、実際上の多様性に左右されないというステータスを得ることになる。要するに「変異」は、衣服をめぐる具体的な現実を抽象的な関係性に変えるという役割を果たしていると言える。

そうであれば、「肯定／沈黙」という「変異」である「種の断定」にも同様の役割が見出せるはずである。「種の断定」が担う役割について述べられた箇所（7.13）を参照しよう。

> ［…］暖かいコートと軽いドレスのあいだには自由な選択が存在しえない、したがって意味作用もない。というのもその選択は温度によってもたらされるからだ。意味作用を持つ選択は、自然の終わるところにのみ存在する。自然は、タッサーとアルパカ

とリネンのあいだに、ボネ［頭巾のように深くかぶる縁なし帽］とトック帽［円筒形の縁なし帽］とベレー帽［丸く平らな縁なし帽］のあいだに、何の現実的区別も課したりはしない。そうであるからこそ、同様に、意味作用を持つ対立関係は同一の類に属する種同士のあいだに直接には成り立たず、ただ、ある断定（その対象はどのようなものであっても良い）とそれに対する暗黙の否定とのあいだに、ある選択とある拒否とのあいだにだけ成立するのである。体系に関わる事実とは、リネンを選択することではなく、ただもっぱらある限界内から何かを選択することである［…］。それゆえ、物質を機能に、具体的な動機づけを形式的な姿勢に、また良く知られたアンチノミーを持ち出せば、自然を文化に変形することによって、種の断定はまさしく「モード」の体系を創始する。つまり種の断定は、理解可能なものの端緒なのである。[45]

「種の断定」は、「自然（nature）」を「文化（culture）」に「変形する（transformer）」という、書かれた衣服の体系にとって必要不可欠な役割を果たしているが、その内実は、衣服の具体的な物質性を形式的な「機能（fonction）」に変形することにある。言い換えれば、物質上の具体的多様性を知的理解に変形する、あるいはまた「物質としての種（espèce-matière）」を「機能としての種（espèce-fonction）」に変形することである。「種の断定」は、「変形」という理論操作なのである。

意味作用を発揮する対立関係は、「自然」によってではなく「種の断定」による「変形」を通じてもたらされるのであり、この抽象的な対立関係は、同一の「類」に属する諸々の「種」同士のあいだに存在するのではなく、断定とそれに対する暗黙の否定（選択と拒否、肯定と沈黙）のあいだに存在する。軽いドレスが意味作用を発揮すると言えるのは、軽いドレスを選択することそれ自体が、そのドレスを意識的に選ばないことに対立しているからである。この「選択（choix）」とは、書かれている衣服が問題になっている以上、実際の衣服着用ではなくモード雑誌に表記されているということにほかならない。このように「種の断定」は、物質としての衣服から意味作用を発揮する衣服への変形を行なうことによっ

[45] « [...] entre le manteau chaud et la robe légère, il ne peut y avoir de choix libre, et partant de signification, car c'est la température qui commande ; il n'y a de choix signifiant que là où la nature finit : la nature n'impose nulle discrimination réelle entre le tussor, l'alpaga et la toile, entre le bonnet, la toque et le béret ; c'est pourquoi aussi l'opposition signifiante ne passe pas directement entre les espèces d'un même genre, mais seulement entre une assertion (quel que soit son objet) et sa dénégation implicite, entre un choix et un refus ; le fait systématique n'est pas de choisir la toile, c'est seulement de *choisir quelque chose dans certaines limites* [...] Ainsi, en transformant la matière en fonction, la motivation concrète en geste formel, et pour reprendre une antinomie célèbre, la nature en culture, l'assertion d'espèce inaugure véritablement le système de la Mode : elle est le seuil de l'intelligible. », Barthes, *Système de la Mode*, pp. 996-997. 邦訳 135-136 頁。

て、書かれた衣服における意味作用の働きを理解するための糸口となっている。

「意味作用の母型」、「種の断定」、「非両立性テスト」、これらの理論装置に基づきながら、諸々の分析手順、すなわちアルファベット順による書かれた衣服の「類」（および「種」）の目録作成、様々な「変異」の目録作成、バルトが「サンタグム（syntagme）」（既訳では「統合」）と呼んだ書かれた衣服の「類」と「変異」の結びつき方（どのような「類」がどのような「変異」と結びつくのかという点）についての記述を経て[46]、書かれた衣服の用語体系（コード）におけるシニフィアンに対するバルトの分類が終了する。書かれた衣服の分類の要となるのは「種の断定」という「変形」の理論操作であり、また、この操作を起点とする「類」と「種」の関係性に基づく意味作用の発現および展開を提喩的意味作用として捉えることができる。

4-2. カテゴリーとしての衣服

書かれた衣服に対するバルトの分析は、物質としての衣服（現実世界における衣服の実際上の様相）に照準を定めていない。あくまでモード雑誌の意味作用の在り方が議論の対象となっているのであるが、実際のところ衣服の物質性を捨象することは、衣服を諸々の「類」と「種」にカテゴライズすることに直結する。ここでは、バルトが探求するモード雑誌の意味作用の在り方を提喩的意味作用として捉えることができるという点をより明確にしたい。

「種の断定」の方法論上の役割についてまとめられている箇所で（7.14）、バルトは次のように述べている。

> どのような種でも、次の原理に従って、［意味作用の］ひとつの対象あるいはひとつの支持項に当てはまる。すなわち、衣服のあらゆる物質性は、［意味作用の］母型のレベルでは諸々の対象と支持項によって、用語のレベルでは諸々の類と種によってくみ尽くされる［という原理である］。対象と支持項の目録はしたがって、結局のところ種と類の目録に帰着する。対象 - 支持項の目録を自在に扱うためには、非両立性テストによって、類のリストを作成するだけで十分である。[47]

---

[46] 「類」と「種」の目録は『モードの体系』の 8 番目のセクションの最終部分（8.9）、変異の目録は 9 番目と 10 番目のチャプター、変異の目録についての総括は 11 番目のチャプター、「サンタグム」については 12 番目のチャプターにおいて、それぞれ記述されている。

[47] « Toute espèce vaut pour un objet ou un support, en vertu de ce principe : *toute la matérialité du vêtement est épuisée par les objets et les supports au niveau de la matrice, par les genres et les espèces au niveau de la terminologie*. L'inventaire des objets et des supports se ramène donc en définitive à celui des espèces et des genres ; il suffit d'établir, par épreuve d'incompatibilité, la liste des genres, pour

この引用文で着目したいのは、衣服の物質性という側面が書かれた衣服の諸々の「類」と「種」のステータスに還元されるという点である。先に見たように、「意味作用の母型」における「変異」は衣服の物質性に基づかないことをその特徴としており、衣服の物質性は「意味作用の母型」における「対象」と「支持項」に反映されるが、実際のところ「対象」と「支持項」の目録は「類」と「種」の目録に帰着する。それゆえ注目するべきなのは、カテゴリーとしての衣服、すなわち提喩的関係性（「類」と「種」のあいだの関係性）に基づく衣服の在り方である。

「種の断定」の方法論上の役割は、意味作用の働きを担う書かれた衣服の「類」と「種」の目録作成の端緒となっている点に存すると総括できる。意味作用を発揮する「種」とはまさしく概念的な存在なのであり、「種の断定」という理論操作によって提喩的関係性に基づく意味作用が前景化されるのである。物質性に依拠しないというバルトの分析方法は、提喩的意味作用への注視を促しているのだと言える。

4-3. 「種の断定」における提喩的運動性

「種の断定」という理論装置によって前景化されるのは、物質としての衣服ではなくカテゴリーとしての衣服である。ここでは、この理論装置に支えられた提喩的意味作用が運動性を有していることを示したい。

まず、改めて書かれた衣服の「種」のステータスを確認するために、衣服パーツの様々な「種」に対する分析方針が述べられた箇所（7.1）を参照しよう。

> 変異の目録は特別なものになるが、それに対し［意味作用の］対象と支持項については、ただこれら両者に共通した実体だけを調査するということになる。そうした実体とは、物質性における衣服にほかならない。つまり、対象と支持項という実体についての目録は必然的に衣服の目録と一致することになる。しかし、ここで問題になっているのは言葉［／パロール］によって中継された衣服であるのだから、調査することになるのは、言語［／ラング］が衣服を指し示すために使用する諸々の語彙そのものである（ただし、衣服を形容するために、ではない。衣服を形容する語彙は変異の目録に属する）。言い換えれば、調査しなければならないのは、衣服の諸々の名称であり（アンサンブル、ピース、ヨーク、ディテール、アクセサリー）、さらに別の言い方を

---

disposer d’un inventaire des objets-supports. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 997. 邦訳 136-137 頁。

すれば、衣服の諸々の種である。[48]

モード雑誌という媒体に中継された衣服の諸々の「種」は、「名称（nom）」という点からアプローチされることが見て取れる。衣服をカテゴリーとして扱うことは、モード雑誌において衣服が命名されていることと不可分の関係にあるのだと言える。

この引用文の直後の箇所では（7.2）、意味作用の問題から衣服の名称について論じるべきであることが、またその次のセクションでは（7.3）、書かれた衣服の「種」の分類が意味作用という基準に従うべきであることが述べられているが、その際にバルトは、「種の断定」が「ある特定の衣服の種の純粋かつ単純な断定（affirmation pure et simple d'une espèce particulière de vêtement）」によって成立していると述べている[49]。衣服を形容するのではなくただその存在を指し示すこの「純粋かつ単純な断定」こそ、諸々の衣服パーツがモード雑誌のなかで命名されているということにほかならないのではないだろうか。

ある何らかの衣服パーツが、名づけられることによってカテゴリー化される、すなわち、認知され得るひとつのカテゴリーになるという様相は、次の記述において見て取ることができる。

> ［種の断定の原理が、リネンの場合ならリネンの物質性ではなく、リネンという種の存在それ自体を肯定することにあるということを受けて］というのも、肯定とは、ここでは中断された［／宙吊りにされた］選択にほかならないからである。言語［／ラング］は諸々の物質［衣服に関しては物質としての衣服］を生じさせずに［何かを］述べることはできないが、もし言語によって強いられなければ、その選択に意味作用

---

[48] « Face au variant, dont l'inventaire est spécifique, on n'a donc à recenser, pour les objets et les supports, qu'une seule substance, qui leur est commune. Cette substance n'est autre que le vêtement, dans sa matérialité : l'inventaire substantiel des objets et des supports coïncide fatalement avec l'inventaire du vêtement. Mais comme il s'agit ici d'un vêtement relayé par la parole, ce que l'on va avoir à recenser, ce sont les vocables mêmes dont la langue se sert pour désigner le vêtement (mais non pour le qualifier, ce qui relève de l'inventaire des variants). Autrement dit, ce qu'il faut recenser, ce sont les noms du vêtement (ensembles, pièces, empiècements, détails et accessoires), autrement dit encore : ses espèces. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 986. 邦訳 121-122 頁。

[49] 「[…]［書かれた衣服の］諸々の種を分類しようと望むのならば、探し出そうと努めるべきなのはしたがって、諸々の種に固有に結びついた変異である。ところで、そのような変異は実在している。つまり、そうした変異は、母型［意味作用の母型］の意味がある特定の衣服の種の純粋かつ単純な断定から生じているときに常に見出される。そのような変異を、種の断定と呼ぶことにしよう。」« [...] c'est donc un variant attaché en propre aux espèces qu'il faut essayer de retrouver, si l'on veut espérer les classer. Or ce variant existe : on le trouve chaque fois que le sens d'une matrice surgit de l'affirmation pure et simple d'une espèce particulière de vêtement : on appellera ce variant l'*assertion d'espèce* [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 988. 邦訳 123 頁。

を発揮させるために、その選択を［衣服の物質性で］満たすことなど無用だろう。体系という観点からは、（またしたがって）たとえどれほど逆説的に見えようとも、「モード」という観点からは、リネンかどうかなどは問題ではないだろう。明日には、それがタッサーかアルパカになっているかもしれない。しかし、リネンかどうかは、選択された種（その種が何であろうとも）と名づけられていない諸々の種の総体［／全体］とのあいだの、常に変わらない対立であるだろう。少しでも物質［としての衣服］を宙吊りにしようと望めば［／少しでも衣服の物質性に対する判断を保留しようすれば］、ここでは意味作用を発揮する対立関係は厳密に二項的であるということになる。つまりその対立関係が指し示すのは、それと反対のものに対立している存在ではなく（リネンは何の反対物でもない）、その存在が引き出される無名のストックと対立している存在である。［…］[50]

リネンという「種」の存在それ自体に対する肯定（「種の断定」）は、「中断された選択（choix suspendu）」と呼べるような作用であり、諸々の「種」の親近性を保証するその物質性を捨象することによって、親近性（物質的な類似性）に依拠しない衣服分類を準備する。「種の断定」を通じて、「自然」（たとえば気温の寒暖）による強制が中断され、意味作用を持つ選択関係、すなわち概念性に基づくカテゴリー的な選択関係が打ち立てられる。

リネンは名づけられることによって書かれた衣服の「種」として立ち現われる。この場合、リネンが対立しているのは、アルパカやタッサー等々といった他の諸々の布地それ自体ではなく、命名されていない諸々の生地の「総体（masse）」ないし「ストック（réserve）」であり、意味作用を持つ概念的な選択関係は、「命名されている／命名されていない」という対立によって構成される（実際の衣服着用における選択の問題ではない）。この引用文の直後で、諸々の「種」が属するストックは「残余（reste）」（リネンが選択された場合なら、選択されなかったアルパカやタッサーなど）と呼び換えられており、命名されていないストックとは残余の集まり（総体）のことを指している。

そのうえで注目したいのは、「総体」として残余が集まった状態が直ちに「類」というステータスを喚起することである。実際バルトは、この引用文の直後で、選択（肯定）され

[50] « Car l'affirmation n'est ici qu'un choix suspendu : si la langue n'y obligeait, elle qui ne peut dire sans faire surgir des substances, il serait inutile de remplir ce choix pour le rendre signifiant. Du point de vue du système (et par conséquent), si paradoxal que cela paraisse, du point de vue de la Mode, qu'importe la toile ? Demain, ce sera le tussor ou l'alpaga, mais ce sera toujours la même opposition entre une espèce choisie (quelle qu'elle soit) et la masse des espèces innomées. Pour peu que l'on veuille bien suspendre la substance, l'opposition signifiante est donc ici rigoureusement binaire : elle réfère un être non à son contraire (la toile n'est le contraire de rien), mais à la réserve anonyme dans laquelle cet être est prélevé [...] », Barthes, *Système de la Mode*, pp. 989-990. 邦訳 126-127 頁。

た「種」と選択（肯定）されなかった「残余」との対立は、「より一般的な要素（élément plus général）」から「特殊な要素（élément particulier）」を識別する関係性であると述べている[51]。あるいはまた、「種の断定」の「変異」としての在り方が個別に扱われた箇所（9.2）では、次のように述べられている。

> ［…］この変異［種の断定］の原理については前に述べておいた。すでに見たとおり、その範列［／パラディグム］は形式的でしかあり得ない。すなわち、諸々の種の多様性にも関わらず、二項的な範列が問題になっている。なぜなら、この変異［種の断定］が対置［／対比］しているのは、言表によってこの対置［／対比］において満たされている物質とは無関係に、ただある個体とそれが属するクラスのみであるからだ。［…］[52]

「種の断定」は「個体（individu）」とそれが属する「クラス（classe）」を「対置している（opposer）」と記述されているが、「種」のクラスである「類」とは諸々の「種」を集めたカテゴリーである以上、「種」と「類」は対立させられるのではない。対立させられるのではなく、対比させられる、すなわち、コントラストをなすかたちで関係づけられるのである。ゆえにこの記述の趣旨は、「種の断定」を通じてそれとして立ち現われた瞬間から「種」は、物質性ではなくカテゴリー間の関係性に基づいて、それが属する「類」と概念的なつながりを持つということだろう。たとえば布地リネンは、「種の断定」を通じてそれが書かれた衣服の「種」としてのステータスを獲得した瞬間から「素材［／材料］（matériau）」あるいは「生地（tissu）」という「類」に関係づけられるのである[53]。

布地リネンがカテゴリーとして立ち現われる場合、実際に私たちは、リネンという「種」が属する「生地」という「類」（ジャンル）、また生地が属する「素材」というさらに大きなジャンルをも同時に感知する。リネンという「種」を断定（肯定）するだけで、「生地」や「素材」という「類」が参照される。「種の断定」が生じているだけで、言い換えれば、リネンという「種」と別個に「生地」という「類」が措定されずただリネンという「種」

---

[51] 「［…］x と「残余」の関係は、より一般的な要素から特殊な要素を区別する関係である。」« [...] le rapport de *x* et du « reste » est celui qui distingue un élément particulier d'un élément plus général. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 990. 邦訳 127 頁。

[52] « [...] le principe de ce variant [l'assertion d'espèce] a déjà été énoncé. On a vu que son paradigme ne pouvait être que formel : il s'agit d'un paradigme binaire, en dépit de la multiplicité des espèces, puisqu'il n'oppose jamais qu'un individu à sa classe, indépendamment de la substance dont l'énoncé remplit cette opposition [...] », Barthes, *Système de la Mode*, pp. 1012-1013. 邦訳 163 頁。

[53] 目録において「生地」は、「素材」という「類」に属しており独立した「類」として扱われていないが、ここでは独立した「類」として「生地」（布地）と呼ぶ方がより正確だろう。

がモード雑誌に表記されているだけで、非両立性テストを施す前に、すなわち、非両立性テストを通じて書かれた衣服の「類」が構成される前に、その都度私たちは、「類」と「種」のあいだの概念的なつながりを瞬時に認識することになる。「種の断定」は原理的に、「類」への暗黙の参照を伴っているのである。

先に見たように、「種の断定」を出発点として、諸々の「種」に非両立性テストを施して書かれた衣服の「類」が構成される。「類」を構成するためには諸々の「種」をたどることになるが、両立できない諸々の「種」を集めるこの行程には、常にすでに「類」への暗黙の参照が伴っており、それゆえ私たちは、「種」（下位クラス）と「類」（上位クラス）のあいだを絶えず往復することになり、下位クラスと上位クラスのあいだで概念的な運動性が生じる。このプロセスは、書かれた衣服に対するバルトの分析に宿る「種」（下位クラス）と「類」（上位クラス）のあいだでの提喩的な往復運動と見なすことができる。

「種の断定」におけるこうした提喩的運動性は、衣服の物質性という論点と複雑に関連している。というのも「種の断定」は、「意味作用の母型」において、非物質的（非実体的）である「変異」（V）が物質的（実体的）である「支持項」（S）と混合しているという、一見すると逆説的だと思われるケースに該当するからである。

支持項と変異の「融合（confusion）」について記述された箇所（6.4）を参照しよう。たとえば「リネンのドレス（une robe en toile）」という言表では、「ドレス」は意味作用の対象（O）、「リネン」という種の肯定（選択）は支持項と変異の融合に対応する。支持項と変異の融合についての次の記述から、提喩的な往復運動を生み出す原動力、すなわち「種の断定」を通じた「類」への暗黙の参照という点を見て取ることができる。

> ［…］たとえば、言表全体がリネンのドレス［という語句］によって占められている場合、ドレスを対象と支持項の融合として、リネンを（たとえばビロードや絹などと対立している）変異として規定したくなりそうである。しかしながら、変異は非物質的であり、リネンは直接に変異を構成することはできない。実際、生地の物質性こそが種の名称のヴァリエーション（リネン／ビロード／絹、等々）を支えている。言い換えれば、目標とされる対象（ドレス）と諸々の種の差異とのあいだに、物質的な支持項による中継を復元しなければならない。その支持項は、総称的であるような［／種に対する類の性質を持つような］生地であり、その用語上の表現が種の命名と融合している。つまりリネンは、［種の］差異を無視した素材としては（生地として）支持項であり、また、あるひとつの種に対する肯定（すなわち選択）としては変異なので

ある。[…] [54]

リネンという「種」を肯定することは、支持項として衣服の物質性を反映しつつ、変異として物質性に依拠しない対立関係を生じさせているというかたちで、支持項と変異の融合を具現化しているのであるが、「種」（リネン）が支持項の働きをしているのではない。支持項の働きをしているのは、暗黙のかたちで作用している「種に対する類の性質を持つ（générique）」存在、つまり復元しなければならない存在と見なされている「生地」という「類」（ジャンル）である。「種の断定」がもたらす支持項と変異の融合という現象の内実は、この「生地」という「類」がリネンという「種」の命名と融合していることにある。リネンが「種」として措定されれば即座に「生地」という「類」への暗黙の参照が生じるのである。

「類」への暗黙の参照は次のことを意味している。バルトの方法論において退けられていた衣服の物質性が、実際のところ完全には捨象されないということである。「種の断定」を出発点にした彼の衣服分類の方針に従えば、衣服の物質性は捨象されており、その分析方針の基盤となるのは、概念性、すなわち「類」と「種」のカテゴリー間の関係性である。同時に、そもそも諸々の「種」の名称のあいだの差異を成立させているのは、生地という物質としての共通性であり、バルトの衣服分類の前提において衣服の物質性は捨象されていないことになる。それでも、バルトの方法論が一貫性を保っていないとは思われない。なぜなら、「種の断定」という理論装置の機能は「変形」に存する、つまり物質としての衣服からカテゴリーとしての衣服への移行を生じさせることにあり、「種の断定」が物質性と概念性の双方にまたがるのは当然のことだからである。

この「変形」のメカニズムについては、衣服パーツの有無として「存在の断定（assertion d'existence）」とバルトが呼んだ「現前（présence）／不在（absence）」の対立（6.4）ないし「充実度（degré plein）」と「ゼロ度（degré zéro）」の対立（9.3）と比較すれば明確になるだろう。「種の断定」と「存在の断定」は、両者ともにモード雑誌に「表記されている／表記されていない」という書かれた衣服にとって根元的な対立に対応しており、「種の断定」と

[54] « [...] lorsque, par exemple, tout l'énoncé est occupé par : *une robe en toile*, il peut être tentant de définir la robe comme une confusion de l'objet et du support et la toile comme le variant (opposé, par exemple, au velours, à la soie, etc.) ; cependant le variant étant immatériel, la toile ne peut constituer directement un variant ; en fait, c'est la matérialité du tissu qui supporte la variation nominale de l'espèce (*toile/velours/soie*, etc.) autrement dit, entre l'objet visé (la robe) et la *différence* des espèces, il faut rétablir le relais d'un support matériel, pour générique qu'il soit, *le tissu*, dont l'expression terminologique se confond avec la nomination de l'espèce : la toile est support à titre de matériau indifférencié (comme tissu) et variant à titre d'affirmation (c'est-à-dire de choix) d'une espèce [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 975. 邦訳 106 頁。

同様に「存在の断定」は、「意味作用の母型」において、支持項と変異が融合しているケースに該当する。しかし、両者が示している支持項と変異の融合の仕方は異なる。先の引用文と同じセクション（6.4）でその相違が述べられており、「存在の断定」においては、支持項が変異を「吸収する（absorber）」のであるが、「種の断定」においては、変異が支持項を「吸収する」と記述されている。

「吸収する」ということの意味を読み解こう。「存在の断定」の場合、「垂れ下がりが存在するベルト（une ceinture à pan existant）」を指す「垂れ下がりのあるベルト（une ceinture à pan）」では、「垂れ下がり（pan）」という支持項が「存在する（existant）」という変異を含むというかたちでモード雑誌に表記されている。「種の断定」の場合、「リネンの（生地の）ドレス（une robe en (tissu de) toile）」を指す「リネンのドレス（robe en toile）」という言表では、「リネン（toile）」という変異（他の布地との差異ではなく「肯定／沈黙」の差異に基づく変異）が、「生地（tissu）」という支持項を含む。「存在の断定」では支持項が変異のステータス（抽象的な対立関係）を取り込み、「種の断定」では変異が支持項のステータス（物質性）を取り込む。ゆえに「種の断定」においては、変異のステータス（抽象的な対立関係）が支持項のステータス（物質性）を取り込むというかたちで、支持項と変異の融合が生じている。

この吸収ないし取り込みが、「種の断定」を、物質性から抽象的な対立関係への「変形」の理論操作たらしめしている。そしてすでに見たように、この抽象的な対立関係には絶えず概念性が伴っており、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性が暗黙のうちに働いている。「種の断定」という「変形」の理論操作には、「類」と「種」のあいだでの往復運動としての提喩的な運動性が伴われているのである。

4-4. 「ル・システマティック」の提喩的な具現化

「類」と「種」のカテゴリー間の関係性が前景化される「種の断定」という理論装置は、『モードの体系』における「体系」と「ル・システマティック」の共存関係をもたらす。その点を論証することを通じて、バルトによる提喩的意味作用の応用を示したい。

『サド、フーリエ、ロヨラ』のフーリエ論で「ル・システマティック」について記述された箇所を再び参照することから始めよう。

> モノローグ的である体系に対して、ル・システマティックは対話的である（ル・システマティックは、両義性の実践であり、諸々の矛盾に悩まされることがない）。ル・システマティックはひとつのエクリチュールであり、エクリチュールの永遠性を持って

いる（「歴史」に沿った、意味の絶え間ない置換）。ル・システマティックの眼目は、適用ではなく（純然たる想像の領域、言説の舞台としてなら別だが）、伝達や循環（意味作用を発揮するような）にある。とはいえ、ル・システマティックが伝達可能であるのは、形を変えられる（読者によって）という条件においてのみである［…］。――ここでは、フーリエの体系（想像的に体系を装う彼の分類法のあの部分）は提示されず、ただもっぱらル・システマティックに属する彼の言説のいくつかの箇所だけが語られる。[55]

バルトのフーリエ論は、フーリエの「体系」（空想的社会主義）ではなく、フーリエが実践した諸々の分類活動から感知できる「ル・システマティック」に狙いを定めたものであり、「ル・システマティック」は、空想的社会主義を実現するという目的とは別の射程を持った、エクリチュールの実践、すなわち自動詞的な実践として現われている。「体系」は、ある何らかの目的に従って適用される。しかし「ル・システマティック」は、意味作用の「循環（circulation）」としての「伝達（transmission）」をその眼目としており、目的を実現するためになされる手段とは異なった在り方をしている。

こうした自動詞的な在り方をしている「ル・システマティック」は、分析対象（この引用文ではフーリエのテクスト）に潜在しており、いわばありのままの形では「読者（lecteur）」すなわちバルトに伝達されず、むしろ読者としてのバルトがその形を変えることによってこそ伝達されるという点に注意したい。つまり、エクリチュールの実践として顕在化する「ル・システマティック」は、「変形する」[56]という作業を前提にしている。

すでに見たように、モード雑誌を分析する読者であるバルトが導入した「種の断定」という理論操作は、物質としての衣服からカテゴリーとしての衣服への「変形」（「自然」から「機能」への「変形」）を体現する。それゆえ、「種の断定」を起点にした衣服分類には、

---

[55] « Face au système, monologique, le systématique est dialogique (il est mise en œuvre d'ambiguïtés, il ne souffre pas des contradictions) ; c'est une écriture, il en a l'éternité (la permutation perpétuelle des sens le long de l'Histoire) ; le systématique ne se soucie pas d'application (sinon à titre d'un pur imaginaire, d'un théâtre du discours), mais de transmission, de circulation (signifiante) ; encore n'est-il transmissible qu'à la condition d'être *déformé* (par le lecteur) [...] – Ici, on n'expose pas le système de Fourier (cette part de sa systématique qui joue imaginairement au système), mais on parle seulement de quelques lieux de son discours qui appartiennent au systématique. », Barthes, *Sade, Fourier, Loyola*, p. 797. 邦訳 151-152 頁。

[56] フーリエ論からの引用文の原文では、「形を変える」という訳語に対応するのは「déformer」であり、それは形を歪めるという否定的なニュアンスを含意する。しかし、「形を変える」という語は、フーリエのテクストから「体系」ではなく「ル・システマティック」を読み取ろうとすれば（要するにバルトの作業それ自体としては）、「変形する（transformer）」という、より否定的なニュアンスを含意しない理論的な用語に置き換えることができるだろう。

「ル・システマティック」が顕在化する前提が備わっていることになる。

そのうえで焦点を当てたいのは、(「ル・システマティック」がその眼目とするところの)意味作用を発揮する「循環」という点である。意味作用を発揮する「循環」という点から、「種の断定」と「ル・システマティック」のつながりについて検討したい。

「種の断定」という知的操作を導入してバルトは、モード雑誌が意味を増殖させるという現象を問題にする。『モードの体系』の結論部分における最初のセクションでは（20.1)、次のように記述されている。

> ［…］言語は、「モード」の意味の特性を際立たせる。というのも、連続した実体を示していて細やかな意味作用をなかなか発揮することができない現実に対して、言語は、不連続なその用語体系［／命名法］によって、記号を増やすからである。こうした意味の増加は、種の断定において見事に見受けられる。つまり、(書かれた)「モード」がリネンに意味作用を発揮させるとき、リネンは現実の衣服が持つ意味の可能性を著しく増大させるのである。実際、現実の衣服が意味を与えることができるのは、重い生地に対する軽い生地というだけである。言語は、この初歩的な構造を、意味作用を持つ無数の種に寸断し、そうしてある体系を打ち立てるのであるが、その体系［の在り方］が正当化されるのは実用的という点（暖かいに涼しいを対立させるように、重いに軽いを対立させるという点）ではもはやなく、もっぱら意味という点にある。このようにして言語は、意味を精神のまぎれもないぜいたくとして作り上げるのである。[57]

「種の断定」を通じて布地リネンが書かれた衣服の「種」として意味作用を発揮することは、意味（sens）の「増加（multiplication)」という現象をもたらす。「種の断定」は、カテゴリー間の関係性を前景化する操作であるため、ここで述べられている意味の「増加」は、提喩的意味作用を基盤にしている。より正確に言えば、「種の断定」(による「変形」)を通じて物質的な条件から逃れたカテゴリーとしての衣服が意味の「増加」に資する。

---

[57] « [...] elle [la langue] accentue la nature sémantique de la Mode, car, par le discontinu de ses nomenclatures, elle multiplie les signes là même où le réel, ne proposant qu'une matière continue, aurait du mal à signifier finement ; cette multiplication des sens se voit bien dans l'assertion d'espèce : lorsque la Mode (écrite) fait signifier *la toile*, elle surenchérit considérablement sur les possibilités sémantiques du vêtement réel ; celui-ci ne peut en fait donner de sens qu'aux *tissus légers* par rapport aux *tissus lourds* ; la langue brise cette structure rudimentaire en mille espèces signifiantes, édifiant ainsi un système dont la justification n'est plus utilitaire (opposer le *léger* au *lourd*, comme le *frais* au *chaud*), mais seulement sémantique : elle constitue ainsi le sens en véritable luxe de l'esprit. », Barthes, *Système de la Mode*, pp. 1175-1176. 邦訳 379-380 頁。

モード雑誌が体現するこうした絶え間ない意味の増殖という点は、シニフィアンの「循環」として「ル・システマティック」につながる。ここで注目したいのは、「種の断定」の典型例が、「集合 B（ensembles B）」に属する言表、すなわちモード雑誌におけるシニフィアンとしての衣服とシニフィエとしての「モード」それ自体（流行に適ったファッション性）との関係性に基づく言表となっている点である。

「軽かろうが重みがあろうがこれこそリネンです［／これこそリネン、軽いものもあれば重みのあるものもあります］（voici la toile, légère ou de poids[.]）」、「赤と白のチェックの木綿のドレス（Une robe en coton à damiers rouges et blancs.）」（木綿のドレス（une robe en coton）という部分を抽出すれば、リネンのドレス（une robe en toile）と同様に、「種の断定」の典型例と見なせる）、「ツインセットを着ていると目立ちます（Le twin-set fait une apparition remarquée.）」（ツインセットという「種」はアンサンブルの「類」に組み込まれる）、「今年はブルーが流行（Le bleu est à la mode cette année[.]）」（青という「種」は色の「類」に組み込まれる）、これら「種の断定」の典型例と見なせる言表はすべて、「モード」それ自体との関係性に基づく「集合 B」に属している[58]。

「集合 B」に属する言表では、シニフィアンは諸々の衣服パーツおよびその様々な変異として多数存在しているが、シニフィエは常にただひとつ「モード」それ自体である。ただひとつのシニフィエを表わすにも関わらず、シニフィアンが多様な変異という形態を取って目まぐるしく展開するのであり、バルトはこの現象を「無限の隠喩（métaphore infinie）」と呼んでいる（20.8）。

実際、シニフィアンの「変異」は多様極まりない。先に見たこの点を想起しておくと、たとえばモード雑誌に記述されるコート、すなわちシニフィアンとしてのコートは、「開いた」、「つき合わせた」、「閉じた」、「交差した」、「巻きつけた（と言えるくらい交差した）」といったように、多様な前身ごろの「変異」を伴って「モード」（流行に適ったファッション性）というシニフィエを表わす。またモード雑誌はそうした「変異」を、「少し」や「それとなくおぼろげに」などといったように、細やかに修飾することもできる。モード雑誌は、流行に適っている衣服しか取り上げないという前提に基づきながら、シニフィアンを

[58] 私たちが「種の断定」の典型例と見なすのは、言表全体が特定の衣服の「種」に対する「純粋かつ単純な断定」のみによって構成されている（正確には限りなくそれに近い）場合である。その根拠は、次のような言表と比較すれば明確になるだろう。「ガーゼ、オーガンザ、ヴェール、綿モスリン、ここに夏があります（Gazes, organzas, voile, mousseline de coton, voici l'été.）」という言表は、「夏」（現実世界の様相）との関係性で「集合 A」に属しているとともに、この言表では「種の断定」が生じている。しかしこの言表は、諸々の布地の「種」を列挙することでレトリックの効果が際立っており、「種」に対する「純粋かつ単純な断定」の域を超え出ていると考えられる。

常に増殖させてゆくわけである。このことからわかるのは、「種の断定」を通じた意味の「増加」という現象、すなわち「類」と「種」の両カテゴリーに基づいた意味の増殖は、「変異」を伴って生じるということである。つまり、「類」と「種」の両カテゴリーが多様な「変異」を伴っていることが意味の増殖を示すのである。

「無限の隠喩」という現象についてもう一歩踏み込んで検討する場合、問題になるのは、その呼称ではなく（隠喩性について議論が深められているわけではない）、それが指し示す現象の帰結、すなわちシニフィアンが絶え間なく増殖することの帰結である。

モード雑誌が「モード」それ自体を表わす同語反復的な「集合 B」の在り方は、「意味への裏切り（déception du sens）」と呼び換えられている（20.9）。シニフィエは常に「モード」それ自体であるにも関わらずシニフィアンが絶えず変わってゆくことで、シニフィアンが変化するという現象そのものが際立つ。こうした意味作用の様態においては、シニフィアンは、シニフィエではなく絶えず生成されるシニフィアン自身を表わすと言えるほど活発な働きをすることになる。そのため、シニフィエはいわば「空虚（vide）」なものになり、シニフィアンがシニフィエを表わすという図式は転倒させられる。シニフィアン（の絶え間ない変化）がシニフィアン（の生成そのもの）を表わすこのような「意味への裏切り」は、シニフィアンからシニフィアンへというかたちでの、いわば再帰的な意味作用として、シニフィアンの「循環」と呼べるだろう。

シニフィアンの「循環」あるいは「意味への裏切り」が何によって引き起こされるのか、その点についてバルトは次のように述べている。

> ［…］シニフィアン（すなわち「モード」の言表）は、意味作用の構造（対象、支持項、変異、母型の階層序列）を通じて絶えず意味を拡散し続けるが、結局のところその意味は、シニフィアンそれ自体にほかならない。このようにして「モード」は、自らが豪奢に作り上げた意味を裏切ることを唯一の目的とする意味の体系というぜいたくな逆説を示しているのである。［…］[59]

シニフィアンを循環させる原動力としてバルトが挙げているのは、モード雑誌が母型構造（「意味作用の母型」）を通じて意味（シニフィアンそれ自体）を「拡散する（diffuser）」

[59] « [...] le signifiant (c'est-à-dire l'énoncé de Mode) continue sans cesse à diffuser du sens à travers une structure de signification (objets, supports, variants et hiérarchies de matrices), mais ce sens n'est finalement rien de plus que le signifiant lui-même. La Mode propose ainsi ce paradoxe précieux d'un *système sémantique dont la seule fin est de décevoir le sens qu'il élabore luxueusement* [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1185. 邦訳 393 頁。

ことであり、それは、私たちが「ル・システマティック」の換喩的な具現化と名づけた意味の「伝播（diffusion）」、すなわち変異が支持項を経たうえで意味作用の対象へと広がってゆくことである。先に私たちは、母型構造の展開が意味作用の目標対象へと方向づけられることで「ル・システマティック」の換喩的な具現化が抑制されることを「体系」の構造的な限界として示したが、「集合 B」に属する言表の場合にはシニフィアンが循環することによって、シニフィエの拘束から免れた母型構造の展開が意味の統御を頓挫させるという目的に方向転換するのであり、その結果として「ル・システマティック」の換喩的な具現化に対する抑制は軽減されることになる。

しかしただちに付記しなければならないことは、「ル・システマティック」の換喩的な具現化は、このように意味の統御から逃れるが、それでもなおこの具現化が、母型構造の展開を通じてなされる以上、意味作用の目標対象というシニフィアン（の配置）の一要素を特権的なかたちで持たざるを得ないことに変わりないという点である。言い換えれば「意味への裏切り」としての意味作用は、特定の意味を伝達することには向かわないが、最終的な到達点として意味作用の目標対象に方向づけられていることには変わりない。それゆえ、「意味への裏切り」という点から、母型構造の展開を通じた「ル・システマティック」の換喩的な具現化に対する抑制が、ある程度解消されるのだと理解しておこう。

同時に、バルトがシニフィアンの循環を意味（sens）の循環と捉えていることに注意を払いたい。「集合 B」に属する言表の理論的帰結としてバルトが焦点を当てているのは、意味の循環という点である。続けてバルトは、次のように述べている。

> 意味を決して固定させずに持続させる機械のようなものとして、それ［「モード」］は、裏切られる意味として絶えず存在しながらも、常にひとつの意味として存在している。内容を持っていないことから［／内容が空虚であることから］、それ［「モード」］は、意味作用を持たないものに意味作用を発揮させるという人間に備わる能力を自分たち自身で［改めて］獲得するということのスペクタクル［／見世物］となっている。ゆえにそれ［「モード」］は、意味作用という一般的行為の典型的な形式として現われており、したがって、諸々の事柄の意味ではなく意味作用を読ませるという文学の存在そのものに通じることになる。［…］[60]

[60] « Sorte de machine à entretenir le sens sans jamais le fixer, elle [la Mode] est sans cesse un sens déçu, mais elle est toujours un sens : sans contenu, elle devient alors le spectacle que les hommes se donnent à eux-mêmes du pouvoir qu'ils ont de faire signifier l'insignifiant ; elle apparaît ainsi alors comme une forme exemplaire de l'acte général de signification, rejoignant ainsi l'être même de la littérature, qui est de donner à lire la signification des choses, non leur sens [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1186. 邦

「意味を決して固定させずに持続させる（entretenir le sens sans jamais le fixer）」ということは、要するに意味を循環させることである。意味を循環させることの内実は、「集合 B」に属する言表が問題になっているのであるから、シニフィアンを循環させることにほかならない。モード雑誌は、意味作用のひとつの「典型的な形式（forme exemplaire）」として、意味（シニフィアン）を固定させずに持続させるという仕組みを持っている。バルトによれば、モード雑誌と文学のつながりは、「意味（sens）」ではなく「意味作用（signification）」を読みの行為の対象にするということに支えられているが、この場合念頭に置かれているのは、意味（シニフィアン）を絶え間なく循環させることである。

意味（シニフィアン）のこうした絶え間ない循環、その際限のなさをもたらす理論操作こそが、「種の断定」なのである。さらに続けて、バルトは次のように述べている。

> ［…］書かれた「モード」の体系がその最も深い経済的条件に通じるのは、まさにその体系が自身の最も形式的な本性をさらけ出す時である。空虚でありながらも意味作用の活動的なプロセスこそが「モード」雑誌を持続的な制度にする。なぜならモード雑誌にとって、語るとは表記することであり、そして表記するとは意味作用を発揮させることであり、モード雑誌の言葉［／パロール］は、その内容がどうであれ、十分に社会的な行為だからである。それ［モード雑誌のパロール］は、空虚であるにもかかわらず意味作用を発揮するのだから、際限のないものであり得る言葉である。というのは、もしモード雑誌が言うべき何かを持っているのだとしたら、モード雑誌は、その言うべき何かをくみ尽くすことを目的そのものとするような秩序をなすだろうからである。それどころか反対に、自身の言葉をまったく論証ぬきの意味作用にすることによって、モード雑誌は純然たる維持のプロセスのひとつを始動させ、そうしたプロセスは理論的に際限のない企図を作り出すことになる。[61]

訳 393-394 頁。

[61] « [...] c’est au moment où il dévoile sa nature la plus formelle, que le système de la Mode écrite rejoint sa condition économique la plus profonde : c’est le procès actif d’une signification cependant vide qui fait du journal de Mode une institution durable ; puisque pour ce journal, parler, c’est noter, et noter, c’est faire signifier, la parole du journal est un acte social suffisant, quels que soient ses contenus : c’est une parole qui peut être infinie parce qu’elle est vide et pourtant signifiante ; car si le journal avait *quelque chose* à dire, il entrerait dans un ordre dont la fin même serait d’épuiser ce quelque chose ; en faisant au contraire de sa parole une signification pure de tout argument, le journal lance l’un de ces procès de pur entretien, qui font des entreprises théoriquement infinies. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1186. 邦訳 394 頁。

「種の断定」という用語自体は用いられていないが、この引用文は、「種の断定」が念頭に置かれて記述されていると見なすことができる。その根拠は、モード雑誌の根本的な形式が「まったく論証ぬきの意味作用（signification pure de tout argument）」に基づいており、モード雑誌が駆使する論証なしに言い切る手法を最も端的に示しているのが「種の断定」であるという点にある。

特定の目的を持たないモード雑誌の断定的な手法が、意味を際限なく持続させる、すなわちシニフィアンを際限なく循環させる。その理由は、そうした断定的な手法が無尽蔵な意味作用（の活発なプロセス）を促すからである。シニフィアンは、「種の断定」に支えられたかたちで循環する。シニフィアンの循環は、シニフィアンがそれ自身を目指すのであるから、他動詞的ではなく自動詞的な在り方をしている。「種の断定」によるシニフィアンの際限のない循環は、カテゴリー間の関係性を基盤にした「ル・システマティック」の提喩的な具現化と見なすことができる。

実際、諸々の衣服パーツのカテゴリー間での展開は、母型構造を階層序列として組織化する要因となる意味作用の最終的な目標対象を持たない、言い換えれば中心的な要素を持たないのである。諸々の衣服パーツのカテゴリー間での展開が意味作用の最終的な目標対象（中心的な要素）を持たないことの根拠は、衣服パーツの「類」と「種」の両カテゴリーが、アルファベット順という特定の方向性を持たない順序に基づいて配列される点にある。分類の手段としてのアルファベット順を「偏りがない（neutre）」と形容していた先に引用したバルトの記述を思い起こそう（「アルファベット順による分類法（classement）は、分類（classification）の自由自在な形式である」、「書かれた衣服の場合、まさに、アルファベット順による分類法（classement）は偏りがないという長所を持っている」）。「偏りがない」というアルファベットによる順序の性質が指し示しているのは、配列される諸要素、すなわち諸々の「類」と「種」のカテゴリーのうちのいかなるカテゴリーも特権的な位置に収まることがないという点であり、アルファベット順は最終的な目標対象というステータスを持つ要素とは無縁なのである。

このようにバルトは、アルファベットによる順序を活かして中心的な要素を介在させずに、「種の断定」によるシニフィアンの際限のない循環を元にして、「体系」に「ル・システマティック」としての在り方を付与する。モード雑誌に対するこうしたバルトの分析実践は、「類」と「種」の関係性に基づく意味作用のひとつのタイプ（シニフィアンの際限のない循環）としての提喩的意味作用の一応用例と見なすことができる。

第 5 節　『モードの体系』における提喩的なプロセスとしての「中性化」

本節では、『モードの体系』のなかの「中性化」をめぐるバルトの記述から、「ル・システマティック」の具現化の一環として捉えることができるところの、バルトが実践した提喩的意味作用の応用を示す。そのためにまず、「ル・システマティック」の提喩的な具現化を示す再帰的な意味作用が『モードの体系』における「中性化」という論点と結びついていることを確認する。次に、「中性化」のプロセスが「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づいていることを示したうえで、「種」（特殊な要素）から「類」（一般的な要素）へという方向性が「類」から「種」へという逆の方向性を同時的に伴うことによって、「中性化」のプロセスに可逆的な運動性が生じること、すなわち、カテゴリー間の関係性に胚胎する往復運動がバルトの分析を通じて現働化されることを明らかにする。

5-1. 「ル・システマティック」の一様態としての「中性化」の作用

「ル・システマティック」の具現化を体現する「集合 B」に属する言表における再帰的な意味作用は、『モードの体系』における「中性化（neutralisation）」という論点に結びついている。

「集合 B」に属する言表をめぐって（20.8）、「モード」というシニフィエを表わすシニフィアンの多様性が「無限の隠喩（métaphore infinie）」と形容されていることは先に言及したが（シニフィアンの多様性がそのように形容されているだけであり、繰り返すが問題になるのはこの形容それ自体ではない）、「ここに見出されるのは、ただひとつの同じシニフィエに対してシニフィアンを自由自在に変える無限の隠喩というエコノミーそのものである」[62]と記述されている箇所にバルトは注を施しており、その注では、際限のない意味作用の働きが程度の差はあれ「集合 A」に属する言表においても観察できるという旨が述べられている[63]。

その根拠として挙げられている汎意味（pansémie）という現象は、中性化の作用によってもたらされる（当該の注の引用で省略した末尾の箇所でバルトは、中性化について論じられた『モードの体系』内の 14.7 および 14.8 という二つのセクションへの参照指示を付記している）。汎意味と中性化のつながりを確認するために、中性化について総括されている箇所（14.8）を参照しよう。

---

[62] « on reconnaît ici l'économie même d'une métaphore infinie, qui varie librement les signifiants d'un seul et même signifié. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1184. 邦訳 392 頁。

[63] 「汎意味によって、集合 A においても同じ傾向［が見られる］（ただしその場合それはひとつの傾向にすぎない）。［…］」« Même tendance (mais ce n'est là qu'une tendance) dans les ensembles A, par pansémie [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1184, note 3. 邦訳 392 頁、注 3。

シニフィエの総体に働きかける絶え間ない中性化は、「モード」のあらゆる語彙を不確かなもの［／人を欺くもの］にしている。［…］まるで「モード」の語彙が、トリックにかけられて、結局のところただひとつの系列に属する類義語群で（あるいはもしそう言いたければ、ひとつの巨大な隠喩で）構成されるかのように事が運ぶ。しかしながら、その語彙はたしかに存在するように見えるのであり、それが「モード」の逆説なのである。[64]

この引用文から、「集合 B」に属する言表において見られた際限のない意味作用が、止むことのない中性化を通じて、「集合 A」に属する言表においても観察されることがわかる。その根拠は、際限のない意味作用をもたらす不断の中性化の働きをバルトが隠喩と形容している点にあるのではなく、中性化の働きがシニフィエに関与するという点にある。

「競馬場ではプリントの布地が全盛です」や「えりを開けるか閉じるかに応じてスポーティーもしくはドレッシーになるカーディガン」といった言表に見られたように、「集合 A」に属する言表のシニフィエは現実世界における諸々の状況や状態である（競馬場、（プリントの布地を無地に置き換えることによって生じる）庭でのパーティー、スポーティー、ドレッシー、等々）。ここで問題になっているのは、衣服をめぐるこうした現実世界の諸々の状況や状態によって形成される対立関係に対して働きかける中性化の作用である。中性化は止むことなしに働くことでモードの「体系」の安定性を頓挫させるという効力を持っているため[65]、中性化の作用による「体系」の不安定性を「ル・システマティック」の現われの一環として捉えることができる。

私たちはこれまでモード雑誌の言表のシニフィアン（諸々の衣服パーツおよびその変異）に対するバルトの分析を検討してきたが、モード雑誌に備わる無尽蔵な意味作用がシニフィアンの領域にとどまらないため、モード雑誌の言表のシニフィエ（現実世界における諸々の状況や状態）に対するバルトの分析についても、無尽蔵な意味作用という点に焦点を当てて、つまり中性化の働きという点から検討する必要があるだろう。

---

[64] « La neutralisation incessante qui travaille son corps de signifiés rend illusoire tout lexique de la Mode [...] tout se passe comme si le lexique de la Mode était truqué, composé finalement d'une seule série de synonymes (ou, si l'on veut, d'une immense métaphore). Pourtant ce lexique semble exister, et c'est le paradoxe de la Mode. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1106. 邦訳 292 頁。

[65] 「[…]「モード」のシニフィエの体系は、その内部構造を絶えず動かす中性化の影響のもとで、不安定な体系となっている。」« [...] le système des signifiés de Mode, sous l'effet des neutralisations qui en déplacent sans cesse la structure interne, est un système instable. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1106. 邦訳 293 頁。

5-2. 「中性化」の提喩的なプロセス

バルトは、モード雑誌の言表のシニフィアン（諸々の衣服パーツおよびその変異）の対立関係に対する中性化とシニフィエ（現実世界における諸々の状況や状態）の対立関係に対する中性化をそれぞれ別個に扱っている（前者：11.8-11.9、後者：14.4-14.8）。私たちは、前者についてはバルトの記述の分量が乏しいため原衣服素をめぐる記述（11.9）を参照するにとどめ、中性化のメカニズムが詳細に分析されている後者を取り上げる。

中性化について検討する際に把握する必要があるのは、中性化の対象となる対立関係である。構造言語学における場合と同様に、バルトの衣服論においてその対立関係は、「連辞［／サンタグム］(syntagme)」とペアになって存在する「範列［／パラディグム］(paradigme)」として組織化されている。私たちが取り上げるのはモード雑誌の言表のシニフィエ（現実世界における諸々の状況や状態）の対立関係、すなわち「集合 A」に属する言表のシニフィエの対立関係である[66]。シニフィアン（諸々の衣服パーツおよびその変異）の対立関係に応じたかたちで組織化されているシニフィエの対立関係は、諸々の要素（衣服パーツおよび変異）からある任意の要素（衣服パーツおよび変異）を選び取ること、要するに範列としての「体系」[67]からある要素を選び取ることと不可分であり、諸々の衣服パーツ（および変異）の選択関係に依拠した現実世界における諸々の状況や状態の差異のことである。

排他的な選択関係に依拠する対立関係について、バルトはそれを、ラテン語の排他的選言の接続詞「AUT（アウト）」を用いて「Relation AUT」（A と B のどちらかという選択関係）と呼んでいる（13.8）。

> ［…］朝か晩かによって縞のフランネルか水玉のツウィルを［という言表］において、事実として検知されるのは、シニフィアン［縞のフランネルと水玉のツウィル］のヴァリエーションそのものによって、「晩」と「朝」のあいだには関与的な対立があり、またそれらふたつの用語は同一の意味的範列に属しているということである。そのことを次のように言っても良いが、これら二つの用語は、サンタグマティックな面の上に繰り広げられた体系の断片というものを構成しているのだ。その面の上で両者を結

---

66 「集合 B」におけるシニフィエは「モード」それ自体として常に同一であるため、「集合 B」に属する言表の用語体系のシニフィエの対立関係（「モード」と「モード外」）はバルトの分析から除外されており（13.1）、私たちの議論でも扱わない。

67 この場合の「体系」は、諸要素の潜在的ストックという意味での「体系」であり（「記号学の原理」でバルトは、「連辞」とペアになって存在する諸辞項の潜在的ストックである範列を「体系（système）」という用語のもとに記述していた）、書かれた衣服のコードとレトリックを合わせたモード雑誌の全般的体系の一部分にすぎない。

び合わせている関係は、排他的な選言の関係である。このきわめて特殊な関係（なぜ特殊かと言うと、それが同一の体系に属する用語群をサンタグマティックの面でまとめあげているからである）、その関係は Relation AUT と呼べるだろう。その二者択一的な本性（あれか…あるいはこれか［どちらか一方］）のゆえ、Relation AUT とは体系のサンタグマティックな関係、ないしは意味作用が持つ特殊な関係であると言っても良い。[68]

この引用文では、構造言語学における「範列」（諸辞項の潜在的ストック）と「連辞」（言連鎖内での諸辞項の結合）にならって、言表ひとつのなかで意味の変化が顕著に現われているケースについて記述されている（先に取り上げた「えりを開けるか閉じるかに応じてスポーティーもしくはドレッシーになるカーディガン」という言表と同様のケースとしての、「朝か晩かによって縞のフランネルか水玉のツウィルを（flanelle rayée ou twill à pois selon le matin ou le soir）」）。シニフィアンのヴァリエーション（縞のフランネルと水玉のツウィル）に応じて生じるシニフィエの差異（「晩（soir）」と「朝（matin）」）は、意味の変化に関与する対立関係として「範列」（パラディグム）を形成している。この場合、縞のフランネルは「朝」を表わし水玉のツウィルは「晩」を表わすというかたちで、二者択一的な対立関係が見られる。要するに、朝には縞のフランネル、晩には水玉のツウィルというかたちでの排他的な選択関係を認識できる。他方、「サンタグマティックな面（plan syntagmatique）」（既訳では「統合の面」）あるいは「サンタグマティックな関係（relation syntagmatique）」（既訳では「統合的関係」）は、諸々の衣服パーツと変異の組み合わせのことを指す[69]。

注意したいのは、バルトによれば「Relation AUT」とは、本来ならば別々の次元に属するパラディグム（「体系」）とサンタグムの境界を侵犯するかのような関係性のことを指しており、それが、パラディグム内（「体系」内）の対立関係でありながらサンタグム上で繰り広げられる二者択一的な選択関係であるという点で特殊な関係性として記述されているこ

---

[68] « [...] dans *flanelle rayée ou twill à pois selon le matin ou le soir*, il est attesté, par la variation même du signifiant, qu'il y a entre « *soir* » et « *matin* » une opposition pertinente et que ces deux termes font partie du même paradigme sémantique ; ils constituent, si l'on veut, un fragment de système étendu sur le plan syntagmatique ; sur ce plan, la relation qui les unit est celle de la disjonction exclusive : on appellera cette relation très particulière (puisqu'elle réunit syntagmatiquement les termes d'un même système) la relation AUT. Par sa nature alternative (ou bien... ou bien), AUT est, si l'on veut, la relation syntagmatique du système ou relation spécifique de la signification. », Barthes, *Système de la Mode*, pp. 1095-1096. 邦訳 277-278 頁。

[69] 「朝か晩かによって縞のフランネルか水玉のツウィルを」という言表の場合では、「フランネル」および「ツウィル」が意味作用の対象（O）、「縞の」および「水玉の」が支持項と変異の融合（SV、「模様（motif）」という「類」に関係づけられる「種の断定」が生じているケース）に該当するだろう。

とである。そこからわかる事柄として、構造言語学の諸概念を衣服論に応用するバルトはサンタグム上での「体系」の在り方を記述しているのであり、別の言い方をすれば、パラディグムとサンタグムの両面にわたる対立関係が書かれた衣服のコード（用語体系）[70]の問題として分析されている。

中性化の問題を検討するにあたって次に確認すべきなのは、「Relation AUT」ではない選択関係、すなわち排他的ではない選択関係であり、バルトはそれを、ラテン語の非排他的選言の接続詞「VEL（ウェル）」を用いて「Relation VEL」と呼んでいる（14.3）。

> Relation VEL は選言的でかつ非排他的である（選言的でかつ排他的な Relation AUT に対立する）。選言的だというのは、この関係によって結ばれる諸々の単位が同時には現実化されえないからであり、また非排他的だというのは、そうした諸々の単位が同一のクラスに属しており、またそのクラスがそうした諸々の単位すべてにわたって延長されていて［／外延の関係を有しており］、暗黙のかたちでそのクラスが、衣服［シニフィアンとしての衣服パーツ］がまさに持つ総括的なシニフィエ［この引用文の場合では、たとえ名づけられていないとしても街や田園を含む場所］となっているからである。たとえば街あるいは田園のためのセーター［という言表］では、街と田園とのあいだに現実化に際しての二者択一がある。というのも、両方の場所［一方と他方の場所］に同時に居ることはできないからだ。しかしながらそのセーターは、時間を無視してみれば、あるいは少なくとも、まず一方の場所、それから他方の場所、というように順を追うかたちでなら、街と田園の両方に当てはまるものとして使われる。したがってそのセーターは、あるただひとつのクラスを指し示しており、そのクラスが街と田園の両方を包含する（たとえそのクラスが言語によって名づけられていないとしても）。[71]

この引用文では、二つのシニフィエ（「街（ville）」および「田園（campagne）」）とひとつ

---

[70] 用語体系は諸々の衣服パーツと変異のヴァリエーション（パラディグム）および両者の結合関係（サンタグム）を含む。

[71] « La relation VEL est à la fois disjonctive et inclusive (par opposition à AUT, qui est disjonctif et exclusif) : disjonctive parce que les unités qu'elle relie ne peuvent être actualisées en même temps, inclusive parce qu'elles appartiennent à une même classe, qui leur est extensive et qui est implicitement le véritable signifié global du vêtement : dans *sweater pour la ville ou la campagne*, il y a une alternative d'actualité entre la ville et la campagne, car on ne peut être à la fois dans l'un et l'autre lieu ; le sweater vaut cependant, intemporellement, ou du moins successivement pour l'un et pour l'autre et renvoie par conséquent à une classe unique, qui inclut à la fois la ville et la campagne (même si cette classe n'est pas nommée par la langue). », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1099. 邦訳 283 頁。

のシニフィアン（セーター）によって言表が構成されているケースについて記述されている（「街あるいは田園のためのセーター（sweater pour la ville ou la campagne）」）。「Relation VEL」は、「選言的（disjonctive）」という性質を持つため、ひとつのまぎれもない選択関係であり（街と田園の両方の場所に同時に居ることはできない）、またそうでありながらも「非排他的（inclusive）」であり、選択関係にある諸要素（街と田園）が互いに排除し合わないという性質を持っている。それゆえ「Relation VEL」とは、A と B のどちらでも構わないという選択関係であると言える。

注目したいのは、なぜ「街」と「田園」という二つのシニフィエが互いに排除し合わない選択関係にあるのかという点であるが、その根拠は、それら二つのシニフィエを包含する上位クラスが存在するという点に存する。二つのシニフィエの上位クラスへの包括は、その上位クラスが何らかの名称を持っているかいないかに関わらず機能する。私たちはここに、「類」（上位クラス）と「種」（下位クラス）のカテゴリー間の関係性、すなわち提喩的関係性を見ることができる。

どのようにして諸要素（「街」と「田園」）が上位クラスに包括されるに至るのかという点に目を向けると、まず一方の場所、それから他方の場所へと順を追うかたちであれば、セーターが街と田園の両方に適用されると記述されている。「Relation VEL」は、二つのシニフィエとひとつのシニフィアンで形成される意味の構造に基づいて成立しており、この引用文の直後で述べられているように、もしシニフィアンが二つ存在すれば、「Relation VEL」は排他的な選択関係へと、すなわち「Relation AUT」へと変わってしまう（「田園か街かによってセーターかシャツブラウスを（sweater ou chemisier selon la campagne ou la ville）」）。非排他的な選択関係は、シニフィアンとしての衣服パーツ（セーター）が一方のシニフィエ（街）から他方のシニフィエ（田園）へと遍歴することを通じて生じる。

二つのシニフィエとひとつのシニフィアンで形成される意味の構造は、「Relation VEL」とは異なる関係性においても確認することが可能であり、バルトはラテン語の接続詞「ET（エト）」を用いてその関係性を「Relation ET」と呼んでいる（14.2）。

> Relation ET は、累積的である。この関係性は、唯一無二で、現実性に満ち、偶発的で生きられたあるひとつの状況のなかでいくつかのシニフィエを寄せ集めて、それらのあいだに現実的な（そして VEL の場合のように、形式的というわけではない）相互補足的関連を確立する（夏、パリで）。[72]

[72] « La relation ET est cumulative ; elle établit un rapport de complémentarité réelle (et non pas formelle, comme dans le cas de VEL) entre un certain nombre de signifiés qu'elle amalgame dans une situation

この引用文で例として想定されているのは、その直前のセクション（14.1）で挙げられている「夏のパリのためのこのタッサーのドレス（cette robe en tussor pour Paris l'été）」という言表であり、この言表は、二つのシニフィエ（「夏（été）」および「パリ（Paris）」）とひとつのシニフィアン（タッサーのドレス）によって構成されている。「Relation ET」において、二つのシニフィエとひとつのシニフィアンから成る意味の構造は、二つのシニフィエが互いに補い合うようなかたちで累積ないし並置されることによって形成される。

この引用文に続けて述べられているとおり、「Relation ET」では、状況限定詞（「夏」および「パリ」）をはじめとして、「春のバカンス（vacances printanières）」における付加形容詞（「春の（printanières）」）、「夏の夜（nuit d'été）」における補語として使用された名詞（「夏（été）」）といったように、シンタックス上での諸々の限定（détermination）が見られる。また「Relation ET」は、「簡素で実用的な（simple et pratique）」や「しなやかでのびのびとした（souple et désinvolte）」など親近性のあるシニフィエの並列だけでなく、「大胆で控えめな（audacieux et discret）」や「厳密なしなやかさ（souplesse rigoureuse）」というように、相反するシニフィエの並列を示すこともある。さらにこの関係性においては、二つに限らず三つ以上のシニフィエが並置されることさえある（「田園でのウィークエンドの秋の晩のため（pour les soirées d'automne pendant un week-end à la campagne）」（14.1））。ゆえに「Relation ET」は、A であると同時に B であるという関係性、より正確には、A かつ B（かつ C かつ…）という関係性のことだと言える。

諸要素の上位クラスへの包括について述べられているわけではないが、私たちはこの引用文から、提喩性につながる事象を見出すことができる（「Relation ET」と提喩性の関連については後述する）。それは次の点、すなわち「Relation ET」が、二つ（に限らずいくつか）のシニフィエ（現実世界における諸々の状況）をひとつのシニフィエ（状況）のなかに「寄せ集めて（amalgamer）」いることである。諸々のシニフィエは、あるひとつのシニフィエのもとに集められる、つまりグルーピングされるのであり、そうしたひとつのシニフィエをひとつの上位クラスと見なせば、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性を感知できるため、この引用文からだけでも「Relation ET」と提喩性の関連を推測することができる。

バルトは、後続するセクションにおいて（14.4）、「Relation VEL」と「Relation ET」の二つの関係性を例証する言表に共通している意味の構造、すなわちシニフィアンをただひとつしか有していないという点に言及したうえで、この二つの関係性がシニフィエの対立関

---

unique, actuelle, contingente et vécue (*à Paris, l'été*). », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1098. 邦訳 281 頁。

係に働きかける中性化の作用を示していると議論を進める。

> ［…］AUT から ET あるいは VEL へのあらゆる移行は、ひとつの関与的な対立に対する中性化を構成しており、対立していた諸々の辞項はいわば化石となって、単に組み合わされた意味の単位として、シニフィエの言表のなかに再び見出される。［…］[73]

「シニフィエの言表のなかに（dans l'énoncé du signifié）」という記述が何を指し示しているのか不明瞭であるが、「シニフィエを表わす言表のなかに」という旨であると理解しておくとして、一見すると何の変哲もない論述であるように思われるが、この引用文は見た目以上の複雑さを含み持っている。

「Relation AUT」（A と B のどちらかという排他的な選択関係）から「Relation VEL」（A と B のどちらでも構わないという非排他的な選択関係）への「移行（passage）」は、シニフィエの対立関係に働きかける中性化の作用、すなわち、モード雑誌の言表の意味が変化するために不可欠なシニフィエの「関与的な対立（opposition pertinente）」が解消されることを示している。「Relation AUT」に言及した際に確認したように、シニフィエ（現実世界の状況）の関与的対立はシニフィアン（衣服パーツ）のヴァリエーション（variation）に応じて生じるのであり（「朝か晩かによって縞のフランネルか水玉のツウィルを」）、シニフィアンがただひとつしか存在しない「Relation VEL」を例証する言表の場合（「街あるいは田園のためのセーター」）、モード雑誌の言表の意味が変化することにおいて不可欠な関与性（pertinence）が失われる。

「Relation AUT」から「Relation ET」（A かつ B という関係性）への「移行」についても同様に、シニフィエの対立関係に働きかける中性化の作用を確認することができる。この場合、「対立関係」と表記するだけでは事態が見えにくくなるが、この対立関係は「範列」（パラディグム）を形成する対立、すなわち諸要素の類似と相違に基づく差異（諸要素を区別する差異）のことであり、諸々のシニフィエの差異に働きかける中性化が問題になっている。それゆえ「AUT」から「ET」への移行としての中性化は、互いに親近性のあるシニフィエが並置されている場合でも（「簡素で実用的な」）、互いに相反するシニフィエが並置されている場合でも（「大胆で控えめな」）、諸々のシニフィエを区別する差異がモード雑誌における言表の意味の変化に関与しなくなることを指している。

---

[73] « [...] tout passage de AUT à ET ou à VEL constitue la neutralisation d'une opposition pertinente dont les termes, en quelque sorte fossilisés, se retrouvent dans l'énoncé du signifié à titre d'unités sémantiques simplement combinées [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1101. 邦訳 286 頁。

私たちがバルトの記述にやや驚かざるを得ないのは、彼が「Relation ET」を中性化の作用を示す関係性として捉えている点である。「Relation VEL」の場合のように、対立する二つの要素（「街」と「田園」、等々）に働きかける中性化の作用は自明のことであると言える。しかし、「Relation ET」が示す中性化のなかでも、互いに区別される三つ以上の要素に働きかける中性化（この場合「Relation ET」は、A かつ B かつ C かつ…という関係性として把握できる）、すなわち並置ないし列挙というかたちで累積されてゆく諸要素（「田園でのウィークエンドの秋の晩のため」）に働きかける中性化の作用は必ずしも自明とは言えない。さらに、バルトは中性化を意味単位の「組み合わせ（combinaison）」という観点から記述しており引用文においてもそれがうかがえるとはいえ（「単に組み合わされた意味の単位（unités sémantiques simplement combinées）」としての諸々の辞項）、「Relation ET」には、親近性のある諸要素や相反する諸要素を混合するかたちでグルーピングするというメカニズムが備わっている。

「Relation VEL」の場合にせよ「Relation ET」の場合にせよ、中性化の作用が提喩的関係性（カテゴリー間の関係性）に基づいていると見なすことができる。というのも、中性化が生じるにしたがって、中性化の影響を受ける諸要素を包括する意味クラスがもたらされることになるからである（14.5）。

> このように、ほかの場所では識別的な仕方で対立している諸単位（晩／朝、スポーティー／社交的）がしばしば、唯一のシニフィアンのドミナンス［支配的な影響］のもとで、中性化を被ることがある。中性化は、それらの単位を融合させる（「Relation ET」の場合）、あるいはまた、それらの単位の差異［衣服論で意味の変化に関与する差異］を失わせる（「Relation VEL」の場合）。しかし融合しながら、あるいは差異［衣服論で意味の変化に関与する差異］を消失しながら、こうした諸単位は必然的にそれらを含む第二の意味クラスを産み出すことになる。すなわちそれは、ある場合には、スポーティーと社交的を両方覆ういっそう一般的な衣服着用の状況であり、また別の場合には、晩と朝に広がりを持つある時間的単位（たとえば一日）である。この新しいクラス、あるいは混合的なシニフィエは、必要な変更を施せば、音韻論での中性化［／中和］によって産出される原音素ないし衣服論での中性化によって産出される原衣服素に等しいものである。［…］[74]

[74] « Ainsi des unités opposées ailleurs d'une façon distinctive (*soir/matin*, *sportif/mondain*) sont parfois soumises, sous la dominance d'un signifiant unique, à une neutralisation qui les fond (ET) ou les égalise (VEL) ; mais en se confondant ou en s'indifférenciant, ces unités engendrent fatalement une seconde classe sémantique qui les comprend : c'est ici une circonstance d'emploi assez générale pour recouvrir à

「晩（soir）」と「朝（matin）」の対立（衣服論で意味の変化に関与する対立）、その対立関係が中性化されれば、「晩」と「朝」を包括する「一日（journée）」という意味クラスを得ることができ、同様に「スポーティー（sportif）」と「社交（会）的（mondain）」の対立関係が中性化されれば、たとえ「スポーティー」および「社交（会）的」という意味を同時に表わす用語が見つからないとしても、「スポーティー」および「社交（会）的」という意味単位を包括する上位クラスの存在を想定することができる。つまりここでは中性化は、個々の衣服使用の状況が概念的にそれより上位に位置する衣服使用の状況へとまとめあげられるという方向性の定まったメカニズムに結びついていることが見て取れる。

それに加えここで、中性化によってもたらされる「原衣服素（archi-vestème）」のステータスがはっきりする。先の第 3 節で述べたとおり、原衣服素は、「記号学の原理」では丸首で厚手のセーターとカーディガン風で薄手のセーターに共通する毛織物という衣服素材として、また『モードの体系』では（この引用文とは別の箇所、すなわち先の第 3 節で言及した箇所：11.9）、「軽い」と「重い」に共通する「重さ」という「概念的存在（existence conceptuelle）」として記述されていた（軽かろうが重かろうが重さは常に存在する）。結局のところ、衣服素材であれ「重さ」であれ、原衣服素は対立する諸要素より概念的に上位のレベルに位置することがわかる。厚手であれ薄手であれセーターは、ニット帽やニットのワンピースなどともに毛織物の一種であり[75]、また概念的存在としての重さは、個別具体的な様々な重さを包括する（とても軽い、軽い、少し軽い、少し重い、重い、とても重い、等々）。ゆえに原衣服素とは、衣服着用をめぐる諸々の個別具体的な様相が、それらより概念的に上位のレベルに位置する様相へと格上げされた状態のことを指している。

この引用文の直後でバルトは、原衣服素を「原意味素（archi-sémantème）」と呼び換え、さらに、原意味素を「機能（fonction）」、および「機能」に属する諸々の諸要素（衣服論で意味の変化に関与する単位としての、「晩」と「朝」、「スポーティー」と「社交（会）的」、等々）を「機能体（fonctif）」（既訳では「機能項」）と呼び換えており、用語が増えているが、問題になっているのは、衣服着用をめぐる諸々の個別具体的な様相、すなわち現実世

---

la fois le sportif et le mondain, là une unité temporelle extensive au soir et au matin (la journée, par exemple) ; cette classe nouvelle, ou ce signifié syncrétique, c'est, *mutatis mutandis*, l'équivalent de l'archi-phonème produit par la neutralisation phonologique ou de l'archi-vestème produit par la neutralisation vestimentaire [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1102. 邦訳 286-287 頁。

[75] 毛織物という「類」が、厚手のセーターや薄手のセーターをはじめニット帽やニットのワンピース等々といった諸々の「種」を包括すると言い換えられるが、この場合の「類」と「種」の関係は、通常の意味合いでのそれであり、非両立性テストに基づいてバルトが作成した「類」と「種」の目録とは無関係であり（セーターとニット帽は両立できる）、要するに排他性に基づく「類」と「種」の関係ではない。

界における諸々の状況がそれらより概念的に上位のレベルに位置する状況に至るという中性化のプロセスである。

バルトはこの中性化のプロセスを「意味の行程（parcours de sens）」と呼び（14.6）、次のように述べている。

> AUT から VEL または ET へのあらゆる移行は、要するに、「モード」が持つ意味の諸々の単位に対して、それらの区別を消滅させてより上位の状態へ至らせる、それらが持つ特殊な意味を失わせて段々とより一般的な意味へ至らせる、という絶え間ない動きの契機にほかならない。[76]

諸々のシニフィエの対立関係に働きかける中性化の作用は、「特殊な（particulier）」意味から「一般的な（général）」意味への移行、すなわち諸々の意味単位を一般化するというプロセスをもたらす。「晩（soir）」と「朝（matin）」は「一日（journée）」（あるいはまた「午前（matin）」と「午後（après-midi）」の中性化では「昼間（journée）」）という上位の意味クラスへ、「田園」と「街」は（「室内（intérieur）」と対立する）「外出（sortie）」という上位の意味クラスへと移行する。より細かく見れば、「午前」と「午後」の対立関係が「昼間（日中）」という意味単位に組み込まれると、「昼間」が「夜」と対立関係を形成し、その対立関係が中性化されれば、「一日」という意味単位に組み込まれる。また、「一日」は別の日と対立関係を形成したうえで中性化され週に、そして同様に、週は月に、月は季節に、等々というように、個別具体的な意味単位は、対立関係の中性化という現象を通じて、段階的に上位の意味単位へと組み込まれる。こうした一般化のプロセスは、「意味の行程」としてモード雑誌が発揮する「絶え間ない動き（mouvement constant）」を示しており、その動きは、「段々と（de plus en plus）」意味単位の一般性が増してゆくという形態を取っている。それゆえ中性化のプロセスは、提喩的意味作用の現われを示している。

中性化のプロセスをたどるにつれて段階的に私たちは、上位の意味クラス、すなわち概念的に上位のレベルに位置する意味単位を目にすることになる。上位の意味クラス（言い換えれば、より一般性の強い意味単位）への諸要素の組み込みは、時間や場所、そして気候などのカテゴリーにおいて頻繁に見られる。たとえば、「街」と「田園」の対立関係は「外出」という上位の意味クラスのもとで解消され、「外出」という上位の意味クラスそれ自体

[76] « Tous les passages de AUT à VEL ou ET ne sont en somme que les moments d'un mouvement constant qui pousse les unités sémantiques de la Mode à anéantir leur distinction dans un état supérieur, à perdre des sens particuliers dans un sens de plus en plus général. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1103. 邦訳 288 頁。

も「室内／外出」という、より一般性の強い対立関係を形成し、この対立関係も「どこへ行くのにも［適した］（où que vous alliez）」という一般性がさらにいっそう強い意味単位のもとで中性化される。同様に、時間や気候においても、中性化を経るにつれ、「あらゆる時間のためのケープ（cape à toute heure）」、あるいはまた「あらゆる気候のためのパンタロン（pantalons tous climats）」のように、様々な衣服着用の状況を包括する一般性がかなり強い意味単位が見られるようになる。

このように中性化のプロセスの内実は、下位クラスに属する意味単位から上位クラスに属する意味単位への概念的なレベルの移行に存するのであり、このプロセスは、提喩的関係性（カテゴリー間の関係性）に基づいている。中性化のプロセスは提喩的なプロセスにほかならないのである。

5-3. 「頂点の欠けたピラミッド」としての提喩的なプロセス

「中性化」の提喩的なプロセスの追跡を続けてゆくと、「どこへ行くのにも適した」、「あらゆる時間のための」、「あらゆる気候のための」といった一般性がかなり強い衣服着用の状況さえも中性化されることが観察できる。その結果として中性化の最終地点には、「いつでもどこでも着られる衣服（vêtement tout-aller）」ないし「万能の衣服（vêtement passe-partout）」という、最も一般性の強い衣服着用の状況に対応した衣服が存在することになる。

バルトは、こうした衣服を「普遍的な衣服（vêtement universel）」と呼んでいる（14.7）。いつでもどこでも着られる「普遍的な衣服」、たとえば「一年中朝から晩まで着られる伸縮性のあるドレス［ジャージ製のワンピース］（petite robe de jersey qui se porte tout le long de l’année du matin au soir）」は、「春」でも「夏」でも「秋」でも「冬」でも構わないし、「朝」でも「晩」でも構わないというかたちで着用できる。「春／夏／秋／冬」の対立関係は「一年中（tout le long de l’année）」という春夏秋冬を包括する時間のカテゴリー（「一年」という上位の意味クラス）に組み込まれ、「朝／晩」の対立関係は「朝から晩まで（du matin au soir）」という朝と晩を包括する時間のカテゴリー（「一日」という上位の意味クラス）に組み込まれる。この「普遍的な衣服」は、個々の衣服着用の状況が同等の権利を有していることを示しており、仮に夏の朝にこの衣服を選択したとしても、冬の晩にそれを着る可能性が捨象されない。

この場合、「朝」と「晩」という意味単位は、上位の意味クラス（「一日」）に包括されるものの、それら自体の存在が消去されるわけではない。衣服論での中性化の作用は、あくまでモード雑誌の言表の意味が変化するかどうかに関わる「朝」と「晩」の差異に働きかけるのであり、「朝」と「晩」の差異それ自体に働きかけるのではない。同様に、「春」、「夏」、

「秋」、「冬」のそれぞれの意味単位も、上位の意味クラス（「一年」）に包括されるが、それらの意味単位は消去されない。下位範疇としての諸々の意味単位は、上位クラスのもとで潜在している、すなわち暗黙のかたちでありながらもたしかに存在している。この点において諸々の意味単位は、その個別性ないし特殊性を残したまま、より一般的あるいは「普遍的な」ステータスへと至るのだと言える。

中性化の最終地点に位置する「普遍的な衣服」は、使用法において何ら特権的な価値を持たず、あくまでほかの個別的な衣服と対等であるという性質を持つ。この点について、バルトは次のように述べている。

> もし可能な意味というものが断じて差異のなかにしか存在しないのならば、普遍的なものがそれとは何か別の機能に対立していなければならないが、そのことは用語のうえでの矛盾のように見える。なぜなら普遍的なものは、衣服の可能な使用法すべてを吸収しているものだからである。しかしこれは実際には、「モード」という観点から見れば、普遍的なものがほかの諸々の意味のなかにおいてひとつの意味としてとどまっているということである（同様に現実においても万能の衣服は、同じ洋服棚のなかで使用法が限定された諸々のほかの衣服と［対等なかたちで］隣り合って並んでいる）。最終的な対立関係という最上位のラインに達した普遍的なものは、そのラインに組み込まれるのであって、そのラインを支配するのではない。［…］[77]

「普遍的な衣服」は、最上位のカテゴリーとして衣服の個々の使用法を包括しているが、意味の体系においてこの衣服は、ほかの諸々の個別的な衣服との関係性においてしか存在しない。中性化の最終地点に位置する意味とは、決して究極的な意味ではなく、ほかの諸々の意味と異なるひとつの意味でしかない。中性化のプロセスは、多数の個別的な意味単位から少数の「普遍的な」意味単位へと向かうピラミッドのような構造を持っていると言えるが、それはいわば「頂点の欠けたピラミッド（pyramide tronquée）」である。

「頂点の欠けたピラミッド」という表現に見事に現われているように、中性化のプロセスにおいて意味作用の働きは停止することがない。この点は、止むことのない中性化の作

[77] « S'il n'y a jamais de sens possible qu'au sein d'une différence, il faut bien, pour signifier, que l'universel s'oppose à quelque autre fonction, ce qui est, semble-t-il, une contradiction dans les termes, puisque l'universel absorbe tous les usages possibles du vêtement. Mais c'est qu'en fait, du point de vue de la Mode, l'universel reste un sens parmi d'autres (de même que dans la réalité un vêtement passe-partout côtoie dans la même garde-robe d'autres vêtements à usages définis) ; parvenu à la ligne supérieure des dernières oppositions, l'universel s'y intègre, il ne la domine pas [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1105. 邦訳 291 頁。

用、またそれを支える役割を持つある性質、すなわち提喩的なプロセスの可逆的な性質につながるだろう。

5-4. 提喩的なプロセスが有する可逆的な運動性

中性化の提喩的なプロセスは、下位クラスに属する意味単位から上位クラスに属する意味単位への移行（一般化の動き）にとどまらない。この動きにはそれとは逆の方向性、すなわち上位クラスに属する意味単位から下位クラスに属する意味単位への移行が同時的に伴われる。

「意味の行程」としての中性化のプロセスについて述べられた箇所（14.6）を再び参照しよう。先に引用した部分を含むバルトの次の記述から私たちは、中性化の動きが可逆的であることがわかる。

> AUT から VEL または ET へのあらゆる移行は、要するに、「モード」が持つ意味の諸々の単位に対して、それらの区別を消滅させてより上位の状態へ至らせる、それらが持つ特殊な意味を失わせて段々とより一般的な意味へ至らせる、という絶え間ない動きの契機にほかならない。当然のことながら、諸々の言表それ自体のレベルでは、この動きは完全に可逆的である。［…］[78]

実際、中性化の対象となる対立関係に目を向けること（「Relation VEL」や「Relation ET」から「Relation AUT」へ移行すること）はいつでも容易に可能であり[79]、中性化の提喩的なプロセスは可逆的なのである。

そのうえで、「普遍的な衣服」について述べられた箇所（14.7）を再び参照しよう。「普遍的な」と呼ばれるステータスは、次のように記述されている。

> ［…］「モード」にとって、ある唯一の衣服のもとに［その衣服が持つ］可能な機能全体を集めるということ、それは諸々の差異を消去してしまうということではまったく

[78] « Tous les passages de AUT à VEL ou ET ne sont en somme que les moments d'un mouvement constant qui pousse les unités sémantiques de la Mode à anéantir leur distinction dans un état supérieur, à perdre des sens particuliers dans un sens de plus en plus général. Naturellement, au niveau des énoncés eux-mêmes ce mouvement est parfaitement réversible [...] », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1103. 邦訳 288 頁。

[79] そうするためには、シニフィアン（衣服パーツ）を増やすだけで良い（たとえば、「街あるいは田園のためのセーター」という「Relation VEL」から、「田園か街かによってセーターかシャツブラウスを」という「Relation AUT」への移行）。

なく、逆に、ただひとつの衣服がその使用例のそれぞれに奇跡的に適応し、結果としてどんな些細な要求にも応じてその使用例が持つ意味作用を発揮するということを肯定することである。普遍的であるということはここでは、諸々の特殊性の除去では少しもなく、諸々の特殊性を足したものなのだ。普遍的であることは、ある無限の自由の場である。最終的な中性化以前に存在した諸々の機能が、ただひとつの衣服が受け持ち得るいくつもの「役割」として、暗黙のかたちで残っている。いつでもどこでも着られる［／万能の］服装とは、厳密に言えば、諸々の使用法上の無差異を指し示しているのではなく、そうした使用法の等価性を、すなわち、ひそかにそうした使用法の区別を指し示しているのである。[80]

普遍的であることは「諸々の特殊性を足したもの（addition de particularités）」と形容されているが、その根拠は、「普遍的な衣服」が諸々の個別的な衣服のそれぞれの使用例に適応しそれら諸々の個別的な衣服に意味作用を発揮させる点にあり、提喩的なプロセスの可逆性がそれを可能にさせているのだと言える。こうした可逆性に支えられているからこそ、普遍的であるということが「ある無限の自由の場（champ d'une liberté infinie）」たり得るのだろう。

バルトの分析実践から見える中性化の作用は、段階的な一般化を経て最終的な到達地点（「普遍的な衣服」）に至りつつもそこにとどまることのない可逆的な運動性を有しており、原理的には最終的な到達地点を持たない、すなわち中心的な要素を持たない一般化の動きと個別化の動きから成り立っている。それゆえこうした中性化の作用は、一般化と個別化の終わりのない動きとして提示されているのである。言い換えれば中性化の働きには、上位クラスと下位クラスのあいだを絶えず往復するという運動性が伴われている。提喩的なプロセスに基づく中性化の作用は、往復運動というかたちで際限なく持続するのである。

第 6 節　結論

『モードの体系』は、意味の統御を旨とする「体系」と際限のない意味作用を有する「ル・

[80] « [...] pour la Mode, rassembler sous un seul vêtement la totalité de ses fonctions possibles, ce n'est nullement effacer des différences, mais au contraire affirmer que le vêtement unique s'adapte miraculeusement à chacun de ses usages pour le signifier au moindre appel ; l'universel est ici, non point suppression, mais addition de particularités ; il est le champ d'une liberté infinie ; les fonctions antérieures à la neutralisation finale restent ainsi implicitement présentes comme autant de « rôles » que peut prendre un vêtement unique : une tenue passe-partout ne renvoie pas, à proprement parler, à une indifférence d'emplois, mais à leur équivalence, c'est-à-dire, subrepticement, à leur distinction. », Barthes, *Système de la Mode*, p. 1105. 邦訳 290-291 頁。

システマティック」の共存を示している。「類」と「種」のカテゴリー間の関係性を前景化する「種の断定」という理論装置は、「類」と「種」のあいだでの往復運動を背景にしたかたちで際限のない意味作用の働きをもたらし、この際限のない意味作用の働きが、シニフィアンの循環という再帰的な様態のもとで「体系」に内在する「ル・システマティック」の具現化に資する。また、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性は、際限のない意味作用に基づく終わりなき「中性化」の作用を貫いているとともに、この「中性化」の作用のプロセスには、上位クラスと下位クラスを絶えず往復する運動性が伴われる。「ル・システマティック」の具現化と終わりなき「中性化」は、プロセスとして感知できる意味作用の働きへのバルトの注視に根ざしている。

シニフィアンの複数性（「意味作用の母型」における諸要素ないし諸辞項の多数性）というかたちで意味を増殖させてゆく「ル・システマティック」が具現化されるにあたって、隣接性に基づいた換喩的な「拡散」は意味作用の目標対象に収束することで「ル・システマティック」の現われを抑制するが、「類」と「種」のあいだでの往復運動が胚胎している「種の断定」から開始される衣服分類、その提喩的なプロセスは意味作用の目標対象に収束せず、「種の断定」を起点とするバルトによる衣服分類は、「ル・システマティック」の現われを抑制することなく原理的には際限のない活動となる。

このように、『モードの体系』においてバルトは、「類」と「種」のあいだの関係性に基づいた意味作用、すなわち提喩的意味作用を活かして、意味の統御を旨とする「体系」に動的な性質（「ル・システマティック」としての在り方）を付与したのである。それゆえ『モードの体系』を、提喩的意味作用を応用した分析実践として位置づけることができる。モード雑誌をめぐるこうしたバルトの分類活動が指し示しているのは、意味を統御する「体系」から意味作用の働きを前景化する「ル・システマティック」と共存する「体系」への移行である。端的に言えばバルトは、「体系」の在り方そのものを変えているのであり、この点においてバルトの分類活動を、創造的な行為として捉えることができる。『モードの体系』には、バルトの創造性が宿っているのである。

第 4 章　提喩的意味作用と「構造化」の問題

第 1 節　はじめに

オノレ・ド・バルザックの小説『サラジーヌ』（1830 年）を対象にしたバルトの『Ｓ／Ｚ』（1970 年）は、彼の物語分析の代表例であり、物語の構造分析からいわゆるテクスト分析への転換点に位置する著作である。バルトは、物語の構造分析に取り組んでいた時期に培った蓄積を活かしつつも、分析対象となるテクストを単なる構造や形式の顕現として捉えているのではなく、彼の分析実践は、意味の複数性を擁護しながら、彼がシニフィアンの戯れ（jeu du signifiant）と呼んだ意味の横すべりや転位などといった特徴を重視する「テクスト理論」に基づいている。また『Ｓ／Ｚ』は、分析実践の前提となるレクチュール（読む行為）をめぐる理論的な著作であるばかりでなく、エクリチュール（書く行為）をめぐる問いを含むという点で[1]、作品創造につながるような分析実践として存在している。実際『Ｓ／Ｚ』は、バルザックの『サラジーヌ』に対するある種の「書き換え」という性質を持つ[2]。

バルトの数ある著作のなかで『Ｓ／Ｚ』に注目する理由は、こうした『Ｓ／Ｚ』の二重の意味で両義的と呼べるような性質にある。すなわち『Ｓ／Ｚ』は、構造分析とテクスト分析の両方のアスペクトを持つとともに（物語の構造分析の蓄積を活かしたテクスト分析）、レクチュールの試みかつエクリチュールの試みであるという、異彩を放つバルトの著作群のなかでもきわめて特殊なテクストであり、別の言い方をすれば『Ｓ／Ｚ』では、そうした諸々の実践の共存関係が際立っている。

このことは、先の第 3 章で取り上げた「体系」の問題が、バルトの数ある著作のなかでもとりわけ『Ｓ／Ｚ』において顕著に現われていることを示唆している。「体系」に内在する「ル・システマティック」は、バルトが用いた用語としては「構造（structure）」に対する「構造化（structuration）」に対応している。先の第 3 章では「体系」の問題性（「体系」

---

[1] Cf. Andy Stafford, « Préparation du *Romanesque* dans le *Sarrasine* de Roland Barthes », in Sémir Badir et Dominique Ducard (dirs.), *Roland Barthes en Cours (1977-1980). Un style de vie*, Éditions Universitaires de Dijon, 2009, pp. 173-184.

[2] これは多くのバルト論者に共有されている見解であり、代表的な文献を挙げておく。Éric Marty, *Roland Barthes, Le Métier d'écrire*, Seuil, 2006, p. 147 ; 篠田浩一郎『ロラン・バルト――世界の解読』、岩波書店、1989 年、267 頁。

と「ル・システマティック」の共存関係）のもとで、「ル・システマティック」の顕在化の有り様について検討したが、本章ではその議論に連なる問いを提示する。それは、「構造」と「構造化」の共存関係という問題であるが、より的確なかたちで言えば、「構造化」には二つの様態が存在するという問題である。その二つの様態とは、物語分析を行なう分析者バルトが及ぼす作用としての「構造化」（これはエクリチュールとしての側面が前景化された分析実践に対応する）、および、「構造化」についてのバルトの捉え方から感知できるところの、テクストそれ自体が内包している「構造化」である（これはレクチュールとしての側面が前景化された分析実践によって実現されると考えられる）。

クロード・コスト（Claude Coste）とアンディ・スタフォード（Andy Stafford）の手により 2011 年に刊行された、1967-1968 年度と 1968-1969 年度における高等研究院でのセミナー（『Ｓ／Ｚ』の元になったセミナー）のノート、すなわち『バルザックの『サラジーヌ』』でのバルトの記述は、『Ｓ／Ｚ』に直接通じる仕方で展開されている[3]。分析実践の模索段階にあるセミナーと体裁が整えられた書物とのあいだの相違はもちろん存在するが（たとえば「意味素」は『Ｓ／Ｚ』よりも限定的でない扱われ方をしている）、このセミナーでバルトは、小説『サラジーヌ』のプロローグにあたる箇所を、『Ｓ／Ｚ』における場合と同様に、諸々の付加的意味としての「コノテーション」を指摘したうえでコメントを施しながら分析を進めている。私たちは、このセミナーのノートのなかでとりわけ、『Ｓ／Ｚ』よりも明確なかたちで記述されている次の点に注目する。「構造化」には二つの様態が存在するという点、すなわち、分析者が及ぼす作用とは別にテクストそれ自体に内包されている働きないし機能が存在することである。

『Ｓ／Ｚ』における「構造化」の在り方を明らかにしようとする本章において、提喩的意味作用はどのようにして取り上げることができるのか。小説『サラジーヌ』からバルトが読み取っているのはコノテーションであるが、それは付加的意味にほかならず、（先の第 2 章で取り上げたバルトの記号論的なテクスト実践が浮き彫りにしていた）第一次の意味作用（デノテーション）から第二次の意味作用（コノテーション）へと至る意味作用のプロセスそのものに焦点が当てられているのではない。しかし、諸々のデノテーション（小説『サラジーヌ』における字義通りの意味）から（ひとつではなく複数の）コノテーション（付加的意味）を抽出するバルトの作業は、デノテーション（字義通りの意味）からコノテーション（付加的意味）を産み出すことを可能にする意味作用の働きに従っていると見

[3] Roland Barthes, *Sarrasine de Balzac. Séminaire à l'École pratique des hautes études 1967-1968 et 1968-1969*, avant-propos d'Éric Marty, présentation et édition de Claude Coste et Andy Stafford, Seuil, 2011.

なせる。それゆえ、『Ｓ／Ｚ』でのバルトのコノテーションの読み取りは、それが「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づいていれば、提喩的意味作用の現われとして捉えることができる。

本章では、バルトの物語分析の妥当性ではなく彼の思考の在り方に焦点を当てつつ、バルトが「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づいた提喩的意味作用を活かして「構造化」の二つの様態を浮き彫りにしていることを明らかにする。まず、「構造化」には、分析者が及ぼす作用とは別にテクストそれ自体に内包されている働き（機能）が存在することを示したうえで、（それら二様態を含む）「構造化」の働きがレクチュール（読む行為）およびエクリチュール（書く行為）に際して分析者（読者）が行なう分類活動を通じて顕在化することを示す。次に、『Ｓ／Ｚ』における解釈学的分析およびシークエンス分析（行為の連鎖に対する分析）を取り上げて、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性を前景化してバルトがテクストそれ自体に内包されている「構造化」を浮き彫りにしていることを示す。最後に、『Ｓ／Ｚ』（およびセミナーのノート『バルザックの『サラジーヌ』』）における意味素分析において、分析者が及ぼす作用としての「構造化」を体現するエクリチュールの実践を通じてバルトが、諸々の意味素に対するグルーピングの作業に際して、新たな意味領域を切り開くという試みを行なっていたことを明るみに出す。そのバルトの試みを、提喩的意味作用を通じて感知できる彼の創造性として提示したい。

第 2 節　「構造化」と分類活動

『サラジーヌ』という作品の筋は、天才的な青年彫刻家サラジーヌがイタリアで美しい去勢歌手ザンビネッラを愛してしまったことによって、最終的に暗殺されてしまう悲劇的な事件について、語り手「私」がロシュフィド侯爵夫人との愛の一夜を手に入れるために夫人に語り、その結果として結局のところ夫人との愛の一夜を得ることができなくなるというものである。バルトは小説『サラジーヌ』を、合計 561 個に及ぶ「レクシ（lexie）」と呼ばれる「読解単位（unité de lecture）」に切り分けながら、読解のための観点とでも言える複数の「コード（code）」を用いて、ひとつひとつのレクシごとに、この小説に存在する様々な意味を分析している。

バルトが用いたコードは五つ存在し、その名称は次のとおりである。小説『サラジーヌ』が示すいくつもの謎を解読するための「解釈学的コード（code herméneutique）」、作中人物の行為の展開に関わる「行為のコード（code des actions）」あるいは「プロアイレティスムのコード（code proaïrétique）」、作中人物や場所が有する性格や雰囲気などを読み取るための

「意味素のコード（code sémique）」、多様な知識や知恵を背景とする「文化のコード（code curturel）」あるいは「参照のコード（code de références）」、そして、去勢歌手をめぐる物語の枠組みに関わる「象徴のコード（code symbolique）」である。

象徴のコードからバルトは、「去勢作用（castration）」の問題について述べていた。バルトによれば「去勢作用」とは、『サラジーヌ』の登場人物である去勢歌手ザンビネッラが元々置かれている「去勢されている状態（castrature）」が、ザンビネッラに隣接するほかの登場人物（サラジーヌやロシュフィド夫人など）や事物（物語そのものや財産）に「伝染する（contaminer）」ことである。すなわちこの「去勢作用」は、近づくものすべてへの「伝染（contagion/contamination）」という換喩的な性質を持つ。サラジーヌに関する一部始終を聞いたロシュフィド夫人は情事から身を遠ざける（去勢歌手の物語を話した語り手は夫人と情事を成し遂げることができなくなる）。それゆえ、ロシュフィド夫人と語り手が交わした契約（去勢歌手の物語の内容と情事を交換するという契約）は破棄され、また最終的に起源の怪しい財産が示されることによって、性の対立構造や所有権に基づく財産の在り方が破局的なまでに動揺することになる。これが、バルトによって強調された換喩的な「去勢作用」の問題である。

この問題は、（精神分析の知見を元にして）換喩的原理である隣接性に注目するという方法論を土台にしたかたちでのバルトの解釈の鋭さを示していると言えるが、彼の思考のプロセスに焦点を当てる私たちにとってより重要なのは、この問題以上にバルトによる方法論の構築が前景化される論点、すなわち「構造化（structuration）」という論点である。

2-1. テクストそれ自体のうちに内包されている「構造化」の働き

バルトが想定するところの「構造化（structuration）」には、分析者が及ぼす作用とは別の働きが存在する。ここでは、その働きがテクストそれ自体のうちに内包されているということを示したい。

『Ｓ／Ｚ』において「構造化」は「構造（structure）」と対比されたかたちで述べられているが、その記述をたどると、「構造化」という用語によって指し示されているのが、単一ではない「構造」（形式）が完成されていない（構築されていない）という状態であることがわかる。

> 五つのコードは、あらゆるテクストが通過する（あるいはむしろ、そこを通過することによってテクストが生じるような）ある種の網目［／ネットワーク］、論点のようなものを形成する。したがって、各コードと五つのコードのあいだを構造化すること

に努めないのは、熟慮のうえでの仕方なのであって、テクストの多価値性、その部分的な可逆性を引き受けるためである。実際のところ問題なのは、ある構造を明示することではなく、ある構造化を可能な限り産み出すことである。分析の余白や不明瞭さはテクストの逃亡を知らせる痕跡のようなものとなるだろう。というのも、テクストがある形式に従うにしても、その形式は単一ではなく、構築されておらず、完成されていないからである。それは切れ端、断片、切断され磨滅した網目であり、それらは、諸々のメッセージの重複と消失を同時に保証する果てしないフェーディング現象のあらゆる動きであり、あらゆる屈折である。[4]

『Ｓ／Ｚ』の眼目は、「構造」を示すことではなく「構造化」を生じさせることに存するのであるが、この引用文によればその要点は、単一ではない「構造」の在り方を体現するテクストの多価値性（mutlivalence）、および「単一」ではない「構造」が完成されていないという状態を示唆する部分的な可逆性（réversibilité partielle）を尊重することにあり、そのためにバルトは、五つのコードを「構造化する（structurer）」作業を避ける。部分的な可逆性という性質によって「構造」が完成されていない状態が示唆されていると思われるのは、この性質によって物語の結末（最終的な到達地点）に至ることが問題にならなくなるからである。実際、この引用文で述べられているように、バルトが念頭に置いているのは、「構造」（形式）が完成されていない（構築されていない）という状態である。また、「構造」が完成されていないという状態は、バルトの分析における余白部分（および不明瞭な部分）として捉えることができるとともに、その点が「テクストの逃亡（fuite du texte）」、つまりテクストそれ自体が逃亡することとして記述されていることがわかる。その趣旨は、テクストそれ自体が「構造」から逃れるということだろう。

テクストの多価値性と部分的な可逆性について確認しておきたい。テクストの多価値性の尊重は、『Ｓ／Ｚ』で示されているバルトのテクスト実践に現われており、それは、五つのコードに序列を設けず、レクシごとに諸コードを同列に並べることである。バルトのこ

[4] « Les cinq codes forment une espèce de réseau, de topique à travers quoi tout le texte passe (ou plutôt : en y passant, il se fait texte). Si donc on ne cherche pas à structurer chaque code ni les cinq codes entre eux, c'est d'une façon délibérée, pour assumer la mutlivalence du texte, sa réversibilité partielle. Il s'agit en effet, non de manifester une structure, mais autant que possible de produire une structuration. Les blancs et les flous de l'analyse seront comme les traces qui signalent la fuite du texte ; car si le texte est soumis à une forme, cette forme n'est pas unitaire, architecturée, finie : c'est la bribe, le tronçon, le réseau coupé ou effacé, ce sont tous les mouvements, toutes les inflexions d'un *fading* immense, qui assure à la fois le chevauchement et la perte des messages. », Roland Barthes, *S/Z* (1970), in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 134-135（『Ｓ／Ｚ――バルザック『サラジーヌ』の構造分析』、沢崎浩平訳、みすず書房、1973 年、24 頁）.

のテクスト実践によって、『Ｓ／Ｚ』の読者でありかつ読解単位に切り分けられた小説『サラジーヌ』の読者でもある私たちは、小説『サラジーヌ』のひとつひとつの切片が付加的意味（コノテーション）を帯びる様相を細やかに感知することができる。テクストの部分的な可逆性がどのように保持されるのかという点を理解するためには、各コードの性質を把握する必要がある。『Ｓ／Ｚ』でコードの同時的な複数性（レクシごとに複数のコードが同時に用いられていること）が音楽作品の譜面に例えられながら記述されている箇所において（「XV. 楽譜」）、バルトは、旋律の進行を担う木管楽器に例えられた解釈学的コードおよび作品全体を支える弦楽器に例えられた行為のコードを非可逆的な性質を持つコードとして、残りのコード（強い響きをもたらす金管楽器や打楽器に例えられた、意味素、文化、象徴の諸コード）を可逆的な性質を持つコードとしてまとめている。この場合、非可逆的な性質を持つとは、始まりから結末へと向かう物語の論理的かつ時間的な順序、要するに物語の筋として展開する順序に従うということであり、可逆的な性質を持つとは、物語の一方向的な順序から逃れるばかりでなく、原理的にはその順序を逆にたどり得るということである。それゆえ、レクシごとに諸コードを並置することは、テクストの多価値性と部分的な可逆性の両方を顕在化することを可能にするのであり、序列なしでの諸コードのこうした提示方法が、五つのコードを「構造化する」ことなく、すなわち完成された「構造」に至らせることなく、テクストの「構造化」を産出することに資するのだと言える。

この引用文が記述されている箇所（「XII. 声の織物」）においてコードという分析装置は、「構造の蜃気楼（mirage de structures）」と呼ばれているだけでなく、「引用の投影図（perspective de citations）」、あるいはまた、テクストの多声的性質が念頭に置かれながら、長い歴史のもとで堆積された「書かれたもの（ce qui a été écrit）」への参照関係によって発信源が定まることのない「声（voix）」と形容されている。当該箇所での記述によれば[5]、テクストの「構造化」とは、「声」としての諸コードが織り合わされることを通じて、テクスト上で立体音響の場ないし「立体画的空間（espace stéréographique）」が形成されることである。この空間のなかで諸コードが形作る網目は、切断されたままで統合されず、完成された状態に至ることがない。

未完成の状態にとどまり続けるという「構造化」、その内実について把握することに努めよう。『Ｓ／Ｚ』の元になったセミナーのノート『バルザックの『サラジーヌ』』では、「構造化の欠如（Carence de la structuration）」という見出しのもとで、『モードの体系』での作業

[5] 「[…] 諸々の声（諸コード）の協力［／競合］が、エクリチュール、立体画的空間となるのであり、そこでは五つのコード、五つの声が交わる。[…]」« [...] le concours des voix (des codes) devient l'écriture, espace stéréographique où se croisent les cinq codes, les cinq voix [...] », Barthes, *S/Z*, p. 135. 邦訳 25 頁。

が引き合いに出されながら、次のように述べられている。

> 各コードについては、したがって、網羅的な構造化（モード［モード雑誌］に対する構造化を参照のこと）を追求してはならない。モードのテクストが「通俗的」であったか（われわれの価値判断の、類型論の公準を思い起こそう）、それともモードのテクストが非常に限定された複数性に属していたためそれが完全なパラディグム作成［／範列作成］を可能にしていたか（一覧表の構成と閉域）、あるいはまた新しい記号学の視野から、私自身が構造に対する私の経験を変えたか。こうした構造化の欠如はひとつの方法的行為であり、それはテクストの多価値性、その部分的な可逆性を引き受けることを可能にする。テクストの逃亡としての分析の余白や不明瞭さ。それは、切れ端や断片が君臨することであり、切断され磨滅した網目、果てしないフェーディング現象の動きである。つまり、諸々のメッセージの重複と消失。[6]

この引用文での「網羅的な構造化（structuration exhaustive）」という記述は、「パラディグム作成［／範列作成］（paradigmatisation）」が言及されていることから、『モードの体系』における「変異（variant）」の目録が念頭に置かれているのだろう。「網羅的な構造化」を行なわないという旨は、次のように理解できる。すなわち『モードの体系』では、モード雑誌の意味作用（の元となる「変異」）が網羅的に扱われていたが、小説『サラジーヌ』を分析する際には、この小説から読み取ることができる諸々の付加的意味を網羅的には扱わないということである（実際のところ、コノテーションをくみ尽くすことは不可能だろう）。それゆえ、この引用文で述べられている「構造化の欠如（carence de structuration）」とは、『モードの体系』におけるようなパラディグム（範列）のリストを仕立てないのであるから、先の『Ｓ／Ｚ』からの引用文と同様に、諸々の要素を秩序立てず構造化しない、要するに「構造」を完成させないことを指しており、テクストは「構造」から逃れるのである。

このように、ここで引用した記述の趣旨は、先の『Ｓ／Ｚ』からの引用文と変わらない。しかし、『Ｓ／Ｚ』での記述に比べセミナーのノートでは、『モードの体系』での作業が引き合いに出されることによって、分析者（バルト）が「構造」を完成された状態に至らせ

[6] « Pour chaque code, donc, il ne faut pas rechercher une structuration exhaustive (cf. celle de la mode) ; soit que le texte de mode était « trivial » (rappelons-nous notre postulat évaluatif, typologique), soit qu'il était d'un pluriel si limité qu'il permettait la paradigmatisation complète (la clôture et l'organisation de la liste), soit que j'ai moi-même modifié mon expérience de la structure, dans une perspective néo-sémiologique. Cette carence de structuration est un acte méthodique qui permet d'assumer la multivalence du texte, sa réversibilité partielle. Blancs et flous de l'analyse comme fuite du texte ; c'est le règne de la bribe, du tronçon, le réseau coupé ou effacé, mouvements d'un *fading* immense : chevauchement et perte des messages. », Barthes, *Sarrasine de Balzac*, pp. 500-501.

ないことがより際立っている（その点が「構造化の欠如」と記述されている）。そこから私たちは、「構造」からの「テクストの逃亡（fuite du texte）」という点をめぐって、次のような問いを立てることができる。つまり、「構造化」と呼ばれている事象には、分析者が及ぼす作用から逃れるような次元が存在するのではないかということである。言い換えれば私たちは、テクストそれ自体のうちに「構造化」の有り様を認めようとするのである。バルトが「構造」に対する問題意識を改めたという点が指し示しているのは、「構造」から逃れるテクストそれ自体のうちに「構造化」が内包されていることなのではないだろうか。

実際、この引用文の直後の箇所において、そうした「構造化」の在り方が問題になっていることがわかる。

> われわれが知るところによれば、テクストはあるひとつの構造ではなく、複数の構造ですらなく、ある活動なのであり、（能動的な意味での）構造化の作業である。しかし、この作業、この構造化の分析者として、もしわれわれが、ある目録や諸々の構造を収めた一覧表に行き着くのならば、われわれはこの構造化を取り逃がすことになる。［そうなると］われわれの構造化はひとつの構造に行き着くことになり、すなわちテクストの構造化を否定することになってしまう。
>
> したがって、われわれは諸々のコードを構造化しないであろう。つまり物語の文法は存在しないということである。断固として［／熟慮の末］、常に変わらず、われわれは諸々のコードを示すであろう（諸々のコードについての指示を与えるであろう）、それだけである。[7]

『Ｓ／Ｚ』では記述されていないこの一節は、テクストがそれ自身のうちに「構造化」の現象を内包していることを示している。バルトによれば、「構造化」の作業はテクストそのものが有する働き（動き）にほかならず、その有り様を捉えるのが分析者の役目ということになる。バルトが述べている「われわれの構造化（notre structuration）」とは、テクストそれ自体が有する構造化の動き（能動的な活動としての「テクストの構造化（structuration du texte）」）を追跡することを指しているのである。また、ある何らかの目録ないし一覧表を完

[7] « Nous le savons, le texte est non une structure, ni même des structures, mais une activité, un travail de *structuration* (au sens actif). Mais si nous, comme analystes de ce travail, de cette structuration, nous aboutissons à un inventaire, à un tableau de structures, nous manquons cette structuration : notre structuration aboutit à une structure, c'est-à-dire dénie la structuration du texte.

Donc, nous ne structurerons pas les codes : pas de grammaire du récit. Délibérément, constamment, nous indiquerons les codes (nous donnerons des indications sur les codes), c'est tout. », Barthes, *Sarrasine de Balzac*, p. 501.

成させればこの「構造化」を取り逃がすことになる。つまり、「構造化」はプロセスとして存在していることがわかる。プロセスそのものとして存在していることが、完成された状態に至ることがないということの内実だと考えられる。「構造化」とは、結果ではなくプロセスが前景化される働きなのである。

このように、バルトが記述する「構造化」には、分析者が及ぼす作用とは別に、分析実践のプロセスそのものから感知できるところの、テクストそれ自体が内包している（テクストに元々備わっている）働きという様態が存在するのである。

2-2. 読者の分類活動を通じて具現化するテクストの「構造化」

バルトが述べるところの「構造化」の具体的な有り様は、彼が行なう分類活動として把握できる。そのことを示すために、『Ｓ／Ｚ』におけるほどバルトの試みが徹底されているテクスト実践ではないが、物語分析にあたり同じ手法が取られている「エドガー・ポーの一短編のテクスト分析」（1973 年）を参照しよう。

『Ｓ／Ｚ』刊行後ある程度の期間を経たこの物語分析では、方法論上の要点が出揃っている印象を受ける。バルトは、自身の試みを「テクスト分析（analyse textuelle）」と銘打って、次のように述べている。

> テクスト分析は作品の構造を記述しようとは努めない。問題になるのは、構造を記録することではなく、むしろテクストの可動的な構造化を産み出すことであり（「歴史」に沿って読者から読者へと移動する構造化）、作品の意味形成のヴォリュームのうちに、作品の意味形成性のうちにとどまることである。テクスト分析は、何によって作品が決定されている（ある因果関係の辞項としてまとまっている）のかを知ろうとするのではなく、むしろどのようにしてテクストが爆発し四散するのかを知ろうとする。したがって私たちは、ある一編の物語テクスト、あるひとつの物語を取り上げ、必要なだけゆっくりとそれを読み、必要に応じてたびたび立ち止まることにするが［…］、厳密にではなく標定し分類するのは、テクストのすべての意味ではなく［…］、諸々の意味を可能にする諸々の形式やコードである。私たちは、意味の大通りを標定しようとするのである。[8]

[8] « L'analyse textuelle n'essaie pas de *décrire* la structure d'une œuvre ; il ne s'agit pas d'enregistrer une structure, mais plutôt de produire une structuration mobile du texte (structuration qui se déplace de lecteur en lecteur tout le long de l'Histoire), de rester dans le volume signifiant de l'œuvre, dans sa *signifiance*. L'analyse textuelle ne cherche pas à savoir par quoi le texte est déterminé (rassemblé comme terme d'une causalité), mais plutôt comment il éclate et se disperse. Nous allons donc prendre un texte narratif, un récit, et nous allons le lire, aussi lentement qu'il faudra, en nous arrêtant aussi souvent que cela sera

「テクストの可動的な構造化（structuration mobile du texte）」、すなわちテクストそれ自体に内包されている構造化の動きは、読者であるバルトが実践する「テクスト分析」を通じて生じるとともに、その動きは決して一様ではなく、読者ごとに異なった形態を取ることがわかる（「読者から読者へと移動する構造化（structuration qui se déplace de lecteur en lecteur）」という記述の趣旨は、読者ごとに異なった「構造化」が生じ得るということだろう）。そのうえで確認したいのは、次の二つの方法論上の要点である。

一つ目は、テクスト分析が「四散する（se disperser）」と描写されたテクスト観に裏づけられたかたちで「分類する（classer）」という作業に基づいていること、別の言い方をすればその分類活動が厳密ではない仕方で行なわれるということである。この点は、前章で『モードの体系』にアプローチした際に私たちが依拠した分類活動という論点がここでも条件付きで有効であることを示している。つまりテクストの構造化の働きを把握するための要点は、「ル・システマティック」との共存関係にあったモードの「体系」にとっての根本的な与件としての分類活動にあると言えるが、この見解は、あくまでもテクスト分析における分類活動が、『モードの体系』での場合とは異なり、分析対象を網羅的に取り扱った綿密な目録の作成（端的に言えば目録を完成させること）を目指さないという条件のもとで成立する。

この分類活動は、意味を網羅するのではなく意味産出に寄与する諸々の形式ないしコードを分類対象にするとともに、厳密ではないかたちで行なわれる。前者は、ポーの作品の場合であれバルザックの作品の場合であれ、作品を解釈することそれ自体が二次的な与件にすぎないことを示唆しており、それは別の箇所で明言されている[9]。他方で後者は、適用されるための理論的な完成度、要するに理論的試みの道具的な性質が問題になっていないことを指しており、その点も同様に明言されている[10]。ゆえにテクスト分析における分類活

---

nécessaire [...] en essayant de repérer et de classer *sans rigueur* non pas tous les sens du texte [...] mais les formes, les codes, selon lesquels des sens sont possibles. Nous allons repérer les *avenues* du sens. », Roland Barthes, « Analyse textuelle d'un conte d'Edgar Poe » (1973), in *Œuvres complètes*, t. IV (1972-1976), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 413-414（「エドガー・ポーの一短編のテクスト分析」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1988 年）、183-184 頁）.

[9] 「[…] われわれは、テクストの筋書を構築したりそのテーマ体系を探し求めたりはしないだろう。一言で言えばわれわれは、テクストの解釈を行ないはしないだろう。[…]」« [...] nous ne construirons pas un plan du texte et nous ne chercherons pas sa thématique ; en un mot, nous ne ferons pas une *explication* du texte [...] », Barthes, « Analyse textuelle d'un conte d'Edgar Poe », pp. 415-416. 邦訳 187 頁。

[10] 「物語のテクスト分析を行なうにあたりわれわれは、いくつかの操作的手順に従うことにする（方法論上の原理というよりもむしろ操作上の基本的な規則と言っておこう。「方法」はあま

動は、解釈の妥当性や理論の適用可能性からは距離を置いていることになる。

二つ目の方法論上の要点は、必要に応じて立ち止まりながらゆっくりと読むというテクストの読み方である。この引用文のすぐあとに、方法（méthode）ではなく操作的手順（dispositions opératoires）とバルトが呼ぶところの、ポーの作品に対するテクスト分析だけでなく『Ｓ／Ｚ』にもそのまま該当するレクチュールの手順が示されている。その手順は、第一に分析対象となるテクストを「レクシ（lexie）」すなわちレクチュールの単位に「切り分ける（découper）」こと、第二に「レクシ」を通じてコノテーションを「すくい取る（écrémer）」こと、第三にコノテーションの読み取りを「一歩一歩（pas à pas）」というかたちで進めること、そして最後の第四に、レクチュールにあたり意味の「忘却（oubli）」を厭わないことである。

これらの手順の第三のそれ、すなわちコノテーションの読み取りを一歩一歩進めることに関するバルトの次の記述から私たちは、テクストの構造化においてレクチュールの進み方そのものが持つ重要性を見て取ることができる。

> われわれは、われわれの分析にレクチュール［読書行為］の歩みそのものを残しておくだろう。ただ単にそのレクチュールは、いわばスローモーションで撮影されたものであるだろう。［レクチュールの］こうした実行の仕方［／進み方］は理論的に重要であり、それが意味するのは、われわれが、テクストの構造を再構成することを目指しているのではなく、テクストの構造化に付き従うことを目指しているということ、そしてわれわれが、（修辞学的で古典的な概念である）コンポジション［作品構成］の構造化よりもレクチュールの構造化を重要視しているということである。[11]

一歩一歩という「歩み（démarche）」の遅い読み方は、テクストそれ自体に内包されている構造化の動きを追いかけてゆくためになされるのであり、バルトのテクスト分析が、レ

りにもしばしば実証主義的な成果を想定するという点で、その［「方法」という］語はあまりにも野心的であるとともにとりわけイデオロギー的に異論の余地があるだろうからである）。」« Pour procéder à l'analyse textuelle d'un récit, nous allons suivre un certain nombre de dispositions opératoires (parlons de règles élémentaires de manipulation, plutôt que de principes méthodologiques : le mot serait trop ambitieux et surtout idéologiquement discutable, dans la mesure où la « méthode » postule trop souvent un résultat positiviste). », Barthes, « Analyse textuelle d'un conte d'Edgar Poe », p. 414. 邦訳 185 頁。

[11] « Nous laisserons à notre analyse la démarche même de la *lecture* ; simplement, cette lecture sera, en quelque sorte, filmée au *ralenti*. Cette manière de procéder est théoriquement importante : elle signifie que nous ne visons pas à reconstituer la structure du texte, mais à suivre sa structuration, et que nous considérons la structuration de la lecture plus importante que celle de la composition (notion rhétorique et classique). », Barthes, « Analyse textuelle d'un conte d'Edgar Poe », p. 416. 邦訳 187 頁。

クチュールのプロセスに焦点を当てる「レクチュールの構造化（structuration de la lecture）」にほかならないことがわかる。それゆえテクストの構造化の様態は、分析者（読者）が行なう進行の遅いレクチュールのプロセスそのものとして把握できる。

こうしたレクチュールのプロセスは、具体的にどのような点でテクストの構造化を捉えることに資するのだろうか。ポーの作品に対する分析をひととおり終えたあと、方法論上の結論（Conclusions méthodologiques）として、バルトは次のように述べている。

> ［…］われわれは単に、構築されてゆくに応じて物語を捉えようと努めた（構造と運動、体系と無限を同時に含んでいること）。われわれの構造化は、レクチュールが自発的に果たす構造化を超えるものではない。[12]

分析者のレクチュールが「自発的に（spontanément）」（特別な意図を伴わずに）成し遂げるのであるから、分析者が及ぼす作用とは別に存在すると想定された構造化の動き、その動きを追跡するレクチュールの進み方は、読者の頭のなかで物語が構築されてゆくプロセスであると呼び換えることができる。この点に関しては、途中で立ち止まりながら読むことに注意が払われている「読書のエクリチュール」（1970 年）という（「レクチュールを書くこと」とでも訳せる）『Ｓ／Ｚ』についてバルトが論じた文章において、『Ｓ／Ｚ』は、レクチュールを通じてバルトが頭のなかで書くことによって形成されるテクストであるという記述を確認することができる[13]。

このようにテクストの「構造化」は、読者バルトが分析対象となるテクストを読み進めてゆくにつれて進展するのであり、また、このプロセスにおいては、「構造（structure）」および「体系（système）」が「運動（mouvement）」および「無限（infini）」と矛盾しないこと、言い換えれば、レクチュールのプロセスが運動性や際限のなさといった性質を持つことが示されている。そこから私たちは、厳密でない仕方でバルトが行なう分類活動には、運動性や際限のなさが伴われていることを容易に推測できるだろう。実際、セミナーのノート

---

[12] « [...] nous avons simplement essayé de saisir le récit au fur et à mesure qu'il se construisait (ce qui implique à la fois structure et mouvement, système et infini). Notre structuration ne va pas au-delà de celle qu'accomplit spontanément la lecture. », Barthes, « Analyse textuelle d'un conte d'Edgar Poe », p. 437. 邦訳 227 頁。

[13] 「では『Ｓ／Ｚ』とはいったい何であるのか？単にひとつのテクストであり、われわれが顔を上げるときに頭のなかで書いているあのテクストである。」« Qu'est-ce donc que *S/Z* ? Simplement un texte, ce texte que nous écrivons dans notre tête quand nous la levons. », Roland Barthes, « Écrire la lecture » (1970), in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002 p. 602（「読書のエクリチュール」、『言語のざわめき』、花輪光訳、みすず書房、新装版 2000 年（初版 1987 年）、37-38 頁）.

『バルザックの『サラジーヌ』』においてバルトは、行為の連鎖に対する分析を「絶え間ない分類の作業（travail incessant de classement）」[14]と形容している。

厳密でない仕方で行なわれる分類活動、そこに賭けられていると思われる運動性および際限のなさという性質を確認するために、セミナーのノート『バルザックの『サラジーヌ』』を参照しよう。バルザックのテクストから実際に諸々のコノテーションを読み取ってゆく作業の前にバルトは、その作業を支える二つの具体的な手順について言及している[15]。

一つ目は「発見（découverte）」と呼ばれている、意味の読み取り方に関する手順であり、この手順は、読み取りの対象となる諸々の意味を「物語の構造分析序説」（1966 年）で取り上げられた「単位（unités）」として分類することに存する。諸々の単位は、各レクシの形式としてのシニフィアン（「語り（narration）」、「対話（dialogue）」、「描写（description）」、等々）ではなく、各レクシの意味内容としてのシニフィエ、より正確に言えば、「パリ性（parisianité）」や「女性性（féminité）」（意味素のコードに属する要素）、「予告（annonce）」（後続する要素予示するレトリック的な要素であり、たとえば後続する行為を予示する場合は行為のコードに属する）、あるいはまた「おとり（leurre）」（解釈学的コードに属する要素）等々といった、諸々のコードに属する要素としてのシニフィエに従って命名される[16]。

二つ目は「論述［／展示］（exposition）」と呼ばれている、読み取りの対象となる諸々の意味を提示する仕方であり、この手順は、「一歩一歩（pas à pas）」というかたちでの意味のいわば示し方、要するに歩みの遅い意味の読み取りの進め方を指す。意味の読み取りを「一歩一歩」進めることは、「金粉（poussière d’or）」として「漂う意味（sens flottant）」によって作品が織り成されているというテクスト観に基づいている。

こうしたテクスト観を述べた直後の箇所でバルトは、テクストの「構造化」に資する歩みの遅いレクチュールが諸々の意味単位を分類してゆくことで進行する点について、次のように述べている。

> 一歩一歩、すなわち、単位にとどまること。［各単位の意味内容としての］命題は、諸単位の分類にほかならない。有機体論的な狙いはない（作品は身体ではない）。エミリ

---

[14] Barthes, *Sarrasine de Balzac*, p. 511.

[15] Cf. Barthes, *Sarrasine de Balzac*, pp. 67-79.

[16] 「［…］われわれのメタ言語に由来する凝縮された表現によって（「パリ性」、「女性性」、「予告」、「おとり」、等々）、諸々の単位を名づけることは可能である（またそうすることが必要である）。［…］シニフィエはそれ自体、あるひとつのコードに属する要素である。［…］」« [...] Il est possible de nommer (et nous en avons besoin) les unités par un raccourci venant de notre métalangue (« parisianité », « féminité », « annonce », « leurre », etc.) [...] Le signifié est lui-même élément d’un code [...] », Barthes, *Sarrasine de Balzac*, p. 71.

ー・テストを参照のこと、「私は自由ですが分類されているのです」。単位について言えば、「私は分類されているが自由である」。目録は、諸単位の行程、流動的な存在様態における諸々の意味素の一覧であり、その分散そのもの、歩みの作業、散策［／散歩］、中断は、エクリチュールの価値を持っている。論理的というよりむしろ、「立体音響的な」コードの配列を見出すことが重要なのである。つまり［この作業において見出される］唯一の諸構造は、各単位に適用される諸コードである。[17]

諸々の意味単位を分類することで得られるのは、「流動的な存在様態における諸々の意味素の一覧（relevé des sèmes dans leur être flottant）」、すなわち「流動的な存在様態における」諸々の意味単位の一覧である（この引用文で述べられている「意味素」とは、『Ｓ／Ｚ』における意味素すなわち作中人物の性格や場所の雰囲気を示す意味素に限定されない、広い意味合いでの意味素である）。この引用文では、諸々の意味単位（意味素）を有機的に統合することなくそれらを流動的な状態のまま分類するという手法が示されている。ゆえに私たちは、『モードの体系』での場合とは異なった厳密でない分類活動の眼目として、分類される諸要素が可動性（運動性）を持つという点を取り出すことができる。そうした分類の作業に基づきながら、複数的な存在としての構造（structures）と見なされた諸々のコードに対する「配列（distribution）」が行なわれることになる。

一歩一歩進むレクチュールのプロセスは、「諸単位の行程（parcours des unités）」すなわち諸単位を分類するプロセスとして存在しており、「分散（dispersion）」や「中断（suspension）」といった様相を含んだかたちで、「エクリチュールの価値（valeur d'écriture）」を帯びている。つまりここでは、レクチュールとエクリチュールの重なり合いが分類活動を通じてこそ生じるという点が示されている。それゆえ、『Ｓ／Ｚ』でのバルトのテクスト実践を、レクチュールの試みとしての分類活動であるのみならず、その試みが作品創造につながるエクリチュールの価値を伴った分類活動であると見なすことができる。

分類される諸要素の流動的な状態が「自由である（libre）」ことの証しにほかならないというバルトの考え方にも留意しておきたい。「私は分類されているが自由である（Je suis classée, mais je suis libre）」という標語は、分類される諸要素が特定のステータスに固定されないことを如実に表わしている。このスローガンは、「私は自由ですが分類されているので

[17] « Pas à pas : *id est* en rester à l'unité. La proposition n'est rien d'autre qu'un classement d'unités. Pas de visée organiciste (l'œuvre n'est pas un corps). Cf. Émilie Teste : « Je suis libre, mais je suis classée. » Unité : « Je suis classée, mais je suis libre. » L'inventaire est parcours des unités, relevé des sèmes dans leur être flottant, dont la dispersion même, le travail de marche, la promenade, la suspension a valeur d'écriture. Il s'agit de retrouver une distribution codique, « stéréophonique », plus que logique : les seules structures sont les codes visés par chaque unité. », Barthes, *Sarrasine de Balzac*, p. 78.

す（Je suis libre, mais je suis classée.）」という、ポール・ヴァレリーの散文作品の作中人物であるエミリー・テスト夫人の言葉を元にしている。この言葉は、テスト夫人が夫テスト氏との自身の生活について書いたという体で構成されている「エミリー・テスト夫人の手紙」（『テスト氏』に所収）と題されたテクストのなかで目にすることができる[18]。「自由であるが分類されている」というこの説明し難い状況をテスト夫人は、自由を「無限（infini）」と呼び換えて説明しようと試み、そしてうまく説明するには至らないが[19]、テスト夫人が夫の決定的な影響力のもとに置かれながらも一種の無限性を感じていることから、バルトは、諸要素が分類されているにもかかわらず無限性を持ち得るということを念頭に置いてヴァレリーのテクストへの参照を行なっているのだと思われる。

したがって、厳密でない仕方でバルトが行なう分類活動には、運動性と無限性（際限のなさ）が存在しているとともに、創造性が伴われているのである。この分類活動を詳細にわたって把握するためには、『Ｓ／Ｚ』でのバルトの分析実践を検討しなければならないが、ここではさしあたり、バルトが行なう分類活動の在り方からテクストの「構造化」にアプローチするという私たちの議論の方針を示すにとどめよう。私たちの解釈によれば、テクストの「構造化」とは、分析者が及ぼす作用およびテクストそれ自体が内包する作用という二つの様態を有する現象である。また、テクストの「構造化」の有り様は、運動性、際限のなさ、創造性といった性質を持つ分類活動として把握できる。第 3 節では解釈学的コードを用いたバルトの分析について取り上げ、その際には分類活動ではなくテクストの解釈が問題になるが、第 4 節において行為のコードを用いたバルトの分類活動に備わる運動性を明らかにするとともに、バルトの解釈学的分析およびシークエンス分析（行為の連鎖に対する分析）が、レクチュール（読む行為）の側面が前景化された分析実践によって顕在化する「構造化」、すなわちテクストそれ自体に内包された「構造化」の有り様を示していることを明らかにする。そして、第 5 節において意味素のコードを用いたバルトの分類活動を取り上げ、エクリチュール（書く行為）の側面が前景化されたバルトの意味素分析に宿る創造性を示すことになるだろう。

---

[18] 「私は自分に限界のない魂を感じることはありません。取り巻かれています、取り囲まれています。ああ！何と説明し難いのでしょう！囚われていると言いたいのでは全くありません。私は自由であるが分類されているのです。」« Jamais je ne me sens l'âme sans bornes. Mais environnée, mais enclose. Mon Dieu ! Que c'est difficile à expliquer ! Je ne veux point dire *captive*. Je suis libre, mais je suis classée. », Paul Valéry, « Lettre de Madame Émilie Teste », in *Monsieur Teste*, Gallimard, 1950 (1946), p. 47（「マダム・エミリー・テストの手紙」、『ムッシュー・テスト』、清水徹訳、岩波書店（岩波文庫）、2004 年、80 頁）.

[19] Cf. Valéry, « Lettre de Madame Émilie Teste », pp. 47-48. 邦訳 81-82 頁。

第 3 節　『Ｓ／Ｚ』における解釈学的分析を通じたテクストの「構造化」

本節では、解釈学的コードを用いてバルトが小説『サラジーヌ』を読み進めてゆくことで示されるテクストそれ自体に内包された「構造化」の働きについて検討する。そうすることによって、提喩的関係性、すなわち「類」と「種」のカテゴリー間の関係性を巧みに操ることがテクストの「構造化」に資するという点が明らかになるだろう。より明確なかたちで言えば、本節で問題にするテクストそれ自体に内包された「構造化」の機能とは、テクストそれ自身が含み持つ解釈学的なロジックにほかならず、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性がそのロジックを支えるのである。

バルトが解釈学的コードから読み取っている「両義性［／あいまいさ］(l'équivoque)」は、小説『サラジーヌ』において、去勢歌手という名を口にすることへのタブーとして、要するに真相暴露の遅延として機能しているが、この「両義性」は、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性が巧みに用いられることによって生じる。「類」と「種」のカテゴリー間の関係性において、一個人ザンビネッラは「去勢歌手」という「種」に包含されると同時に、「去勢歌手」という「種」は「排除された者」という「類」に包含される。言い換えれば、「排除された者」という上位クラスが、下位クラスとしての「去勢歌手」という「種」と「ザンビネッラ」という「個」を包含している[20]。このように構成されるカテゴリー間の包含関係において、ザンビネッラは自身の身分規定をめぐって去勢歌手という「種」にのみ触れないというかたちで嘘をつく。このザンビネッラの嘘について、バルトは次のように述べている。

> 両義性は（非常にしばしば）、類（私は排除された者である）については明らかにし、種（私は去勢歌手である）については沈黙することに存する。すなわち、部分の代わりに全体を言うのである。これは提喩である。［…］「排除された者」という類のうちの二つの種（一方では近づきがたい女性、他方では好ましくない去勢歌手）に対して、言説は一方を言外に含め、言説の受け手は他方を言外に含める。［…］この換喩的な嘘（なぜなら、部分の代わりに全体を言うことによって、誤りに導くか、少なくとも真実を覆い、充満のもとに空虚を隠すからである）は、人が期待しえるように、ここでは戦術的な機能を持っている。つまり、類と種の差異のように、述べられていないことはまさにザンビネッラの本性である。ところで、この本性は、操作的に［小説『サ

[20] 図式化すれば次のようになるだろう。
「排除された者」という「類」　＞「去勢歌手」という「種」　＞「ザンビネッラ」という「個」

ラジーヌ』の筋における機能上］決定的なものである（この本性は謎に対する真相暴露を要求する）と同時に、象徴的には生死にかかわるものである（それは去勢作用そのものである）。[21]

ザンビネッラの提喩的な嘘（去勢歌手という名に対するタブー）は、「両義性」というかたちで現われ、真相暴露の遅延に役立つ。またバルトが、この嘘が部分と全体の関係に基づいていると考えたうえで、「換喩的な嘘（mensonge métonymique）」と命名しているところからは、彼が換喩（隣接関係）と提喩（包含関係）を区別していないことがわかる。部分と全体の関係という観点からくくると、提喩は換喩の一種に組み込まれてしまい、「類」と「種」の関係のようなカテゴリー間の概念的な包含関係という提喩独自の性質を感知することが難しくなるが、このザンビネッラの嘘がカテゴリー的な包含関係に基づいていることは明らかである。

「排除された者」という「類」は明かすが「去勢歌手」という「種」は決して明かさないという戦略による、「類」と「種」の包含関係に基づく両義性は、小説『サラジーヌ』において巧妙に機能しており、バルトはこの解釈学的な仕掛けについて注意を払っている。「近づきがたい女性」という「種」（虚偽）と、「去勢歌手」という「種」（真相）の二つの「種」が、「排除された者」という「類」のなかで共存することを通して両義性が生じることを、バルトは様々な箇所で述べている。

たとえば、344 番のレクシ「彼女［ザンビネッラ］の器官の繊細さは彼女の判断力に反映されていた（La délicatesse de ses organes [de Zambinella] se reproduisait dans son entendement.）」においては、ザンビネッラの器官が、発声器官（「近づきがたい女性」としては虚偽）でも性的特徴（「去勢歌手」としては真相）でもありうるという両義性が指摘されている。373 番のレクシでは、ザンビネッラが短刀で身を護るのは、高級娼婦の計算（「近づきがたい女性」としては虚偽）あるいは貞操ではなく嘘を護る（「去勢歌手」としては真相）というように両義的な解釈ができる。同様に、401 番のレクシでザンビネッラが性の問題から遠ざかるのは、気高くも肉体とは縁を切ること（虚偽）あるいは肉体的な欠如があること（真相）、

[21] « L'équivoque (bien souvent) consiste à dévoiler le genre (*je suis un être exclu*) et à taire l'espèce (*je suis un castrat*) : on dit le tout pour la partie, c'est une synecdoque [...] des deux espèces du genre « *Exclu* » (d'une part la Femme inaccessible et d'autre part le castrat indésirable), le discours sous-entend l'une, le destinataire sous-entend l'autre : [...]. Ce mensonge métonymique (puisqu'en disant le tout pour la partie, il induit en erreur ou du moins masque la vérité, cache le vide sous le plein) a ici, comme on peut s'y attendre, une fonction stratégique : comme différence de l'espèce au genre, c'est le *propre* de la Zambinella qui est tu : or ce *propre* est à la fois décisif opératoirement (il commande le dévoilement de l'énigme) et vital symboliquement (il est la castration même). », Barthes, *S/Z*, pp. 254-255. 邦訳 191-192 頁。

395 番のレクシではザンビネッラが臆病なのは、女性性のため（虚偽）あるいは去勢作用のため（真相）、というかたちで虚偽を示す「種」と真相を示す「種」が共存することによって両義性が生じている。この両義性のうちでサラジーヌは虚偽の部分のみを受け取り、真相暴露が遅延される。その理由は、「近づきがたい女性」という「種」（虚偽）が「排除された者」という「類」に同一化されているからである。

さらに、「類」と「種」の関係に基づく提喩的な両義性は、虚偽の「種」（愛情の対象）が「（一個人ザンビネッラの）全存在」という「類」に同一化されるというかたちで展開される。428 番のレクシでのザンビネッラの発言「何時間か経ったら、もうあなた［サラジーヌ］は私［ザンビネッラ］のことを同じ眼で見ないでしょう。あなたの愛する女性は死んでいるでしょう。（Dans quelques heures, vous [Sarrasine] ne me [Zambinella] verrez plus des mêmes yeux, la femme que vous aimez sera morte.）」の受け取り方には、バルトがコメントしているとおり、1：ザンビネッラは死ぬから、2：サラジーヌは女性としてのザンビネッラを愛さないから、3：「女性性（féminité）」という虚偽が崩れ去るから、というかたちで複数の解釈が可能になっている。

1 番目の解釈は「（一個人ザンビネッラの人間としての）全人格（personne totale）」という「類」を示しており、2 番目の解釈は「愛情の対象」という「種」（虚偽）を、また 3 番目の解釈は「性別」という「種」（真相）を示している。「（一個人ザンビネッラの）全人格」という「類」のなかで、「愛情の対象」（虚偽）と「性別」（真相）という二つの「種」が共存していることがわかる。真相と虚偽が混在するこのザンビネッラの発言について、「偽装は全体と諸部分が同一であるとする関係を操ることにある。」[22]とバルトは述べている。

バルト自身が 428 番のレクシのこの両義性を、部分と全体の関係と捉えていることから（ここでも彼はやはりそれを「換喩的な嘘」と述べている）、あくまで一個人ザンビネッラのなかで愛情の対象（女性であること）と性別（男性であること）が共存していると考えること、つまり一個人ザンビネッラはその全存在（全人格）として必ずしも一つの「類」（カテゴリー）として想定されているわけではないと考えることも可能である。しかしながら、ここで機能している包含関係は、「帆」と「船」のような現実上の隣接関係にまとめられる部分と全体の関係ではなく、「貨物船」と「船」のような概念的なカテゴリー間の包含関係であると考える方が妥当だろう。なぜなら、この場合問題になっているのはザンビネッラが実際に有する身体の諸部分ではないことに加え、ここで「類」は、ザンビネッラのまさしく「全て」を包括するカテゴリーとして機能しており、虚偽の「種」がこの「類」に同

[22] « [L]a feinte consiste à jouer des rapports d'identité du tout et des parties. », Barthes, *S/Z*, p. 261. 邦訳 201 頁。

一化されることによってこそ、ザンビネッラの発言が嘘であると解釈できるからである。

両義的なザンビネッラの嘘を、バルトは部分と全体の関係に基づく嘘と見なした。しかしその両義性の内実は、一つの「類」のなかで二つの「種」を共存させたうえで、「類」の持つ包括性を巧みに利用することによって（すなわち虚偽の「種」を上位クラスである「類」に同一化しながら）、真相となる「種」を隠すことに存する。このように、隣接関係による換喩性とは異なり、概念的な包含関係を利用していることから、この嘘は提喩的な性質を持つのである。

「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づく提喩的な嘘は、真相暴露の遅延に資するというかたちで、テクストそれ自身が含み持つ解釈学的なロジックを支える。こうした解釈学的なロジックは、テクストそれ自体に内包された「構造化」の機能と見なすことができる。この機能は、バルトが行なうレクチュールの実践、正確に言えばレクチュールの試みかつエクリチュールの試みのなかでもレクチュールの側面が前景化された分析実践によって顕在化されると考えられる。言い換えれば、元々テクストに備わっていた解釈学的なロジックが、バルトのレクチュールによって浮き彫りにされるのである。

第 4 節　行為の連鎖における提喩的運動性を通じたテクストの「構造化」

解釈学的な問題とは別の観点から、テクストの「構造化」の働きにアプローチするために取り上げたいのは、行為のコードを用いたバルトのレクチュール、すなわち行為の連鎖に対する彼の分類活動である。本節で私たちは、この分類活動のプロセスが「類」と「種」の両カテゴリー間で生じる往復運動というかたちで提喩的な運動性を有することを示す。行為の連鎖に対するバルトの分類活動は、（解釈学的分析と同様に）レクチュールの試みかつエクリチュールの試みのなかでもレクチュールの側面が前景化された分析実践であり、元々テクストに備わっていた行為の連鎖（ないし行為のロジック）を浮き彫りにするかたちで、テクストそれ自体に内包された「構造化」の機能を顕在化させる。行為の連鎖をめぐるテクストそれ自体に内包された「構造化」の動きを捉えることは、行為の連鎖を形成する諸々の「類」と「種」のあいだでの往復運動を追跡することによってなされるのであり、本節の企図は、この提喩的な運動性の輪郭を示すことにある。

4-1. 提喩的関係性と「構造」の動的様態

行為の連鎖に対するバルトの分類活動の要点は、素描というかたちではあるが『Ｓ／Ｚ』刊行以前の時点ですでに記述されている。バルトの有名な論文「物語の構造分析序説」で

は、限りない多数性ないし多様性という意味合いでの物語の無限性を分類活動によって統御しようとする企図がうかがえるとともに[23]、そうした企図が、物語の内部に存在する諸々の要素（要するに物語の諸々の細部）に対する分析実践にまで及んでいることがわかる。行為の連鎖もそのなかに含まれる物語内部の諸要素に対する彼の分類活動、その要点を確認しよう。

> 物語の言語［／ラング］における第二の重要なプロセスは、組み込みである。あるレベルにおいて分離されたもの（たとえばひとつのシークエンス）は、たいていの場合、上位のレベル（階層秩序の高い段階にあるシークエンス、諸々の指標の分散を総括するシニフィエ、諸々の作中人物のあるクラスの行為［グレマスが導入した行為項］）において合流する。物語の複雑さは、諸々の後退と前進を組み込むことができる組織図の複雑さに比されよう。あるいは、より正確には、様々なかたちでの組み込みこそが、あるレベルに属する諸々の単位の見たところ統御できない複雑さをカバーすることを可能にする。まさに組み込みのおかげで、不連続で、隣接した種々雑多な諸々の要素（継起というただひとつの次元しか知らない連辞によって与えられるような諸要素）の理解を導く［／方向づける］ことができるのである。［…］[24]

この引用文が記述されているセクションは、「物語の体系（système du récit）」についての総括、言い換えれば「物語の構造分析序説」の議論全体に対する総括を担う役割を果たしており、「物語の構造分析序説」におけるバルトの分類活動の骨格が端的に示されている。問題となるのは、物語の体系構築のための次の二つの分析行程である。

第一に、引用文では言及されていないが「物語のラング（langue du récit）」における一つ目の分析行程として、「線分分割（segmentation）」（すでに私たちが目にした用語で言えば「切り分ける」こと）と呼ばれる作業が存在する。「物語の構造分析序説」でバルトは、物語を

---

[23] Cf. Roland Barthes, « Introduction à l'analyse structurale des récits » (1966), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 828-830（「物語の構造分析序説」、『物語の構造分析』、花輪光訳、みすず書房、1979 年、1-4 頁）.

[24] « Dans la langue du récit, le second procès important, c'est l'intégration : ce qui a été disjoint à un certain niveau (une séquence, par exemple) est rejoint le plus souvent à un niveau supérieur (séquence d'un haut degré hiérarchique, signifié total d'une dispersion d'indices, action d'une classe de personnages) ; la complexité d'un récit peut se comparer à celle d'un organigramme, capable d'intégrer les retours en arrière et les sauts en avant ; ou, plus exactement, c'est l'intégration, sous des formes variées, qui permet de compenser la complexité, apparemment immaîtrisable, des unités d'un niveau ; c'est elle qui permet d'orienter la compréhension d'éléments discontinus, contigus et hétérogènes (tels qu'ils sont donnés par le syntagme, qui, lui, ne connaît qu'une seule dimension : la succession) [...] », Barthes, « Introduction à l'analyse structurale des récits » p. 863. 邦訳 50-51 頁。

構成する諸要素を諸々の「単位（unités）」（「物語の最小単位（les plus petites unités narratives）」）として規定し[25]、それら諸単位をいくつかの「形式的なクラス（classes formelles）」、すなわち、物語の内容に直接的に関与する「核（noyaux）」、「核」と「核」のあいだを埋める「触媒（catalyses）」、作中人物の性格特徴や場所の雰囲気に対する読み取りを支える「指標（indices）」、語られる事柄の情報（たとえば作中人物の年齢）をもたらす「情報提供子（informants）」という、諸々のクラスに分類している[26]。これら諸々のクラスは、物語の構造分析のための「記述レベル（niveaux de description）」として設定された三つのレベル[27]、そのうちの「機能（fonctions）」のレベルに属する。

第二に、引用文で述べられている分析行程が存在する。それは、諸々の「単位」のあるレベルから「上位のレベル（niveau supérieur）」への「組み込み（intégration）」と呼ばれている作業である。「上位のレベル」への諸単位の「組み込み」という操作が指し示すのは、一方では、諸単位が属する「記述レベル」としての三つのレベルが入れ子構造的に絡み合う様相、すなわち、「機能」のレベルから「行為（actions）」のレベルへの移行、および「行為」のレベルから「語り［／物語行為］（narration）」のレベルへの移行に応じて、段階的に諸単位の「組み込み」が生じるケースであり、他方では、シークエンスの規模の相違に基づいて諸単位の「組み込み」が生じるケースである。

一つ目のタイプの「組み込み」である三つの「記述レベル」間での諸要素の「組み込み」については、「物語の構造分析序説」のなかでもバルトの記述がとりわけ素描にとどまっている点であるが、「機能」のレベルで見出される物語の構成単位、たとえば、ある作中人物の背後に控える行政的権力（電話機の数から「指標」として読み取られる要素）は、「行為」のレベル（「諸々の作中人物のあるクラスの行為（action d'une classe de personnages）」）に、すなわち、その作中人物が秩序の陣営についているということに統合される[28]。

二つ目のタイプの「組み込み」の例として、「機能」という「記述レベル」ひとつのなか

---

[25] Cf. Barthes, « Introduction à l'analyse structurale des récits », pp. 835-838. 邦訳 11-14 頁。

[26] Cf. Barthes, « Introduction à l'analyse structurale des récits », pp. 838-843. 邦訳 15-22 頁。

[27] 「物語作品のうちに三つの記述レベルを区別するよう提案したい。すなわち、「機能」のレベル（この語がプロップやブレモンにおいて持つ意味で）、「行為」のレベル（この語が行為項としての作中人物たちについて語る際のグレマスにおいて持つ意味で）、「語り［／物語行為］のレベル（おおよそトドロフにおける「言説［／物語言説］」のレベル）である。」« On propose de distinguer dans l'œuvre narrative trois niveaux de description : le niveau des « *fonctions* » (au sens que ce mot a chez Propp et chez Bremond), le niveau des « *actions* » (au sens que ce mot a chez Greimas lorsqu'il parle des personnages comme d'actants), et le niveau de la « *narration* » (qui est, en gros, le niveau du « discours » chez Todorov). », Barthes, « Introduction à l'analyse structurale des récits », p. 835. 邦訳 10-11 頁。

[28] Cf. Barthes, « Introduction à l'analyse structurale des récits », p. 839. 邦訳 16 頁。

で展開される「核」の論理的連続であるシークエンスに対する分析では（「階層秩序の高い段階にあるシークエンス（séquence d'un haut degré hiérarchique）」への諸要素の「組み込み」、この場合は諸々の「核」の「組み込み」）[29]、「手を差し出す」・「手を握る」・「手を離す」という第一のシークエンスは、「接近（abord）」・「呼びかけ（interpellation）」・「挨拶（salutation）」・「着席（installation）」という第二のシークエンスのなかの「挨拶」に組み込まれ、第二のシークエンスは「出会い（rencontre）」・「懇願（sollicitation）」・「契約（contrat）」という第三のシークエンスのなかの「出会い」に組み込まれる。そして第三のシークエンスは、「依頼（requête）」という「核」に収まる。微小なシークエンスが、より大きなシークエンスに順を追って統合されてゆき、最終的にそれらのシークエンスを統合するひとつの「核」への収束を通じて、ピラミッド型の階層秩序が構成されることになる。

これら二つのタイプの「組み込み」は、一見すると部分と全体の関係を適用しただけのように思えるが（行政的権力は秩序の一部分を形成する、あるいはまた、シークエンスはひとつのまとまりをなす行為の連鎖にほかならない）、この「組み込み」という操作には提喩的関係性、すなわちカテゴリー間の関係性が働いている。というのもここでは、部分と全体の関係がカテゴリー間の関係性にいわば変形させられているからである。秩序の陣営についていることは、「行為」のレベルでひとつのまとまりをなす抽象的なクラス（グレマスが導入した行為項（actant）というクラス）として、行政的権力という物語の構成単位を包括する。微小なシークエンスは、「機能」のレベルにおける行為のクラスとして想定された規模の大きいシークエンスおよびピラミッド構造の頂点をなす「核」に包括される。つまり、単に部分と全体の関係が問題になっているのではなく、諸々の要素が、物語を読解する際に何の役に立っているのか（どのような意味を有しているのか）ということに対する理解を導くカテゴリーとして分類されているのである。

この点は、バルトが参照している次の二つの言語理論の影響のもとにある。一つ目は、バンヴェニストが提唱した言語分析における「レベル（niveau）」の概念であり、複数の「レベル」のあいだでの包含関係を言語分析の基礎に置くバンヴェニストの言語理論は、バルトの「物語の構造分析序説」に理論的な枠組みを与えている。バンヴェニストは、音素、語、文といった諸々の言語単位間の関係性を包含関係に基づく複数のレベル間の階層関係として提示し（たとえば、下位レベルに位置する音素を上位レベルに位置する語が包含する）、ある言語単位を定義するためには、意味（sens）を基準にしながら、その言語単位を構成要素に持つ別の言語単位への参照が不可欠であるとした（要するにある音素を定義す

[29] Cf. Barthes, « Introduction à l'analyse structurale des récits », pp. 846-848. 邦訳 26-29 頁。

るためには、それが語のなかで意味の変化に影響を及ぼすかどうかチェックする必要があるということである）[30]。

二つ目は、バンヴェニストが論じた「レベル」の概念におけるよりも提喩的関係性が前景化されている言語理論、すなわちグレマスが提唱した「イゾトピー［／同位態］(isotopie)」の概念であり、実際バルトは「組み込み」の操作を記述するにあたりこの概念を引き合いに出している。バルトが行なう「組み込み」の操作が提喩的関係性に基づくことを明確にするために、グレマスの記述を参照しよう。

> ［…］言説の何らかのメッセージないし要素連続は、それらがひとつあるいはいくつかの分類素を共通に持っているときにのみ、イゾトピー的であると見なされ得ると言うことができる。さらにわれわれは、メッセージの狭い枠を超えて、このイゾトピーの概念のおかげで、どのようにして諸々のテクスト全体が同質的な意味論的レベルに位置づけられるのか、また、どのようにしてある意味作用の集合の包括的なシニフィエが、アプリオリに公準として立てられる（イェルムスレウが提案するように）代わりに、言語表出の構造的な現実として解釈され得るのかを示そうと努めるだろう。[31]

テクスト全体の意味の安定性を支える言説の「イゾトピー」という性質は、言説の各部分が共通の「分類素［／類素］(classèmes)」を有していることによって把握されるのであり、私たちは、この「分類素」の働きのうちに提喩的関係性を認めることができる。

グレマスの意味素分析において、「意味素（sème)」の集合すなわち「形態意味素［／語義素］(sémème)」は、「核意味素（sème nucléaire)」および「文脈意味素（sème contextuel)」という二つのタイプの「意味素」から成っており[32]、その組成をたどると、概念的に上位のレベルに位置する「文脈意味素」が概念的に下位のレベルに位置する「核意味素」を包含

---

[30] Émile Benveniste, « Les niveaux de l'analyse linguistique », in *Problèmes de linguistique gérérale I*, Gallimard, 1966, pp. 119-131（「言語分析のレベル」、矢島猷三訳、『一般言語学の諸問題』、岸本通夫監訳、みすず書房、1983 年、129-142 頁）.

[31] « [...] on est en mesure de dire qu'un message ou une séquence quelconques du discours ne peuvent être considérés comme isotopes que s'ils possèdent un ou plusieurs classèmes en commun. Bien plus : en dépassant le cadre étroit du *message*, nous essaierons de montrer, grâce à ce concept d'*isotopie*, comment les textes entiers se trouvent situés à des niveaux sémantiques homogènes, comment le signifié global d'un ensemble signifiant, au lieu (comme le propose Hjelmslev) d'être postulé *a priori*, peut être interprété comme une réalité structurelle de la manifestation linguistique. », Algirdas Julien Greimas, *Sémantique structurale. Recherche de méthode*, Larousse, 1966, p. 53（『構造意味論』、田島宏・鳥居正文訳、紀伊國屋書店、1988 年、66-67 頁）.

[32] Cf. Greimas, *Sémantique structurale*, pp. 44-45. 邦訳 54-55 頁。

していることがわかる[33]。たとえば、ごく単純な例ではあるが、「犬が吠える（Le chien aboie.）」という言表では、「叫び」および「犬」という二つの「核意味素」を「動物」という「文脈意味素」が包含しており、「文脈意味素」の存在がこの言表に対する一貫した意味の読み取りを支えている。グレマスが「分類素」と名づけているのは、この「文脈意味素」のことにほかならず、それは、言説における諸々の「核意味素」を包括するカテゴリーとして機能することによって、言説を理解する際の一貫性の構築に役立っているのである。

カテゴリーとして存在する諸要素の「上位のレベル」への「組み込み」は、下位レベルに位置するカテゴリーから上位レベルに位置するカテゴリーへの移行によって成り立っており、異なる概念レベルに属するカテゴリー間での移動に基づいているため、提喩的な操作であると見なせる。「階層秩序の高い段階にあるシークエンス」および「諸々の作中人物のあるクラスの行為」とともに記述されている、「上位のレベル」としての「諸々の指標の分散を総括するシニフィエ（signifié total d'une dispersion d'indices）」という点の効果的な具体例は「物語の構造分析序説」のなかで記述されているようには見受けられないが、分散している諸々の「指標」をあるシニフィエのもとに統合することを趣旨とするこの点についても、諸々の要素をある一定の理解に向けて方向づけるという枠組みで捉えることができる。

バルトが素描した「組み込み」の作業はこのように、基本的な分析モデルとしては、下位レベルから上位レベルへと収束する一方向的な性質を有する。当然のことながら、複雑な様相をコントロールしようとする作業それ自体が複雑化する傾向は避けられているため、この「組み込み」の操作にはやや乏しい運動性しか備わっていないように見える。「組み込み」の操作という、「物語の構造分析序説」の骨格を形成している分析モデルは、異なる概念レベル間での移動という点を活かしたバルトの分類活動の現われにほかならないが、この提喩的実践はひとつの方向性のもとで制限されてしまうことになる、あるいはより端的に言えば、「物語の構造分析序説」で提起された分析モデルは、あまりにも素朴で単純すぎるように見える。

しかしこれは、表面的な事実にすぎない。この「組み込み」の作業から成るバルトの分析行程には、単調なクラス分けには収まらない分類活動のダイナミズムが存在する。ある要素が「核」ないし「触媒」として行為の連鎖に関与しつつ「指標」の役割を果たすというように、ある「単位」が「混成的な（mixte）」性質を持ち二つのクラスに同時に属し得ること、つまり「組み込み」の操作が同時に二つの様態を成し得ることにバルトは注意を払

[33] Cf. Greimas, *Sémantique structurale*, pp. 50-53. 邦訳 62-66 頁。

っており[34]、別の言い方をすれば、「組み込み」のプロセスは同時に複数の方向性を持ち得るのである。さらにその射程として、異なる概念レベル間での移動が物語のレクチュールに豊かな運動性をもたらす点が問題になっていることがうかがえる。

> ［…］非常にしばしば、一方ではあるレベルで（あるシークエンスの機能）、他方では別のレベルで（ある行為項を参照する指標）、同一の単位が二つの相関項を持つことが有り得る。こうして物語は、きわめて入り組んだ間接的および直接的諸要素の連続のように姿を見せる。統辞障害は「水平の」レクチュールを導くが、組み込みはそのレクチュールに「垂直の」レクチュールを重ね合わせる。まるで潜在力の絶え間ない戯れのような、ある種の構造的な「不規則性の動き」が存在し、その様々な下降［の動き］が物語に「活力」ないしエネルギーを与える。それぞれの単位はその発現と深みにおいて感知され、このようにして物語は「進行する」。これら二つの経路の協力によって、構造は枝分かれし、増殖し、姿を現わし――そして捉え直される。新たなものも規則に従うことをやめない。[35]

「統辞障害（dystaxie）」という用語が指し示しているのは、諸要素が同一のレベルにおいて分散している状態であり、このように水平的な布置を示している諸要素をある一定の理解に導く「組み込み」の操作は、諸々の要素を単位として顕在的かつ潜在的なかたちで（「発現（affleurement）」と「深み（profondeur）」という位相において）把握することを可能にするが、この場合、下位レベルから上位レベルに至る階層秩序が整然と具現化されるのではない。というのも、この「組み込み」のプロセスにおいては、「構造的な（structural）」現象であるがゆえに無軌道ではないものの、ある「不規則性の動き（boitement）」がたしかに存在するからである。

その動きは「下降（chutes）」、つまり上位レベルから下位レベルへの移動であると記述されている。それゆえここでは、上位レベルに位置するカテゴリーと下位レベルに位置する

---

[34] Cf. Barthes, « Introduction à l'analyse structurale des récits », p. 842, 860. 邦訳 20-21, 47 頁。

[35] « [...] très souvent, une même unité peut avoir deux corrélats, l'un sur un niveau (fonction d'une séquence), l'autre sur un autre (indice renvoyant à un actant) ; le récit se présente ainsi comme une suite d'éléments médiats et immédiats, fortement imbriqués ; la dystaxie oriente une lecture « horizontale », mais l'intégration lui superpose une lecture « verticale » : il y a une sorte de « boitement » structural, comme un jeu incessant de potentiels, dont les chutes variées donnent au récit son « tonus » ou son énergie : chaque unité est perçue dans son affleurement et sa profondeur, et c'est ainsi que le récit « marche » : par le concours de ces deux voies, la structure se ramifie, prolifère, se découvre – et se ressaisit : le nouveau ne cesse d'être régulier. », Barthes, « Introduction à l'analyse structurale des récits », pp. 863-864. 邦訳 51 頁。

カテゴリーのあいだでの往復運動が想定されており、前章で検討した『モードの体系』での場合と同様に、バルトが行なう分類活動には提喩的な往復運動が伴われているのである。物語のレクチュールが進行するにつれて、より具体的には、分類活動が実践されてゆくなかで、物語の「構造（structure）」は細分化ないし多数化しながら顕在化してゆき、そしてまた新たに「捉え直される（se ressaisir）」が、そうした「構造」の動的な様態を支えているのは、単一の方向性だけでなく複数の方向性、さらには逆向きの方向性すら備えている「組み込み」のプロセスなのである。

したがって「物語の構造分析序説」の骨格を成す分析モデルには、「類」（上位カテゴリー）と「種」（下位カテゴリー）のあいだを往復するという構想が存在しており、バルトの「構造分析」は、物語の「構造」が動的な様態を持ち得ることへの注視に根ざした試みであったのだと言える。

実際、物語分析にあたりバルトは、「構造分析」が動的でありかつ際限のない作業として存在するという展望を持っており、この点について彼は、物語分析の方法論が問われている「どこから始めるべきか？」（1970 年）という論考の末尾で、次のように述べている。

> 要するに、（ここで行なったように）ある種の意味の圧縮から出発する権利が得られるのは、分析の運動がその無限の流れ［／撚り糸］において、テクストを、意味の大群から成る最初の雲を、諸々の内容から成る最初のイメージをまさしく爆発させるからである。構造分析に賭けられているのは、テクストの真実ではなくその複数性である。したがってその作業は、諸々の形式から出発して諸々の内容を見破り、解明し定式化することではあり得ず（そのためなら構造論的な方法などまったく必要ないだろう）、まさにそれとは逆に、形式の科学の力によって、諸々の最初の内容を散らし、後退させ、減速化し、消え去らせることにある。[36]

「構造分析」の射程は、諸々の内容（contenus）を「散らし（dissiper）」また「消え去ら

[36] « En somme, si l'on se donne le droit de partir d'une certaine *condensation* du sens (comme on l'a fait ici), c'est parce que le mouvement de l'analyse, dans son filé infini, est précisément de faire éclater le texte, la première nuée des sens, la première image des contenus. L'enjeu de l'analyse structurale n'est pas la vérité du texte mais son pluriel ; le travail ne peut donc consister à partir des formes pour apercevoir, éclaircir ou formuler des contenus (point ne serait besoin pour cela d'une méthode structurale), mais bien au contraire à dissiper, reculer, démultiplier, faire partir les premiers contenus sous l'action d'une science formelle. », Roland Barthes, « Par où commencer ? » (1970) [in *Nouveaux essais critiques* (1972)], in *Œuvres complètes*, t. IV (1972-1976), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 94（「どこから始めるべきか？」、『新＝批評的エッセー――構造からテクストへ』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1977 年）、117 頁）.

せる（faire partir）」といった、「テクスト分析」の手法につながっており、この展望のもとでは、分析するという行為そのものが運動性や際限のなさを伴う。この論考においては、運動性や際限のなさを伴った物語分析の具体的な様相にまで議論が進められているわけではないが、テクスト分析と構造分析の区別にかかわらず、その運動性によって原理的には絶え間なく継続するという分析行程の在り方が明確に示されている。「類」と「種」のあいだの提喩的な往復運動は、この分析行程の具体的な様相にほかならない。

4-2. 『Ｓ／Ｚ』でのシークエンス分析における提喩的な往復運動

提喩的な運動性（「類」と「種」のあいだの往復運動）を活かしたバルトの分析手法は、「物語の構造分析序説」では素描の段階にとどまっていたが、『Ｓ／Ｚ』においては細やかに実践されていることが見て取れる。『Ｓ／Ｚ』でのシークエンス分析は、テクストの「構造化」を捉えること、すなわちテクストそれ自体が内包する「構造化」の働きを追跡することにつながっている。

バルトは、行為の連鎖が細分化してゆく様相を樹木に例えながら（「LVI. 木」）、シークエンスを命名することが「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に直結している点について、次のように述べている。

> ［…］言説は、（命名された）類とその諸々の（プロアイレティスムの）種のあいだで絶えず揺れ動いている。つまり、総称的かつ特殊な名称の体系としての語彙は、根本的に構造化に協力する。それは、実際には構造化を我が物とするためである。というのも、意味は力だからである。命名すること、それは従属させることであり、命名が総称的であればあるほど、従属［の度合い］は強い。［…］われわれ自身、シークエンスを命名することによって（「愛することへの願望」）、意味の戦いを長引かせているだけであり、テクストそれ自身によって実行された占有を逆向きに行なっているだけである。[37]

あるシークエンスに対する命名行為の内実は、諸々の行為をそのシークエンスに「従属させる（assujettir）」こと、すなわち、当該のシークエンスのもとに諸々の行為をまとめる

[37] « [...] le discours oscille sans cesse entre le genre (nominal) et ses espèces (proaïrétiques) : le lexique, en tant que système de noms génériques et spéciaux, collabore fondamentalement à la structuration. C'est en fait pour se l'approprier, car le sens est une force : nommer, c'est assujettir, et plus la nomination est générique, plus l'assujettissement est fort. [...] Nous-mêmes, en nommant la séquence (« Vouloir-aimer »), nous ne faisons que prolonger la guerre du sens, retourner l'appropriation qui a été mise en œuvre par le texte lui-même. », Barthes, *S/Z*, pp. 226-227. 邦訳 151-152 頁。

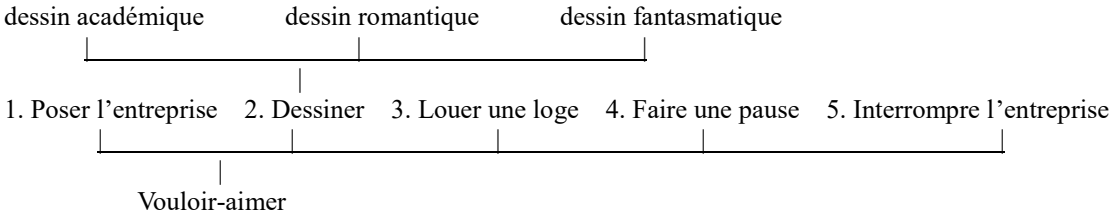
ことにほかならない。この引用文で言及されているシークエンスの命名を例に挙げると、「愛することへの願望（Vouloir-aimer）」というシークエンスのもとに、「企てを設定する（Poser l’entreprise）」、「デッサンする（Dessiner）」、「桟敷を借りる（Louer une loge）」、「休止する（Faire une pause）」、「企てを中断する（Interrompre l’entreprise）」等々といった諸行為の連鎖がまとめられる。つまり、「愛することへの願望」というシークエンスの命名においては、「デッサンする」等々の諸行為が上位レベルに位置する行為のクラス（「愛することへの願望」）に組み込まれるというかたちで、「種」（下位レベル）から「類」（上位レベル）へと向かう動きが認められる。

同時にバルトは、あるシークエンスに属する行為が枝分かれしてゆく様相をツリー状の成層関係に見立てている。たとえば、「デッサンする」という行為は、「アカデミックなデッサン（dessin académique）」、「ロマンティックなデッサン（dessin romantique）」、「幻想的なデッサン（dessin fantasmatique）」というように細分化される[38]。厳密に言えば、この三つのデッサンは行為のコードではなく象徴のコードから問題にされているが、それらは、諸行為のツリー状の成層関係のなかに収められているため、バルトのシークエンス分析の一部を成していると見なせる。この場合、「デッサンする」という行為は諸々のデッサンの試みを包括する上位レベルに位置する以上、行為の連鎖の細分化においては、「類」（上位レベル）から「種」（下位レベル）へと向かう動きが認められる。

このように、行為の連鎖を細やかにたどることは、「類」（ある命名されたシークエンス）と「種」（あるシークエンスに属する諸々の行為）のあいだに存在する運動性を感知することになるのであり、行為の連鎖に対するバルトの分類には、「種」から「類」へ、また「類」から「種」へと向かう二つの動きが伴われている。それゆえ『Ｓ／Ｚ』でのシークエンス分析は、「類」と「種」のあいだを往復しながら進行するのである。『Ｓ／Ｚ』でのシークエンス分析が念頭に置かれた論考「行為の連鎖」（1971 年）では、この分析行程を示すバルトの簡潔な記述を確認することができる[39]。

---

[38] 当該箇所で（「LVI. 木」）バルトが図示している諸行為のツリー状の成層関係を、省略的な仕方で示せば次のようになるだろう。



[39] 「[…]（その雑多な性質について述べたところの、意味作用を発揮するテクストの総体から）諸々のシークエンスを取り出すことは、ある総称的な名称（「会う約束」、「旅行」、「遠出」、「殺人」、「誘拐」、等々）のもとに、諸々の行為を整理するということである。それら諸々のシーク

さらに、「類」と「種」のあいだの運動性の源泉である語彙体系が「構造化」に資するという点に注目すると、「構造化」をめぐるテクストと分析者（バルト）、その双方の在り方が明確に記述されていることがわかる。「構造化」は、元々テクストが「占有（appropriation）」を行なっている状態にあるが、行為の連鎖に対する分類活動を通じてその「占有」が分析者の側に移る。つまりシークエンス分析の行程は、「類」と「種」のあいだでの絶え間ない往復運動を原動力にしながら行為の連鎖がテクストのなかで産出されてゆくプロセスを反映したものであり、その分析行程を通じてバルトは、テクストそれ自体のうちに内包されている「構造化」の動きを捉えることになるのである。ゆえに『Ｓ／Ｚ』でのシークエンス分析は、テクストそれ自体に内包された「構造化」の働きを可視化することの見事なデモンストレーションとなっているのだと言える。

こうしたシークエンス分析のプロセスは、『Ｓ／Ｚ』の別の箇所でも示されている（「XXXVI. 折りたたむこと、広げること」）。一方では、あるシークエンスの構築が諸々の行為を包括する名称を見出すことに存する点について言及されているが、この点が指し示すのは、「種」としての諸々の行為を「類」としてのシークエンスの名称のもとにまとめること、要するに「種」から「類」へと向かう分類活動にほかならない。他方では、それとは逆の分析行程である「類」から「種」へと向かう分類活動が、「始める／立ち止まる／再び出発する（commencer/s’arrêter/repartir）」というように、あるシークエンスをその構成要素に分解してゆく「分析的（analytique）」プロセスであるばかりでなく、「おやすみなさいと言う／預ける、キスをする（dire adieu/confier, embrasser）」というように、隣接関係にある行為を加算してゆく「触媒的（catalytique）」ないし「換喩的（métonymique）」プロセスでもあるとやや詳細に記述されている。

そのように諸行為の枝分かれに対する把握を精密化したうえでバルトは、シークエンス分析において「類」と「種」のあいだを往復することを、次のように形容している。

> それゆえ、読む（テクストが読み得ることを感知する）ということは、名称から名称へ、折り目から折り目へと進むことである。それは、ある名称のもとに［テクストを］折りたたみ、それから、この名称の新たな折り目に従ってテクストを広げることであ

エンスを分析することは、この総称的な名称をその諸々の構成要素に広げることである。」« [...] dégager les séquences (de la masse signifiante du texte, dont on a dit le caractère hétéroclite), c’est ranger des actions sous un nom générique (*Rendez-vous*, *Voyage*, *Excursion*, *Assassinat*, *Enlèvement*, etc.) ; analyser ces séquences, c’est déplier ce nom générique en ses composants. », Roland Barthes, « Les suites d’actions » (1971), in *Œuvres complètes*, t. III (1968-1971), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 965-966（「行為の連鎖」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1988 年）、25 頁）.

る。これがプロアイレティスムである。すなわち、諸々の名称を探し、それらを目指すレクチュールの技巧（ないし技術）であり、語彙の超越の行為であり、言語の分類から実行された［／もたらされた］分類の作業である。［…］[40]

テクストを「折りたたみ（plier）」かつ「広げる（déplier）」というかたちで進行する分類活動について、テクストを折りたたむことは、諸々の行為をあるシークエンス名にまとめる「種」から「類」へと向かう分析行程として、テクストを広げることは、あるシークエンスに属する諸々の行為を細分化する「類」から「種」へと向かう分析行程として把握できる。

ここではそうした分類活動、すなわち行為の連鎖という観点からテクストに内包された「構造化」の動きを追跡することが、レクチュールの技術的な一面として、テクストの「読み得る（lisible）」という性質につながっていることがうかがえる。引用文のなかでは手短に記述されているだけであるが、この点を見逃さないようにしたい。なぜならバルトは、行為の連鎖の在り方を、テクストの「読み得る」という性質に明確なかたちで関連づけているからであり、実際、シークエンス分析に対する総括が行なわれている箇所での記述によれば（「LXXXVI. 経験の声」）、確固たる論理的かつ時間的な順序に従うシークエンスは、「読み得るものの最も強力な骨格（armature la plus forte du lisible）」[41]を形成するのである。

また、セミナーのノート『バルザックの『サラジーヌ』』においても、行為の連鎖の在り方は、テクストの「読解可能性（lisibilité）」に結びつけられている。

［…］プロアイレティスムとは、諸々の名称を探し、それらを目指すレクチュールの技巧ないし技術である（語彙の超越性の探求、すなわち語彙化の、命名の活動）［…］大切なのは、この活動の結果ではない。というのも、科学的な論理は存在せず、その作業が存在するからである。［作業の結果として］得られるクラス分けは重要ではない（たしかに［クラス分けは］常に避けられないが）、もし、テクストのレクチュールによってもたらされる途切れることのないクラス分けの作業を捉えるのであれば。テクストの読解可能性は、読者が行なう命名の作業の力である。[42]

---

[40] « Ainsi, lire (percevoir le *lisible* du texte), c'est aller de nom en nom, de pli en pli ; c'est plier sous un nom, puis déplier le texte selon les nouveaux plis de ce nom. Tel est le proaïrétisme : artifice (ou art) de lecture qui cherche des noms, s'efforce vers eux : acte de transcendance lexicale, travail de classement opéré à partir du classement de la langue [...] », Barthes, *S/Z*, p. 187. 邦訳 97 頁。

[41] Barthes, *S/Z*, p. 290. 邦訳 241 頁。

[42] « [...] le proaïrétisme est un artifice ou un art de lecture qui cherche des noms, s'efforce vers eux (recherche d'une transcendance lexicale : activité de lexicalisation, de nomination). [...] Ce qui compte, ce

行為の連鎖に対するバルトの捉え方が『Ｓ／Ｚ』に引き継がれていることが明瞭に見て取れるこの引用文が示しているのは、分類活動の結果として得られる「クラス分け（classement）」と対比されながら述べられた分類活動それ自体の重要性である。その内実としての、「テクストのレクチュールによってもたらされる途切れることのないクラス分けの作業（travail ininterrompu de classement impliqué par la lecture du texte）」という記述の趣旨は、テクストのレクチュールは絶え間ない分類活動の運動性を伴っており、その運動性がテクストそれ自体に内包された「構造化」の動きを反映していると解釈できる。このようなかたちで、行為の連鎖に対する絶え間ない分類活動は、テクストの「読解可能性」（「読み得る」という性質）を浮き彫りにする。

したがって、『Ｓ／Ｚ』でのシークエンス分析で実践されている分類活動は、諸々の行為の「類」と「種」のあいだでの絶え間ない往復運動に支えられており、この提喩的な運動性を通じて、テクストの「読み得る」という様態として想定された「構造化」の働きが可視化されるのだと言える。このようにして、テクストそれ自体に内包された（元々テクストに備わっていた）機能としての行為のロジックが浮き彫りにされるのである。テクストそれ自体に内包された「構造化」の働きが「読み得る」という様態を有する点は、バルトが行なう分類活動の別の一面、すなわち、テクストの「書き得る」という様態に基づく「構造化」の働きへと私たちを導くだろう。

第 5 節　テクストの「構造化」と『Ｓ／Ｚ』における提喩的創造性

バルトの解釈学的分析およびシークエンス分析は、テクストそれ自体に内包された「構造化」の機能、言い換えればテクストの「読み得る」という性質を可視化する。本節で注目したいのは、「書き得るもの」として想定されたテクストに対する「構造化」の在り方、すなわち分析者が及ぼす作用としての「構造化」の有り様である。本節では、まず、「書き得るもの」として想定されたテクストに対してバルトが行なう「構造化」が、エクリチュールの実践、正確に言えばレクチュール（読む行為）の試みかつエクリチュール（書く行為）の試みのなかでもエクリチュールの側面が前景化された「構造化」、すなわち分析者が及ぼす作用としての「構造化」を体現することを確認する。次に、こうしたエクリチュー

---

n’est pas le résultat de cette activité, car il n’y a pas de logique scientifique, mais son travail. Peu importe le classement auquel on arrive (d’ailleurs toujours forcé), si on saisit le travail ininterrompu de classement impliqué par la lecture du texte. La *lisibilité* d’un texte est le pouvoir de travail de nomination du lecteur. », Barthes, *Sarrasine de Balzac*, p. 511.

ルの実践が、（レクチュールの実践を元にした）創造性を伴った分類活動として把握することができるということを示す。そのうえで、意味素の提喩的特徴と呼べる点（意味素がコノテーションのレベルで何らかの「類」を導くこと）を明らかにしつつ、その作業を元にして、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づいて新たな意味領域（意味グループ）を切り開くという、バルトの分類活動に宿る創造性を示したい。

5-1. 「読み得るテクストの構造化」と「書き得るテクストの構造化」

本節での議論の出発点として、分析者が及ぼす作用としての「構造化」がエクリチュールの実践にほかならないことを確認したい。そのために、テクストの在り方に対してバルトが想定した良く知られている区分、すなわち、「読み得るもの（le lisible）」と「書き得るもの（le scriptible）」という区分を取り上げることにする。『Ｓ／Ｚ』冒頭での記述によれば（「I. 価値判断」、「II. 解釈」）、テクストの「読み得る」という性質は「生産物（produit）」ないし「構造（structure）」として構築された状態から、テクストの「書き得る」という性質は「生産活動（production）」ないし「構造化（structuration）」から、対比的なかたちでそれぞれアプローチされている[43]。その記述からわかるのは、テクストの「書き得る」という性質が「構造化」に直結していることであるが、先に見たように、テクストの「構造化」の働きは「読み得る」という性質に相反するものではない。

私たちは、「読み得るもの」と「書き得るもの」についてのバルトの記述を、次のように解釈したい。つまり、テクストの「読み得る」という性質は、テクストそれ自体に内包された「構造化」の働きの現われにほかならないのであり、レクチュールの側面が前景化された分析実践を通じてバルトがその様態を明るみに出す一方で、テクストの「書き得る」という性質が、エクリチュールの実践を前景化したかたちで分析者が及ぼす作用としての「構造化」の在り方を指し示していると考えられる。

テクストの「書き得る」という様態として捉えることができる「構造化」、それは、読者による創造的な行為を原動力にした「構造化」のことである。

われわれの価値判断はひとつの実践にしか結びつき得ず、その実践とはエクリチュー

---

[43] 「書き得るもの、それは、小説のないロマネスクなもの、詩のない詩的なもの、論文のない論述の試み、文体のないエクリチュール、生産物のない生産活動、構造のない構造化である。しかし、読み得るテクストは？それらは、生産物であり（生産活動ではない）、われわれの文学の巨大な一群を形成している。」« Le scriptible, c’est le romanesque sans le roman, la poésie sans le poème, l’essai sans la dissertation, l’écriture sans le style, la production sans le produit, la structuratuion sans la structure. Mais les textes lisibles ? Ce sont des produits (et non des productions), ils forment la masse énorme de notre littérature. », Barthes, *S/Z*, p. 122. 邦訳 7 頁。

ルの実践である。［…］価値判断が見出すのは、次のような価値である。つまり、こんにち書かれる（再び書かれる）ことが有り得るもの、書き得るものである。なぜ書き得るものがわれわれの価値なのだろうか。なぜなら、文学的な労働（労働としての文学）に賭けられているのは、読者を、テクストのもはや消費者ではなく、テクストの生産者にすることだからである。[44]

「書き得るもの」というテクスト観は、レクチュールの実践を元にしたエクリチュールの実践に私たちの注意を促す。この展望のもとで読者をテクストの「生産者（producteur）」と捉えることは、読者の潜在的な書き手としての一面を重要視すること、先に挙げた『Ｓ／Ｚ』に対するバルトの自著解説「読書のエクリチュール」にならって言えば、読者がテクストを頭のなかで書くという行為を前景化することであると考えられる。バルトがひとつの価値として提起しているのは、まさしく読者がテクストを書く可能性であり、「書き得るもの」としてのバルザックの小説『サラジーヌ』は、読者によって再び書かれ得るという射程を持つことになる。

それゆえ、エクリチュールの試みとして顕在化する「構造化」の働きは、読者の創造的行為から捉える必要があると言える。この「構造化」こそ、分析者が及ぼす作用と呼び換えることができるだろう。本節で取り上げたいのは、小説『サラジーヌ』の読者バルトの創造的行為であるが、より具体的に言えば、彼が行なう創造的な分類活動である。

5-2. 分類活動と創造性

『Ｓ／Ｚ』における読者の創造的行為に裏づけられた「構造化」、すなわち分析者が及ぼす作用として捉えることができる「構造化」について検討する際の手がかりとなるのは、あくまでも読者としての行為が問題になっている以上、バルトによるレクチュール（読む行為）の実践である。

このレクチュールの実践は、諸々の意味を分類する活動として把握できる。レクチュールに際して意味の忘却を厭わないという分析方針が述べられている箇所で（「V. レクチュール、忘却）、バルトは次のように述べている。

---

[44] « Notre évaluation ne peut être liée qu'à une pratique et cette pratique est celle de l'écriture. [...] Ce que l'évaluation trouve, c'est cette valeur-ci : ce qui peut être aujourd'hui écrit (ré-écrit) : le *scriptible*. Pourquoi le scriptible est-il notre valeur ? Parce que l'enjeu du travail littéraire (de la littérature comme travail), c'est de faire du lecteur, non plus un consommateur, mais un producteur du texte. », Barthes, *S/Z*, pp. 121-122. 邦訳 6 頁。

読むということは、実際、言語活動の作業である。読むということは諸々の意味を見つけ出すことであり、そして諸々の意味を見つけ出すということはそれらを名づけることである。しかし、名づけられたこれらの意味は、別の諸々の名前の方へ運び去られる。それらの名前は互いに呼び合い、集まり、そしてそれらの名前のグルーピングが再び名づけられることを望む。私は名づけ、命名し［／指名し］、再命名する。このようにしてテクストは進行する。それは生成状態にある命名であり、倦怠することのない近似であり、換喩的な作業である。[45]

「言語活動の作業（travail de langage）」としてのレクチュールは、諸々の意味を命名しつつ関係づけながらグルーピングしてゆく分類活動に基づいている。この分類活動の手順をピックアップすると、第一に何らかの意味を「名づける（nommer）」こと、第二に命名された意味がそれとは別の命名された意味の方へ「運び去られる（être emporté）」こと、第三にそれら命名された諸々の意味が「互いに呼び合い（s'appeler）」また「集まり（se rassembler）」グルーピングが生じること、第四に命名された諸々の意味の「グルーピングが再び名づけられることを望む（groupement veut de nouveau se faire nommer）」ということになる。

バルトはこの分類活動を「換喩的な作業（travail métonymique）」、あるいはまた、隠喩的原理（類似性）を想起させる「倦怠することのない近似（approximation inlassable）」と形容しており、その背景に存在する考え方は、隠喩的秩序を形成する範列（paradigme）に従って諸々の意味が命名され、換喩的原理（隣接性）を形成する連辞（syntagme）に沿って諸々の意味が関係づけられると理解できる。そもそも何らかの意味に対する命名は範列（選択関係）なくしては不可能であり、またテクストのレクチュールを進めるというかたちで諸々の意味を関係づけるにあたっては必然的に連辞（隣接関係）をたどることになる以上、隠喩的原理と換喩的原理は『Ｓ／Ｚ』で行なわれている分類活動にとって必須の与件であることは間違いない。

しかし、この分類活動が隠喩性と換喩性によってくみ尽くされると見なすのは早計だろう。むしろ注目すべきなのは、バルトの分類活動がどのような知的操作によって成り立っているのかという点、すなわち諸々の意味を何らかのグループにまとめるという作業である。この作業は、諸々の意味を理解可能性に資するかたちでクラス分けする提喩的原理（「類」

[45] « Lire, en effet, est un travail de langage. Lire, c'est trouver des sens, et trouver des sens, c'est les nommer ; mais ces sens nommés sont emportés vers d'autres noms ; les noms s'appellent, se rassemblent et leur groupement veut de nouveau se faire nommer : je nomme, je dénomme, je renomme : ainsi passe le texte : c'est une nomination en devenir, une approximation inlassable, un travail métonymique. », Barthes, *S/Z*, p. 127. 邦訳 13-14 頁。

と「種」のあいだの関係性）に属していると言える。さらに、諸々の意味に対する命名や関係づけ、そしてまた何らかのグルーピングに対する再命名といった諸々の分析行程が分類活動において切り離せない要点であることを考慮に入れると、それらの分析行程をグルーピングの作業と連動させること（分類活動は諸要素に対するクラス分けの作業にほかならない）、つまり、ここで問題になっている分類活動の手順全体を提喩的実践の枠内で捉えることが必要だろう。

さらに、「生成状態にある命名（nomination en devenir）」という記述は、命名することに基づいて諸々の意味に対してクラス分けを行なう提喩的操作が生成という様態を伴っていることを示唆している。要するに、バルトの分類活動には創造性が存在するように思われる。この点は、第四の手順である命名された意味のグループが再び命名されるという行程によっても示唆されている。なぜなら、あるグルーピングが「再び（de nouveau）」名づけられるということは、そのグルーピングに対して元々なされていた命名がキャンセルされることを含意しており、別の言い方をすれば、ある何らかのグルーピングが解体されたうえで別のグルーピングとして作り直される、そのような余地が生じるからである。この展望のもとでは、「私は名づけ、命名し、再命名する（je nomme, je dénomme, je renomme）」というバルトの記述をめぐって、「命名する」と訳した「dénommer」という表現は、「dé-nommer」すなわち「命名を取り消す」と捉えることが可能であり（実際、既訳ではそのように訳されている）、バルトの記述を「私は名づけ、命名を取り消し、再命名する」と読み換えることができる。ある何らかの意味グループに対する命名を取り消したうえで再命名すること、それは新たな意味グループを作り上げるということを含意する。ゆえに私たちは、バルトの分類活動の創造性に意識的でなければならないだろう。

5-3. 「意味素」の提喩的特徴

バルトが行なう分類活動を詳細にわたって把握するために私たちは、小説『サラジーヌ』における諸々の作中人物や場所の性格特徴を標定してゆく作業、すなわち意味素のコードを用いたバルトの分析を取り上げることにする。その理由は、バルトの意味素分析が「書き得るもの」との強固なつながりを有しており、彼の意味素分析に対する検討を通じて、バルトが行なう分類活動の創造性を浮かび上がらせることができるからである。

バルトの意味素分析の実践について検討する前に、意味素に対する彼の捉え方を確認しておこう。意味素分析に対する総括が行なわれている箇所において（「LXXXI. 人格の声」）、「意味素（sème）」は、「コノテーションのシニフィエ（signifié de connotation）」であると同時に、「シニフィエ（signifié）」としての「性格特徴（caractère）」の「コノテーター（connotateur）」

（コノテーションのレベルで性格特徴を形成するシニフィアン）であると記述されており[46]、一面的な理解から逃れるような意味素に対する捉え方がなされている。それに加え、実際には、意味素の読み取りがコノテーションのみならずデノテーションからも実践されている点も考慮に入れるべきだろう。たとえば 155 番目のレクシ「異常なほどの気性の荒さを示しました（donna les preuves d'une turbulence peu commune）」においてバルトは、サラジーヌの「気性の荒さ（turbulence）」という意味素をデノテーションとして挙げつつ、そのコノテーションに関しては、「「固まる」ことのない、もしくは純化されることのない、そしてまた解体され乱され続ける物質の状態（état d'une substance qui ne « prend » pas ou ne se purifie pas, et reste défaite, troublée）」というシニフィエに導かれるとコメントしている。

また、セミナーのノート『バルザックの『サラジーヌ』』を参照すると、レクシ（レクチュールの単位）に切り分けられた小説『サラジーヌ』のプロローグに該当する箇所について一歩一歩コメントを施すにあたって、バルトは、『Ｓ／Ｚ』に引き継がれるコードの区分けを意識しながら[47]、それにもかかわらず、意味素のコードに限定せずに諸々の意味素を読み取っていることがわかる。たとえば、最初のレクシの場合、『サラジーヌ』という小説のタイトルが「レクシ 1（Lexie 1）」としてコメントされているが、そこでは、「単位 1（UNITÉ I [1]）」および「意味素 1a（Sème 1a）」として、サラジーヌとは誰であるのかという謎の提起（解釈学的コードに属する要素）が取り上げられ、「単位 2（UNITÉ 2）」および「意味素 1b（Sème 1b）」として、「女性性（féminité）」という意味素のコードに属する要素が問題にされており、諸々の意味素は『Ｓ／Ｚ』よりも限定的でない扱われ方をしている。

しかし同時に、バルトは意味素のステータスについて明確なヴィジョンを持っている。『Ｓ／Ｚ』でバルトは、最初のレクシである『サラジーヌ（Sarrasine）』という小説のタイ

---

[46] 「意味素（いわゆる［本来の意味での］コノテーションのシニフィエ）は、諸々の人格や場所や対象のコノテーター［／共示子］であり、そのシニフィエは性格特徴である。性格特徴とは、形容詞や属詞や述語である（たとえば、自然外の、暗闇の、人気歌手、混成の、過度の、不信心な、等々）。」« Le sème (ou signifié de connotation proprement dit) est un connotateur de personnes, de lieux, d'objets, dont le signifié est un *caractère*. Le caractère est un abjectif, un attribut, un prédicat (par exemple : *hors-nature*, *ténébreux*, *vedette*, *composite*, *excessif*, *impie*, etc.). », Barthes, *S/Z*, p. 278. 邦訳 225 頁。

[47] セミナーを終えるにあたりバルトは、各コードについて総括する際に、意味素のコードに属する諸要素を、「意味素ないし厳密な意味合いでのコノテーションのシニフィエ（SÈMES OU SIGNIFIÉS DE CONNOTATION PROPREMENT DITE）」と記述しており、作中人物の性格や場所の雰囲気は、狭い意味合いでのコノテーションのシニフィエであると規定されている。また、「そのシニフィエがひとつの性格特徴であるところの、諸々の人物や場所や事物のコノテーター（Connotateurs de personnes, de lieux ou d'objets dont le signifié est un caractère）」という記述に見られるとおり、コノテーションのシニフィエに対応するシニフィアンが「コノテーター（Connotateurs）」と呼ばれている。Cf. Barthes, *Sarrasine de Balzac*, p. 511.

トルをめぐって、意味素として「女性性」を挙げたうえで（「Sarrazin」ではなく「Sarrasine」という名前はフランス語の女性形の標識「e」を含む）、次のように述べている。

> （コノテーションとして示された）女性性は、テクストのいくつもの箇所で定着することになるシニフィエである。それは移動する要素であり、同一の類に所属するほかの諸々の要素とともに組み合わさることが可能であり、性格特徴や雰囲気やフィギュールや象徴を形成する。ここで標定されるすべての単位はシニフィエであるが、それ［意味素という単位］は典型的な部類に属する。つまりそれはとりわけ、コノテーションという用語がほぼ日常的な意味合いで指すようなシニフィエを構成するのである。[48]

この引用文の趣旨は、『Ｓ／Ｚ』で標定される諸々の意味単位（諸コードから読み取られる諸要素）、そのなかでもとりわけ諸々の意味素が、コノテーションのレベルで互いに集まることによって、性格特徴をはじめとした何らかの「類（genre）」としてのシニフィエを構成するということであると理解できる。諸々の意味素は、「類」としてのシニフィエをコノテーションのレベルで形成するのである。また、ここでは意味素が「移動する要素（élément migrateur）」と記述されているが、その内実については後述する。

引用文の直後でバルトは、意味論において意味素は「シニフィエの単位（unité du signifié）」であると付記している。意味論での定義によれば[49]、意味素（sème）は、意味の最小単位であり、単独では実現されず、常に意味論的布置の内部、すなわち形態意味素（sémème）の内部で実現される。言い換えれば、諸々の意味素が集まることによって形態意味素が形成される。形態意味素は意味素の束ないし集合であり、言語形態上それに対応するのが「語彙素（lexème）」である。たとえば、語彙素「高い（haut）」と「低い（bas）」は「空間性（spatialité）」・「一次元性（dimensionalité）」・「垂直性（verticalité）」という諸々の意味素を共通に持っているが「水平性（horizontalité）」や「展望性（perspectivité）」といった意味素は持っておらず、語彙素「長い（long）」と「短い（court）」は、意味素「空間性」・「一次元性」・「水平性」・「展望性」を共通に持っているが意味素「垂直性」を持っていない。また、語より上位に位置

---

[48] « La féminité (connotée) est un signifié destiné à se fixer en plusieurs lieux du texte ; c'est un élément migrateur, capable d'entrer en composition avec d'autres éléments du même genre pour former des caractères, des atmosphères, des figures, des symboles. Bien que toutes les unités repérées ici soient des signifiés, celle-ci appartient à une classe exemplaire : elle constitue le signifié par excellence, tel que le désigne la connotation, au sens presque courant du terme. », Barthes, *S/Z*, p. 132. 邦訳 20-21 頁。

[49] Cf. J. デュボワほか著『ラルース言語学用語辞典』、伊藤晃ほか編訳、大修館書店、1980 年、15-16 頁、99 頁 ; Greimas, *Sémantique structurale*, pp. 34-36. 邦訳 41-42 頁。

する言語レベルが問題になる場合（文や言説）、先に見たようにグレマスの意味素分析では、形態意味素は「核意味素（sème nucléaire）」および「文脈意味素（sème contextuel）」という二つのタイプの意味素に細分化され、「文脈意味素」が諸々の「核意味素」を包括する「分類素（classème）」の役割を果たす。それゆえバルトは、ある何らかの意味グループとしてのシニフィエを形成するという意味素の機能を自身の分析に取り入れていることになる。

意味素に対するバルトの捉え方をその特徴からまとめると、意味素は、コノテーションのレベルで何らかの「類」を導く要素なのである。これを私たちは意味素の提喩的特徴と呼ぶことができるだろう。

5-4. 「類」の可動性を活かした分類活動に宿る提喩的創造性

分析者が及ぼす作用としての「構造化」を体現するバルトのエクリチュールの実践に備わる創造性を示すために、分類活動という点から『Ｓ／Ｚ』でのバルトの意味素分析について検討しよう。あらかじめ議論の見通しを示しておくと、バルトが抽出する特定の意味素（「固まらないもの」ないし「混成的なもの」）は、ほかの諸々の意味素を包括するという「類」としての役割を果たすとともに、この意味素を元にしたバルトの分類活動は、際限のなさが伴われたかたちで新たな意味グループを創出する試みとして把握することができるだろう。

諸々の意味素に対する読み取り、その具体的な手法がテーマ批評への参照とともに説明された箇所では（「XL. テーマ性の誕生」）、先に私たちが見たところの（5-2. 分類活動と創造性）、分類活動に際しての諸々の手順が見て取れる。

まず、ある何らかの意味が命名されるという点（第一の手順）に関しては、次のように述べられている。

> サラジーヌは「代わる代わる行動的になったりあるいは受動的になったりする」と述べること、それは彼の性格のなかから「固まらない」何かあるものを標定するように勧めることであり、その何かを名づけるように勧めることである。こうして命名のプロセスを開始することになり、それは読者の活動そのものである。つまり読むということは、名づけるということのために奮闘することであり、テクストの諸々の文章に意味論的な変形を被らせることである。[50]

[50] « Dire que Sarrasine est « *tour à tour agissant ou passif* », c'est engager à repérer dans son caractère quelque chose « qui ne prend pas », c'est engager à nommer ce quelque chose. Ainsi commence un procès de nomination, qui est l'activité même du lecteur : lire, c'est lutter pour nommer, c'est faire subir aux phrases du texte une transformation sémantique. », Barthes, *S/Z*, p. 195. 邦訳 107-108 頁。

この引用文では、読者（バルト）がテクストに「意味論的な変形（transformation sémantique）」を及ぼすというかたちで、諸々の意味を命名してゆくプロセスが創造性を帯びていることがわかる。命名のプロセスは、サラジーヌの性格特徴を形成する意味素として「固まらない（ne pas prendre）」という性質を見出すことを起点とする。サラジーヌの性格のそうした不安定な有り様を別の言葉で呼び換えれば、この引用文の直前に位置する 159 番目のレクシ「代わる代わる行動的になったりあるいは受動的になったり、無能になったりあるいは賢くなりすぎたりといった、彼の奇矯な性格特徴（Tour à tour agissant ou passif, sans aptitude ou trop intelligent, son caractère bizzare）」で挙げられている意味素、すなわち「混成的なもの（le composite）」ということになる。この固まらない「混成的なもの」という意味素は、バルトの分類活動の創造性を把握するための鍵になるだろう。

次に、ある何らかの命名された意味が別の命名された意味に関係づけられるという点（第二の手順）、および諸々の命名された意味がグルーピングされるという点（第三の手順）に関しては、次のように述べられている。

> 言説が他の可能なものへと、親近性のある他のシニフィエへとあなた方［読者］を連れ去る一方、コノテーターはひとつの名前よりもむしろ類義関係による複合体を指し示し、その複合体に共通する核について見当がつけられる。このようにして読書はある種の換喩的な横滑りのなかに吸収され、各々の類義語は自身に隣接している語に、ある何らかの特徴やある何らかの新しい区分［／出発点］を付け加える。［…］こうした拡大は意味の運動そのものである。意味は同時的に横滑りし、覆いかぶさり、また前進する。意味は分析されるどころではなく、反対に意味は、その拡大や語彙の超越性、また自身が常に合流しようと試みる類的な単語によって描き出されなければならないだろう。［…］[51]

諸々の意味素は、換喩的原理（隣接関係）に従って、自身とは異なった別の諸々の意味素の方へと向かう（「換喩的な横滑り（glissement métonymique）」）。それと同時に、「コノテ

[51] « Le connotateur renvoie moins à un nom qu'à un complexe synonymique, dont on devine le noyau commun, cependant que le discours vous emporte vers d'autres possibles, vers d'autres signifiés affinitaires : la lecture est ainsi absorbée dans une sorte de glissement métonymique, chacune synonyme ajoutant à son voisin quelque trait, quelque départ nouveau : [...] Cette expansion est le mouvement même du sens : le sens glisse, recouvre et avance à la fois ; loin de l'analyser, on devrait au contraire le décrire par ses expansions, la transcendance lexicale, le mot générique qu'il essaye toujours de rejoindre [...] », Barthes, *S/Z*, p. 195. 邦訳 108 頁。

ーター」としての役割から見れば、諸々の意味素は、隠喩的原理（類義関係）に基づいて互いに集まり「類義関係による複合体（complexe synonymique）」という様相を呈することになり、私たち読者（というよりはむしろ分析者バルト）が、諸々の意味素のそうした複合的な様相に共通の「核（noyau）」、またその「核」を可視化することのできる「類的な単語（mot générique）」を標定するように導かれる（つまり意味素に対する分類活動の第二の手順と第三の手順は、実際には同時的な操作として現われる）。「類的な単語」を通じて諸々の意味素の集まりを規定する作業は、提喩的原理（カテゴリー間での包含関係）に基づいている。

この引用文の直後では、諸々の意味素の「核」となる「類的な単語」がどのように標定されるのかという点について、次のように述べられている。

> テーマ化すること、それは一方では、辞書の外へ出ていくつかの類義関係の連鎖を辿り（荒々しい、混濁した、不安定な、乱れた）、拡大する命名（それはある種の官能から発するものである）に身をまかせ、また他方では、そのような［形容詞を元にした］実詞［名詞］の多様な係留点に立ち戻り、そこからある何らかの不断の形態を再始動させることである（「固まらないもの」）。［…］終わり［／目的］のない命名のとりこになった際限のないテーマ体系のみが、言語活動の永続的な性格を、そしてもはや生産物のリストではない読書の生産活動を尊重することができるだろう。[52]

エクリチュールの価値を帯びた「読書の生産活動（production de la lecture）」としての「際限のないテーマ体系（une thématique infinie）」は、「終わりのない命名（nomination sans fin）」に基づいている。隠喩性と換喩性の重なり合い（「類義関係の連鎖（chaînes synonymiques）」）に沿って展開する「拡大する命名（nomination en expansion）」の作業を支えているのは、「不断の形態（forme constante）」として存在している「固まらないもの（ce qui ne prend pas）」という意味素、すなわち「荒々しい（turbulent）」、「混濁した（trouble）」、「不安定な（instable）」、「乱れた（défait）」といった諸々の意味素に共通する意味素である。それゆえ、実際のところ「類的な単語」とは、「荒々しい」をはじめとした諸々の意味素を包括する「固まらないもの」という意味素にほかならない。

---

[52] « Thématiser, c'est d'une part sortir du dictionnaire, suivre certaines chaînes synonymiques (*turbulent*, *trouble*, *instable*, *défait*), se laisser aller à une nomination en expansion (qui peut procéder d'un certain sensualisme), et d'autre part revenir à ces différentes stations substantives pour en faire repartir quelque forme constante (« *ce qui ne prend pas* ») [...] Seule une thématique infinie, proie d'une nomination sans fin, pourrait respecter le caractère perpétuel du langage, la production de la lecture, et non plus la table de ses produits. », Barthes, *S/Z*, pp. 195-196. 邦訳 108-109 頁。

この点は、私たちが先に提示した意味素の提喩的特徴に補足が必要であることを示している。つまり、諸々の意味素はコノテーションのレベルで互いに集まって何らかの「類」を導くのであるが、ある特定の意味素（「固まらないもの」ないし「混成的なもの」）は、それ自体がほかの諸々の意味素を包括する「類的な」役割を果たすのである。グレマスにならって言えば、この「類的な」機能を持つ意味素は「分類素（classème）」であるということになるだろう。

また、私たちの解釈によれば、この「固まらないもの」という「類的な」役割を果たす意味素は、ほかの諸々の意味素（「荒々しい」や「混濁した」等々）を統一された状態に至らせることのない要素として存在している。なぜならこの意味素は、先に言及した 159 番目のレクシでの「混成的なもの（le composite）」や 155 番目のレクシでの「純化されることのない（ne pas se purifier）」状態、あるいはまた、13 番目のレクシにおける「マケドニア風サラダ（macédoine）」（インゲン豆や賽の目切りにしたニンジンやカブなどを寄せ集めたサラダ）といった諸々の意味素とともに、「実詞の多様な係留点（différentes stations substantives）」を形成しているように思われるからである。原理的には、「類的な」機能を持つ意味素のこのような在り方は、意味素の対する分類活動の第四の手順、すなわち命名された意味グループが再び命名されることにつながると考えられる。

実際のところ、この第四の手順（何らかの意味グループに対する再命名）は、『Ｓ／Ｚ』において十分なかたちで実践されているようには見受けられないが、それに類する作業が、ある意味では最も劇的なかたちで実践されていると言える。この点は、意味素のコードの組成に対する総括（「LXXXI. 人格の声」）において述べられている意味素のステータスに関係している。作中人物の性格特徴を形成する諸々の意味素は「人格のイデオロギー（idéologie de la personne）」に結びついており、その結びつきを支えているのが「固有名詞（nom propre）」ないし作中人物の「個性（individualité）」である。諸々の意味素が「人格」というイデオロギー（市民権を持ち自立した自己という一個人に対する近代的な捉え方）と切り離せないのは、諸々の意味素の集合が、個性によって唯一無二の在り方であると見なされ、またそうした在り方が固有名詞によって保証されているからである。しかし、諸々の意味素と「人格」を分離させること、そこに私たちは、ある何らかの意味グループに対する再命名の作業、正確には、ある何らかの意味グループのステータスに対する変形の操作を認めることができる。作中人物について論じられた箇所で（「XXVIII. 作中人物とフィギュール」）、「フィギュール（figure）」（既訳では「外形」）という概念を見て取ることができる[53]。「フィギ

[53] 「[…] 象徴的な観念性としての作中人物は、年代記的で伝記的な持続［／装い］を持たない。そうした作中人物はもはや「名前」を持たず、それはフィギュールの通過［／移行］（と帰着［／

ュール」は、作中人物の「人格」およびそれに付随する心理的特性や伝記的時間を捨象した概念である。「象徴的な観念性（idéalité symbolique）」としての作中人物は、「人格」を持たず「フィギュール」が往来する場として機能するという旨のバルトの記述からわかるのは、諸々の意味素が集まる「人格」（作中人物の「人格」）が、「フィギュール」に変形されているということである。このように、「フィギュール」という概念が導入されることによって、諸々の意味素と作中人物の「人格」を分離させることが可能になる。

バルトは、サラジーヌの性格特徴を形成する諸々の意味素として、「固まらないもの」ないし「混成的なもの」をはじめとして、「荒々しい」、「混濁した」、「不安定な」、「乱れた」、あるいはまた、「芸術的な才能（don artistique）」、「独立心（indépendance）」、「激しさ（violence）」、「過剰さ（excès）」、「女性性（féminité）」、「醜さ（laideur）」、「不信心（impiété）」、「細かく切り刻むことへの嗜好（goût du déchiquetage）」、「意志（volonté）」等々と挙げている。これらの性質をサラジーヌという一個人の個性としてまとめあげれば、彼の「人格」が形成される。しかし、特定の名前を持たない抽象的なカテゴリーとしての「フィギュール」のもとにそれらの性質を集めることは、作中人物の「人格」を形成することにはならない。この見地からすれば、「フィギュール」は、いわば無名のクラスとして存在していると考えられる。

この「フィギュール」という概念については、バルト自身十分な議論を施していないが、固有名詞と「人格」の結びつきが論じられた箇所で（「XLI. 固有名詞」）、次のように言及されている。

> ［直前のいくつかのレクシにおいて、意味素のコードから、粗暴さや不信心などといったサラジーヌが持つ諸々の性格特徴が読み取れることを受けて］ここではしばしば、サラジーヌについて語られる際には、まるで彼が存在しているかのようであり、彼が未来や無意識や魂を持っているかのようである。しかし語られているのは、彼のフィギュール（サラジーヌという固有名詞のもとで駆使された人格を持たない象徴のネットワーク［／網の目］）についてであって、彼の人格（諸動機とあり余る意味を授けられた心的な自由）についてではない。つまり、諸々のコノテーションは展開されるが、［その諸々のコノテーションに対する］探求は続けられない。探し求められるのは、［人格を持った一個人である］サラジーヌの真実ではなく、テクストが持つ（一時

回帰］）の場にほかならない。」« [...] Comme idéalité symbolique, le personnage n’a pas de tenue chronologique, biographique ; il n’a plus de Nom ; il n’est qu’un lieu de passage (et de retour) de la figure. », Barthes, *S/Z*, p. 175. 邦訳 80 頁。

的な）ある場の体系性である。この場は、（サラジーヌという名のもとに）標識づけられることで、物語が持つ操作的なものという諸々のアリバイのなかに、諸々の意味の決定不可能なネットワークのなかに、諸々のコードの複数性のなかに入り込むことになる。[54]

諸々の意味素は、それらを有機的に統合する「人格」の概念から切り離されれば、テクストが持つ「体系性（la systématique）」、すなわち、ある何らかのネットワークを構築する。このネットワークは、「一時的な（transitoire）」という性質を持つため、「体系」や「構造」には還元されない。またこの引用文では、こうしたネットワークそれ自体が「フィギュール」として提示されている。それゆえ「フィギュール」は、諸々の意味素が形成するネットワークであり、なおかつそのネットワークを示すカテゴリー（無名のクラス）であると考えられる。

「フィギュール」を導入したグルーピングは、諸々の性格特徴を作中人物の個性（「人格」）として定着させない、言い換えればこのグルーピングは、確固不動のものではなく一時的なものにほかならない。この点は、ある作中人物の意味素が別の作中人物に推移できるという点（語り手が持つ混成的な性質はサラジーヌへと推移する）、つまり個性（「人格」）を超えて、ある作中人物の意味素を別の作中人物の意味素としてグルーピングする可能性につながる[55]。

こうしたグルーピングの作業は、バルトの分類活動に宿る提喩的な創造性を示している。ある作中人物から別の作中人物への意味素の推移という点は、『Ｓ／Ｚ』ではごくわずかに言及されているだけであるが、セミナーのノート『バルザックの『サラジーヌ』』においては、意味素の「結合的特徴（Caractère combinatoire）」として、次のように述べられている。

---

[54] « On parle ici, parfois, de Sarrasine comme s'il existait, comme s'il avait un avenir, un inconscient, une âme ; mais ce dont on parle, c'est de sa *figure* (réseau impersonnel de symboles manié sous le nom propre de Sarrasine), non de sa *personne* (liberté morale douée de mobiles et d'un trop-plein de sens) : on développe des connotations, on ne poursuit pas des investigations ; on ne cherche pas la vérité de Sarrasine, mais la systématique d'un lieu (transitoire) du texte : on marque ce lieu (sous le nom de Sarrasine) pour qu'il entre dans les alibis de l'opératoire narratif, dans le réseau indécidable des sens, dans le pluriel des codes. », Barthes, *S/Z*, p. 197. 邦訳 110 頁。

[55] たとえば、サラジーヌは活力に満ちているにも関わらず、彼が持つ意味素として、老ザンビネッラが持つ「機械のような性質（mécanicité）」（その性質が含意する有機的な滑らかさの欠如は、不安定なサラジーヌの気質につながるだろう）、そしてこの性質から派生する「自然外［的存在］（extra-nature）」や「死」といった意味素をグルーピングすることができるだろう。また反対に、老ザンビネッラは活力に満ちていないにも関わらず、彼が持つ意味素として、サラジーヌが持つ「不安定さ」や「過剰さ」（限界を超えるほど極端であること）といった意味素をグルーピングすることもできるだろう。

ある名前に諸意味素が定着することは、ほかの諸々の箇所に応じた諸意味素のある種の反復、すなわち、ある種の諸意味素の移動を妨げない。「冷たい」［という意味素］は、庭から老人へ移動する。（固まらない）「混成の」［という意味素］は語り手からサラジーヌへ移動する。したがって、諸々の意味素のコンビナートとしての作中人物は、千変万化する［／万華鏡的な］歯止めのようなものである。

作中人物の（千変万化する［／万華鏡的な］）スペクタクルは、（名前を伴わずに）不連続な諸要素から成るコンビナート、意味素の諸々の「ブロック」から成るコンビナートを見せる。つまり、古典的な性格描写は実際のところはキュビズム的［／立体派的］なのである。その表象は、ダイアグラム的な秩序に属している。たとえば、「庭」と「老人」は同一のブロックに所属している。すなわち、老人は庭のなかに存在する。[56]

意味素が定着する万華鏡的な係留点としての作中人物、すなわち「諸々の意味素のコンビナート（combinat de sèmes）」としての作中人物は、『Ｓ／Ｚ』における「フィギュール」というカテゴリーを如実に表わしている。

「諸意味素の移動（migration des sèmes）」は、新たな意味グループの創出を導く。というのも、「冷たい（Froid）」という意味素が「庭（jardin）」から「老人（vieillard）」へと移動することで、両者を包括する新たな意味ブロックが創出されるからである。このようにして、新たな意味のテリトリー（領域）が切り開かれることになり、「ダイアグラム的な秩序（ordre *diagrammatique*）」が具現化される。この「ダイアグラム的な秩序」においては、「冷たい」という意味素のもとで、ある要素（「老人」）が別の要素（「庭」）に含まれていることを示している。つまり「冷たい」という意味素は、「類的な」役割を果たしているのである。

また、語り手からサラジーヌへと移動する意味素、すなわち固まることのない「混成の（composite）」という意味単位も同様に、諸々の意味素を包括する「類的な」機能を持つ。こうした「類」としての意味素（固まることのない「混成の」性質）は語り手とサラジーヌを横断するかたちで両者を包括するに至るのであり、「類」（の役割を果たす「冷たい」および「混成の」という意味素）が可動性を有していることがわかる。

---

[56] « La fixation des sèmes sur un nom n'empêche pas une certaine répétition des sèmes selon d'autres lieux, c'est-à-dire une certaine *migration des sèmes*. « Froid » migre du jardin au vieillard ; « composite » (qui ne prend pas) migre du narrateur à Sarrasine. Donc, le personnage, comme combinat de sèmes, est une sorte de coup d'arrêt kaléidoscopique.

Le *spectacle* (kaléidoscopique) du personnage fait voir (sans le nom) un combinat d'éléments discontinus, de « blocs » sémiques : le portrait classique est en fait cubiste. Sa représentation est d'ordre *diagrammatique*. Par exemple, « jardin » et « vieillard » appartiennent aux mêmes blocs : le vieillard est dans le jardin. », Barthes, *Sarrasine de Balzac*, p. 513.

先に確認したように、分類されているが自由であることをモットーとするバルトによる分類が「流動的な存在様態における諸々の意味素の一覧（relevé des sèmes dans leur être flottant）」、そしてまた「諸単位の行程（parcours des unités）」にほかならないことを確認した。「諸単位の行程」とは、諸々の単位を分類するプロセスであるばかりではない。流動的な諸々の意味単位が移動すること、その真価は、「種」としての意味素だけでなく、「類」としての意味素も移動するという点にある。ゆえに「類」としての意味素は、「種」としてのほかの諸々の意味素を駆け巡りながら囲い込みつつそれらを集めるのである。際限のない（完成された状態に至らない）分類活動の試みとして新たな意味領域を切り開くバルトの提喩的創造性は、「類」の可動的な在り方に支えられているのであり、こうした分類活動は硬直することのない柔軟な分析実践と呼ぶことができるだろう。

第 6 節　結論

レクチュール（読む行為）の試みかつエクリチュール（書く行為）の試みである『Ｓ／Ｚ』は、提喩的意味作用の働き、すなわち「類」と「種」の関係性に基づきながらコノテーションの産出を可能にする意味作用の働きが活かされたかたちで、「構造化」の二つの様態を体現している。

レクチュールとしての側面が前景化された分析実践によってバルトが可視化するところの、テクストそれ自体に内包された「構造化」の機能は、元々テクストに備わっている解釈学的なロジックおよび行為の連鎖として把握することができる。また、それら解釈学的なロジックと行為の連鎖の在り方を浮き彫りにするバルトの分析実践は、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づいている。そのなかでも行為の連鎖に対するバルトの分類活動は、「類」と「種」のカテゴリー間を往復するという運動性を有している。

エクリチュールとしての側面が前景化された分析実践によってバルトが可視化するところの、分析者が及ぼす作用としての「構造化」は、レクチュールの実践を元にした創造的な分類活動として把握できる。その創造性は、新たな意味領域（意味グループ）を切り開くという点に現われている。またこの創造的なバルトの分類活動は、原理的には際限のないかたちで行なわれることによって完成された状態に至ることがないとともに、グルーピングの作業の核となる「類」が可動性を有するという、硬直することのない柔軟な分析実践として存在していた。

レクチュールの試みかつエクリチュールの試みであること（すなわち両者の共存関係）が前景化されている『Ｓ／Ｚ』にアプローチするにあたって私たちは、先の諸々の章（と

りわけ『モードの体系』を論じた第 3 章）と同様に、バルトの分析の妥当性ではなくその方法論に焦点を当てるという手法を取った。この手法は、「類」と「種」の関係性を活かすバルトの思考の在り方を示すために有効なのであり、このあとの第 5 章で『恋愛のディスクール・断章』を論じる際にも、採用されるだろう。

第 5 章　提喩的意味作用の水平的運動性

第 1 節　はじめに

本章では、1970 年代後半に後期バルトの著作として結実した「恋愛のディスクール（discours amoureux）」[1]に対する彼の読解を取り上げて、そこに彼による提喩的意味作用の応用を見出すことを試みる。

「恋愛のディスクール」へのバルトのアプローチは、第二次の意味作用（「コノテーション」）の読解およびその作業を通じた分類活動という問題設定のもとではなされておらず、本章で追求しようとするバルトによる提喩的意味作用の応用は、第二次の意味作用に焦点を当てることに基づくものではない。私たちはまた、1960 年代のバルトの記号論的実践で見られたような、意味作用のプロセスの前景化というかたちで感知できる提喩的意味作用の現われを追求するのでもない。

本章で見出そうとするのは、いわばより広い意味合いでの提喩的意味作用の応用である。「恋愛のディスクール」に対するバルトの読解は、意味作用に対する彼の注視に根ざしているとともに、その方法論において、「類」と「種」の関係を水平性という観点から捉えるバルトの特異な考え方が提示されている。この点を検討することによって、「類」と「種」の水平的な関係性に基づいた意味作用の探求として、すなわち、これまでの章で取り上げてきた「類」と「種」の垂直的な関係性を前提にしながらもその関係性を水平的な次元に重ね合わせるないしは連動させる試みとして、提喩的意味作用の問題圏のなかにバルトの取り組みを位置づけることができるように思われる。

後期バルトの著作である『恋愛のディスクール・断章』（1977 年）は、断章形式で書かれたバルトのテクストのなかでもとりわけ、諸々の断章群を統合しないという手法が方法論として練り上げられたうえで書かれており、この著作では、諸々の断章群を「種」として何らかの包括的な「類」に統合しないことが理論的に推し進められている。本章で明らかにしたいのは、「恋愛のディスクール」に対する断章形式でのバルトの読解が、包括的な「意味」に統合されないというかたちでの意味作用の一様態に対する探求となっていること、

[1] 「discours amoureux」という用語は、「discours」を「言説」と表記する本論文での用語法からすれば「恋愛の言説」と訳すべきところではあるが、バルトが明確な方法論を伴ってアプローチする分析対象として、「恋愛のディスクール」と訳すことにする。

および、この意味作用を「類」と「種」の水平的な関係性に基づいた提喩的意味作用と捉えたうえで、この提喩的意味作用に備わる運動性をバルトが自身の方法論に活かしていることである。

本章で着目するのは、断章群の配列方法という観点から見た「恋愛のディスクール」にアプローチするバルトの方法論上の問いである。2007 年に刊行された『恋愛のディスクール』[2]、これは、『恋愛のディスクール・断章』の元になったバルトの高等研究院での 1974-1976 年度のセミナーのノートであり、方法論上の問題に多くのページが割かれている。このノートを参照することによって、包含関係とは異なるかたちでの意味作用のネットワークの存在、および、バルトが考えるところの、「類」と「種」の水平的な関係性に基づいた提喩的意味作用に宿る運動性を可視化したい。

第 2 節　「恋愛のディスクール」をめぐる意味作用の様態

本節では、「恋愛のディスクール」にアプローチするバルトの方法論を取り上げて、諸々の断章群を統合しないという手法が意味作用の様態への注視に根ざしていること、また、その背景を把握することに努める。

『恋愛のディスクール・断章』は、その冒頭においてバルトの方法論が簡潔にではあるが彼の考察が凝縮されたかたちで述べられたうえで、恋する者（amoureux）ないし恋愛主体（sujet amoureux）が発する言葉を起点にしてバルトが断章形式でコメントを連ねてゆくという体裁を取っている。同時にこの著作は、メタ言語（métalangage）ではなく一次言語（langage premier）の働きによって進行することを旨としており[3]、断章形式での諸々のコメ

---

[2] Roland Barthes, *Le discours amoureux. Séminaire à l'École pratique des hautes études 1974-1976*, suivi de *Fragments d'un discours amoureux* (pages inédites), avant-propos d'Éric Marty, présentation et édition de Claude Coste, Seuil, 2007. このセミナーのノートを読むうえで、次の文献は優れたガイドとなっており、そこではセミナーを聴講者に開かれたものにしつつ、可能な限り「恋愛のディスクール」に対する読解を持続させようとしたバルトの試みを通じて、教育の問題に焦点が当てられている。桑田光平『ロラン・バルト――偶発事へのまなざし』、水声社、2011 年、129-177 頁。

[3] 「すべては次のような原則から出発している。恋する者を単なる症候を示す主体に還元するのではなく、むしろ、その声のなかで現実離れしたもの、すなわち手に負えないものが存在していることを聴き取れるようにすること。そこから、諸々の先例にならわず（メタ言語ではなく）一次言語の作用にのみ依拠するという「演劇的」な方法が選択された。」« Tout est parti de ce principe : qu'il ne fallait pas réduire l'amoureux à un simple sujet symptomal, mais plutôt faire entendre ce qu'il y a dans sa voix d'inactuel, c'est-à-dire d'intraitable. De là le choix d'une méthode « dramatique », qui renonce aux exemples et repose sur la seule action d'un langage premier (pas de métalangage). », Roland Barthes, *Fragments d'un discours amoureux* (1977), in *Œuvres complètes*, t. V (1977-1980), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 29（『恋愛のディスクール・断章』、三好郁朗訳、みすず書房、1980 年、5 頁）.

ントは、「フィギュール（figure）」と呼ばれる「恋愛のディスクール」の「破片（bris）」（「恋愛のディスクール」を構成する諸々の部分）として提示されている。言い換えれば、『恋愛のディスクール・断章』においてバルトが連ねる諸々のコメントは、「フィギュール」というかたちで数多く存在する断章群としてまとめられており、この著作はそうした多数の断章群から成る。

この「フィギュール」にバルトが与えた定義を確認しておこう。バルトは、「ディスクール」の語源的意味（あちらこちらと走り回ること）を引き合いに出したうえで、次のように述べている。

> 恋する者は実際のところ絶えず自身の頭のなかを駆け巡り、新たな奔走を企て、自分自身に対して策を弄する。恋する者のディスクールは、些細な偶発的状況に任せて到来する言語活動の発作によってしか存在し得ない。
>
> ディスクールのこうした破片をフィギュールと呼ぶことができる。この語はレトリックでの意味［文彩］に解されてはならず、むしろ体操や舞踊での意味［フォーム］に解されるべきである。[…] 恋する者はいささか常軌を逸したスポーツに励んでおり、アスリートのように奮闘している。演説家のように大げさに語り、彫像のように、ある役柄において捕えられ唖然とさせられている。フィギュールとは、活動している最中の恋する者である。[4]

「フィギュール」とは、恋する者が駆使するレトリックそれ自体ではなく、（往々にしてレトリックが駆使されることを含めて）「活動している最中の（au travail）」恋する者が体現する動的な言語活動を捉えた「恋愛のディスクール」の構成要素である。「フィギュール」は文字通り「恋愛のディスクール」の「破片」として存在しているのであり、ここからうかがえるのは、「フィギュール」が「恋愛のディスクール」を構成する「場所（lieu）」ないし「トポス（topos）」としての「恋愛についての「類型表現［／トピカ］」（Topique amoureuse）」にほかならないこと[5]、および、（メタ言語に頼るのではなく）「恋愛のディスクール」その

---

[4] « L'amoureux ne cesse en effet de courir dans sa tête, d'entreprendre de nouvelles démarches et d'intriguer contre lui-même. Son discours n'existe jamais que par bouffées de langage, qui lui viennent au gré de circonstances infimes, aléatoires.

On peut appeler ces bris de discours des *figures*. Le mot ne doit pas s'entendre au sens rhétorique, mais plutôt au sens gymnastique ou chorégraphique [...] il [l'amoureux] se démène dans un sport un peu fou, il se dépense, comme l'athlète ; il phrase, comme orateur ; il est saisi, sidéré dans un rôle, comme une statue. La figure, c'est l'amoureux au travail. », Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 29. 邦訳 6 頁。

[5] Cf. Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 30. 邦訳 8 頁。

ものが「フィギュール」を標定する際の目印となっていることである[6]。

恋する者の言語活動が「些細な偶発的状況（circonstances infimes, aléatoires）」に左右されて「発作（bouffées）」という在り方をしている点に、「フィギュール」の特徴が見て取れる。「フィギュール」は、情動（affect）を語ってすぐさま停止する言語活動の有り様を示し[7]、また、偶然性に基づいておりその現われは無秩序と形容できるほどである[8]。

こうした特徴を持つ「フィギュール」は一定の方向に定まることがないのであり、この点がバルトの方法論の要点になっていることを押さえておきたい。

> 言語学の用語では、フィギュールは分布的なものであるが、統合的［／組み込み的］なものではないと言えるだろう。フィギュールは常に同一のレベルにとどまっている。すなわち恋する者は、文の束を用いて語るが、そうした文をより上位のレベルや作品へと統合する［／組み込む］ことはない。それは水平的なディスクールなのである。いかなる超越性も、救済も、小説も存在しない（しかし多くのロマネスクなもの［／小説的なもの］が存在する）。[9]

恋する者が発する言葉（「文の束（paquets de phrases）」）は、何らかの包括的な上位レベルに組み込まれることのない「水平的なディスクール（discours horizontal）」である。「恋愛のディスクール」が「水平的なディスクール」であることは、メタ言語ではなく一次言語の働きを前景化するバルトの方法論に直結しており、バルトが標定する諸々の「フィギュール」は、包括的な上位レベルに統合されることがない。諸々の「フィギュール」を通じてバルトが取り上げる「恋愛のディスクール」は、「小説（roman）」というジャンルのもとで捉え直されるのではなく、「多くのロマネスクなもの［／小説的なもの］（beaucoup de

---

[6] 「「苦悶」というフィギュールが存在するのは、主体がしばしば（語の臨床的意味など気にかけずに）「私は苦悶している！」と叫ぶからである。［…］」« S'il y a une figure « Angoisse », c'est parce que le sujet s'écrie parfois (sans se soucier du sens clinique du mot) : « Je suis angoissé ! » [...] », Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 30. 邦訳 9 頁。

[7] Cf. Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 31. 邦訳 9-10 頁。

[8] 「恋愛の生がまっとうされている間中ずっと、諸々のフィギュールは恋愛主体の頭のなかにまったく無秩序に生じる。というのも、諸々のフィギュール［の生起］はそのたびごとに（内的あるいは外的な）偶然性に依存しているからである。」« Tout le long de la vie amoureuse, les figures surgissent dans la tête du sujet amoureux sans aucun ordre, car elles dépendent chaque fois d'un hasard (intérieur ou extérieur). », Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 31. 邦訳 10-11 頁。

[9] « En termes linguistiques, on dirait que les figures sont distributionnelles, mais qu'elles ne sont pas intégratives ; elles restent toujours au même niveau : l'amoureux parle par paquets de phrases, mais il n'intègre pas ces phrases à un niveau supérieur, à une œuvre ; c'est un discours horizontal : aucune transcendance, aucun salut, aucun roman (mais beaucoup de romanesque). », Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 32. 邦訳 11 頁。

romanesque）」の現われを示しており、その様相を提示する『恋愛のディスクール・断章』は、「ロマネスクなもの」に属するテクスト実践であると言えるだろう。

「恋愛のディスクール」についての論述（コメント）からいかなる恋愛論あるいはまた恋愛物語や恋愛哲学が形成されないようにするために、諸々の「フィギュール」を統合するという手続きが取られない。『恋愛のディスクール・断章』において、諸々の「フィギュール」を連結して統合する働きを担うような構造や序列は存在せず、バルトは、諸々の「フィギュール」のあいだにいかなる論理的動機づけをも見出せないようにする[10]。

そのための具体的な手法が、アルファベットによる順序という「フィギュール」の配列方法である。『恋愛のディスクール・断章』では、アルファベットによる順序について、次のように述べられている。

> 諸々のフィギュールが整理され得ないこと、すなわち秩序立てられ、進展し、ある結末（ある何らかの証明）へと向かうことが有り得ないということ、それがこの［恋愛の］ディスクール（およびそれを表象するテクスト）の原理そのものである。［…］一つの恋愛物語（もしくはある愛の物語）がここで問題になっているのではないことを理解してもらうため、意味の誘惑を挫くため、絶対的に無意味な順序を選ぶことが必要だった。したがって諸々のフィギュールの継起（書物がその性質からして進行することを強いられている以上、［フィギュールの継起は］不可避的である）が、組になった二つの恣意性に委ねられたのである。つまり、命名とアルファベットによる恣意性である。しかしながらこうした恣意性のそれぞれが、緩和されている。一方は、意味論的な理由によって（辞書のすべての名詞のうち、ひとつのフィギュールは二つないし三つしか受け取れない）、他方は、われわれのアルファベットの順序を定める古来の慣習によってである。このようにして、論理的シークエンスを産み出したかもしれない純粋な偶然性の狡知が避けられた。［…］[11]

---

[10] 「いかなる論理もフィギュールとフィギュールを結合することがなく、その隣接性を規定することがない。［…］」« Aucune logique ne lie les figures, ne détermine leur contiguïté [...] », Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 31. 邦訳 11 頁。

[11] « C'est le principe même de ce discours (et du texte qui le représente) que des figures ne peuvent *se ranger* : s'ordonner, cheminer, concourir à une fin (à un établissement) [...] Pour faire entendre qu'il ne s'agissait pas ici d'une histoire d'amour (ou de l'histoire d'un amour), pour décourager la tentation du sens, il était nécessaire de choisir un ordre *absolument insignifiant*. On a donc soumis la suite des figures (inévitable puisque le livre est astreint, par statut, au cheminement) à deux arbitraires conjugés : celui de la nomination et celui de l'alphabet. Chacun de ces arbitraires est cependant tempéré : l'un par la raison sémantique (parmi tous les noms du dictionnaire, une figure ne peut en recevoir que deux ou trois), l'autre par la convention millénaire qui règle l'ordre de notre alphabet. On a évité ainsi les ruses du hasard pur, qui aurait bien pu produire des séquences logiques [...] », Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*,

諸々の「フィギュール」を配列する際に考慮されるのは、その恣意的な性質（動機づけがないという性質）である。「組になった二つの恣意性（deux arbitraires conjugés）」として、アルファベットによる順序のほかに命名の操作が挙げられているが（ひとつの「フィギュール」にあてがわれるべき名称は完全には限定されておらず、「フィギュール」に対する命名は厳密なものではない）、命名の操作それ自体は方法論上の選択というよりは論述の際に必要不可欠と言える与件であり、方法論上の選択として取り上げるべきなのはアルファベットによる順序だろう。「絶対に無意味な（*absolument insignifiant*）」と強調されているアルファベットによる順序は、「意味の誘惑を挫くため（pour décourager la tentation du sens）」、すなわち、諸々の「フィギュール」を何らかの包括的な「意味」に還元することを避けるために導入されていることがわかる。「フィギュール」の配列に直接関与するアルファベットによる順序は、包括的な「意味」の元になる論理展開そのものを退ける。

注意を払っておきたいのは、諸々の「フィギュール」を統合しないことが「恋愛のディスクール」を提示するための「原理（principe）」となっている点である。「恋愛のディスクール」は、単に恋愛論に還元されないというだけではなく、秩序立てられないことこそをその特徴としており、バルトはその「原理」に従っている。つまり、恋愛主体の言語活動が些細な偶発事に左右される発作的なものでしかあり得ない以上、アルファベットによる順序のもとで諸々の「フィギュール」を秩序立てないことは、「恋愛のディスクール」を提示するうえで有効な手法として存在しているのである。

またここで押さえておきたいのは、無意味であることが強調されているにもかかわらず、千年単位の期間にわたる慣習によって定められているという理由で、アルファベットによる順序の「恣意性」が緩和されていることである（命名の操作に関しても、ひとつの「フィギュール」にあてがうべき名称は完全にではないものの限定されている）。アルファベットによる順序は、無意味さを具現化しつつも文字通りのかたちで無秩序なのではなく、諸々の「フィギュール」を包括するような「意味」のみならず、「狡知（ruses）」として「純粋な偶然性（hasard pur）」がもたらしかねない「意味」をも避ける。この点に「意味」の問題が見て取れる。

この「意味」の問題は、セミナーのノート『恋愛のディスクール』において、より詳細なかたちで記述されている。バルトは、諸々の「フィギュール」が基づくべき偶然性について、アルファベットによる順序の偶然性に命名行為の偶然性を「重ね合わせる（superposer）」

---

p. 32. 邦訳 12-13 頁。

と説明したうえで、次のように述べている。

> この重ね合わせの幸福な効果はまさに、偶然性がそこに過剰に見受けられないということである。というのも、（意味のあらゆる帰納的推論の裏をかくために）偶然に左右される分類が必要ならば、同様にこの分類がいわば慣らされる［／思いどおりにされる］必要があるからである。むき出しの、純粋な偶然性について、人は問うことになるだろう。人はあくまでその偶然性に秘められた意味を見つけようとし続けるだろう。アルファベットはその貴重な役割を持っている。つまりアルファベットは、偶然性を尊重するとともにそれ［がもたらす不都合さ］を払いのけるのである。[12]

純然たる偶然に頼ること、すなわちただもっぱら無意味さを追求することは、そのこと自体を通じて何らかの包括的な「意味」（「秘められた意味（sens secret）」）を生じさせかねない。この包括的な「意味」は、諸々の「フィギュール」を統括するいわば最終的な要素であり、バルトは、そうした要素をもたらしかねない「意味」の罠ないし落とし穴を避けているのである。アルファベットによる順序は、「意味」の「狡知」を払いのけつつ、偶然性に基づいた「フィギュール」の配列を支える。アルファベットによる順序においては偶然性が緩和されているため、純然たる偶然によって包括的な「意味」がもたらされることはない。アルファベットによる順序を導入することでバルトが重要視しているのは、無意味さを追求せずに「意味」の罠（「誘惑」）を避けることにほかならない。

無意味さを追求せずに「意味」の罠を免れる諸々の「フィギュール」の働きは、「偶然性の意味作用（signification du hasard）」と呼び換えることができる[13]。それゆえ、「恋愛のディスクール」をめぐってバルトは、アルファベットによる順序を通じて（緩和された）偶然性を導入して、意味の「誘惑」を引き起こしかねない包含関係とは異なる意味作用の様態

---

[12] « L’effet heureux de cette superposition est précisément que le hasard ne s’y voit pas trop : car, s’il faut un classement aléatoire (pour déjouer toute induction de sens), il faut aussi que ce classement soit en quelque sorte apprivoisé : sur le hasard pur, brutal, on s’interrogerait ; on s’entêterait à lui trouver un sens secret. L’alphabet a ce rôle précieux : il respecte le hasard et le conjure. », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 685.

[13] 「［…］恋愛主体にとって、小事件は常に思いがけないものである（起こるべきでないときに起こる［偶然の］出会い、等々）。偶然性の意味作用を増加させる誇張のような、思いがけなさ。つまり、まるで覆い、カヴァー、網、黒き恍惚のように、主体に突然降りかかるもの。小事件は、変動の操作子、ドアノブに回す鍵のようなものである。突然の出現は、意味の操作子である。」
« [...] Pour le sujet amoureux, l’incident est toujours inopiné (une rencontre quand il ne faut pas, etc.). Soudaineté, comme une emphase qui accroît la signification du hasard : ce qui tombe brusquement sur le sujet comme un voile, une chape, un filet, un *ravissement noir*. L’incident est comme un opérateur de mutation, *une clef qu’on tourne*. La brusquerie de l’apparition est un opérateur de sens. », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 573.

を問題にしているのである。

同時に、この意味作用の様態には運動性が伴われていることに注目したい。「恋愛のディスクール」が「結論（conclusion）」を持たないという点についてバルトは、次のように述べている。

> 恋愛のディスクールは、言語活動の断続的な存在に正面から参与する。［恋愛の］ディスクールの諸フィギュールの有機的でない運動（ブラウン運動、すなわち序列や組み立てがない）。諸フィギュールは、言語活動の諸々のさいころ振りである。ところで偶然性は、結論に向かって語らないものである（結論、すなわち反 - 偶然性）。[14]

「恋愛のディスクール」は、言語活動の断続性（不連続性）を体現しており、バルトは、「ブラウン運動（mouvement brownien）」（液体や気体のなかに浮遊する微小粒子の不規則的な運動）を引き合いに出しつつ、この断続性（不連続性）を諸々の「フィギュール」の「有機的でない運動（mouvement inorganique）」として捉えている。

さらに、バルトが「フィギュール」を「恋愛のディスクール」の構成要素となる「単位（unités）」と見なしていることを考慮に入れると[15]、「恋愛のディスクール」をめぐってバルトが探求しているのは、諸々の「フィギュール」が諸単位となって発揮される意味作用の様態にほかならないことがわかる。そして、この意味作用の様態には、ある明確な運動性が備わっているのである。

このようにバルトの方法論は、意味作用の様態への注視に根ざしている。そのうえで、この方法論の背景を把握したい。

まず、アルファベットによる順序はある種の「形式的な（formel）」性質を有することが、『彼自身によるロラン・バルト』（1975 年）において、次のように述べられている。

> アルファベットの誘惑。断章をつなぎ合わせるために文字の連なり［／継起］を採

---

[14] « Le discours amoureux participe de plein fouet à l'être discontinu du langage ; mouvement inorganique de figures de discours (mouvement brownien : pas de hiérarchie, pas de construction). Les figures sont des coup de dés du langage. Or le hasard est ce qui dit non à la conclusion (conclusion : un anti-hasard). », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 542.

[15] 「恋愛のディスクールは断続的なものである。その諸単位は、些細な予期せぬ状況にまかせて、主体の頭のなかに到来しかつ再来してそこを通り過ぎる言語活動の諸々の発作である。そうした諸単位は「フィギュール」と名づけられた。［…］」« Le discours amoureux est discontinu. Les unités en sont des bouffées de langage qui viennent et reviennnent, passent dans la tête du sujet, au gré des circonstances infimes, inattendues. On a appelé ces unités des « figures » [...] », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 611.

用すること、それは言語活動の栄光を形作るものに身をまかせることである。[…] 動機づけがない（いかなる模倣とも関わりがない）順序であり、それは恣意的ではない（なぜなら誰でもそれを知っており、承認し、またそれについて合意しているからである）。[…]

彼は語を定義せず断章を名づける。彼はまさに辞書と逆のことをする。語から言表が生じる代わりに、言表から語が出てくるのである。語彙集から、私はその最も形式的な原理だけを取り上げる。つまりそうした語彙集の諸単位の順序である。[16]

『恋愛のディスクール・断章』とほぼ同時期の著作である『彼自身によるロラン・バルト』は、（厳密にではないが）アルファベット順に見出しがつけられた数々の断章群で構成されている。この引用文では、アルファベットによる順序は、慣習に基づいているとともに（ここではそのことを理由にしてアルファベットによる順序は恣意的でないと述べられているが）、「動機づけがない（immotivé）」および「いかなる模倣とも関わりがない（hors de toute imitation）」と形容されている。アルファベットによる順序は、辞書をモデルにした語彙体系の「形式的な」性質に基づいており、この「形式的な」性質が指し示しているのは、「いかなる模倣とも関わりがない」以上、アルファベット順に配列された諸々の要素にとって外在的な与件を介在させないということである。

先の第 3 章第 4 節で検討したとおり、『モードの体系』でも同様に、アルファベットによる順序が採用されていた。「書かれた衣服」の「類」に、それ固有の性質以外のアスペクトを付加しないという方法は、『恋愛のディスクール・断章』における諸々の「フィギュール」を（緩和された）恣意性のもとで配列することにつながっているのではないだろうか。この見地からすれば、アルファベットによる順序は、偶然性に基づくというそれ固有のステータスを損なうことなく「恋愛のディスクール」を提示するための手段になっているのだと言える。

次に、『恋愛のディスクール・断章』が「構造的（structural）」と形容される試みであることに注意を払いたい。『恋愛のディスクール・断章』の冒頭において、この著作がメタ言語

[16] « Tentation de l'alphabet : adopter la suite des lettres pour enchaîner des fragments, c'est s'en remettre à ce qui fait la gloire du langage [...] un ordre immotivé (hors de toute imitation), qui ne soit pas arbitraire (puisque tout le monde le connaît, le reconnaît et s'entend sur lui) [...]

Il ne définit pas un mot, il nomme un fragment ; il fait l'inverse même d'un dictionnaire : le mot sort de l'énoncé, au lieu que l'énoncé dérive du mot. Du glossaire, je ne retiens que son principe le plus formel : l'ordre de ses unités. », Roland Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes* (1975), in *Œuvres complètes*, t. IV (1972-1976), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 720（『彼自身によるロラン・バルト』、佐藤信夫訳、みすず書房、新装版 1997 年（初版 1979 年）、232 頁）.

ではなく一次言語の働きに依拠するという旨に続いて、次のように述べられている。

> それゆえ恋愛のディスクールについての記述を、恋愛のディスクールの模擬に置き換えたのであり、分析ではなく言表行為が前景化［／上演］されるようにして、恋愛のディスクールに私というその基本的人称を引き渡したのである。提示されているのは、もしそのように言いたければ、人物描写であるが、この人物描写は心理的ではなく、構造的である。それが読み取らせようとしているのは言葉の場であり、つまり、語らない他者（恋愛の対象）を前にして、恋情を込めて自身の内部で語る誰かの場なのである。[17]

バルトは、恋愛主体が発話するという行為それ自体を重視して、言表行為（énonciation）を舞台にした自身の論述が「恋愛のディスクール」の「模擬（simulation）」であると想定している。『恋愛のディスクール・断章』は、諸々の言表行為が実践される「構造的」という在り方をした「場（place）」にほかならない。この「場」が、レクチュール（読む行為）によってもたらされるという点は、『恋愛のディスクール・断章』がレクチュールの歩みそのものを前景化した『Ｓ／Ｚ』の試みの延長線上にあることを示している[18]。

また、この引用文に見られるバルトの論述の根本的な方針は、記号論的な枠組みを背景にしていると思われる。バルトは、1963 年に『レットル・ヌーヴェル』誌に掲載された短いテクストにおいて、「構造主義的活動（activité structuraliste）」の企図について次のように記述している[19]。「構造主義的活動」の企図は、分析対象が機能する際の規則を示しながらその対象を「再構築する（reconstituer）」ことにあり、そのように再構築された対象が「シ

---

[17] « On a donc substitué à la description du discours amoureux sa simulation, et l'on a rendu à ce discours sa personne fondamentale, qui est le *je*, de façon à mattre en scène une énonciation, non une analyse. C'est un portrait, si l'on veut, qui est proposé ; mais ce portrait n'est pas psychologique ; il est structural : il donne à lire une place de parole : la place de quelqu'un qui parle en lui-même, amoureusement, face à l'autre (l'objet aimé), qui ne parle pas. », Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 29. 邦訳 5 頁。

[18] 「明らかなことであるがフィギュールは『Ｓ／Ｚ』でのレクシである。つまり、言語活動の流れに対する切り分けの結果である。しかし、『Ｓ／Ｚ』においては、アクセントはコードに置かれておりレクシにではない。［…］恋愛のディスクールに関しては、アクセントはフィギュールに置かれておりコードにではない。」« Évident que les figures sont les lexies de *S / Z* : le résultat d'un découpage du flux langagier. Mais, dans *S / Z*, l'accent est mis sur les codes, non sur les lexies [...] Discours amoureux : l'accent est mis sur les figures, non sur les codes. », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 545.

[19] Cf. Roland Barthes, « L'activité structuraliste » (1963) [in *Essais critiques* (1964)], in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, pp. 467-468（「構造主義的活動」、『ロラン・バルト著作集 5　批評をめぐる試み　1964』、吉村和明訳、みすず書房、2005 年、319-320 頁）.

ミュラークル［／模像］（simulacre）」ないし「構造（structure）」である。この作業は「ミメーシス［／模倣］（mimesis）」と呼ぶことができるが、それは「実質（substance）」のアナロジーではなく「機能（fonction）」のアナロジー（「相同性（homologie）」）に基づくものである。意味作用の諸々の「体系（systèmes）」の有り様を「再構築する」という「記号学の原理」で述べられている記号学の目的は、この「構造主義的活動」の企図に従っている[20]。

『恋愛のディスクール・断章』では、「恋愛のディスクール」が「構造」ないし「シミュラークル」として再構築されるのではない。しかし記号論的な枠組みは、分析対象である一次言語の働きを注視するという点については、『恋愛のディスクール・断章』に引き継がれていると言える。実際、セミナーのノート『恋愛のディスクール』では、バルトが記号学の役割をその時期での彼なりの仕方で「恋愛のディスクール」へのアプローチ方法につなげていることが見て取れるのであり[21]、そこでは記号学が、「言表行為の自己批評［／自己批判］（autocritique de l'énonciation）」というかたちで対象言語（langage-objet）とメタ言語の区別を取り払うという問題設定のもとに位置づけられている。

このように、「恋愛のディスクール」に対するバルトの方法論は、『Ｓ／Ｚ』でのレクチュールの実践、また『モードの体系』や「記号学の原理」に代表される記号論的な枠組みを背景にしたかたちで、諸々の「フィギュール」がその単位となって発揮される意味作用の様態を前景化することに根ざしているのである。

第 3 節　「差異」として反復される「フィギュール」のネットワーク

本節では、セミナーのノート『恋愛のディスクール』を参照して、「恋愛のディスクール」をめぐってバルトが探求している意味作用の様態が、諸々の「フィギュール」を「ネットワーク」というかたちで集める彼のグルーピングの実践を通じて感知できることを示す。そのうえで、諸々の「フィギュール」が「差異」を伴ったかたちで反復されることによって、そうした「ネットワーク」が具現化することを示したい。

---

[20] 「記号学の研究の目的は、観察対象のシミュラークル［／模像］を作り上げるというあらゆる構造主義的活動の企図そのものに従って、言語体系以外の、意味作用の諸々の体系が持つ機能の仕方を再構築することである。」« Le but de la recherche sémiologique est de reconstituer le fonctionnement des systèmes de signification autres que la langue selon le projet même de toute activité structuraliste, qui est de construire un simulacre des objets observés. », « Eléments de sémiologie », Roland Barthes, « Éléments de sémiologie » (1965 [1964]), in *Œuvres complètes*, t. II (1962-1967), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002, p. 699（「記号学の原理」、沢村昂一訳、『零度のエクリチュール　付・記号学の原理』、渡辺淳・沢村昂一訳、みすず書房、1971 年、202 頁）.

[21] Cf. Barthes, *Le discours amoureux*, p. 548.

「恋愛のディスクール」にアプローチするバルトの方法論においては、アルファベット順による配列を通じて諸々の「フィギュール」を統合しないという手法が取られる。しかし、その恣意性ないし偶然性が緩和されているアルファベット順による「フィギュール」の配列が指し示しているのは、分類活動に対する全面的な否認ではなく、「分類の中断（suspension de classement）」（予期し得ないというかたちで諸々の「フィギュール」が再び現われることを旨とする「分類の中断」）[22]、言い換えれば、中断された状態にある分類にほかならない。それゆえ、バルトが提示する「フィギュール」の配列には、「体系」ないし「構造」として構築されないものの、ある一定のグルーピングの実践が存在していると考えられる。

先に見たように「フィギュール」は、「恋愛のディスクール」を構成する物理的な部分（「破片」）である。しかし同時にそれは、概念的な存在でもあるということに注意を払いたい。「分類の中断」について述べられている箇所の直後においてバルトは、「反復、再認識（Récurrence, reconnaissance）」と名づけられた見出しのもとで、「フィギュール」が再び現われるという点が「フィギュール」（が存在するということ）の根拠であること、および「フィギュール」が概念的なステータスを有していることを明確化している。

> どのようにして「フィギュール」を基礎づけるのか？二つの特徴によってである。すなわち「フィギュール」は、反復し、再認識される。
>
> 恋愛のディスクールにおいて、「フィギュール」は、再来する（予告することなしに？）。「反響」でありながらも（想像的な出来事としての何か）「フィギュール」は、出来事的なものの反対である（心を奪われることを除いて）。自殺の観念／自殺における非常にはっきりとした差異。[23]

「恋愛のディスクール」のなかで「フィギュール」は、「再来する（revenir）」ことによっ

---

[22] 「われわれはそれら［諸々の「フィギュール」］を、分類せず構造に仕立てず、関連づけることもしなかったのであり、この分類の中断はわれわれにとって原則的な価値を有した。われわれは恋愛のディスクールの歩みそのもの（音楽）を模倣することを望んだ。つまり、予見し得ない枠組みのなかで再来するという、反復する諸々のフィギュールで穿たれた織物。」« Nous ne les [Figures] avons pas classées, construites, ni liées, et cette suspension de classement a eu pour nous valeur de principe. Nous avons voulu *imiter* l'allure même (la *musique*) du discours amoureux : tissu troué de figures récurrentes, revenant dans un cadre imprévisible. » Barthes, *Le discours amoureux*, p. 289.

[23] « Comment la Figure est-elle fondée ? Par deux traits : elle est *récurrente*, elle est *reconnue*.

Dans le discours amoureux, la Figure *revient* (sans prévenir ?). Étant Retentissement (quelque chose comme *événement imaginaire*), elle est le contraire de l'événementiel (sauf le rapt). Différence bien nette dans *idée de suiside / suicide*. », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 289.

て、あるいは「反響（Retentissement）」という様相のもとで、その存在が明確なかたちで認められるようになる。反復する要素（意味単位）である「フィギュール」は、恋愛の端緒となる出来事を除いて出来事そのものではなく、たとえば「自殺（suicide）」という出来事それ自体とは異なる「自殺の観念（idée de suiside）」であるような[24]、概念的な存在である。こうした「フィギュール」の概念的なステータスは、グルーピングの実践を通じてもたらされる諸々の「フィギュール」が有するつながりを捉えることの重要性を示唆しているように思われる。

実際バルトは、諸々の「フィギュール」が有するつながりを「ネットワーク（réseau）」という用語を用いて記述している。

> 恋愛のディスクールの諸フィギュールは、それらフィギュールなりの仕方で、諸々の観念性なのであり、あるネットワークの諸々の地点となっている（たとえそのネットワークが構築されず偶然に左右されるとしても）。諸々のフィギュールはしたがって、その見かけにも関わらず、レトリックのフィギュールよりも数学的なフィギュールに近いのである。［…］恋する者にとって、恋する者のなかでは、日常的な言語活動は存在しない。つまり恋する者の言語活動は、他者の言語活動を伴わず、常にそれのみで走っている。恋する者はフィギュールからフィギュールに飛ぶのである。[25]

諸々の「フィギュール」は、恋愛主体の動的な言語活動に胚胎する「観念性（idéalités）」を体現するのであり、決して完成されない「ネットワーク」の中継点、すなわち生成状態のままにとどまる「ネットワーク」の構成要素として存在している。諸々の「フィギュール」は、決して統合されず一定の方向に定まらないものの、生成状態のままにとどまるネットワークというかたちで連帯しているのである。

引用文での記述を手がかりにすると、恋愛主体が、ある「フィギュール」から別の「フィギュール」に文字通り「飛ぶ（sauter）」ことによって、諸々の「フィギュール」間のつながりが具現化されるに至るのだと考えられる。諸々の「フィギュール」間のつながりは、

---

[24] バルトは「自殺の観念」を、それが何でもないようなことによって引き起こされることによって頻繁に生じることから、「浮ついた観念（idée *futile*）」と形容している。Cf. Barthes, *Le discours amoureux*, p. 179.

[25] « Les figures du discours amoureux sont, à leur manière, des idéalités, les points d'un réseau (même si ce réseau est inconstruit, aléatoire) ; elles sont donc, malgré les apparences, plus proches de la figure mathématique que de la figure rhétorique. [...] pour lui [l'amoureux], en lui, il n'y a pas de langage courant : son langage court toujours seul, sans les autres : il saute de figure en figure. », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 677.

言語活動の連なりに基づいているが、ある「フィギュール」から別の「フィギュール」への移動は、いわば飛躍ないし跳躍と呼べるものであり、離れた距離のあいだでも生じ得るため、必ずしも換喩的な原理（隣接性）に従っているのではない。むしろこの移動は、端的に、ある「フィギュール」と別の「フィギュール」のつながりそれ自体を示していると考えられる。

実際、諸々の「フィギュール」間のつながりは、（統合されることのない）結合関係として記述されている。

> いくつものフィギュール間の唯一の連帯関係は連辞の次元に属している。強烈な「出来事」（思いがけない出会いなど）がフィギュールの束や房をもたらす。つまり［諸フィギュールの］つかの間の組み合わせ。[26]

連辞の次元（ordre syntagmatique）のなかで生じる諸々のフィギュール間のつながり（「連帯関係（solidarité）」）は、確固としたステータスを持ち得ない「つかの間の組み合わせ（combinatoire éphémère）」、すなわち仮のものでしかない一時的な関係性、あるいはまた不安定な関係性である。

この「つかの間の組み合わせ」が諸々の「フィギュール」の「束（paquet）」ないし「房（grappe）」と形容されていることに注意を払いたい。恋愛主体が諸々の「フィギュール」間を移動することによって、言い換えれば恋愛主体が行使する言語活動の連なりに沿って、諸々の「フィギュール」は集められるのであり、たとえその名称が存在しなくとも一定のグループを形成する。この点において、分類という行為が中断されている状態として、バルトによるグルーピングの実践が証し立てられていると言える。それゆえバルトは、「恋愛のディスクール」における諸々の「フィギュール」に対して、表面上それらを何らかの目録のもとに分類してはいないが、中断されているというかたちで潜在的には分類活動に類する作業を行なっているのである。

今しがた検討したようにバルトによるグルーピングの実践は、言語活動の連なり（連辞の次元）を基盤にしているとともに、バルトがその様相を提示するところの、恋愛主体による諸々の「フィギュール」間の移動を通じて感知できる。実際のところこの点は、バルトが考察する「意味」の問題に直結している。

---

[26] « La seule solidarité entre plusieurs figures est d'ordre syntagmatique : un « incident » fort (rencontre inopinée, etc.) peut amener un paquet, une grappe de figures : combinatoire éphémère. », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 370.

バルトは、空間的な比喩を用いながら、恋愛主体による言語活動、その連なりを「意味の連鎖［／シニフィアンの連鎖］（chaîne signifiante）」と捉えて、「意味形成性（signifiance）」に関連づける。

> 「フィギュール」とともに、われわれはどこにいるのか、記号学的な場？シニフィアンのなか？シニフィエのなか？われわれはもちろんシニフィアンのなかにいるが、記号学的ではないシニフィアンである。われわれは、「象徴的なもの」を下側にしたかたちで伴う「想像的なもの」の「表面」にただよう意味の連鎖［／シニフィアンの連鎖］のなかにいる。われわれは意味形成性のなかにいる。
>
> ［…］意味形成性、それは、差異、襞、起伏、凹凸、である。「フィギュール」とはそういったものである。すなわち、繊細で、個別的で、軽薄で、子供じみた特徴のことであり、「想像的なもの」の発作である。［…］[27]

「意味の連鎖」の基盤となるのは、「想像的なもの（l'Imaginaire）」に従って話す恋愛主体の言語活動（「象徴的なもの（le Symbolique）」の秩序）、すなわち「想像的なもの」によって引き受けられた「象徴的なもの」の次元にあり、この点は「恋愛のディスクール」にアプローチするバルトの方法論の理論的前提に属すると言える[28]。

同時に、ラカン的な「シニフィアンの連鎖」が問題になっているように思われるこの引用文から確認したいのは、バルトがラカンの理論に依拠している点ではなく、バルトがラカンの理論を彼なりの仕方で応用している点、すなわち、「意味の連鎖」（「シニフィアンの連鎖」）とともにある「意味形成性」が、換喩的な原理（隣接性）に収まらない「襞（pli）」や「起伏（relief）」、あるいはまた「凹凸（aspérité）」といった奥行きを喚起する用語とともに、「差異（différence）」として記述されていることである。そこから、「恋愛のディスクール」にアプローチするバルトが想定している「意味形成性」とは、換喩的な原理にとどまらない「意味の連鎖」における「差異」にほかならないということを導き出すことができ

---

[27] « Avec les Figures, où sommes-nous, du champ sémiologique ? Dans le signifiant ? Dans le signifié ? Nous sommes dans le signifiant, bien sûr, mais un signifiant qui n'est pas sémiologique. Nous sommes dans *la chaîne signifiante*, flottant à la « surface » de l'Imaginaire, avec le Symbolique par en dessous. Nous sommes dans la *signifiance*.

[...] La significance, c'est la différence, le *pli*, le relief, l'*aspérité*. C'est ce qu'est la Figure : un trait fin, singulier, futile, puéril, une *bouffée* d'Imaginaire [...] », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 291.

[28] 「出発点となる最良の仮説として、「恋愛」とは「想像的なもの」によって「象徴的なもの」を引き受けることである。恋愛のディスクールとは「想像的なもの」のディスクールである。」« La meilleure hypothèse de départ est que l'Amour est la prise en charge du Symbolique par l'Imaginaire ; le discours amoureux est un discours de l'Imaginaire. », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 59.

る。そしてまた、この「差異」は、「フィギュール」にとって根本的な与件（いわばその本質）として存在しており、バルトは、包括的な「意味」に統合されない「フィギュール」を通じて、ある種の奥行きを伴った「差異」としての「意味形成性」の様相、すなわちそのようなかたちでの意味作用の一様態を提示しているのである。

奥行きを伴ったこうした「差異」は、「ニュアンスを与えること（nuancer）」として把握することができる。

> フィギュールにおいて関与的なもの、それは、フィギュールのなかにあって、（［フィギュールの］聞き手に対して）異なる在り方をすることを余儀なくさせるものである。すなわち、対立することではなく、ニュアンスを与えることや微妙な色合いをつけること（タピスリーのように）、つまり調和することと同時に差異化すること［が問題になるのである］。[29]

問題となるのは、「対立すること（s'opposer）」ではない「差異」の在り方である。のちにバルトが「中性（的なもの）（le neutre）」の問題として「ニュアンス（nuance）」を重要視していたことを考慮に入れると[30]、バルトは「ニュアンス」としての「差異」という意味作用の様態を検討に付すために、断章形式を採用したと考えられる。

他方でバルトは、恋愛主体による諸々の「フィギュール」間の移動について、次のように述べている。

> われわれのねらい？あるひとつの一般性や抽象化（恋愛のディスクール）を記述することではなく、言語活動が流れる空間や場、また言語活動の（活きた、すなわち熱烈な）道筋や生成、言表行為、すなわち欲望や「想像的なもの」に従って話す主体の位

---

[29] « Ce qui est pertinent dans la figure, c'est ce qui, en elle, oblige (l'écouteur) à *différer* : non pas à s'opposer, mais à *nuancer*, à *nuer* (tapisserie), c'est-à-dire en même temps *harmoniser et différencier*. », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 379.

[30] 「私が講義の準備のなかで探し求めているもの、それは生きることの手ほどき、人生の行動原理である（倫理的企て）。つまり、私はニュアンスによって生きることを望んでいる［…］ニュアンスによって生きるように努めること、それは文学が私に教えてくれたことだ［…］→ 文学の記号学講座 = 1）文学：ニュアンスの処方集 + 2）記号学：諸々のニュアンスを聞くこと、あるいは見ること。」« Ce que je cherche, dans la préparation du cours, c'est une introduction au vivre, un guide de vie (projet éthique) : je veux vivre selon la nuance. [...] essayer de vivre selon les nuances que m'apprend la littérature [...] → chaire de sémiologie littéraire = 1) Littérature : codex de nuances + 2) Sémiologie : écoute ou vision des nuances. », Roland Barthes, *Le Neutre. Notes de cours au Collège de France 1977-1978*, texte établi, annoté et présenté par Thomas Clerc, Seuil / IMEC, 2002, p. 37（『〈中性〉について――コレージュ・ド・フランス講義ノート 1977-1978 年度（ロラン・バルト講義集成 II）』、塚本昌則訳、筑摩書房、2006 年、26 頁）.

置が揺れ動く位相を記述することである。個人的なものでも一般的なものでもなく、流動するもの、可動するもの、繊細なもの、つまり複数的なもの（差異の永遠回帰）、要するにある量の「テクスト」（あるひとつの作品ではなく）。[31]

この引用文では、精神分析の理論のみならずドゥルーズによるニーチェ論への参照（「差異の永遠回帰（éternel retour de la différence）」）が見られる。「差異の永遠回帰」を追求しようとするこの言明は、「差異」の反復が有する可動性や複数性を示している。諸々の「フィギュール」は相互に関連し合うものであり、この点において諸々の「フィギュール」は反復しているが（たとえば「イメージ（Image）」と「反響（Retentissement）」のように、近似的な性質を持つ「フィギュール」が存在する）、それは、「ニュアンス」が異なるかたちでの反復を指し示している。

同時にバルトは、「ダイアグラム（[d]iagramme）」ないし「モアレ（moire）」として、「差異の永遠回帰」の現われを彼なりの仕方で捉えている。

［…］アルファベットによる順序、動機づけがなく（文字の途方もない連なり）、しかし恣意的でない（誰もがそれを識別しそれについて合意している）。したがって、諸々のフィギュールのアルファベットによる順序（各フィギュールはそれをアルファベット順に扱いやすくするひとつの語に包摂される、それがアルファベットによる順序の唯一の機能である）は、ダイアグラム的に、恋愛主体に到来するディスクールの発作で織り成されるモアレを再現する。われわれのメタ言説と、ひとたび心を奪われた主体を捕捉するもうひとつ別の論理（精神病に類似した論理）、すなわち回帰［／再来］の論理（物語の論理でも進展の論理でもない）とのあいだに存在するダイアグラム。[32]

アルファベットによる順序は、自身の「想像的なもの」に従って語る恋愛主体が織り成す「ディスクール」の「モアレ」（波紋状のきらめく模様）を提示するためにこそ採用され

[31] « Notre visée ? Non pas décrire une généralité, une abstraction (le discours amoureux), mais un espace, un champ de circulation du langage, un tracé, une élaboration de langage (vivante, voire brûlante), une énonciation, c'est-à-dire une topologie mouvante des places du sujet qui parle selon le désir et l'Imaginaire. Ni l'individuel, ni le général, mais le circulant, le mobile, le subtil : le pluriel (l'éternel retour de la différence) ; bref *du Texte* (et non *une* œuvre). », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 61.

[32] « [...] l'*ordre alphabetique*, immotivé (suite folle de lettres), mais non arbitraire (tout le monde le reconnaît et s'entend sur lui). Donc l'ordre alphabétique des figures (chacune étant subsumée sous un mot qui la rend alphabétiquement maniable : c'est sa seule fonction) reproduit diagrammatiquement la moire des *bouffées* de discours qui viennnent au sujet amoureux. Diagramme entre notre métadiscours et l'*autre logique* (para-psychotique) qui saisit le sujet une fois qu'il a été *ravi* : logique du retour (et non de la diégèse, de l'évolution). », Barthes, *Le discours amoureux*, pp. 65-66.

ている。この「ディスクール」の「モアレ」は、恋愛主体の言語活動において「重ね合わされるもの（ce qui est surimprimé）」[33]として「フィギュール」を配列することに基づいている、要するに諸々の「フィギュール」が重ね合わされているという様相を呈する。また、（緩和された）偶然性に基づく「フィギュール」の配列方法は、発作的という「恋愛のディスクール」の在り方を可能な限り尊重することになる。この場合、アルファベットによる順序は、「恋愛のディスクール」を単に項目ごとに列挙することに寄与するのではなく、「ダイアグラム」の役割を果たす。先の第 4 章で見たように、この「ダイアグラム」という用語が指しているのは、ある要素が別の要素に含まれていることである。

「モアレ」や「ダイアグラム」、あるいはまた「ニュアンス」という「意味」の奥行きは、諸々の「フィギュール」が個別性を失うことなく連帯すること、言い換えれば、「差異」を伴ったかたちで反復することによって具現化されるのだと言える。そして、こうした「意味」の奥行きを前景化することは、「中性」の探求の一環として位置づけることができる。バルトは、「ニュアンス」（としての「差異」）を「中性」の現われの一例と見なしているからである[34]。

このように、「中性」の問題につながる「恋愛のディスクール」のレクチュールにおいてバルトが探求している意味作用の様態とは、諸々の「フィギュール」が「ニュアンス」としての「差異」を伴ったかたちで反復される「ネットワーク」にほかならないのである。

第 4 節　「類」と「種」の並置を通じた水平的運動性

これまで検討してきたように、「恋愛のディスクール」のレクチュールに際してバルトが問題にしているのは、包括的な「意味」に還元されないという意味作用の様態であるとともに、この意味作用の様態は、「差異」（「ニュアンス」）を伴った反復というかたちで具現化される諸々の「フィギュール」間のネットワークとして捉えることができる。また「フ

---

[33] Barthes, *Le discours amoureux*, p. 295.

[34] 「[…] 単色画（「中性」）は、対立という概念を、淡い差異、始まり、差異の努力、言い換えればニュアンスという概念に置き換える。ニュアンスは完全な組織化の原則となるのであり […]、この原則はいわば、範列を越えて跳躍する。完全にかつ網羅的であるようなかたちでニュアンスを与えられたこの空間、それはモアレである。[…]「中性」、それはモアレである。主体のまなざしの傾きに応じて、繊細に様相を、おそらく意味を変えるもの。」« [...] le camaïeu (le Neutre) substitue à la notion d'opposition celle de différence légère, de début, d'effort de différence, autrement dit de nuance : la nuance devient un principe d'organisation totale [...] qui en quelque sorte saute par-dessus le paradigme : cet espace totalement et comme exhaustivement nuancé, c'est la moire [...] le Neutre, c'est la moire : ce qui change finement d'aspect, peut-être de sens, selon l'inclinaison du regard du sujet. », Barthes, *Le Neutre*. p. 83. 邦訳 92 頁。

ィギュール」とは、「恋愛のディスクール」を構成する物理的な部分（「破片」）でありかつ概念的な存在であるという両義的な性質を有していた。

本節では、引き続きセミナーのノート『恋愛のディスクール』を参照して、「フィギュール」間のネットワーク（「恋愛のディスクール」の意味作用）を提喩的意味作用の一様態として提示する。その理由は、諸々の「フィギュール」間のネットワークの形成、すなわち諸々の「フィギュール」に対するバルトのグルーピングの実践が、「類」と「種」の関係性に貫かれているからである。ここでは、「類」と「種」が並置されることによって生じるところの、垂直的ではなく水平的であるという「類」と「種」の特異な関係性を取り上げる。そのうえで、「類」と「種」の水平的な関係性に基づいた提喩的意味作用に備わる運動性がバルトの方法論に活かされていることを明らかにしたい。

先に取り上げた「つかの間の組み合わせ」という諸々の「フィギュール」間の関係性が記述されているのは、「フィギュール」をどのようにグルーピングするのかという点が問題になっている箇所である[35]。そこでは、諸々の「フィギュール」を何らかの「意味」に包括しないというバルトの方法論が幾分詳細なかたちで述べられている。諸々の「フィギュール」を統合しようとすること、すなわち「ジャンル（ジャンル的なもの）の魅惑（séduction du *genre* (du générique)）」は、見かけのうえで親近性のある諸々の要素を単一の名称のもとにグルーピングしようとする慣習に依拠している。学校教育や修辞学的な伝統に支えられてきた文化的な慣習からすれば、「種」としての諸々の「フィギュール」を「類」としての包括的な「意味」に統合することは自明な行為であるように見える。この慣習に対してバルトは、批判的な姿勢を見せている。たとえば、（恋愛対象の）「善良さ（Bonté）」と「完璧さ（Perfection）」（この二つの「フィギュール」は『恋愛のディスクール・断章』では収録されていない）、およびその反対に位置する「変質（Altération）」（恋愛対象に対するイメージが否定的なものへと変わること）というように、親近性（類似性）に従って諸々の「フィギュール」を整理しようとする企図は、それら「フィギュール」が持つ「ニュアンス」としての複数性を台無しにすることになる。

こうした「魅惑」に対してバルトは、「恋愛のディスクール」に対する自身の作業において、「類」と「種」の関係性がいかなるものであるのかという点について、次のように述べている。

恋する者の多様な「不幸な出来事」（苦悩、破局、底なしの淵、衰弱）を「不幸」とい

[35] Cf. Barthes, *Le discours amoureux*, pp. 369-371.

う唯一の類に統合しようとする自然な欲求。すでに述べたとおりこの欲求は文化的で修辞学的であって、この欲求には逆らわなければならず、いかなる類もそれそのものとして認めてはならない。われわれにとって、構造的に言えば、類は種と同一の面にあり、類は種と同格の辞項である。不幸／苦悩／破局、等々。類は種の上位にあるのではなく、［種に］並置されている。類は種と同列に置かれている ＝ 論理的 - イデオロギー的な道具であるブレース［中括弧］の解体。［フィギュールの配列にとって］問題点のある［論理的とイデオロギー的という］この二つのケースにおいては常に、総合する意味ではなく諸フィギュールの区分けとしての意味に、単純化する意味ではなく増加する意味に向かわねばならない。[36]

この引用文では、「類」の特異な在り方を見て取ることができる。「苦悩（angoisse）」、「破局（catastrophe）」、「底なしの淵（abîme）」、「衰弱（délabrement）」といった出来事を「不幸（Malheureux）」に統合しないために、バルトが想定した「類」の在り方は、「種」と同列に位置する、すなわち「種」と完全に同格であるというものである。「類」と「種」は、同一のレベルで並ぶという関係性を持つことになる。「類」と「種」のつながりが、水平的な関係性として提示されているのである。「類」を「種」と同格のものと見なすことによって、「意味」を、諸々の「フィギュール」の「区分け（partition）」というかたちに委ねて、増加させるないしは複数化させることが目指されている。

引用文で問題になっている水平的な関係性があくまで「類」と「種」という用語を用いて記述されていることからうかがえるのは、「類」と「種」の両者が元々有する垂直的な関係性が水平的な関係性にそっくりそのまま置き換えられること、言い換えれば諸々の「種」のグルーピングに資するという「類」に備わる機能が完全に消え去ることではなく、「類」と「種」のあいだの垂直的な関係性を言語活動の連なり（言連鎖）に連動させることである。この見地からすれば、「類」と「種」の水平的な関係性のもとでの諸々の「フィギュール」のグループ（ネットワーク）は、それらの「フィギュール」が単一の包括的な「意味」に還元されない意味作用として、言連鎖の流れそれ自体に焦点を当てたかたちでの「類」と「種」の関係性に基づいた提喩的意味作用の一様態と捉えることができる。

---

[36] « Envie naturelle de regrouper les différents « malheurs » de l'amoureux (angoisse, catastrophe, abîme, délabrement) sous un seul genre : « Malheureux ». Il faut résister à cette envie, je l'ai dit, culturelle, rhétorique, n'admettre aucun *genre* comme tel. Pour nous, structuralement parlant, le genre est sur même plan que l'espèce, le genre est un terme au même titre que l'espèce. Nous aurons : *Malheureux* / *Angoisse* / *Catastrophe*, etc. Le genre n'est pas *au-dessus* de l'espèce, il est *à côté*. Le genre se met sur la même ligne que l'espèce = destruction de l'*accolade*, objet logico-idéologique. Dans les deux cas douteux, il faut toujours aller dans le sens non de la synthèse mais de la partition des figures, non de la simplification mais de la multiplication. », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 371.

引用文で記述されている「意味」の複数化は、諸々の「種」をグループ（ネットワーク）として把握しつつ、単一の「類」に還元することなく諸々の「種」の複数性を前景化することであると理解できる。

「類」と「種」の並置は、「苦悩」、「破局」、「底なしの淵」、「衰弱」といった「恋愛のディスクール」における諸々の意味作用の「単位」としての「フィギュール」を包括的な要素に統合されないネットワークとして提示することに資する。このようにして「類」と「種」の並置は、諸々の「フィギュール」が個別性を失うことなく連帯すること、すなわち「差異」を伴った反復として感知できる諸々の「フィギュール」のネットワークを支える。引用文のなかの諸々の「フィギュール」は、『恋愛のディスクール・断章』においてアルファベット順に、「底なしの淵（abîme）」、「苦悩（angoisse）」、「破局（catastrophe）」と配列されており、それらの「フィギュール」は、不幸な出来事として、「差異」を伴って反復されていると言える（「不幸」および「衰弱」という二つの「フィギュール」は『恋愛のディスクール・断章』には収録されていないものの、原理的には同様だろう）。

同時に、この「類」と「種」のあいだの水平的な関係性は、両者の垂直的なつながりを保持している。諸々の「種」は、ネットワークとしての何らかのグループを形成すると考えられるからである。表面上、諸々の「種」（となる「フィギュール」）を「類」（となる「フィギュール」）に統合することは避けられているが、実際のところ、特定の「フィギュール」（「不幸」）を求心力にしてほかの諸々の「フィギュール」（「苦悩」、「破局」、「底なしの淵」、「衰弱」）が集められる。別の言い方をすれば、「類」そのものは顕在化していないが、グルーピングに資する「類的な」機能は顕在化している。「不幸」という「フィギュール」は、「類的な」機能を失っていないのである。「類」と「種」の並置をめぐって問題になっているのは、「類」そのものを顕在化させることではなく「類的な」機能を顕在化させることであり、結果としての分類活動ではなく（『Ｓ／Ｚ』でのテクスト実践の延長線上にあるような）グルーピングの作業それ自体が前景化されるようなプロセスとしての分類活動なのだと言える。こうした「類」と「種」の並置は、「種」よりも概念的に上位に位置する「類」のステータスを上下関係ないし階層関係のもとで捉えないということを含意しており、つまりバルトは、「類」と「種」のカテゴリー間の概念的な関係性を活かして諸々の「フィギュール」のネットワークを可視化すると同時に、この関係性を上下関係（階層関係）から切り離しているのである。

「類」という存在は概念的に「種」よりも上位に位置しているが、この自明な理には「類」と「種」のあいだの概念的なレベルの差異を感知するという人間の思考ないし認識の働きが宿っている。上下関係から切り離された「類的な」機能を持つ「フィギュール」（「不幸」）

から感知できるのは、ほかの諸々の「フィギュール」とともに並置されていながらも概念的なレベルの差異の消滅ではなく、諸々の「フィギュール」に対するグルーピングの作業に資する概念的なレベルの差異である。仮に「類」それ自体が完全に存在しないのであれば、概念的なレベル間の差異は消滅するが、その場合にはもはや「フィギュール」は概念的な存在（カテゴリー）ではなくなり、ただ「恋愛のディスクール」の断片が目に映るだけだろう。概念的な存在である諸々の「種」としての「フィギュール」が有する複数性（ニュアンスとしての差異）に対する前景化は、暗黙のうちに想定されている「類」との概念的なレベルの差異に支えられているのである。それゆえ、「類」は顕在化していないが潜在的には存在していることになる（潜在的に「類」が存在することの可能性まで完全に消去することはおそらく不可能だろう）。

ここでは、「類」という観念的かつ構造的な存在が持ち得る動的な性質、すなわち、「類」は「種」が配されるどのような位置をも占め得るという「類」の可動性が念頭に置かれているように思われる。先の第 4 章で検討したようにバルトは、ほかの諸々の意味素を遍歴しつつ包括する「類的な」機能を持つ特定の意味素（「分類素」）の働きを前景化していた。実際バルトは、「不幸」という「フィギュール」を、不幸と呼べるあらゆる出来事に適用される「ジョーカー（joker）」と見なすとともに[37]、「私はあなたを愛しています（Je t'aime）」という「フィギュール」を、「恋愛のディスクール」において時を問わず生じる「ジョーカー」と定義している[38]。

「類的な」機能を持つ「フィギュール」、そのなかでも最も運動性に富み原理的にはあらゆる「フィギュール」につながることができる「私はあなたを愛しています」という「フィギュール」は、ほかの諸々の「フィギュール」と共通に持つ性質、すなわち、それが「恋愛のディスクール」の物質的な「破片」でありなおかつ概念的な存在であるという両義的な性質を如実に表わしている。

この点を例証するために、『恋愛のディスクール・断章』のなかでこの「フィギュール」が記述されている箇所を参照しよう。まず見出し語のようなものとして「恋愛のディスクール」それ自体を元にした標語（「愛しています（Je t'aime）」）が配置されており、次にこ

---

37 「恋愛の不満な状態のあらゆるタイプに当てはまる明確でない辞項、空虚なフィギュール、不吉なジョーカー。[…]」« *Terme indistinct, figure vide, joker maléfique, qui vaut pour tous les types du mal-être amoureux* [...] », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 657.

38 「「私はあなたを愛しています」については、それは［恋愛の］生の間中いかなる瞬間においても口に出され得る。その唯一の目印は誇張であるということ、つまりそれはジョーカーであり、あらゆるフィギュールのうちで最も可動的なものである。」« Quant à « Je t'aime », il peut se dire toute la vie à n'importe quel moment ; sa seule marque est l'emphase : c'est un *joker*, la plus mobile de toutes les figues. », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 685.

の「フィギュール」の名称（「私は・あなたを・愛しています（JE-T-AIME）」、『恋愛のディスクール・断章』ではそのように表記されている）および当該の「フィギュール」についての説明文[39]が配置され、そのあとに諸々の断章群（バルトの論述）が配置されている。また出典の表示が、各ページの下段（テクストの欄外）で省略的な仕方で行なわれるとともに、各ページの左側（テクストの欄外）に著作の名称や著者の名称のみの表記というかたちで行なわれている。注意を払いたいのは、それらの部分が紙面のうえで並置されているように見えることである。諸々の断章群とそれらをひとまとめにする標語（見出し語）、当該の「フィギュール」についての説明文とそれを包括すると見なせるこの「フィギュール」の名称、省略的なかたちでの出典表記とそれを包括すると見なせる著作名や著者名、つまり「類」としての諸々の要素と「種」としての諸々の要素を並置するということが、『恋愛のディスクール・断章』の体裁のうえでも実践されている（という印象を与える書物の体裁になっている）。このような書物の体裁によって、バルトの記述における概念的なレベルの差異は保たれつつも表面上緩和され、彼の記述における「恋愛のディスクール」の物質的な「破片」としてのアスペクトが浮き彫りになっている。

『恋愛のディスクール・断章』の本文そのものを参照すると、当該の「フィギュール」（「私は・あなたを・愛しています」）の 3 番目の断章でバルトは、欲動（pulsion）であるにはあまりにも文（平叙文）としての形態を取っており、また文（平叙文）であるにはあまりにも叫びとしての性質を有する「私は・あなたを・愛しています（je-t-aime）」という言葉を、言表（énoncé）でも言表行為（énonciation）でもなく、学問的には扱い得ないとバルトが考える「発語行為（profération）」というカテゴリーに属させている。その際バルトは、この言葉については言語学も記号学も扱うことができないという旨を述べつつ、それを言語ではないカテゴリー（「音楽（Musique）」）を用いて形容している[40]。この言葉は、対話する二人の間で同時に発せられることができないことからそのモデルが「思考不可能である（impensable）」という「運動（mouvement）」を生じさせる[41]（6 番目の断章）、あるいはま

---

[39] 「このフィギュールは、愛の宣言や告白に関連しているのではなく、愛の叫びの反復された発語行為に関連している。」« *La figure ne réfère pas à la déclaration d'amour, à l'aveu, mais à la profération répétée du cri d'amour*. », Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 187. 邦訳 222 頁。

[40] 「発語行為には、いかなる学問的な場所もない。つまり、私は・あなたを・愛しています［という言葉］は言語学にも記号学にも属していない。その審級は［…］むしろ「音楽」だろう。」« A la profération, nulle place scientifique : *je-t-aime* ne relève ni de la linguistique ni de la sémiologie. Son instance [...] serait plutôt la Musique. », Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 189. 邦訳 225 頁。

[41] 「同時的な発語行為は、そのモデルが社会的には知られておらず思考不可能である運動を基礎づける。［…］」« La profération simultanée fonde un mouvement dont le modèle est socialement inconnu, impensable [...] », Barthes, *Fragments d'un discours amoureux*, p. 191. 邦訳 228 頁。

たこの言葉は、恋愛主体にとって明確なかたちでそっくりそのまま聞きたい「物理的、肉体的、唇音的な発語行為（profération physique, corporelle, labiale）」である[42]（9 番目の断章）といったように、「私は・あなたを・愛しています」という言葉は、学問的に扱い得る言語活動のジャンル（言表および言表行為）から逸脱して、概念的ではなく物理的あるいは物質的なアスペクトを強めることになる。しかしそれでもなおこの言葉は、言語活動のジャンル（「発語行為」）に属することを止めず、また言語ではないジャンル（「音楽」）によってもカテゴリー化される。ゆえに「私は・あなたを・愛しています」という「類的な」機能を持つ「フィギュール」は、概念的な存在であることの在り方が問われるかたちで提示されており、バルトは、この「フィギュール」が「類」として存在し得る（顕在化し得る）余地を残しているのだと考えられる。

そのうえで示したいのは、バルトが「類」と「種」の垂直的な関係性を保持しつつ両者のあいだに水平的な関係性を導入することによって、「類」と「種」の両者のあいだで単なる上下移動ではない（いかなるヒエラルキーをも形成しない）運動性がもたらされることである。先の引用文を元に例を挙げると、「底なしの淵」から「苦悩」へ、「苦悩」から「破局」へというかたちで、諸々の「フィギュール」間での移動が可能になっており、「類」と「種」の水平的な関係性には運動性が備わっている。アルファベット順を前から順々に移動することによる水平的な運動性（「底なしの淵」→「苦悩」→「破局」（→「衰弱」）と図式化できる）、この水平的な運動性は、「不幸」という「類的な」機能を持つ「フィギュール」がネットワーク（グループ）を形成するほかのあらゆる諸々の「フィギュール」に移動可能であることを前提にしている（「底なしの淵」（「不幸」）→「苦悩」（「不幸」）→「破局」（「不幸」）（→「衰弱」（「不幸」））と図式化できる）。つまりバルトが提示しているのは、概念的な関係性（「類」と「種」のカテゴリー間での関係性）を元にしながらも、同一レベルにとどまる水平的な運動性である。

また、提喩的意味作用を通じて発揮される水平的な運動性には、アルファベット順を逆向きに移動することによる運動性が含まれる（「底なしの淵」（「不幸」）←「苦悩」（「不幸」）←「破局」（「不幸」）（←「衰弱」（「不幸」））と図式化できる）。この点は、諸々の「フィギュール」を設定することをめぐる次のバルトの記述によって例証できる。

> 諸々のフィギュールが切り分けられるのは、ディスクールの流れのなかで（自己の

[42] 「[…] 重要なのは、語の、物理的、肉体的、唇音的な発語行為である。[…]」« [...] ce qui importe, c’est la profération physique, corporelle, labiale, du mot [...] », Barthes, *Fragments d’un discours amoureux*, p. 192. 邦訳 231 頁。

内面の映画、ロマネスクなテクスト)、何かすでに見たこと、読んだこと、聞いたこと、体験したこと（あるいは読者たる主体がすでに見聞きし読み体験したと思うこと）を再認識する読者たる主体が有する能力によってである。フィギュールは、ただちに［／直接的に］レクチュール［読書行為］となっている（それはレクシである)。少なくとも誰かが、まったくもってそのとおりだ、それは！と言える必要がある［…]。私は戻り、さかのぼる。この遡行において、言語学者たちは、結局のところ言語的な感性という漠然としたものの助けを借りる。諸々のフィギュールを構成するためには、それ以上でもそれ以下でもなくただ恋愛感情だけというこうしたガイドが必要になる。各々のフィギュールを再認すること、それは連鎖をさかのぼることである（逆向きに)。[43]

諸々の「フィギュール」を設定するにあたっては、「恋愛のディスクール」の読者たる主体（バルト）が、ただ恋愛感情（sentiment amoureux）だけに従って自身の経験から、諸々の「フィギュール」に該当する言語活動の場面を「再認識する（reconnaître)」ということが必要であるとともに、この行為には読者たる主体が自身の経験を「さかのぼる（remonter)」という行為が付随する。

この「遡行（remontée)」が指し示しているのは、「恋愛のディスクール」の「連鎖」を逆向きにたどることにほかならず、一次言語の在り方に焦点を当てる『恋愛のディスクール・断章』における諸々の「フィギュール」の配列には、「遡行」というかたちでの運動性が胚胎している。それゆえ、「類」と「種」の並置に基づいた提喩的意味作用の水平的な運動性には、アルファベット順による諸々の「フィギュール」の配列を順々にかつ逆向きに移動すること、すなわち往復運動が内包されている。

この場合、「ジョーカー」としての「不幸」という「フィギュール」を原動力にして、概念的なレベルの差異に基づいて諸々の「フィギュール」のあいだでの垂直的な往復運動が生じるとともに、言語活動の連なり（言連鎖）に沿って諸々の「フィギュール」のあいだでの水平的な往復運動が生じる。「不幸」という「フィギュール」は、垂直的かつ水平的な次元で可動的であるからこそ、「ジョーカー」という切り札の役割を果たすことができる。

---

[43] « Les figures se découpent en fonction du pouvoir qu'a le sujet lecteur de reconnaître dans le flux discoursif (le cinéma intérieur ou le texte romanesque) quelque chose qui a déjà été vu, lu, entendu, éprouvé (ou qu'il croit avoir déjà vu, lu, entendu, éprouvé). La figure est *immédiatement* un acte de lecture (c'est une *lexie*) : il faut qu'au moins quelqu'un puisse dire *Comme c'est vrai, ça !* [...] je retourne, je remonte. Dans cette remontée, les linguistes s'aident en fin de compte d'une chose vague : le sentiment linguistique. Pour constituer les figures, il ne faut ni plus ni moins que ce guide : le sentiment amoureux. Reconnaître chaque figure, c'est remonter la chaîne (*ana*-). », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 677.

ここでは、垂直的な往復運動が備わったかたちでの水平的な往復運動が具現化されており、別の言い方をすれば垂直的な運動性と水平的な運動性が重ね合わされているのである。この二重の運動性が、提喩的意味作用の水平的な運動性の内実である。こうした運動性は、垂直的次元（複数の異なる概念レベル）かつ水平的次元（言連鎖の流れ）での往復運動という形態を取るのである。

引用文では、提喩的意味作用を通じた往復運動における「遡行」が「恋愛のディスクール」の読者であるバルト自身の経験をさかのぼることであるとされていたが、実際のところこの「遡行」は、言連鎖（アルファベット順による「恋愛のディスクール」の連なり）の次元を超えて主体（バルト）の経験、またそればかりでなく「文化（culture）」にまでさかのぼるという広大な射程を有している[44]。ここでは、バルト自身の経験をさかのぼる提喩的意味作用の運動性がテクストを書くという行為に直結していることを示しておきたい。バルトは、彼自身の経験を元にして主観性を前景化しながら論述を進めたテクストを、彼自身がテクストそのものであるというヴィジョンに基づいた「テクスト・ロラン（Texte Roland）」[45]と形容しており、この「テクスト」は、「恋愛のディスクール」とそれについて論述するディスクールの差異がほとんどないという状態、すなわち「ロマネスクなメタ言語（métalangage romanesque）」[46]を体現する。この「ロマネスクなメタ言語」こそ、『彼自身によるロラン・バルト』において虚構（fiction）という見出しのもとで記述されていた「知性（Intellect）」のロマネスクな表現と捉えることができる[47]。このようにバルトは、提喩的意味作用の問題圏のもとで、ロマネスクなエクリチュール（『恋愛のディスクール・断章』）を創造したのだと言える。

バルトは、「フィギュール」のグルーピングについての記述をまとめるにあたって、「類」と「種」の水平的な関係性によってもたらされる「恋愛のディスクール」の読解について、次のように述べている。

> ［…］ある語を別の語に還元することをいかなるときでも受け入れないこと。たしかに、それぞれのフィギュールごとに、われわれはそうしたフィギュールを支える語を

---

44 Cf. Barthes, *Le discours amoureux*, p. 290.

45 Barthes, *Le discours amoureux*, p. 290.

46 「私は、見かけだけのメタ言語、あるいはまた「ロマネスクなメタ言語」を産み出す。」« Je produis une feinte de métalangage, ou encore un « métalangage romanesque ». », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 351.

47 「彼が産み出したかったと思っているらしいものは、「知性」の喜劇ではなく、そのロマネスクである。」« Il aurait voulu produire, non une cmédie de l'Intellect, mais son romanesque. », Barthes, *Roland Barthes par Roland Barthes*, p. 668. 邦訳 133 頁。

「解釈する」。しかしわれわれの解釈は、総体としての、閉じた体系を参照しておらず（カタレイプシス［閉じられた全体性を穿つ制御できない激高］）、還元ではなく、開花なのである。つまりわれわれは、もうひとつ別のテクストを産出するのである。[48]

バルトは、諸々の「フィギュール」を構成する用語を彼なりの解釈に基づかせたうえで、『恋愛のディスクール・断章』において断章を連ねてゆくのであるが、その際には、ある用語が別の用語に還元されていない状態、言い換えればある「フィギュール」が別の「フィギュール」を伴って複数化されているという様態および「フィギュール」間のネットワークが閉じられておらず複数的であるという様態が、「意味」の「開花（efflorescence）」をもたらすのである。

こうした「意味」の「開花」には、先に見たように提喩的意味作用の水平的な運動性が備わっている。そしてバルトは、「意味」の「開花」というかたちで「もうひとつ別のテクスト（second texte）」、すなわち『恋愛のディスクール・断章』を創造したのである。

第 5 節　結論

バルトによる「恋愛のディスクール」の読解は、「意味」の包括性を免れる意味作用の様態をめぐるバルトの考察が凝縮された試みであり、そこには諸々の「フィギュール」のネットワークを通じて感知できる提喩的意味作用の働きが存在する。この提喩的意味作用の働きは、「類」と「種」のあいだの垂直的な関係性に宿る往復運動が水平的な次元に拡大されるというかたちで現われる。提喩的意味作用の水平的運動性とは、概念的なレベルの差異に基づく垂直的な往復運動に言連鎖の次元での水平的な往復運動が連動する、すなわち両者が共存する運動性である。私たちは、中断された状態にあるがゆえに完成された状態に至ることがない（要するに尽きることがない）バルトの分類活動のもとでの、垂直的次元（複数の異なる概念レベル）での往復運動と水平的次元（言連鎖の流れ）での往復運動が組み合わさったこの提喩的意味作用の運動性を、「縦横無尽な運動性」と名づけたい。

「恋愛のディスクール」の連なりに沿って移動しつつ互いにつながりを持つというかたちで具現化される諸々の「フィギュール」のネットワークによって、バルトの著作の読者である私たちは、概念的なレベルの差異においても言連鎖の次元においても諸々の「フィ

[48] « [...] n'accepter à aucun moment la *réduction* d'un mot à l'autre. Certes, à chaque figure, nous « interprétons » le mot qui la soutient ; mais notre interpétation, ne se référant pas à un système fermé, total (*cataleipsis*), n'est pas *réduction*, mais *efflorescence* : nous produisons un second texte. », Barthes, *Le discours amoureux*, p. 371.

ギュール」を往復することができる。バルトは、提喩的意味作用に備わる水平的な運動性（「縦横無尽な運動性」）を活かして、「意味」の包括性を免れる意味作用の様態を前景化したのであり、垂直的なレベルでの往復運動に水平的なレベルでの往復運動を細やかなかたちで連動させるこのバルトの試みを「提喩的意味作用」の創造的な応用と形容することができるだろう。

このバルトの試みは、レクチュール（読む行為）のプロセスに焦点が当てられた分類活動（完成された状態に至ることのない分類活動）でありなおかつエクリチュール（書く行為）の実践である『Ｓ／Ｚ』の延長線上に位置づけることができる。完成された状態に至ることがなく「意味」の複数化（「開花」）を旨とする分類活動としてのバルトの分析実践は、「ロマネスクなメタ言語」の創出というかたちでの、レクチュールを元にしたエクリチュールの実践にほかならない。さらにまたバルトの分析実践は、記号論的な枠組みのもとで彼が実践した提喩的意味作用の応用を、垂直的な往復運動から水平的な往復運動へと拡張したものであると捉えることができる。

意味作用の様態を浮き彫りにするバルトの記号論的な探求は、その後期にあたる時期において新たな段階に達したのであり、提喩的運動性のヴァリエーションを模索する試みであったのである。

結章

本論文を通じて私たちは、ロラン・バルトの初期から晩年に至る諸々のテクスト実践において、意味作用の在り方を問題にする彼の思考が、「類」と「種」のカテゴリー間の関係性として規定される提喩的関係性を様々なかたちで活かしていることを明らかにした。提喩的関係性が様々なかたちで活かされた意味作用の在り方、それがバルトにおける「提喩的意味作用」である。

第 1 章では、バルトのレトリック論と文体論を対象にして、それらのテクスト実践が「提喩的意味作用」への注視に根ざしたものであったことを示した。バルトのレトリック論は、「デノテーション」（第一次の意味作用）から「コノテーション」（第二次の意味作用）へと至るプロセスを通じて諸々の意味作用の様態を分類する試みであったのであり、バルトの記号論的な実践の要点は、諸々の意味内容ではなく諸々の意味作用の様態それ自体を分類するということに存する。バルトにとって「コノテーション」とは、意味作用の在り方すなわち意味作用の働きそのものを問う意味作用にほかならないのであり、付加的な意味を抽出するにとどまらないバルトの「コノテーション」観は、「デノテーション」の在り方を分類することに直結しているのである。この点から私たちは、「提喩的意味作用」の基礎的な様態を、分類活動に資する「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に貫かれた第二次の意味作用として定義づけた。また、「コノテーション」の抽出と連動するバルトの文体論では、諸々の文体事象を「形式」の重なりと捉えるヴィジョンが打ち出されていたとともに、その具体的な様相が「類」と「種」のカテゴリー間でなされる往復運動として提示されていた。こうした分析実践によってバルトは、意味作用の働きを異なる概念レベル間での往復運動として可視化したのであり、彼は、意味作用の働きを浮き彫りにするために提喩的関係性を活かしたのである。

第 2 章では、バルトの神話分析および写真論を通じて、「神話」と写真の現実表象においては自明であるとは言い難い意味作用（「記号体系」）の働きを「提喩的意味作用」の現われとして浮き彫りにするとともに、その意味作用の働きが多様な要素を結び合わせるバルトの「混合」の思考操作と連動していることを示した。バルトの記号論的なテクスト実践の出発点に位置する初期の神話分析では、言語活動の類型性を背景にして「提喩的意味作用」（「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に貫かれた第二次の意味作用）を通じた諸々の第一次での意味実践に対する分類活動が行なわれていた。「フランス帝国性」というカテ

ゴリーの抽出は、偽りの自然らしさ（偽りの自明の理）によって覆い隠されているように見える「記号体系」の存在がバルトによって明るみに出された一例である。このカテゴリーの抽出の内実は、「フランス性」と「軍隊性」という相異なる抽象的な概念を「混合」というかたちでグルーピングすることに存する。1960 年代の記号論に傾倒していた時期のバルトの写真論では、無意味さをただもっぱら示すことで意味作用の働きを退けるかのような写真の現実表象における意味作用の働きが前景化されており、バルトは、「提喩的意味作用」を通じて、相反する抽象的な概念（「現実性」と「非現実性」）を結び合わせて「現実的な非現実性」という新たなカテゴリーを創出していた。写真の現実表象が念頭に置かれたバルトの記号論的な言語論「現実効果」では、「「現実」というカテゴリー」のもとで、指示対象を忠実に示すことを旨とする現実表象に「幻想」が介在し得るという 1970 年代以降のバルトの写真論を把握するうえでの有益な観点が提示されていた。バルトは、論文「第三の意味」での「鈍い意味」の読み取りの「錯誤」への関連づけを経て、最晩年の『明るい部屋』では、写真の「指示機能」を、「狂気」や「錯覚」に関連づけつつ「現実」と「真実」を一体化させる契機として再定式化していたのであり、彼は、グルーピングの作業を背景にした「混合」という思考操作を通じて、写真の「指示機能」に潜む意味作用の働きを注視するために、提喩的関係性を活かしたのである。

第 3 章では、バルトの記号論的実践を代表する『モードの体系』を取り上げ、意味の統御を旨とする「体系」の在り方に還元されない「ル・システマティック」が無尽蔵な意味作用によって具現化される点を示し、そうした際限のない意味作用の働きが「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に裏づけられていることを明らかにした。そのプロセスが前景化される意味作用の母型構造を土台とするところの、「種の断定」から開始されるバルトの衣服分類には提喩的な思考の運動性（「類」と「種」のあいだでの往復運動）が伴われているとともに、カテゴリー間の関係性を前景化する「種の断定」という知的操作を通じて、シニフィアンの絶え間ない変化がシニフィアンの生成そのものへと向かう「循環」というかたちで、無尽蔵な意味作用の働きを体現する再帰的な意味作用が生じる。意味の増殖に資するこの再帰的な意味作用には、「中性化」のプロセスの「類」と「種」のあいだでの可逆的な運動性が連動している。『モードの体系』においてバルトは、「体系」の在り方に動的な性質を発揮させるために、すなわち、意味の統御を旨とする「体系」を際限のない意味作用の働きが発揮される「体系」に変える創造的な試みを成し遂げるために、「提喩的意味作用」を活かしたのである。

第 4 章では、理論的企図に基づくレクチュール（読む行為）の試みかつ作品創造につながるエクリチュール（書く行為）の試みである『Ｓ／Ｚ』における意味作用の働きを、「コ

ノテーション」（付加的意味）の読み取りというかたちで意味の複数化を支える基盤として把握できることを示した。また私たちは、この著作で問題にされているテクストの「構造化」の在り方が「類」と「種」のカテゴリー間の関係性に基づいていることを明らかにした。バルトが浮き彫りにするテクストの「構造化」は、テクストそれ自体が内包している機能および分析者が及ぼす作用という二つの様態を持ち、前者（テクストそれ自身が元々有している骨格ないしロジック）はレクチュールの側面が前景化された分析実践によって、後者（分析対象となるテクストの書き換えとなるような作用）はエクリチュールの側面が前景化された分析実践によって、それぞれ顕在化する。こうしたバルトの分析実践のなかでも分類活動に焦点を当てることで私たちは、「類」と「種」の両カテゴリーのあいだを往復するバルトの思考の運動性、および「類」の可動性を元にして新たな意味領域（意味グループ）を創出するという、彼のグルーピングの作業に宿る創造性を示した。『Ｓ／Ｚ』においてバルトは、思考の運動性と連動したかたちで新たな意味領域を柔軟に切り開いてゆく創造的な分類活動を成し遂げるために、「提喩的意味作用」を活かしたのである。

第 5 章では、『恋愛のディスクール・断章』およびその元になったセミナーのノート『恋愛のディスクール』においてバルトが、「意味」の包括性を免れる「意味作用」の在り方を探求していたことを示した。「恋愛のディスクール」をめぐって問題になっていたのは、中断された状態（完成されていない状態）にある分類活動、すなわち包括的な「意味」のもとで統御されるのではなくむしろ「意味」を複数化させる分類活動である。この分類活動のもとでバルトが前景化した意味作用の在り方には、諸々の「フィギュール」のネットワークを通じて感知できる運動性が存在する。それは、「類」と「種」のカテゴリー間を往復するという「提喩的意味作用」に胚胎する運動性である。「フィギュール」の配列方法を検討するにあたってバルトは、この「提喩的意味作用」の運動性を、垂直的なレベルかつ水平的なレベルで生じさせることを試みていた。つまりバルトは、「類」と「種」のあいだを往復する思考の運動性を垂直的な往復運動から水平的な往復運動へと拡張したのであり、こうしたかたちでの「提喩的意味作用」の創造的と形容できる応用は、『Ｓ／Ｚ』の延長線上に位置づけることができる。垂直的な往復運動から水平的な往復運動へと拡張された「提喩的意味作用」の水平的運動性、この運動性を私たちは、「縦横無尽な運動性」と名づけた。その内実は、垂直的次元（複数の異なる概念レベル）かつ水平的次元（言連鎖の流れ）で往復運動を形成する意味作用の無尽蔵な働きにほかならない。そこから私たちは、後期バルトの「恋愛のディスクール」に対する分析実践を、提喩的関係性に備わる運動性の射程を模索する創造的な記号論的探求として提示した。

こうしたバルトの数々のテクスト実践から見えてくるのは、創造的な記号論者というバ

ルト像である。初期の神話分析から最晩年の『明るい部屋』に至るまでバルトは、必ずしもその働きが前景化されていないという状態をも含めて意味作用の在り方を注視する姿勢を貫いたのであるが、本論文によって浮き彫りになるのは、そうしたまなざしに根ざしたバルトの記号論的な活動が展開する様相である。その流れを明確にするために、あえて図式的なかたちでまとめてみよう。まず出発点として、造語的表現によって新たなカテゴリーを創出する 1950 年代後半の神話分析が存在する。次に、1960 年代のバルトの代表的な記号論的実践である『モードの体系』および写真論「映像のレトリック」での提喩的意味作用に基づく創造的な分類活動、すなわち「体系」の在り方そのものを変える試みと「現実的な非現実性」という新たなカテゴリーの創出は、1970 年の『Ｓ／Ｚ』および写真論「第三の意味」での提喩的意味作用を活かした柔軟かつ創造的なグルーピングの実践（新たな意味領域の創出ないし意味領域を固定させない試み）として展開する。そのうえでバルトの記号論的な活動は、1970 年代後半の『恋愛のディスクール・断章』および 1980 年の写真論『明るい部屋』での提喩的意味作用の射程の拡張（カテゴリー間での往復運動の拡張、写真の「指示機能」の再定式化）という様相を呈するに至るのである。

本論文が示し得たのは、理論家かつ作家であるバルトを細やかに把握することができる創造的な記号論者というバルト像である。このバルト像は、初期から晩年までのバルトの「全体像」にほかならないが、無論バルトの知的活動の「全て」を反映しているわけではない。たとえばこの場合、作家研究を行なう批評家としてのバルトや教育の場に立つバルトに光は当たらなくなるが、文字通りのかたちでの「全て」を包括するようなバルト像などおそらく存在しない。しかし、創造的な記号論者というバルト像は、記号論に傾倒した理論家としての 1960 年代のバルトと記号論に傾倒してはいないものの記号論の蓄積を活かす作家としての 1970 年代のバルトを、前期と後期という区分のもとで分離する傾向にある先行のバルト像を見直すことに貢献すると言えるだろう。

おおよそ（『Ｓ／Ｚ』や論文「第三の意味」が発表された）1970 年を境にしてバルトの分類活動は、学問的な装いを持たないような試みに変貌したが、分析対象に備わる意味作用の働きを注視する彼の姿勢は変わっていない（ある一定の変化が見られるからこそ、また感知し難い意味作用の働きが追い求められるからこそ、彼の記号論的な活動を「冒険」と形容することができる）。言い換えれば、1970 年代のバルトのなかで引き継がれなかったのは、学問的な厳密さが旨とする意味の統御という問題であり（とはいえ『モードの体系』においてすら、「体系」に「ル・システマティック」が胚胎していることによって学問的な厳密さは和らげられている）、引き継がれたのは、バルトの「エスプリ」である繊細さや細やかさを体現するところの、意味の統御から免れている意味作用の働きという問題である。

第 1 章で換喩的意味作用の帰結として引き合いに出した 1975 年の『彼自身によるロラン・バルト』で記述されている意味の「免除」（消失）は、実際のところ、ある意味から別の意味への換喩的な変転（ある「意味」から別の「意味」への移動）の帰結というよりもむしろ、第 5 章で示した提喩的意味作用の縦横無尽な運動性（垂直的次元かつ水平的次元での「意味作用」の無尽蔵な往復運動）の帰結であると言える。というのも、「意味作用」の無尽蔵な働きによってこそ、あれこれしかじかの「意味」の存在を指摘することがもはや問題にならず、意味の「免除」（消失）が生じると考えられるからである。このように提喩的関係性は、意味作用の在り方を探求する後期バルトの活動の核心的な部分を形成しているのである。

先行のバルト像に対する見直しとは別に、本論文の成果として強調したい点を二つ挙げておきたい。第一の点は、無意味さが発揮する意味作用の解明という典型的に構造主義的なヴィジョン（それ自体では意味を持たない音素が意味の変化に関与することを明らかにした音韻論の成果に基づく意味作用の働きに対するヴィジョン）を取り入れつつ（これは第 2 章で行なったことである）、諸々の意味内容ではなく意味作用の働き方そのものを浮き彫りにすることを方法論としても分析実践としても明確に打ち出した点にある。本論文は、様々な文化表象を通じて意味作用の働きに焦点を当てるバルトの思考の在り方を、提喩的な運動性および創造性として明らかにすることによって、メタ批評の「試み」として、意味作用論の典型的と形容できる一例を示した。つまり本論文を、広範な分析対象（バルトの多様な分析実践）、明確な方法論（バルトの思考の歩みを前景化して彼の「理論的な」テクストを読み込むこと、言い換えれば有用性や新しさとは別の観点から「理論」にアプローチするという方法論）、そして綿密な論証（先に総括した具体的な分析実践）を伴ったひとつの総合的な意味作用論と定義づけることができるだろう。それはバルト論という本論文の性質と矛盾しない。

第二の点は、提喩的関係性のヴァリエーションを示し得たことである。私たちの議論の土台となったグループ μ のレトリック論を元にした提喩的関係性とは、「類」と「種」のあいだの概念的な関係性にほかならない（レトリックの技法としての提喩の基礎的あるいは原理的様態であるところの、「種」から「類」への移動すなわち「パン」で「食物一般」を表わすケース、および「類」から「種」への移動すなわち「死すべきもの」で「人間」を表わすケース）。この関係性には、異なる概念レベル間を往復するという運動性が備わっている。換喩が水平的なレベルでの運動性を持つのに対して、提喩は、垂直的なレベルでの運動性、すなわち異なる概念レベル間を往復する思考の運動性を体現するのである。本論文は、まずそもそもこうした概念的な運動性（往復運動）が明確に存在するということを

丹念に例証した[1]。さらに第 5 章で検討したように、バルトは、この垂直的な運動性を遡行という方向性をも含めて言連鎖の流れに細やかなかたちで沿わせる（つまり換喩的次元に重ね合わせる）という試みを行なっていたのであり、そのバルトの試みを細部にわたって検討することで本論文は、概念的な運動性が縦横無尽に展開する軌跡を浮き彫りにした。

同時にこの概念的な運動性は、バルトの思考特有の性質ではなく、彼と同じ時代に生きたほかの理論家の思考にも共通して見られる性質である。本論文で言及した理論家に限って言えば、とりわけイェルムスレウ（コノテーションの問題をめぐって言説の文体的特徴を分類する際のカテゴリー間での往復運動）、およびグレマスが挙げられる（「分類素」（「類」の役割を果たす意味素）と「核意味素」（「種」としての意味素）のあいだを往復するからこそ、意味の一貫した読み取りを支える「イゾトピー」という言説の性質を抽出することができる）。意味の変化という点を元にして分析実践のレベル間の差異を設けるバンヴェニストについても、諸々の言語単位を分類することが問題になっている以上、同様のことが言える。あるいはまた、提喩的関係性そのものに着目した理論家として、ジュネットを挙げることができる。本論文で引き合いに出した彼の論文「文体と意味作用」は 1990 年代に発表されたものであるが、序章で青柳の論文を通じて確認したように彼は構造主義の時代にすでに提喩と換喩の区別に意識的であった。グループ μ の提喩的関係性への着目については、言うまでもない。

このような時代背景への参照を元にして、提喩の理論的な意義、より正確にはバルトの「思考の体験」を支える提喩的意味作用の理論的な意義がはっきりする。それは、提喩的意味作用が、換喩的意味作用によって具現化される運動性、すなわち現実上の隣接関係に従うという点で感覚的な（いわば物質的な）基盤を持つ運動性とはまったく異なる概念的な運動性を産み出すことができる点にある。換喩は原理的に、（ラカンの理論が示すように）ある何らかの特権的な項を導入しない限り、どこまで進んでも同一の概念レベルでしか機能しない。それに対して提喩は、思考の往復運動、究極的にはその縦横無尽な運動性（垂直的次元と水平的次元を組み合わせたかたちで際限なく展開する往復運動）を体現する。ゆえに提喩の理論的な意義とは、唯一の特権的なシニフィアン（「欠如」の記号としての「ファルス」）によってシニフィアンの連鎖を一方向的に還元するというかたちでシニフィアン

[1] バルトによる概念的な運動性の前景化は、ともすれば私たちが陥りかねない思考の罠に注意を促しているように思われる。統御しないことを旨とするバルトの思考の在り方は諸々の「種」を単一の「類」に統合しようとすることへのアンチテーゼとなっており、こうしたバルトの思考の在り方を支えているのが「類」と「種」のあいだを（原理的には際限なく）往復することなのである。

の連鎖を統御するラカンの理論[2]へのアンチテーゼであるばかりでなく、そもそもラカンの理論が基盤とする「連鎖」という換喩的関係性へのアンチテーゼでもある。要するに提喩の意義とは、換喩との「区別」ではなく換喩との「対立」にある（「対立」という闘争的な意味合いを含む用語は、繊細さや細やかさを旨とするバルトの「エスプリ」にそぐわないように見えるが、実際のところこの「対立」は、「区別」が前景化された状態を指すのであり、細やかな「差異」に注意を払うバルトの「エスプリ」に釣り合うだろう）。

こうした見地からすれば提喩とは、もはや単なる転義的比喩（技巧としてのレトリック）ではないのだと言える。実際、動的な性質を付与して「体系」の在り方そのものを変える、あるいはまた、「類」の可動性を活かして新たな意味領域を切り開くといった、本論文が浮き彫りにしたバルトの創造的なテクスト実践は、ある「意味」を別の「意味」に変化させる技法である提喩が、「意味作用」の働きを促しつつ、作品創造に比肩し得るエクリチュールの実践を支えるという射程を有することを示している。「恋愛のディスクール」をめぐってバルトが提示していた「ロマネスクなメタ言語」は、その典型例と言えるだろう。

最後に、今後の研究課題とするべき点を述べておきたい。バルトが意味の体系（「範列」）から逃れるものとして定義づけた「中性」の問題にアプローチすることである。本論文を通じて私たちは、バルトによる提喩的意味作用の探求として、意味作用の働きを退けるかのような現実表象の在り方、それに加えて、体系に内在する「ル・システマティック」、テクストの「構造化」、「フィギュール」のネットワークといったように、包括的な意味から逃れる意味作用の働きの輪郭を浮き彫りにした。しかし、あくまではっきりとしたかたちでは現われないことを旨とする「中性（的なもの）」をめぐって、本論文では、「恋愛のディスクール」に対するバルトの分析実践との関連性について断片的に言及することしかできなかった[3]。バルトにおける「中性」の概念の真髄と呼ぶべき点を明らかにするためには、この概念が最初期の『零度のエクリチュール』から晩年の「中性」講義に至るまで一貫して散見されることから、数多くのバルトのテクストを元にしてこの概念に固有の論理を探すことから始めなければならないと思われる。それと同時に、バルトの思考の在り方を探るだけでなく、本論文で採用しなかった方法論、すなわち、（モーリス・ブランショをはじめとした）関連するほかの知識人たちのテクスト実践と比較するという方法論が必要にな

---

[2] Cf. 佐藤嘉幸『権力と抵抗――フーコー・ドゥルーズ・デリダ・アルチュセール』、人文書院、2008 年、64-69 頁。

[3] バルトにおける「中性」概念に対して私たちが行なった予備的な考察については、次の論文を参照のこと。Cf. Sota Kanaya, “The Binary and the Potential in Roland Barthes’s Concept of the Neutral,” *Tsukuba Studies in Literature* (Tsukuba Society of Comparative Literature), no. 31, 2013, pp. 99-113.

るだろう。その際、本論文が明るみに出したバルトの創造性のなかでもとりわけ「体系」の在り方そのものを変えるという点は、意味の「体系」に対するある種の脱構築（「範列」の在り方ないし私たちの「範列」観を変えること）であると思われるバルトの方針ないし狙いを把握するための、また本論文で取り上げた「中性化」の可逆的な運動性は、明確な形態を取らない「中性的なもの」の現われに伴うと思われる一方向的ではない運動性を浮き彫りにするための、それぞれ手がかりになるだろう。バルトにおける「中性」の問題に対する検討を今後の課題にして、本論文を閉じることにしたい。

主要参考文献一覧

凡例

1. ロラン・バルトの文献は、初出年を（　）に入れ刊行年代順に配列する。欧語文献は、初出年を（　）に入れ著者の姓のアルファベット順に配列する。同一著者による文献は、刊行年代順に配列する。

2. 欧語文献に日本語訳があり、それを参照した場合、欧語文献の書誌情報に続けて（　）に入れて表示する。

3. 日本語文献は、欧語文献のあとに著者もしくは編者の姓のアイウエオ順に配列する。また日本語訳のみを参照した欧語文献については日本語文献として配列する。同一著者による文献は、刊行年代順に配列する。

4. 辞典類については、欧語文献は文学辞典のあとに言語辞典を配列し、日本語文献はアイウエオ順に配列する。

文献一覧

1. ロラン・バルトのテクスト

Œuvres complètes, t. I (1942-1961), t. II (1962-1967), t. III (1968-1971), t. IV (1972-1976), t. V (1977-1980), nouvelle édition revue, corrigée et présentée par Éric Marty, Seuil, 2002. — *OC* I, *OC* II, *OC* III, *OC* IV, *OC* V

OC I —— *Le Degré zéro de l'écriture* (1953)（「零度のエクリチュール」、渡辺淳訳、『零度のエクリチュール　付・記号学の原理』、渡辺淳・沢村昂一訳、みすず書房、1971 年）; *Mythologies* suivi de Le Mythe, aujourd'hui (1957)（『ロラン・バルト著作集 3　現代社会の神話　1957』、下澤和義訳、みすず書房、2005 年）; « Le bleu est à la mode cette année. Note sur la recherche des

unités signifiantes dans le vêtement de mode » (1960)（「「今年は青が流行です」――モード服における記号作用単位の研究ノート」、『ロラン・バルト著作集 4　記号学への夢 1958-1964』、塚本昌則訳、みすず書房、2005 年 ；「今年はブルーが流行――モードの衣服における記号作用単位についての研究ノート」、『ロラン・バルト　モード論集』、山田登世子編訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2011 年）; « Le message photographique » (1961)（「写真のメッセージ」、『第三の意味――映像と演劇と音楽と』、沢崎浩平訳、みすず書房、新装版 1998 年（初版 1984 年））.

OC II ―― « Écrivains et écrivants » (1960), in *Essais critiques* (1964)（「作家と著述家」、『ロラン・バルト著作集 5　批評をめぐる試み　1964』、吉村和明訳、みすず書房、2005 年）; « L'activité structuraliste » (1963), in *Essais critiques* (1964)（「構造主義的活動」、『ロラン・バルト著作集 5　批評をめぐる試み　1964』、吉村和明訳、みすず書房、2005 年）; « Rhétorique de l'image » (1964)（「映像の修辞学」、『第三の意味――映像と演劇と音楽と』、沢崎浩平訳、みすず書房、新装版 1998 年（初版 1984 年））; « Éléments de sémiologie » (1965 [1964])（「記号学の原理」、沢村昂一訳、『零度のエクリチュール　付・記号学の原理』、渡辺淳・沢村昂一訳、みすず書房、1971 年）; « La cuisine du sens » (1964)（「意味の調理場」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1988 年））; *Critique et vérité* (1966)（『批評と真実』、保苅瑞穂訳、みすず書房、2006 年）; « Introduction à l'analyse structurale des récits » (1966)（「物語の構造分析序説」、『物語の構造分析』、花輪光訳、みすず書房、1979 年）; *Système de la Mode* (1967)（『モードの体系――その言語表現による記号学的分析』、佐藤信夫訳、みすず書房、1972 年）; « L'analyse rhétorique » (1967)（「修辞の分析」、『言語のざわめき』、花輪光訳、みすず書房、新装版 2000 年（初版 1987 年））; « Le discours de l'histoire » (1967)（「歴史の言説」、『言語のざわめき』、花輪光訳、みすず書房、新装版 2000 年（初版 1987 年））.

OC III ―― « L'effet de réel » (1968)（「現実効果」、『言語のざわめき』、花輪光訳、みすず書房、新装版 2000 年（初版 1987 年））; *S/Z* (1970)（『Ｓ／Ｚ――バルザック『サラジーヌ』の構造分析』、沢崎浩平訳、みすず書房、1973 年）; « Le troisième sens. Notes de recherche sur quelques photogrammes de S. M. Eisenstein » (1970)（「第三の意味――エイゼンシュテインのフォトグラムに関する研究ノート」、『第三の意味――映像と演劇と音楽と』、沢崎浩平訳、みすず書房、新装版 1998 年（初版 1984 年））; « Écrire la lecture » (1970)（「読書のエクリチュール」、『言語のざわめき』、花輪光訳、みすず書房、新装版 2000 年（初版 1987 年））; « Le

classement structural des figures de rhétorique » (1966) [annexe de « L'ancienne rhétorique. Aide-mémoire » (1970)]（「修辞の文彩の構造的分類」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1988 年））; « L'ancienne rhétorique. Aide-mémoire » (1970)（『旧修辞学　便覧』、沢崎浩平訳、みすず書房、1979 年）; *Sade, Fourier, Loyola* (1971)（『サド、フーリエ、ロヨラ』、篠田浩一郎訳、みすず書房、新装版 2002 年（初版 1975 年））; « Les suites d'actions » (1971)（「行為の連鎖」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1988 年））; « De l'œuvre au texte » (1971)（「作品からテクストへ」、『物語の構造分析』、花輪光訳、みすず書房、1979 年）; « Le style et son image » (1971)（「文体とそのイメージ」、『言語のざわめき』、花輪光訳、みすず書房、新装版 2000 年（初版 1987 年））.

OC IV —— « Proust et les noms » (1967), in *Nouveaux essais critiques* (1972)（「プルーストと名前」、『新＝批評的エッセー——構造からテクストへ』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1977 年））; « Par où commencer ? » (1970) in *Nouveaux essais critiques* (1972)（「どこから始めるべきか？」、『新＝批評的エッセー——構造からテクストへ』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1977 年））; *Le Plaisir du texte* (1973)（『テクストの快楽』、沢崎浩平訳、みすず書房、1977 年）; « Texte (théorie du) » (1973)（「テクスト——その理論」、花輪光訳、『現代思想　特集＝構造主義以後』、1981 年 7 月号（第 9 巻第 7 号）、77-91 頁）; « Analyse textuelle d'un conte d'Edgar Poe » (1973)（「エドガー・ポーの一短編のテクスト分析」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1988 年））; « L'aventure sémiologique » (1974)（「記号学の冒険」、『記号学の冒険』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1999 年（初版 1988 年））; *Roland Barthes par Roland Barthes* (1975)（『彼自身によるロラン・バルト』、佐藤信夫訳、みすず書房、新装版 1997 年（初版 1979 年））.

OC V —— « Masculin, féminin, neutre » (1970)（「男性、女性、中性——『Ｓ／Ｚ』の最初の草稿」、『ロラン・バルト著作集 6　テクスト理論の愉しみ　1965-1970』、野村正人訳、みすず書房、2006 年）; *Fragments d'un discours amoureux* (1977)（『恋愛のディスクール・断章』、三好郁朗訳、みすず書房、1980 年）; *La Chambre claire. Note sur la photographie* (1980)（『明るい部屋——写真についての覚書』、花輪光訳、みすず書房、新装版 1997 年（初版 1985 年））.

L'obvie et l'obtus (Essais critiques III), Seuil, coll. « Points », 1992 (1982).

Le bruissement de la langue (Essais critiques IV), Seuil, coll. « Points », 1993 (1984).

L'aventure sémiologique, Seuil, coll. « Points », 1991 (1985).

Le Neutre. Notes de cours au Collège de France 1977-1978, texte établi, annoté et présenté par Thomas Clerc, Seuil / IMEC, 2002（『〈中性〉について――コレージュ・ド・フランス講義ノート 1977-1978 年度（ロラン・バルト講義集成 II）』、塚本昌則訳、筑摩書房、2006 年）.

Le discours amoureux. Séminaire à l'École pratique des hautes études 1974-1976, suivi de *Fragments d'un discours amoureux* (pages inédites), avant-propos d'Éric Marty, présentation et édition de Claude Coste, Seuil, 2007.

Le lexique de l'auteur. Séminaire à l'École pratique des hautes études 1973-1974, suivi de *fragments inédits du Roland Barthes par Roland Barthes*, avant-propos d'Éric Marty, présentation et édition d'Anne Herschberg Pierrot, Seuil, 2010.

Sarrasine de Balzac. Séminaire à l'École pratique des hautes études 1967-1968 et 1968-1969, avant-propos d'Éric Marty, présentation et édition de Claude Coste et Andy Stafford, Seuil, 2011.

『ロラン・バルト　モード論集』、山田登世子編訳、筑摩書房（ちくま学芸文庫）、2011 年。

2. ロラン・バルトのテクストに関する研究

2. 1. 欧語文献

BADIR Sémir et DUCARD Dominique (dirs.), *Roland Barthes en cours (1977-1980). Un style de vie*, Éditions Universitaires de Dijon, 2009.

BREMOND Claude et PAVEL Thomas, *De Barthes à Balzac. Fictions d'un critique, critiques d'une fiction*, Albin Michel, 1998.

BUFFAT Marc, « L'aventure sémiologique », *Revue des sciences humaines*, no. 268, 2002, pp. 27-39.

BURGELIN Olivier, « Le double système de la mode », *L'Arc*, no. 56. 1974, pp. 8-16.

—, « Barthes et le vêtement », *Communications*, no. 63, 1996, pp. 81-100.

CHAMPAGNE Roland, *Literary History in the Wake of Roland Barthes. Re-defining the Myths of Reading*, Summa Publications, 1984.

CLERC Thomas, « Roland le neutre », *Revue des sciences humaines*, no. 268, 2002, pp. 41-53.

COMMENT Bernard, *Roland Barthes, vers le neutre*, Christian Bourgois, 1991.

COMPAGNON Antoine, “The two Barthes,” trans. James McGuire and Didier Bertrand, in Steven Ungar and Betty R. McGraw (eds.), *Signs in Culture. Roland Barthes Today*, University of Iowa Press, 1989, pp. 63-75.

—, « Roland Barthes en saint Polycarpe », in *Les antimodernes. De Joseph de Maistre à Roland Barthes*, Gallimard, 2005, pp. 404-440.

COSTE Claude, *Roland Barthes moraliste*, Presses Universitaires du Septentrion, 1998.

—, *Bêtise de Barthes*, Klincksieck, 2011.

CULLER Jonathan, “Barthes Theorist,” *The Yale Journal of Criticism*, vol. 14, no. 2, 2001, pp. 439-446.

DE MAN Paul, “Roland Barthes and the Limits of Structuralism” (1972), in Diana Knight (ed.), *Critical Essays on Roland Barthes*, G. K. Hall, 2000, pp. 157-167.

GIL Marie, *Roland Barthes. Au lieu de la vie*, Flammarion, 2012.

GROSSMAN Evelyne, « La Semence de Roland Barthes (la French theory et après) », *Contemporary French and Francophone Studies*, vol. 18, no. 1, 2014.

HEATH Stephen, *Vertige du déplacement. Lecture de Barthes*, Fayard, 1974.

JOHNSON Barbara, “The Critical Difference” (1978), in Diana Knight (ed.), *Critical Essays on Roland Barthes*, G. K. Hall, 2000, pp. 174-182.

JOUVE Vincent, *La littérature selon Roland Barthes*, Minuit, 1986.

KANAYA Sota, “The Binary and the Potential in Roland Barthes’s Concept of the Neutral,” *Tsukuba Studies in Literature* (Tsukuba Society of Comparative Literature), no. 31, 2013, pp. 99-113.

KNIGHT Diana, *Barthes and Utopia. Space, Travel, Writing*, Clarendon Press, 1997.

LAVERS Annette, *Roland Barthes. Structuralism and After*, Harvard University Press, 1982.

MAQUILLAN Martin, *Roland Barthes (Or the Profession of Cultural Studies)*, Palgrave Macmillan, 2011.

MARTY Éric, « Roland Barthes et le discours clinique : lecture de *S/Z* », *Essaim. Revue de psychanalyse*, no. 15, 2005, pp. 83-100.

—, *Roland Barthes. Le Métier d’écrire*, Seuil, 2006.

—, « Maurice Blanchot, Roland Barthes, “une ancienne conversation” », *Les Temps Modernes*, no. 654, mai-juillet 2009, pp. 74-89.

—, *Roland Barthes, la littérature et le droit à la mort*, Seuil, 2010.

MILNER Jean-Claude, *Le Périple structural. Figures et paradigme*, Seuil, 2002, pp. 115-129.

—, *Le pas philosophique de Roland Barthes*, Verdier, 2003.

OURA Yasusuke, « Barthes théoricien ? À propos de sa théorie antimimétique », *UTCP [The University of Tokyo, Center for Philosophy] Bulletin*, vol. 2, 2004, pp. 102-108.

PHILIPPE Gilles, *Bibliographie des écrivains français. Roland Barthes*, Memini, 1996.

POLAN Dana, "Inexact Science: Complexity and Contradiction in Roland Barthes's "Classic Semiology"," *The Yale Journal of Criticism*, vol. 14, no. 2, 2001, pp. 453-462.

REID Martine, "*S/Z* Revisited," *The Yale Journal of Criticism*, vol.14, no.2, 2001, pp. 447-452.

RICHARD Jean-Pierre, *Roland Barthes, dernier paysage*, Verdier, 2006.

ROGER Philippe, *Roland Barthes, roman*, Bernard Grasset, 1986.

SCHAEFFER Jean-Marie, « Roland Barthes : de la théorie à la pensée », *UTCP [The University of Tokyo, Center for Philosophy] Bulletin*, vol. 2, 2004, pp. 14-22.

SONTAG Susan, "Writing Itself: On Roland Barthes," in Susan Sontag (ed.), *A Barthes Reader*, Hill and Wang, 1982.

STAFFORD Andy, « Préparation du *Romanesque* dans le *Sarrasine* de Roland Barthes », in Sémir Badir et Dominique Ducard (dirs.), *Roland Barthes en Cours (1977-1980). Un style de vie*, Éditions Universitaires de Dijon, 2009, pp. 173-184.

THOMAS Jean-Jacques, "System vs. Code: A Semiologist's Etymology," in Steven Ungar and Betty R. McGraw (eds.), *Signs in Culture. Roland Barthes Today*, University of Iowa Press, 1989, pp. 49-62.

Barthes après Barthes, une actualité en questions, actes du colloque international de Pau, 22-24 novembre 1990, textes réunis par Catherine Coquio et Régis Salado, Publications de l'Université de Pau, 1993.

Barthes, au lieu du roman, textes réunis et présentés par Marielle Macé et Alexandre Gefen, Éditions Desjonquères / Éditions Nota bene, 2002.

Roland Barthes (Genesis. Revue internationale de critique génétique), Jean-Michel Place, 2002.

Empreintes de Roland Barthes, sous la direction de Daniel Bougnoux, Cécile Defaut / INA, 2009.

2. 2. 日本語文献

淺沼圭司『ロラン・バルトの味わい——交響するバルトとニーチェの歌』、水声社、2010 年。

アレン、グレアム『シリーズ　現代思想ガイドブック　ロラン・バルト』、原宏之訳、青土社、2006 年（原著 2003 年）。

アンガー、スティーブン『ロラン・バルト――エクリチュールの欲望』、千葉文夫訳、勁草書房、1989 年（原著 1983 年）。
遠藤文彦『ロラン・バルト――記号と倫理』、近代文芸社、1998 年。
大浦康介「フランス構造主義」、小森陽一ほか編『岩波講座文学別巻　文学理論』、岩波書店、2004 年、41-71 頁。
金谷壮太「提喩性と「強度」の概念――ロラン・バルトにおける恋愛のディスクールの問題」、『文学研究論集』、第 30 号、筑波大学比較・理論文学会、2012 年、65-79 頁。
カラー、ジョナサン『ロラン・バルト』、富山太佳夫訳、青弓社、1991 年（原著 1983 年）。
カルヴェ、ルイ＝ジャン『ロラン・バルト伝』、花輪光訳、みすず書房、1993 年（原著 1990 年）。
桑田光平『ロラン・バルト――偶発事へのまなざし』、水声社、2011 年。
篠田浩一郎『ロラン・バルト――世界の解読』、岩波書店、1989 年。
鈴村和成『現代思想の冒険者たち第 21 巻　バルト――テクストの快楽』、講談社、1996 年。
花輪光「ロラン・バルトの物語論：構造分析からテクスト分析へ」、『文藝言語研究文藝篇』、第 6 巻、筑波大学文芸・言語学系、1981 年、1-25 頁。
――,『ロラン・バルト――その言語圏とイメージ圏』、みすず書房、1985 年。
松本健太郎『ロラン・バルトにとって写真とは何か』、ナカニシヤ出版、2014 年。
渡辺諒『バルト――距離への情熱』、白水社、2007 年。

3. その他のテクスト

3. 1. 欧語文献

ABLALI Driss et DUCARD Dominique (dirs.), *Vocabulaire des études sémiotiques et sémiologiques*, Éditions Champion / Presses Universitaires de Franche-Compté, 2009.
BADIR Sémir, *Hjelmslev*, Société d'édition les Belles Lettres, 2000（『イェルムスレウ』、町田健訳、大修館書店、2007 年）.
BALZAC Honoré de, *Sarrasine*, in *La Comédie humaine*, t. VI, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1977.
BENVENISTE Émile, *Problèmes de linguistique générale I*, Gallimard, 1966（『一般言語学の諸問題』、岸本通夫監訳、みすず書房、1983 年）.
BLANCHOT Maurice, *L'Entretien infini*, Gallimard, 1969.

BRØNDAL Viggo, *Essais de linguistique générale*, Ejnar Munksgaard, 1943.

COMPAGNON Antoine, *Le Démon de la théorie. Littérature et sens commun*, Seuil, coll. « Points », 2001 (1998)（『文学をめぐる理論と常識』、中地義和・吉川一義訳、岩波書店、2007 年）.

CULLER Jonathan, *Structuralist Poetics. Structuralism, Linguistics and the Study of Literature*, Routledge & Kegan Paul, 1975.

DELEUZE Gilles, *Nietzsche et la philosophie*, Presses Universitaires de France, 2010 (1962)（『ニーチェと哲学』、足立和浩訳、国文社、1982 年）.

DERRIDA Jacques, *La dissémination*, Seuil, coll. « Points », 1993 (1972)（『散種』、藤本一勇ほか訳、法政大学出版局、2013 年）.

DION Robert, *Le structuralisme littéraire en France*, Éditions Balzac, 1993.

DU MARSAIS César Chesneau, *Traités des tropes*, Le Nouveau Commerce, 1977 (1730).

ECO Umberto, *A Theory of Semiotics*, Indiana University Press, 1976（『記号論 I, II』、池上嘉彦訳、岩波書店（岩波現代選書 43, 44）、1980 年）.

FONTANIER Pierre, *Les figures du discours*, introduction par Gérard Genette, Flammarion, 1977 (1968).

GENETTE Gérard, « La rhétorique restreinte », in *Communications, 16. Recherches rhétoriques*, Seuil, coll. « Points », 1994 (1970), pp. 233-253（「限定された修辞学」、天野利彦訳、花輪光監修『フィギュール III』、1987 年、白馬書房（書肆風の薔薇）、41-103 頁）.

—, « Style et signification », in *Fiction et Diction* précédé de *Introduction à l'architexte*, Seuil, coll. « Points », 2004 (1991), pp. 169-221（「文体と意味作用」、『フィクションとディクション——ジャンル・物語論・文体』、和泉涼一・尾河直哉訳、水声社、2004 年、77-119 頁）.

—, « Ouverture métacritique », in *Figures V*, Seuil, 2002, pp. 7-39.

—, « Des genres et des œuvres », in *Figures V*, Seuil, 2002, pp. 39-133.

GREIMAS Algirdas Julien, *Sémantique structurale. Recherche de méthode*, Larousse, 1966（『構造意味論』、田島宏・鳥居正文訳、紀伊國屋書店、1988 年）.

—, *Du sens. Essais sémiotiques*, Seuil, 1970（『意味について』、赤羽研三訳、水声社、1992 年）.

GROUPE μ, *Rhétorique générale*, Seuil, coll. « Points », 1982 (1970)（『一般修辞学』、佐々木健一・樋口桂子訳、大修館書店、1981 年）.

HJELMSLEV Louis, *Prolégomènes à une théorie du langage*, Minuit, 1968 (1943)（『言語理論の確立をめぐって』、竹内孝次訳、岩波書店、1985 年）.

—, *Essais linguistiques*, Minuit, 1971 (1959).

JAKOBSON Roman, « Deux aspects du langage et deux types d'aphasie », in *Essais de linguistique*

générale, traduit de l'anglais et préfacé par Nicolas Ruwet, Minuit, 1963, pp. 43-67（「言語の二つの面と失語症の二つのタイプ」、田村すゞ子訳、『一般言語学』、川本茂雄監修、みすず書房、1973 年、21-44 頁）.

—, *Six leçons sur le son et le sens*, Minuit, 1976（『音と意味についての六章』、花輪光訳、みすず書房、1977 年）.

KRISTEVA Julia, *Sêméiôtikê. Recherches pour une sémanalyse*, Seuil, 1969（『記号の解体学——セメイオチケ 1』、原田邦夫訳、せりか書房、1983 年 ；『記号の生成論——セメイオチケ 2』、中沢新一ほか訳、せりか書房、1984 年）.

—, *La révolution du langage poétique*, Seuil, coll. « Points », 1985 (1974)（『詩的言語の革命（第一部　理論的前提）』、原田邦夫訳、勁草書房、1991 年）.

LACAN Jacques, « Le séminaire sur "La Lettre volée" », in *Écrits I*, Seuil, coll. « Points », 1999 (1966), pp. 11-61.

—, « L'instance de la lettre dans l'inconscient ou la raison depuis Freud », in *Écrits I*, Seuil, coll. « Points », 1999 (1966), pp. 491-526.

LE GUERN Michel, *Sémantique de la métaphore et de la métonymie*, Larousse, 1973.

MEYER Bernard, *Synecdoques. Étude d'une figure de rhétorique*, t. I, L'Harmattan, 1993.

—, *Synecdoques. Étude d'une figure de rhétorique*, t. II, L'Harmattan, 1995.

MILLER Jacques-Alain, *Un début dans la vie*, Gallimard, 2002.

ROUSSIN Philippe, « Figure », in Oswald Ducrot et Jean-Marie Schaeffer (dirs.), *Nouveau dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Seuil, coll. « Points », 1995, pp. 577-593.

RUWET Nicolas, « Synecdoques et métonymies », *Poétique*, no. 23, 1975, pp. 371-388.

SAUSSURE Ferdinand de, *Cours de linguistique générale*, édition critique préparée par Tullio de Mauro, Payot & Rivages, 1967 (1916)（『一般言語学講義』、小林英夫訳、岩波書店、改版 1972 年（初版 1940 年）.

TODOROV Tzvetan, *Qu'est-ce que le structuralisme ? 2 Poétique*, Seuil, coll. « Points », 1973 (1968)（「詩学」、松崎芳隆訳、『構造主義——言語学・詩学・人類学・精神分析学・哲学』、渡辺一民ほか訳、筑摩書房、1978 年、89-159 頁）.

—, « Synecdoques », in *Communications, 16. Recherches rhétoriques*, Seuil, coll. « Points », 1994 (1970), pp. 38-53.

VALÉRY Paul, *Tel Quel II*, Gallimard, 1943.

—, « Lettre de Madame Émilie Teste », in *Monsieur Teste*, Gallimard, 1950 (1946)（「マダム・エミリー・テストの手紙」、『ムッシュー・テスト』、清水徹訳、岩波書店（岩波文庫）、2004 年）.

3. 2. 日本語文献

青柳悦子「ジュネットにおける「フィギュール」」、『言語文化論集』、第 46 号、筑波大学現代語・現代文化学系、1998 年、53-79 頁。

池上嘉彦『詩学と文化記号論』、筑摩書房、1983 年。

石田英敬『記号の知／メディアの知――日常生活批判のためのレッスン』、東京大学出版会、2003 年。

佐藤嘉幸『権力と抵抗――フーコー・ドゥルーズ・デリダ・アルチュセール』、人文書院、2008 年。

瀬戸賢一『認識のレトリック』、海鳴社、1997 年。

蓮實重彦『『ボヴァリー夫人』論』、筑摩書房、2014 年。

山中桂一『ヤコブソンの言語科学 1――詩とことば』、勁草書房、1989 年。

――,『ヤコブソンの言語科学 2――かたちと意味』、勁草書房、1995 年。

3. 3. 辞典類

GORP Hendrik van *et al.*, *Dictionnaire des termes littéraires*, Éditions Champion, 2001.

Le Grand Robert de la langue française, t. VI, deuxième édition entièrement revue et enrichie par Alain Rey, Le Robert, 1985.

Dictionnaire historique de la langue française, Le Robert, 2006 (1992).

Le Nouveau Petit Robert, Le Robert, 2010.

佐々木健一監修『レトリック辞典』、大修館書店、2006 年。

チルダーズ、ジョゼフほか編『コロンビア大学　現代文学・文化批評用語辞典』、杉野健太郎ほか訳、松柏社、1998 年（原著 1995 年）。

デュクロ、O. ・トドロフ、T. 著『言語理論小事典』、滝田文彦ほか訳、朝日出版社、1975 年（原著 1972 年）。

デュボワ、J. ほか著『ラルース言語学用語辞典』、伊藤晃ほか編訳、大修館書店、1980 年（原著 1973 年）。

マルティネ、アンドレ編著『言語学事典　現代言語学　基本概念 51 章』、三宅徳嘉監訳、大修館書店、1972 年（原著 1969 年）。

初出一覧

序章　書き下ろし

第 1 章　「ロラン・バルトにおける「コノテーション」の概念についての再検討――換喩性から提喩性へ」、『テクスト研究』（テクスト研究学会）、第 6 号、2010 年 3 月、151-167 頁。

第 2 章　書き下ろし

第 3 章　「体系化の諸原理――ロラン・バルト『モードの体系』について」、日本フランス語フランス文学会 2013 年度秋季大会、別府大学、2013 年 10 月 26 日（口頭発表）。

第 4 章　「ロラン・バルト『Ｓ／Ｚ』における提喩的原理」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』（日本フランス語フランス文学会関東支部）、第 19 号、2010 年 12 月、197-209 頁。

第 5 章　書き下ろし

結章　書き下ろし

※ただし各初出論文および発表原稿には、大幅な加筆修正を加えた。